# 花物語

*Hana Monogatari*

吉屋信子

下



河出文庫

# 花物語

（下）

吉屋信子

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。

本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

# 花物語（下）

目次

アカシヤ
桜草
日陰の花
浜撫子
黄薔薇
合歓の花
日向葵
龍胆の花
沈丁花
ヒヤシンス
ヘリオトロープ
スイートピー
白木蓮
桐の花
梨の花
玫瑰の花
睡蓮

心の花

曼珠沙華

解説

# 花々は世界に抗する。

——大正五年の文藝ガーリッシュ

千野帽子

# 花物語（下）

# アカシヤ

毎日毎日日記に雨、雨、と続けさまに、かんしゃくを起こしたように書き続ける気候――で、それでも始めのうちは、やっぱし雨の日はしんみりとして気が落ちついてよいものねえ、などとたいへん讃美していたのだけれども、もう先週の日曜日を降りつぶして、その上今日が土曜日、その間ずうっとおし通しての降りつづき、まあ、よくもこんなにあの大空に水桶の用意がしてあるものよ！　と子供のように不思議に思われてくる頃はもう半日でもいいからコバルト色の空が仰ぎたくて、濡れそぼけた傘なんか早くどこかへやっちまって、あの気に入りの新しいパラソルをぱちんとひろげてかざしたい――と憧憬（あこがれ）やら希望やら愁いやら、――長い雨でよっぽど気が沈んだ上に、病気からようやくはなされたばかりの私は、もう自分で可哀想なほど、しょんぼりして、朝からお部屋の籐椅子に作りつけの人形のように、よりかかって、壁を見つめてぼんやりしているよりほかにせんすべはなかった――

　そのところへ新庄さんが訪ねて来て下さった――沙漠で泉を見つけたなどと言うありふれた譬（たと）えようはとてものこと、うれしくて飛びつきそうになってお迎えすると――その懐しいお客様もやっぱり仄かに涙ぐんで――

『会いたかったわ……』

『私も……』

そして、だんまり――ああやっぱり、久しぶりで懐しいお友達と語りあうのは雨の日がよい、と初めてそこで雨を重宝がる――雨の神が大空で　それ、ごらん）と笑って、念入りに親切にしとしとと細かにおろす小雨の糸が綾なして窓の外――

かくて――小さい籐の円卓子（まるテーブル）を囲んで、ふたりは一年ぶりで瞳を交した――一年ぶり――そう一年ぶり――新庄さんは学校をお出になると直ぐにX女学校の英語の教師になっていらっした――私は学校を落第したり病気したり、ぼんやりしているうちに、新庄先生は教壇に立って――

『皆さん、LとRの発音は、ちゃんと区別しないと、そりゃあ、おかしいのですよ、外国の方に笑われないように、よく練習しましょう――Lっていう時は、そら、ごらんなさい、この舌の先を前の歯の裏のあたりへ、こう持ってゆくの、L、L――ね、そらごらんなさい……』など汗を浮かばせて苦心していらっしたのだろうに――新庄さんの先生振りはどんなによいことだろう――できることなら私もX女学校へ入学して生徒になりたいなどと叶わぬ願いを考えたこともあるほど――新庄さんは理想的な先生におなりになれることとお友達の誰しも思っていたので――まず次の挨拶はおのずと――

『いかが？　先生の御生活は――』と微笑むと――

『私――もうやめました……』と、意外の答え――思いなしかそのひとの眉のあたりが曇る。

まあ――これがいつもならさっそく　免職？）などと軽く挨拶を戯れかけて言えたものを――あまりにその人の眉の愁いの色におされて俄かにどういう返事もできなかった。

『もう一生――先生は嫌――』とさらに眉の雲が重い。

もう今は　なぜ？）と聞く勇気もなく——私もさしうつむいた。

『……私は教師をしたために、一生償うことのできない恐ろしい罪を負うて、これからいかねばならないの——』

あまりに、それは意外の言葉だったので、私はふいっと新庄さんの顔をうち見た。学校の同じ窓に机をならべた頃は、級（クラス）でも指折りの楽天家、明るい眼ざしに沢（つや）やかな頬、この人が時たま取ってつけたように『私ほんとうに悲観したわ』など言う時は、その悲観の原因は保証人の家へ昨日の日曜日行って貰ってきた紙包みのお菓子を寄宿舎の天井裏のチュウチュウが頂いて行ったからとのこと——、まず、そうした人のしばらく見ぬ間の変りよう——明るい眼の光は暗い影さす憂鬱の色も深く閉されて、その頬のあたりも色あせて細くこけて寂しい面（おもて）——

『——お変りになったわ……』という口にのぼった自分の言葉に私ははっとして、たゆたった。

『ええ、変ったでしょう、あんな罪を負うた身でもし変らなければ、よくよく私は呪われ者ですもの——』

私はそれに答える言葉もなく、またさしうつむいた。

外には小雨がまたしとしとと降りそそぐ。

『ごめんなさい、こんな謎のようなことばかり言っていても、はてしが無いのね、——私何もかもおしゃべりしましょう——聞いて下さいね、本気で——』……私は顫えた声で——

『新庄さん私は本気です……』

『ありがとう、じゃあ——』と、語るひとの眼もとに、気弱くも泪がさっと浮んだ——。

小雨の音は佗しく外面（そと）の窓を打つ。

新庄さんは語った。

「私がX女学校へ行ってから最初に教壇に立ったのは、三年級の二の組の英語の時間なの、生れて初めて教壇へ立ったのでしょう、さすがの私も身体（からだ）は顫（ふる）えてよ。ちょうどリーダーの時間だったのでしょう、まず新しい単語を五つ六つ、先に教えることにして、綴り字を黒板へ片っ端から書いてゆきました。上手に書こうと思ったら意気地なく手が顫えるの――それでも、どうにか一つやっと書いて改まった顔で教壇で正面へ向きなおった時――突然声が起こりました――それまでは新任の先生に対する一種の好奇心のようなものでしょうか、ずいぶんお行儀よくしいんと教室内は静まりかえって、皆借りて来た猫のようにおとなしく控えていたのでしょう――その沈黙を破って、声が――その声がどうでしょう――たしかに少し変ですわ。――まあ、その声が十五、六――せいぜい十七八の子ばかり集まっているその室で響く声と、どうして思われるでしょう――それは変なのよ。まるで七十、八十の老人――それもお爺さんの皺枯れたような気味の悪い声がするのでしょう――それにこういうのです 先生、字があまり小さくて、私ども後ろに席を占めている者には読む事ができかねます）――こうなんです、少しも悪びれず落ちつき払ってこういう注意を私にしたその言葉がもうその薄気味の悪い大人の声でしょう、思わずどきっとさせてその声の方を向くとそこに――あのそこに――今思い出しても―― と新庄さんは蒼白い顔を双手（もろて）におおうてその思い出の幻像に堪えかねた様子で） 胸を刺されるようですわ、あのそれがどうしても少女の顔だと思えるでしょうか――まるで若年寄とでも言いたいような顔つきなのです。眼がじいっと据わって唇がふんべつあるらしく締って、そしてすっかりもう大人の態度で、

こう机を前に、反身になって私の方を向いているのです――不思議な少女――こう思う前についと私は空恐ろしくなったのです。

新任の教師の前で、人怯じもせず、ちゃんとものを言い得る勇気を正しく受け入れる前に、何かいとわしい恐怖と嫌厭の感じが私の胸に起きたのです。それがみな私の心持の不完全なためだったのです。いまさら泣いても悔いても追いつかぬことですけれど――私はついとその生徒の顔から眼をそらしました。そしてうろたえて、黒板の字をかき消しながら、 それでは大きくかきましょう）と言って今度はぐっと大きく書きなおしたのです。そして 今度はお見えになりますか）と黒板の方を向いたまま尋ねるとやっぱりあの気味の悪い底力のある大人の声で はい、今度はたしかに見ることができます）と答えるのが、あのやはり同じ生徒でしょう――またその時私の胸には、いまいましい感じがしたのです――すでにそう感じる事がどれほどの罪悪に価したかをその時は夢にも知らなかったのでした。

私はもうその声とその顔に触れるのが恐ろしくて、その生徒の席、教室の左から二側目の後方を一切見ないことにしたのです。左側の二側目を見ないようにすれば、自然私の姿勢の斜めになって教壇の上から右側の後方がはっきり一番見えるようになりました。こうして不平均に見るようになると、わざと自分の気を落ちつかせる為に一点に視線を集めようとしたのが、右側の端の後ろでした。その後ろの隅に私の眼の向いた時、私ははっとしました。それは前とすっかり異った意味で――そこには私が吃驚したほど、ほんとに綺麗ないとしい顔が、一つぽっかりと雑草を抜いて咲いた白い花のように浮いていたのですの、まあ可愛い顔――と思うと教壇に立つ私の胸

がぱっと明るくなりました。そして気持が軽くなって、なんということなしにその可愛い顔にほほえみかけましたの——今までのあの不快な、どうする事もできない重苦しさから、ようやく逃れられて、ほっと息をついたのでした。——そしてその時間というものは、とうとうその可愛い少女の美しい顔ばかり思って、ともかくどうにか初めての教授を終りましたの。

　始めの印象——それは恐ろしいほど私の心を深く捕えてしまいました。私は自分がその学校へ行ってから最初教壇に立った三年級の教室が一番私の心持を引いたのです。そしてそこの教室での最初の衝動を受けた両極端に相違ある二つの顔にいつしか憎悪をはっきりと区別されてゆきました……私はあの恐ろしい大人びた声と顔を持つ生徒——それは棚島郁子という子でした。その生徒を私はうとみ出しました、教室に行っても、けっしてその棚島さんが時間中に私の問いに対して何十度手をあげて答えようとしても、指しはしませんでした。いいえ指さないばかりか、その子の顔を絶対に見向かないように心がけました——ああなんという恐ろしい心理的の大罪悪を平気で私は犯したのでしょう、今考えても身ぶるいをするほど恐ろしい——　と新庄さんはその追憶の恐怖におそわれるように身を伏せたので……）ああ、そして私はなんという痴者（おろかもの）でしょう、その棚島さんをそうして教室内であっても無いように扱っておきながら、一方にあの美しい顔と姿の持ち主、仇気（あどけ）なく愛らしい丘みつるさんという生徒に——日ごとに——あのなんと言ったらいいでしょう——あの妙な——あのおかしいほど——あの——あの不思議に——あの——なにして——あの——やっぱり妙になってしまって笑わないで頂戴、後生　と新庄さんは切なそうなお顔をなさった）——そしてなんでしょうその丘さんの顔を見ると気が晴々するほどになったのですもの——二、三日その子が病気で学校を休んだ時は、その組へ出て教壇へ立っても、もう何も張合い

もなくて大きなものが一つ足りないような気がしてぼんやりしていました。その子の休んでいる間は学校にいても宿にいても寂しくて寂しくてならなかったの――あらっそんなに笑わないで頂戴――後生よ――はずかしいはずかしい懺悔をこれでも泣いてしているつもりなのよ　と新庄さんはふいと泪さしぐんで下うつむいた――）こうして、私はなんという妙な対照――一つの組に、嫌いな憎む子と好きでたまらないほど可愛い生徒を持って、そして教壇に立って真面目な顔をしていたのです――心でたくさんの罪を犯しながら――悪魔――それは私のまたの名であったでしょう、その頃の――』

新庄さんは、ここまで語りきたって、ほっと吐息をもらされた――

部屋は静かに隅々に仄かな雨の日の陰影がさしてしめやかで――外には小さい雨のそぼふる音がひそやかにひそやかにせまっていた。

『悪魔――悪魔に自分がなっていたとは後で気がついたことでした。同じ教室に席を占めているその生徒の群れにある特殊な観念を抱いて差別をつけるということはなんという恐ろしい浅ましいことでしたろう――ほんとに人間は弱いものですのね。その頃の私はこうでした。鐘がなってしばらくして教室へ行く――その教室――私の運命に大きい変化を与えたその教室へ入ります――教壇へ立った刹那から、どうでしょう、もうあの棚島という子の顔を見ないように、そうした態度を取ってゆくのです。ですから、言うまでもないこと、たとえどのように棚島という子が手をあげようとも私はどこまでも知らない顔をして過すのです、なんという恐ろしいことをまあ、私

はしたのでしょう。今考えると自分で自分が恐ろしくてぞっとします、それはとりもなおさず心理的に棚島を非常に苦痛の中に落し入れていたことですもの――、ああ……』

新庄さんのお顔には罪人が牢獄の窓から過去の犯せる罪業の責めに悩んだ面(おもて)を見せるが如に表情が浮んで、あたりの空気さえ灰色に重苦しくなってゆくようだった。

『それでいてどうでしょう、丘という子は一時間に二度三度平気で指したのでしょう――もちろんある時、続けざまに二度（丘さん）と呼んで指したら、教室の中に俄(にわ)かに流行性感冒が侵入してきて、あっちでもへへんこっちでもへへんという咳ばらいが起りましたっけ……』

新庄さんが悲しげに笑った――寂しい笑いのさても痛ましさよ。

『――それはある時のことでした。私が学校を出て、そこへ行った春からちょうど一月目――五月頃ね――うすぐもりの日のことよ、書取りを少しその組へさせたのでしょう――教室の中はしいんとして、ただペンが紙の上を走る音ばかり、私の読みあげる声を一つも聞きもらさじと生徒は皆耳を澄ましていたのでした。私は本の頁(ページ)をひらいて読みゆきながら、生徒の机の間を、そろそろと歩いていたのです――そのうち丘さんの机の傍へ来たら――あの――つい――自然に足が止まりましたの――』

『自然の引力といえば重宝ね』などと、これが常なら何か悪口を言って、いじめてあげたいのだけれども――話がこの場合で、寂しい雨――答えるすべもなくて、ただ語られるのみ――佗しい主客はたがいの視線を避け合ったので……。

『何ゆえとなくおのずと止まった歩みを、そのままに私はじいっと立ち止って丘さんの机のそばに立ちました。机に今さし向かって、なめらかな洋紙の上に象牙のペン軸を握って走らせるその細やかに美しい指の主を見つめましたの――ふくよかな頬は、次から次へと綴字を思い出す努力にか、やや上気してうす紅く、なおさらに可愛らしいその顔を紙の面(おもちか)近く向けて、前へかがむと後ろの襟足が露わに美しい細い襟首に純白の襟に重なる濃紫(こいむらさき)の銘仙(めいせん)の背にすらっとお垂髪(さげ)がふわりと煙るように流れ落ちるその末に薄茶色の光沢の良いリボンが、ふくらんですっきり結んで椅子の背にさわって、その下に海老茶の袴の腰に絹のレースの模様が白く浮いて……もう、私すっかり見とれて思わず、うっとりとして、書取りの句を読み違えたほど……』

『まあ、呆れた不良教師！』――と私は眼に言わせて新庄さんの顔を睨んであげようと思ったけれど――その刹那――かくばかり正直に何もかも打ち明けて語る眼の前のそのひとの、しおしおとした様子を見ると強くもとがめかねて――ああ、もしも仮りに私が新庄さんのその境遇その位置に置かれてあったら――と思った時、ついと我が胸をさす思いがしたので――

『私がその時――その美しい子をじいと見つめている時です――読みちがえた書取りの言葉を早くも覚った生徒がおりました――それはほかでもないあの棚島という子でした、おお棚島！――私は棚島の声を聞いた時、背中に冷水をかけられたようにぞっとしました。――棚島――その子は職員室でも評判の頭の良い生徒でした。リーダーの何頁もほとんど一字一句間違わずに暗誦していたのです、――その日の書取りの頁の字句をそらした私の不注意は、すぐに鋭いその子の頭に反射したのです、――静かな教室の中に突然――きりきりっとした声が起りました、言うまでもない棚

島の声です、恐ろしい厭な声――私は不快な気持になりました。――『先生、もう一度正確にお読み下さいませ』まあ、何という言葉でしょう！『もう一度正確に読め』とは、それは教壇から教師が生徒に向かって時折用いる言葉でこそあれ、なんで生徒が教師に向かって言う言葉でしょうか、しかしその場合棚島はたしかに強く私にきっぱりと明らかに申しました。その言葉を聞いた時、今はもう不快な気分どころではなく、思わず私は顫えました。おお、その鋭い語気の裏には包みかねた反抗と憎しみとを充分に含んだその気配を感じたのですもの、私は今まで見まい見まいとしていた、その棚島の顔をその刹那つと見やらずにはおられずふと向こう側の机の列に眼を向けた時、ほんとに私の足はまったく度を失って床の上にすくんでしまいました。

　棚島という子はその机の席から燃ゆるような眼を私の方へ正面（まとも）に向けてちらとも瞳を動かさないのです、色の浅黒い顔、眉の濃い下には熱情と烈しい気性を表した大きな眼がじいと据えられて、愛嬌という愛嬌のみじんもないほど大人びたほど冷たい賢こい顔です、――けれどもその眼は普通の少女に見がたいほどの珍しく熱のある瞳をしていました。その瞳は戦おうとする騎士が今戦陣に馬の足を向ける如きある烈しい力をこめられてあったのです。そして私への戦いをもう始めているようでした。私は顫えて来ました、辛うじて教壇の上に立ち戻って、何が何やら無我夢中課目をうやむやにすまして、倒れるような身体を支えつつその教壇を逃れて出てひとまずほっと吐息をつきましたが、さて考えれば考えるほど恐ろしいのは、あの棚島という子です――私はその一日を何かものに襲われているような気がして落ちつかずに夕刻宿へ帰りました。

宿へ帰ってからは、何かと取りまぎれて、今日学校での出来事も忘れるともなく打ち忘れていました。その夜の入り口から荒い風が吹き出して、おまけにひどい雨が横しぶきに降り出しました、俄かの暴風になったのです。私は自分の部屋の机によって雑誌を拾い読みしておりますと、廊下の外の雨戸を烈しい雨が打つ、庭の立木をゆすぶって鳴る風の音の中に、異様な人の声音が響いて来たのです。なんだろうと、私は気味が悪くなりました。宿のおばあさんを呼ぼうかと思いましたがあんまり臆病らしいと思って、気味の悪いのを我慢していたのです——すると、その異様な人声は、おいおいに近く大きくなりました、ちょうど机の据えてある窓の戸の外です——

『先生……新庄先生……新庄先生……』という声です——それは私を呼ぶ声じゃあ、ありませんか、まあ！　不思議、この暴風の夜、誰か私の宿へ来て、外から私の名を呼ぶのでしょう、ますます私は気味が悪くて、そら恐ろしくなってきました。外ではますます私を呼ぶ声が火のつくようにおしせまってきます。『……先生……新庄先生……後生です、開けて下さい、開けて下さい……』と、とぎれとぎれに息もたえだえのように叫ぶ声が、烈しい暴風の音の中にまじって聞えるのです、もう今はただ気味が悪いとばかり思ってもおられません、私はとうとう思い切って雨戸を一枚顫えおののきながらおし開きました。——『どなたです、どなたです？』と暗（やみ）の中を透しつつ尋ねますと雨風烈しい暗の中から答えが起ると同時に窓の下へ人の顔が現れました、——『——先生……私です、私——棚島郁です……』——この声を耳にした時の私の驚きと恐れは、まあ、どんなだったでしょう——蒼白い沈んだ痛ましい面持をした棚島さんは強い雨に身を打た

るるにまかせて、濡れそぼって窓の外に像のように立っているのです――私は驚きと恐れのあまりに一言も発しえで呆然として窓の外を見やって棒立ちになっていました。

その時、窓の外から雨の中から風の中から、ひときわ悲しげに痛々しい声が響き渡りました。

――『先生、先生――私は今までの失礼をお詫びに今晩参りました、心から憎みました――先生、どうぞお許し下さいまし、許して下さいませ、私は先生を今まで呪いました、憎みました、なんというだいそれた恐ろしい事でしょう、どうぞお許し下さい。先生はこう私が今改めて申し上げるまでもなく、もう私が先生にどのくらい反抗して先生からのお憎しみを充分に受けているかは、私にもわかっております、また先生も御存じの事でございましょう、――先生、けれども今日こそ私はもうその恐ろしい憎しみの中に堪えることができません、先生、私をどうぞおゆるし下さいませ、私は私は先生、先生になぜ反抗してお憎しみを受ける子となったのでしょう先生――今それを申し上げますどうぞお許し下さい、先生、私は私は――あの――丘さんを――丘さんを――丘さんが好きでならなかったのです、ところが先生、先生は丘さんを愛していらっしゃるのを私は覚りました、私は先生のお憎しみを受けて、私の好きな丘さんは先生に愛されていらっしゃるこの両端に別れた悲しい差別は、私を今日までどんなに泣かせたことでしょう――先生もう何も申し上げません、先生私は生徒として先生をかりにも呪ったり憎んだりした大きい恐ろしい心の罪にもうこれ以上浸ることは嫌でございます、私は今宵かぎり、この学校のある土地を去りましょう、郷里へ郷土へ帰ります、先生、お別れの前にただ一言お詫びをしたかったのです、先生、許して下さい、棚島郁は哀れな子でございます、どうぞ……先生……許して……』と闇の中に烈しい泪の声音がと切れたと思うと、もうその人は遠く去ったのです。おお、夢ではないか、夢ではないかと

私は吹きしきる雨風の中を呆れ果てて見やりながら佇みました、ああ、しかし、それは夢ではありませんでしたの、現実、現実と呼ぶも悲しいまことの悲しい事実でした。

　翌朝私が蒼ざめた顔で登校した時、すでに棚島郁子は学籍をみずから消し去って、遠く郷里の北海道の十勝平野へ帰った後でした。ああそれを知った時の私の限り無き悔い、きわまりなき苦しみ、それはどんなだったでしょう、およそ一月（ひと）苦しみぬいて、私はもう堪えかねたまま、あの熱情深く外には強く内に哀れに弱くも優しい子の去った北海の島の十勝の曠原へと、みずからその子を尋ねて長い旅をしました。ようやく尋ねあてたその子の家は曠原の中の小さい牧場でした。その家に辿りついて一日も胸を去らぬ、人の名を呼んで、その足もとへ膝まずいて私自身の背に負う罪の責めを果たそうと、私は決心したのです。そしてその牧場へ着いて、まずそのひとを訪れました時、私は最初私に会ってくれた、郁子さんの母なる人から、あまりに悲しい痛ましい言葉を聞かねばならなかったのでした。──　郁は気が狂いました、ふびんな子でございます』と、母なる人は私の前で泣き伏したのです、おお、心を狂わせてついに終った熱情の子よ！

　私は倒れかかりました、もうすべては終ったのです、そして私の罪は永久にあがなう日も無くて続くのです──せめては儚ない魂のものぬけし姿なりとも、外（ほか）ながら会うて心からの私の泪をその人の前にそそぎたいと切に望む心から、母なる人にこうてやつれた姿を私は垣間見ることができました──それは黄昏（たそがれ）ゆく牧場の柵──並木のように相ならんで立つ、木蔭──藤の葉に似た葉が枝に茂って、枝にも細やかな棘があるのです、そして、その葉がくれの微風にさゆられつつ匂う花房の乳色の葩（はなびら）のいじらしくも甘くもの悲しい、しめやかなその匂い──アカシヤ、アカシヤ──大連（たいれん）から来ていらっしゃった友がよくなつかしそうに賞め讃えた、その花でした、その花咲く牧

場の木蔭に、すんなりとよりすがった寂しい寂しい人の影、おお、それが魂を生きながらうばわれた、哀れな少女の現(うつつ)の儚ない姿『郁子さんどうぞこの私の泪を知って下さいまし』こう胸につぶやいて私はもう正面(まとも)に見つめることは、心弱くもできなかったのです――母なる人の前にも身を伏せて、我が身の罪を告げる事も、やはり弱い私にはできぬことでした。

　そしてとうとう佗しい思いを身一つに負うて、寂しくも再び曠野をよぎって帰路につきました――黄昏ゆく曠野の中に独り立ちて来し路をふり返れば――あわれ落日後の仄暗みゆく牧場のほとり薄白う夢のごと烟(けむ)れるアカシヤの花房の群れ……夕風にほろほろ寂しく人思う泪の如く乳色の小さき葩の散るでしょうものを――その木蔭には痩せ枯れし身をよせて魂ぬけし空蝉の哀れにいじらしい少女が立つと思えば――私は広い空の下にこの身の置き処もないほどの罪人なのでした――この旅は私の一生の転機となりました。学校へ帰ってからすぐに辞職の願いをこうたのでしたけれども後任のあるまではと辛い苦しい日を送って、ようやくこの間代りの教師を得て学校をはなれ教師の職を退いて今となりました。これから何をするという当もない私です。できることなら再び北海道へ渡っていじらしい子の守人となって一生を果たしましょう、――あの丘みつるという子は、これほどの悲しい事実の生れ出でたことを露ほども知らずに今なお美しい可憐な姿を日々あの学舎の窓に現すことでしょう、願わくば一生を通じて、こんな事実をあの子には知らせたくありません、一人の教え子を害(そこな)った罪だけでも重さに堪え得ぬものを、またも一人の美しい子の魂を傷つけるに、どうして忍び得ましょう、ただこの苦痛と悔いは生涯私の負い忍ばねばならぬものですもの、――ああ、もうアカシヤの花の咲く頃――あの牧場のほとりへ私は我が罪のあがないにもう一度行きたい！』

――新庄さんは語り終って、潤んだ瞳を軽く閉じてさしうつむいた。

熱情強く生れ出でし子の運命のいかに悲しき、今もなお、そのひとは、アカシヤの木蔭に立ちて失ないし魂のゆくえを見守るであろうが、かつては憎しみてあいし師の、かくまでの悲しき悔いの涙も今は空しき胸に知るよしもなく、あわれ、あわれ、アカシヤの花、アカシヤの花、棘ある枝葉に、ひそかにゆらぐ乳色の花房、甘く悲しく若き子の胸そそるその優しき匂いよ！

# 桜草

それは去年の春でした。

私は、その頃まだ病気がはっきりとよくならないで、地に訪れた春をよそに寂しくふせっておりました。ある日曜の夕方、滝沢良子さんがお見えになって――。

『私きょううきまがはらへ摘みに行って、いま帰り路にお寄りしたのよ……』

こう、良子さんは言って、コップに盛ったように挿された桜草の束を私の枕もとへ置いてなぜかせいせいと息を切っていらっしゃる。

『どうなさったの？』

と、たずねると、『だって、電車がすとらいきなんですって、私歩いたのよ』と、笑う――南の海岸から久しぶりで東京へ帰った時、東京駅からの車の中からちらと見た都会の灯がどんなに懐しかったろう、それからのこと――郊外にはもう桜草が咲く、市街には電車が怠業する、自然も人事も茂く深む、病む身にとっては、こうした世の春が珍しくも強く感じられるのでした。

『そう、ありがとう』こう言ったまま、私はコップの花を見つめていました。

『あのね。私、この花には忘られない　思い出）があるんですもの、だからなつかしい……』

こう言う良子さんの声は、ずいぶんセンチメンタルだったので――

『どんな　思い出）？』

と、私は微笑んで——

『どんな　思い出）って——こうなのよ、あの、私が田舎にいた時　良子さんは女学校の一年の二学期にこちらへ地方から転校してきた方だった）、女学校へ入る春ね、県立の入学試験を受けたのよ、ずいぶん志望者が多いので、なかなかたいへんだったの、でも家ではぜひ県立へと望んでいるんでしょう、それでかなり入学準備に勉強もさせられたの、いよいよ恐ろしい入学試験の日、おどおどしながら学校へ行くと、さあ大変、うようよ山のように受験者がいるのでしょう、市のひとはもとより郡部の町や村から集まったひと達もたくさんでしょう、そして、誰もかれもその校舎でこの春から楽しく学ぶ希望でいるのだと思うと、もう胸がどきどきして控え室にいる時から私はふるえてしまうようだったの——

　そのうち、時間が始まって、定まった試験場へ入ると、順々に机へ二人ずつ並ばせられるのよ、何百人という人数ですから幾組にも分けたんでしょうね、私もその内の組へ入って、そして一つの教室へ入れられて、そして見たこともない女学校の先生に指図されて二人ずつ机に着いてゆくんでしょう、私は見知らない受験者のひとと並んだの、私は師範の附属にいたんですから、附属のひと達なら、たいていは知っていたり、わかったりするんですけれど、市立の小学校や郡部からのひと達は初めて皆試験場で会うばかりですから、初対面でしょう、そして机に並ぶのでしょう、ずいぶん妙にかたくなるのねえ、それになんとなく遠慮しあうでしょう、中にはもう試験そのものに夢中になって、お隣の人になんか無我夢中に振舞うひともいるけれど——私御存じのように妙に神経質でしょう、かなり隣のひとを気にするでしょう、けれど、その時私の隣にな

らんだひとは、ほんとにすっきりした気持の好いひとだったの、やせぎすで背のむやみに高い方でね、やっぱり神経的な型なの、そして近眼なのね眼鏡をかけて色の仄かに蒼白い細面で鼻が高い、そこへ細い銀蔓がすっきりと映えて、いかにも、さわやかな感じのする方だったの、そのひとの着物の柄、いまでも覚えているわ、銘仙でね、茶のぼかし縞に白い地と棒で組んでいるの、そして茶の方の縞に飛んで源氏香が散らしてあるの、それのお対をすらりと着てね、袴はたぶん海老茶だったと思うけれど……はでで締っている身なりなのよ、きっといい家の子なのね、上品なんですもの、そのひとと私が一つのつながったお机に向かったの、椅子は別なのよ。

『お初めて』だの『不束者ですが、よろしく』なんて、大人びたことは知るよしもないから、ふたりとも机に向かって一言もきかずに正面の黒板の方を睨めているばかり、私などもう胸がどきどきばかりしているんですもの、それもそのはずでしょう、その試験の最初のとっつきから私にとっては第一に恐ろしい鬼門の算術なの、――数学の不得手は貴方と同じよ。と良子さんは名誉にもならない引き合いに私を引張り出して笑う）それだから、なお心配でしょう、そこへもってきて、あの試験官って言うんでしょうか、私達のその教室について試験を監督している先生というのが、まあ一口で評すればブルドッグが人間に進化したというような様子なんですもの、そんなのが、ずいぶん心理的に悪い影響を受けてしまったのよ。

ところで、そのプロフェッサー、ミスター・ブルドッグが、もったいらしく順々に試験の問題紙と答案用紙を配ってくるんでしょう、そして吠えるように一場の訓示を与えたの、それはね、第一に静粛にすること、第二に絶対に話をせぬことですって、そして、もしこれらの規則に背く

と直ちに退場を命ずなんて、まるで地獄か裁判所だわ、私すっかりおどかされてしまったの、それでも、どうやら丹田（たんでん）に必死の力をこめて、問題を、ひととおり見渡したわ、小学校の先生から、慌てずにまっ先に出た問題を見渡して、そのうち、たやすくできるのから先に片付けて一番むずかしそうなのを後まわしにして、ゆっくり考えるようにって、くれぐれも注意されているんでしょう、だからその通りにしてまずできそうなのから運算しはじめていたの、数分の間、ただ紙の上へ滑る鉛筆の微かな紙のすれる音ばかり、恐ろしいほどの静かな教場に私は一心になって運算の筆を動かしていたの。

　すると私の隣で、低い低い小さいあたりをはばかる声音で、　あの……ちょっと……）と言う声が二度ばかりしたの、自分の隣から、こう嘆願するような声を聞いて、それでも、なお黙って知らぬ顔は、私にはできなかったんですもの、声を出して話し合うのは禁制とは知りながら、弱い心はやはりどうすることもできないで、ふと隣を見返るとそらそのお隣のひとね、眼鏡の似合う品のよいひとが困った顔をして問題の刷られてある紙を私の方へ差して、（ここは、何とかいてありますの、よめませんから）と問うの……問題を粗末な藁紙（わらがみ）に謄写版（とうしゃばん）で刷ってあるのですから、インキのつき方にむらがあって、字がうすれて読めない処がありがちなんでしょう、その方のは可哀想に一つの問題それは四則の応用問題で、何かくどくど書いてある処で、中頃がまるっきり字がうすれて読めないのですもの、それではお困りのはずねえ、だから隣の私を呼んだのでしょう、もちろん、そうしたことは先生を呼んで言えば一番いいには異（ちが）いないのですけれども、その先生があわれブルドッグ！　お隣の眼鏡のお嬢さんやっぱりこわかったのね、それで私に尋ねたというわけだったのよ、私もそのお困りの事を知ると、教えてあげずにはいられないでしょ

う、それから、さっそく、私の方のはっきり刷ってある問題の紙を読み合せて、そして言葉を出すといけないと思うから、運算の下書に使った答案紙の反古を折って、その白い空き場所へ、鉛筆で大いそぎで写しとってあげたの。そこは、こうなんですの）とか小声で囁いて、そっと隣の席へその紙片を渡そうとした刹那、まあどうしましょう、雷様が落ちちまったの！　ブルドッグよ、ブルドッグよ、吠えたわ、吠えたわ、（こらッ、何をしているのかッ）って、まあ、恐ろしかったこと、そして、おまわりさんが泥棒を追っかけるように、靴音荒く、つかつかと私の机の傍へ来たんです。

　今なら理屈も相当に申し立てて自分の仕業と立場を明らかにし弁解もできたでしょうけれど、その時はまだちいさいんですもの、ようやく、その春から小学校の殻を脱いで女学生に一足ふみ出そうとするばかりの頃ですものただ恐ろしいのと、はずかしいのが先に立って何一言も言い得で罪人のように、真赤な顔になって下うつむいて顫（ふる）えてしまったのです。するとブルドッグ殿は、もう私を立派にカンニングの犯罪者と見て取って、鹿爪らしく手帳をとり出し、私の受験番号を書き入れて、そりかえって行ったのです、私もうその後の心持はめちゃめちゃ、何が何やら頭がもやもや、どれ一つまとまった計算が出ない――そのうち試験場の生徒達はぽつぽつ答案を出して立ち去ってしまい、私は一番殿（しんが）りになって、もう定めの二時間が切れそうです、隣の人もいつの間にかもう姿も見えません、心配そうにうつむいて力なく悄然と教室を出る姿を仄かにちらりと見たような気がしましたの、この次は国語の時間、これは鬼門でもなかったのですけれども、前にあんなことがあったから私やっぱり落ちつけなかったし、それにお隣のあの眼鏡の方には、次の時間には、また席順が変って、それきりお眼にかかれなかったの――体格検査や何かが

あって、それから幾日かの後、合格の発表、いくら待っても合格通知の葉書も来ない、おおかたは諦めていても堪え切れず、おずおずと学校へ行って見れば、入学許可の人名がずらりと書いてはってありました。おしまいから順々に根気よく上まで見上げてゆけども、ゆけども、自分の名はないのです。見つめた終りは儚なや灰色の壁に終ってしまって――もとより覚悟はしていました、あんな災難に試験場で会ったのですから仕方がないと、それにしても、あの災難にかかり合った眼鏡の方はどうした結果かしらと思いやるのでした。ともあれ、私は同じ市のミッションの御厄介になったの、慣れればなんでも無いけれども、当分の内は通学の途中で、意気揚々として行く県立のひと――附属時代のお友達に会うのが嫌だったわ、だって附属から行って落第したなんて私ひとりぐらいだったんですもの。

　そのうちに春の遠足が私の学校にもあったの、それは汽車で少し行くとちょっとした景色の好い村があるのよ、そこに桜草の咲く丘があるんです、桜草――九輪草とも、その辺では言うけれども、その花の咲く処へ、春季遠足をすることになったの、私達が停車場に朝勢揃いすると、ちょうど、偶然にその日県立の方もやっぱり遠足なんですって、そしてね、行く先もやはり同じあの桜草咲く丘ですって。日も同じ所も同じ、しかも向こうは県立の御威光で一列車早く御出立になったんですって、『まあ、県立も今日ですって、もう先へ行ったの、つまらないわ、花をみな先へ摘まれちまうわ』と生徒達は大心配をしましたが、先生達は呑気に『なあに、大丈夫あの広い丘の花がそうむやみになくなりはしませんよ』なんて、悠々としていらっしゃるのよ、ようやく汽車に乗って向こうへ着き、息せきたてて、桜草咲く丘へと、たどりつくとまあ、どうでしょう、見渡すかぎり丘は青坊主！　花という花は一輪残らず、先着の県立の人達の掌中に収められ

てしまった後でした。丘にはただ青々と桜草の葉が残って春の微風にゆらぐばかり、葉ばかりの丘ですわ、『ぱばかりさま』ともなんとも言わずに県立の人達は手に手に匂う花の束を持ってしゃあしゃあして遊んでいるんでしょう、私達すっかり悲憤の泪にくれたのよ、寝より来る人類のために一輪の花さえ残そうとは心がけなかった県立高女の生徒は、まあなんという非人道主義でしょう』などと、憤激してみても間に合わない、先生は先生でまた『皆さん、花は摘めなくともこの美しい自然をごらんなさい、人の手に摘むことのできない自然を……』などと仰しゃるけれど、馬の耳に念仏ですわ、ただ花が欲しい欲しいの一心で皆泣きっ面……私もその一人だったの、丘の路傍で行き会った附属時代のお友達が、私の姿を認めて、とんきょうな声を出して、『滝沢さん、もう遅いわよなぜ早く来ないの?』などと、半分同情して半分羨やましがらせるような口調で言うのでしょう、鶴の中の雲雀(ひばり)のように私はしょんぼりしていたの、手に手に桜草の束を持った県立の人たちの三々五々としてさまよう姿を佗しい眼で見やるとふとすれちがって通る群の中に、銀蔓の眼鏡、すらりと痩せぎすの面影!あの試験場で机をともにした忘れ得ぬ人、そのひとでした。

『おや!』私の胸は叫ぶと、向こうの視線もいち早く私を見出したのです、つと眼を私に注いだ一瞬間、罪人が法官に会ったように、ふっと下をさしうつむいて肩をすぼめたのです、――沈黙の中にたがいに立ち向かいました――『滝沢さん、滝沢さん、早くいらっしゃい、おおぜいで半巾(ハンカチ)落しするのよ!』と丘の上から、級の友達が口々に私をその時呼ぶのでした。私はその声にすがって丘へ登るような気持でほっとして、その人の前から立ち去りましたけれどもさすがに胸

は苦しかったわ――問題の不明の文字を尋ねたその人は首尾よく合格している、文字を教えようとして叱られた子は不合格、一つの起点から流れ出る二線(ふたすじ)の水の滴はこうして立派に分けられた。運命！　宿命！　私は寂しい気持になりました。けれども露ほども、あの眼鏡の方を呪う気にも恨む気にもなれなかった、私はただ素直にその与えられた自分の（運命）を受け入れればよいと思ったのですもの、そして私は丘の上でおおぜいの仲間に入って半巾(ハンカチ)落しをして遊びました。

　そこへまたもや（滝沢さん）と私を呼んで一人の友達が走って来ました、その人は手に美しい桜草の花束を持って、『これをね、あなたにあげて頂戴って、今あすこの丘の下で県立のひとに頼まれたのよ、ちょっと、おめでとう、眼鏡をかけたすてきな人よ、えへん』からかいがちながら花の一束を私に手渡したのです、はっと胸とどろかして、おののく手に犇(ひし)と花を握って打ち見やれば、優しき茎のもとに紅の紐で結ばれて、その紐に細い紙片がはさんであるの、眼に近く寄せて見れば、鉛筆の跡うすく、（罪の子より）としるされてあるのです――罪の子より、罪の子よりと私はこうひとり口につぶやいて泪さしぐみましたの、落第した私よりも合格したあの方の胸の暗さをその時初めて思いやられたのですもの、――どこかで細い呼子の笛の音がすると、今まで丘の下の大半を占領していた県立の生徒は皆一同に列を作りました、もうそれは帰る用意でした、どの列にならぶひとも皆手に桜草の束を大事に持っている、その中にただ一人、空しき手に花の影はあらで姿さびしく立つ面影！　罪の子とみずからを責めて悩むそのひと、夕日が静かに沈む丘の上に佇んで私は、丘を去って野路を辿る県立高女のパラソルの列の遠ざかりゆくのを見送りながらとめどもなく、熱い泪が頬を伝わったの――今でも私忘れられない、この花――』

滝沢さんの長いしめやかな話はこれで終った――終りの声は泪に消えたようでした、じいっと耳を澄まして聞き入った私の瞳にも、いつの間にかはずかしいほど泪が湧いていましたの――あわれ、かくて音もなく春の宵は柔らかに更けてゆくのでした。

## 日陰(ひかげ)の花(はな)

毒ある花の色美しい悲しさよ、毒ある茸の紅傘やさしく、秋の山路に生うるを見る時――若い子の胸はあわれに寂しい。毒うつぎの果(み)の珊瑚の珠に似たるは！　なぞかくばかり毒は美しく罪は甘く秘密は楽しいとして美しいものは呪われて幸薄いのは……地にある人の子の嘆きは、かくて永久に解き得ぬ謎で続くのか？　あわれ。

禁制の実に手を触れんと心昂ぶるは、楽園を追われたイブのみかは――その血を伝える人の子の、狂わしいばかりに避けがたい誘(いざな)いの紅い果は、罪の名のもとに、枝もたわわに実るものを。

……環(たまき)は不思議にも怪しき美しさを持つ少女だった。母を幼くて失ったまま、後は父と子とただふたりのみの境遇の故(せい)か、環そのひとには世の常の少女と異なって、どこかに雄々しい凛々しさが、姿形の中に現われていた。眉の濃く秀でたのも、眼に張りのあるのも、口元の締め方もすべてが、そして、美しく快い――級の誰かが戯れて言うた。『環さんは、まるで早川雪州とモンロー・ソルスベリーと伊井蓉峰(ようほう)を臼の中でつきまぜて、お団子にして、その上へ福助の女形の柔らか味の黄粉を仄かにふりかけたような感じのする方ね』と。

その評のもし的を射たものとすれば、環は美少年というのが、ふさわしいかも知れない。けれども、ああけれども、やはりどこまでもどこまでも環は少女だった。少女だった。雄々しくと

も、健気でも、その胸は柔らかな女鳩（めばと）の胸毛のしめやかに春の雨に濡れて顫えるごとく、譬（たと）うれば、恨みありて、絃断（いとき）れしビオロンに残りし一線（ひとすじ）の巨線のかぼそき音に掻き鳴るように、ひと夏逝きし海のほとりの、浜の砂地に誰（た）が子か捨てし銀扇の破れ、打ちよする秋の波に佗しく濡れて光るかのように、すべてがあわれに優しくもの悲しい少女の魂の薄桃色の小さき壺を柔らかにふくよかな、胸に秘めて、ともすれば溢れ零れる乳色の美しい涙が壺の中に満ちて、やるせないものを。

　環は寂しい澄んだ美しさに生れ出でた子だったので。

　環の父は、明るく華やかに思われている外交官の務めに在った。母を失なったまましばらくの間、いまだに第二の母と呼ぶひとを持たぬ、その家は物足りなく佗しかった。

　小さいながら、気持よく調った洋館、窓のカーテンに、露台の蔦の茂み、壁を伝い屋根を這いのびる蔦に覆われた、その露台の美しさ、絵に見る異国の村里に平和の鐘打ち響く小さい教会堂の古びた塔のような趣を添えている――その露台の奥の突きあたりが、応接室になっていた。父なる人の若き頃、遠い海の外（ほか）なる国々あまた巡られしおりにふれては、求めて帰られたという、泰西（たいせい）の名画の数かず重々しい額の中に収められて仄暗い壁のあちこちを飾る。珍しい模様の絨氈敷きつめた床の上には、主人の好みでルイ十四世時代の卓子（テーブル）に椅子の配置、小さいながら狭いながら、そこには一つの趣味で形作られてあった。古典な感じのする古いピアノの燭台が、黄昏（たそがれ）の気配早くもせまる心地する部屋の一隅に、遠い沖の暗さを破る夜の船の灯のように二つ光る……。

今、その黒い廃船のような、ピアノの前に佇む、おぼろの影──露台に半ば開かれたまま、たゆたげに重くある扉の隙より、仄かにさしこむ夕日を背に浴びて、環は双手の指を真白き鍵盤の上に置いて奏（かな）ずる曲あるとも見えやらで、ただ夢を追うごとく、時おりゆるやかに鍵は鳴って消えてゆく。その音の消えて薄烟（うすけぶ）るところに、七つの輪に連ねてさげられし、重く柔らかく厚い印度更紗（インドさらさ）の幕、そは隣れる室との界（さかい）に垂らされたもので、そのあたり幕の下三分まで斜めに日影が染めて、残りは床の上に敷き詰められた絨氈の唐草模様にからんで消えて、そこはかとなく儚ない日の色の、さても物語めいて、あわれになつかしい。ふと……、ピアノの音がやんだ。環はピアノを離れて立った。漆黒の天鵞絨（びろうど）の洋服、襟元に仄見ゆる純白のレースと、袖口に返された僅かの飾りレースの白さが、ひときわ映えて年ゆかぬ姿にも何か知らぬ気品を備えて見ゆる、しかも今立つ室の背景の釣合うてさらに、さらに──

　環は静かに歩み進んだ、あの幕のほとり、その左手の壁の上に、寂しく澄んだ瞳をあげたので……、幕に日のあかりをさえぎられて、仄暗く沈黙の奥にひそんだその壁は、クリームの地色の押した銀箔の壁紙のやや古びし、その上に懸けられた一つの肖像画、年齢まだ若き貴婦人の半身、うららかに微笑む面（おもて）を向けて生くるが如くその唇の、いましほころびて玉の音まろぶかと見ゆるばかり──髪よ、瞳よ、唇よ、胸よ、ああ美しき、さても現世（うつしよ）の人なりしかな。──

　環はじいと、その肖像を見据えて立った。その画像こそ、環にとりて夢にだに、相会うあらばと、永久（とわ）に憧れ慕いつ嘆く、亡き母のありし世の面影なので……あった。

　環は己れひとり居の静かな客室の中で、いま打ち仰ぐ亡き母のおもざしに対して、その瞳がしめやかに曇る陰から、怪しくも奇（めずら）しい熱情こめられた光を帯びてくる。

ああ）
小さい嘆息、心憎いほど優しさと慕わしさのこもった――お妃のお手箱の中から、あやまって一つこぼれ落ちた宝石のような、その嘆息――

何ゆえぞ、何がゆえぞ……　。

環は母の肖像をその瞳に烙（や）きつけていた。その瞳にうつったある一つの影が怪しいばかりに、環の胸を乱した。　満寿（ます）とその人は呼ばれた。環とは境遇も生い立ちも家庭も異なる、下町の豪家の奥に育くまれて、踊りは藤間に通い始めたのが、六つの春という。さればこそ身のこなし袖のゆらめき、妙（たえ）に美しい。姿の美しさはあえて環の胸を乱しはしなかった、しかし、その面ざしは、あわれなんの為ぞ！

まこと、その子の面は、環が日ごとに打ち仰ぐ、かの客間の壁にある肖像の主と瓜二つ、若きと幼きとの相違こそあれ、まこと似通いし眼ざし、頬のあたり、その唇のさままで、いかなる縁（えにし）ありて、かくまで空似のありしぞ、といぶかしいばかり、環は初めて相見た三年前から、生涯を通じて忘れ得ぬとばかり、そのひとに心動かされたので……あった。

三年の月日は、このふたありの上にいかに働きかけたか？

ああ！　ふたりは、　友情）の垣根をいつか越えて来たので……あった。

ふたありは、もう禁制の木の実の甘さを知ってしまった――今さら知らぬ昔に、どうして返り得られよう、今宵は、ふたりの相会う可愛い　やくそく）のゆうべだった。

人待つ夕べの、さてもやるせなさよ。環は落ちつかぬ胸を抱いて二階の人気のない客間にと逃れきた。そして、心を静めようとしてか、ピアノに向かった。けれども心そこにあらねば、とも

すれば指は象牙の鍵（キー）を滑りがちだったので、ピアノを離れて母の面影に対せば、あわれ今は堪えがたき思慕の焔――そは亡き母へか――知らず、かのひとへなるか……。

秘密）という美しい桃色のヴェールをふたありは大事に身につけていた。

秘密）という美しい魔女の指先に、深夜ひそかに日光を掬（く）んで編まれたものという――ふたありはこのヴェールの陰にふたありのみ知る小さい匂いやかな玉のような世界を、守り育んでゆくのだった――

『わたしたち……日陰の花なのね……』

ある宵、かの露台に月光を浴びて、ふたありの立った時、満寿子が嫋（たお）やかな腕をあげて、つと環の肩に巻きつつ、ためらいがちに囁やいた。

『ええ日陰の花なのね……けれどいいわ、わたし達、日の光には咲かずとも、月の青白い光に濡れて、咲けばねえ……』

環はいとしきひとに、かく答えた。

――こよいもまた、あえかなる日影の花ふたつ、月光流るる露台に咲き立つものを――

……微かにかぼそく呼鈴（ベル）の音……

つと瞳の輝いた環は、客間を急ぎ離れようと身をひるがえす刹那前なる母の姿、その眼の犇（ひし）と環の胸に向けられてあるごとく……環は立ちすくんだ。

『……お母様、お叱り遊ばしちゃあ、いや』

拗ねるように嘆くように祈るように、環は打ち仰ぐ母の面（かお）——小さいいじらしい日影の花は、暗い壁に顫えて怯えつつ立つあわれさ。

その時、同じ時、露台の下なる柱によりて、これもまた一輪月に咲く日影の仄白き花、訪れども、まだ見えやらぬひとを待ちて、不安に顫える葩（はなびら）の姿のままに佇む……。

あわれ、その後のふたありのこと聞かまほしや……と一葉女史が筆の跡まねてのみやむ本意なさよ……されども、日影の花は、日を恐るるものをただ陰にのみ咲かしめ給え、余は望み給うな、とふたりを知るひとの微笑みてかく語ったので……あった。

# 浜撫子（はまなでしこ）

真澄はいわゆる、可愛い子供ではなかった。言い代えるなら、真澄はけっして少女雑誌の表紙や口絵や挿絵の中に描かれるような、眉と眼の間が遠い美しい（?）人形のような少女ではなかったので——。

真澄の眉は俗に言う地蔵眉とか申すものではなかった。古来より美女の眉を形容して柳の眉というけれども、真澄の眉はそんな細々しいのじゃあ、なくて、ちゃんと太くて濃かった。

美女とか申す方の眉が柳の葉に似ているとてか、柳眉云々と歌った支那の詩人は、真澄の眉を見てなんと言うだろう、芭蕉の葉とでも言うのかしら——まさか。

それから美女は雪の顔（かんばせ）、玉の肌とかよく言われるようだけれども、真澄の顔は雪のように白くない、たしかに黒い、黒いも黒い蒼黒い——匂いやかなお化粧など言うことは、真澄にとっては夢にもなし得ぬことであった。

そんな垢だらけかというのに、いえ、いえ、けっしてそんな風ではない、首もとの白襟が一点の汚れだにかつて示したことがないものを。

丈なす黒髪という通り、それだけは黒い漆黒を帯びた真澄の髪の毛——しかし、それは波打って縮れていた。

そして、最後に忘れてならないのは、真澄の双の眼である。

濃く太い眉のすぐ下に、暗い湖水のように双の瞳が大きく開かれてある。

その湖水の眼には種々の影が映じる——真澄の顔が灰色の沙漠ならその眼は暗い水をたたえた神秘の泉であろう。

けっして美女とは呼び得ぬ真澄の姿——けれども真澄の顔も姿も皆真澄自身の持っているものを、明らかに強く示していた。

全世界、この地球の中に竹森真澄と言う一人の少女の存在は、ただ一つであった、その一つの自己というものを、力強くはっきりと現し切っていた。

もうそこには、単なる美とか否とかいう問題を、より高く越えて立派に真澄は生きる少女だった。

真澄——このひとは春うららかに冬暖かい南の海岸のある街に生れて、そこに育くまれた子だった。

真澄の家は、竹森家、富む家だった。蜜柑の鈴なる山をいくつ、米俵積む土蔵のいく棟、海岸の別荘、いく千坪の貸し地、それらは真澄の父竹森某の所有だった。

多額納税者——貴族院に席を得る時期も待たれる人であると伝えられた。

ああけれども、この富める父が真澄には悲しいものだった。

なにゆえ？　と言うならば、真澄は一つの身に二人の母をもたねばならなかったから……。

こうしたことを、深く尋ねあばくのは誰にも痛ましく悲しいことゆえ——多くを語らずにそれなりにしたい。ただひとことだけ言うならば、富豪竹森家の夫人は真澄にとっては養母に当たっ

た。そして、ああ、そして、竹森家の主人は真澄の実父であった。――母と呼ぶふたり――父とよぶひとり――真澄の双眸の暗い色は生まれながらに負わねばならぬ、逃がれがたい宿命の影だった。

ほんとに、真澄の顔には陰影が多かった。

ゆえあって家にある子の真澄に、竹森夫人は冷たい眼を向けたのは言うまでもない。

真澄の生い立ちは佗しかった。

佗しく辛い真澄にも、ただ一つのかくれ得る大きな柔らかい翅（つばさ）が与えられた――それは異母姉の葉子だった。

『まあちゃん、まあちゃん』

葉子は異母妹を親しくこう呼んだ。幼ない日頃から――父の罪はうとんでも、あわれな真澄をまでけっして呪おうとはしなかった。

母のつれない仕打ちを見るにつけても、いやまして葉子は五つ下の真澄をいとしがった。

葉子は二十一の春、東京のS家に嫁いだ。

真澄はやがて海岸の街の小学校の高等科を卒業した。竹森家ではそのままに家に置いて銀の針を持つことやら、その他見習わせるつもりだったらしい、けれども真澄は一生に一度の強情を張り通した。救いの手を都の葉子の許へ求めた。葉子は実家の母を説いた。

かくして、真澄は葉子の嫁いだS家へ来て、それから某（それがし）の女学校の門を日々くぐることになった、それは一年前（ぜん）の春――その学校で第三学年の補欠試験があった時だった。

真澄はその補欠試験に応じて、ともかく入り得た。

なにゆえ、その某の女学校を選んだかというに、補欠のあるのを求めたのはもとよりであるが、その学校には真澄が、故郷の南の街で小学校の六年まで同じ級だった、細島さんが一年生から学んでいた。

細島さんは真澄の上京と入学をどんなに喜んだろう。試験を受ける準備のために細島さんは、毎日毎夜のようにS家へ通って、真澄と机に差し向かって、自分のノートや教科書を開いて手伝った。

その甲斐あって、真澄は第三学年のしかも細島さんと同じA組に入ることになった。自分のことのように喜んだのは細島さんだった。

細島さん、そのひとは綺麗な背の高い少女だった。口元はどこか負け嫌いの凜々しさが含まれているようでも、底をさぐると人一倍なつっこい泪もろいひとだった。

このひとは、まあ、どんなに真澄に親切だったろう——この親切には、時としてはただならぬ熱情さえ盛られてあったので——けれども真澄にはそれがわからなかった。ただひとすじの親切な友情とのみ、真澄の開いた胸は細島さんに淡かった、浅かった、友達の垣根を一歩でも踏み越えてはいなかった。細島さんはA組で成績は一位に相違なかった。といってもけっして答案をかく時、左の腕を机の上に曲げて答案紙を囲んで、城壁を作ったりする利己主義者ではなかった。また口をへの字に結んで六尺前をきっと睨んで、静々とかしこまって歩いて、先生方のお顔色に相応じて動くカメレオンの如き優等生型(タイプ)ではなかった。

ゆったりとした優しい人柄だった。目に立つ努力はせずとも良い成績を得られるらしかった。

細島さんは真澄にひきつけられるのだった。なぜとはなしに、真澄のはっきりとして現している自分という強さも、その沈んだ陰影を持つ顔も――はては幼ない日の思い出を彩どる南の海辺のさまもなにやかや集まって、真澄を慕う心は細島さんに、いつとはなく大きくなりまさって行った。

けれども、それほどの思いを真澄は知らなかった、ほんとに知らなかった。

細島さんは、お母さんと弟と三人で小さく暮している家の子だった。お父さんも兄さんも、姉さんも皆布哇（ハワイ）へ渡って砂糖黍（さとうきび）の畑に働いているのだった。

『私も学校を卒業したら布哇（ハワイ）へ行こうかしら、あのねアイスクリームがそりゃあ、おいしいんですって、お豆腐ほどの大きさのアイスクリームを二かたまりもいただくとお昼御飯の代りになるって、姉からの手紙にかいてあったのよ』

こんなことを、いつか真澄に語って細島さんは笑った。

『あら、そう、私も行きたいわ』

と真澄も言った。

『うれしい！　ほんとに、いっしょに行って下さる？　もし、それが実現できたら、どんなに嬉しいでしょう。私あなたに毎日おいしいアイスクリームをバケツで一杯さしあげるわ、そして私は一生懸命で農園で働くわ、そしておかねをとって、あなたにアイスクリームやバナナやパインアップルやそれから珍しい異国の宝石も買ってあげましょう』

と細島さんは心から感動したらしく昂奮して、眼を輝かしてこう言った。

真澄はただ声をあげて笑った。

『ええ、行けるといいわねえ』
と――真澄にとって、その場合布哇(ハワイ)の島へ細島さんと行くということは、ちょっと銀座辺の散歩の途中、どこかへアイスクリームを飲みに行く相談をしたぐらいの軽さであったので、しかし、細島さんはどこまでも本気だった。
それはその夏のある日の夕暮のことだった。
細島さんが真澄のいる家へ――真澄の姉さんのところ――へ訪ねた。
まあちゃんは?)と細島さんが、声をかけた時、玄関に出た取次の女中が、ただ今お風呂を召していらっしゃいますと答えた。
真澄の姉さんの嫁いだS家の邸(やしき)は、家内の人数に広すぎるほど宏壮な建物だった。庭園もやはり大きかった。真澄は奥の方の日本間を一つ貰って居間にも寝室にも使っていた。
細島さんは、女中に案内されるまでもなく、よく知っている、その真澄の居間へ通って、真澄の浴室から帰るのを待っていた。
机の上の青絹笠の卓上電気灯に、ぽっと灯がついていた。その灯の下に二冊の小形の手帳が開かれたままの頁(ページ)の中に細い可愛い鉛筆がはさんであった。
その手帳の白い頁の上に、うっすらと字が二行ばかりならべてあった。
細島さんの人待つ間のしょざいなさの瞳がその頁の上へと向けられた。
瞳の中に、手帳の上の字は映えた。

ふるさとの海辺の花に似たるかな
君がかざせる、パラソルの房

――まあちゃんの歌――と細島さんは微笑んだ、けれども次の瞬間に細島さんは真面目顔になって考え出した。

まあちゃんの故郷なら、あの南の方の海辺の街にちがいない、その海辺の砂地に咲く花なら、自分でもよく摘んだことのあるあの可愛い浜撫子の花であろう、その花の色に似たパラソルの色なら、ピンク色！　そのピンクの房を飾るパラソルをかざす君は？……

細島さんは、自分の記憶から、柔かいピンクの色を求めて辿った――ピンクの房をつけたパラソル）の持ち主を求めていったけれども、さしあたってわかりかねた。

その時、廊下の方に軽い足音の気配がした。障子が開いて真澄が入って来た、まだ帯締めの結びもそこそこに手をかけたまま、急いで部屋へ来たのだった。

『お待せしたのね、かんにんして頂戴』と、真澄は青い笠の灯の下に、しょんぼり待っていた友達にこう声をかけた。

『いいえ、かまわないのよ』と、さしうつむいて低い声音で答えた細島さんはなぜかいつもより寂しそうだった。

真澄はいつものようにハーモニカを吹いたりいろいろ話を交した、細島さんもなにかと話をした。

しばらくたってから細島さんは帰った。

帰る時玄関まで真澄が細島さんを送って出た、踏石の上に立って細島さんが下うつむいて小声でつぶやくように言うた。

『――まあちゃん、ごめんなさい、私今晩悪いことをしたのよ、あなたに――』

その声も重々しく、顔色も沈んでいたから、不意のことだけに、真澄はかなり吃驚(びっくり)した。

『あら、どんな悪いこと、教えて！』と問いかけた。

『でも、許して下さる？』と細島さんが聞いた、不安らしく。

『ええ、許すわ、いったい、どんな事なの』

真澄はじれったそうにした。

『あのね——ごめんなさい、——お机の上に開かれたお手帳を拝見したのよ——ただあのお歌のところだけですけれども——』

細島さんは、とうとう言ってしまった。

その瞬間、真澄の顔、——どのような場合でも眉ひとつ動かさぬその顔が、おしかくせない慌て方をした。——うす紅くさえなった。細島さんは素早く真澄のその様子を見てとった、学課にも頭がよく、またそういう点にもこのひとの頭は澄んでいた。

『さようなら——おやすみ遊ばせ』

細島さんは、こう挨拶をして玄関を出た。けれども真澄はじいっと立ったまま、動かぬ像の如くに黙っていた。

その夜の明けて、翌日の朝真澄も細島さんも学校へ出かけて行き会った。

『お早よう』と、細島さんがおとなしく声をかけたけれども、真澄は黙してちょっと首をかしげるようにしたばかりだった。

『あなた、ほんとうにお怒りになったの？　まあ、私、どうしましょう』

細島さんは心から心配しだした。

『だって、私はずかしい』と、真澄は双手（もろて）で自分の顔を覆った。真澄——あの強く雄々しくはっきりと自分を保っている、そのひとの常にない、その容子（ようす）よ、——細島さんはうら寂しい表情をした。

『だってなんでもないんですもの、ただお歌を拝見しただけのことなの——かんにんして頂戴』

細島さんは身も世もないようにひたすらに詫び入った。

『怒っているんじゃあないのよ、ただなんだか、はずかしくて……』

真澄も気が折れて優しくなった。

『もう、あのことは忘れて頂戴な、私苦しいから……』

細島さんはしきりに願うのだった。

『ええ、忘れましょう、私もちゃんと忘れるから、あなたもきっと忘れて下さいね』

『ええ——きっと忘れるわ』と細島さんはどことなく寂しそうに答えた。

その日は、きのうからの妙な気持をふたりともなおしたらしかった。そしていつものように遊びあい話しあいをしていた。お昼休みの時間に、細島さんは真澄にも誰にも知らさず、こっそり昇降口に出て行った。初め東の昇降口に出て細島さんは眼を見張って、そこの傘置場を見渡した。そこには色とりどりの日傘が置きならべられてあった。

かずかずの日傘を細島さんは順々に見やった。多くのパラソルの何を見るのか？

それは柄に結ばれた飾り房を見るのだった。白いのがあった、黒いのがある、水色のがある。緑のがある。黄色いのがある、オリーブのがある、紅いのがある——千紫万紅——中には房の無いのがある——それらの中でピンク色の房は一つもなかった。まったく一つもなかった。

その東昇降口は一年と二年との昇降に用いられていた。
細島さんはそこを出て、南の昇降口に行った。そこは三年と四年の昇降口だった。そこには美しいパラソルがならんでいた。細島さんは、そっと目立ぬように、そのパラソルの列を見渡した。目ざすのはピンク色の飾り房……
上級だけに東の口よりは、やや色の大人びた傘が多かった。柄に結ばれた飾り房は黒い打ち紐の輪もあった。中には皮紐の輪もあった、紫のも薄茶のも、クリームのも、房なしも多かった、中には飾り玉をつけて金めっきの鎖に翡翠まがいの玉をつけたのもあった。
細島さんは、ずっと見渡して行った。
入口のとっつきにある三年のA組の場所を見た。そこに求むる色は見出し得なんだので続く隣のB組の置き場に眼を移した。細島さんは、はっとした――そこに、ピンクの飾り房があったのだった。
薄いピンクの絹のパラソルに乳色の木の柄、上には銀の平円の握りをつけて、その柄の中ほどに、傘の地色と同じピンクの絹房の玉が二つ可愛くさげられてあった。この美しく可憐な傘の持ち主は誰ぞ――細島さんは知るよしもなかった。
その日の放課後、あの南の昇降口に細島さんは、いち早く出た。流れ出る美しい匂いやかな水の如くに生徒の群れはそこから群がり出る――細島さんは出口の大きな重い扉を左右に開いて傍にぴったりと身をつけてひたすらに流れ出る人影を見逃さぬようにと見つめていた。
手に手に傘置き場から自分のを抜いて持って出る――細島さんはその傘置き場に、やがて全身の注意を払いだした。おいおいに傘の数はへって行く――しかしあのピンクの房に飾られたパラ

ソルの柄にはまだふるる手もなく、そのままに置かれてあった。今はもう細島さんの注視はただ、そのピンク色のパラソルにのみ集まるかのようであった。始めよりは、おいおいに人数もへってきて三々五々人影はまばらに下駄箱下の踏板が鳴るのだった。――そのある瞬間、つと白い優しい手があのピンクの房結ばれしパラソルの柄に触れた、華奢な指がつとその柄を握った。

　細島さんは、そっとその手の主を見やった。ピンクのパラソルを片手に持って、今しも校門の方へと出かけようとする、そのひとは同じ三年B組の水上佐紀子さんだった。

　優しくまとまった美しいひとだった。その姿に顔に、おっとりした柔らかいピンク色の薄絹がふうわりとかかっているような感じのするひとゆえによくこそ似合うピンクのパラソル！　身につけしモスリンの単衣（ひとえ）の襟もとに重ねし襟はピンクの縦絽（たてろ）に白いレースで覆ったもの、袂の振りに匂うはこれも淡きピンクの襦袢の袖、ピンクそのものの色合いが、その人柄にその風情に調和し溶け合っているのだった。

『あら、細島さん』と、佐紀子は昇降口の傍で、熱心に自分を見つめているA組の細島さんを認めて、ふくやかな頬に淡く紅（べに）さして、佇んだままこう言った。

　細島さんは、さっきから人を黙って見ていた自分のぶしつけの行為を、今佐紀子に呼びかけられて初めて気がついて、うろたえてしまった。

　しょうことなしに、細島さんはどぎまぎしながら、

『あら、あんまり可愛い色のパラソルでしたから見ていたのよ、「ごめんなさい」』

こう、つくろうように言ってとりました。

『あら――』と佐紀子は、またいじらしく紅くなって下うつむいて、はじらいながら、

『あの──私、妹がないものですから、こんなはでなのをまだしていますの──』と、言いわけをするように、小さい優しい声音で言った。真白い指先にピンクの飾り房をさぐりつつ、いとしげに微笑むのだった。

──南の海辺の砂地に咲く撫子の花のような方──そのパラソルの色に似た花のようなひと──細島さんはこう思った。そして、あの夜、真澄の机の上で、はからずも見出したあの歌を思い浮べた。

　　ふるさとの海辺の花に似たるかな
　　　君がかざせる、パラソルの房

あわれ、その歌ゆえに今日のひとひを、花に似しパラソルの房を求めて過したのであったものを、そして今眼のあたり──その歌われし君の姿も見出したのだ。

『ごいっしょに帰りましょう』と、佐紀子はしとやかに言った。

細島さんは　ええごいっしょに）と答えて、ふたりは揃って歩き出した。

校門を出てから、やがて電車の停留場へ来た。

ふたありの乗ってゆく電車の方角は異(ちが)っていた。

『ここからはお別れですのね』と、細島さんが言うと、佐紀子はやさしくうなずいて、

『あの──私まっすぐ家へ帰るのですと、あなたと、おんなじに乗って行けますのよ、けれどもほかへよるものですから……』と言う。

『ああ、そうですの、どちらへ？　お稽古？』と細島さんが問うた。

『ええ、あのお琴を……』と佐紀子ははじらうように答えた。

——琴、琴、げにも琴を弾くにふさわしい撫子の君よ、細島さんは感じた。

やがてふたありは別れ別れに、電車に乗って東西に離れた。

人に思われて、そのひとの手帳の端にまで歌にしるされてあるなどとは知るよしもない、美しい子はピンクの傘を手にして琴の師匠の門をくぐるべく行くのだった。

知りたいものを皆知りつくしてしまった後のような、もの憂い寂しさとものの足りなさが、細島さんの胸を襲うてきた。

細島さんは佗しく家へ、母と住む小さい家へと帰りゆくのだった。

真澄はその日、教室当番だったので、遅れて校舎を出た。いつもは自分を待っているはずの細島さんの姿も見えず、またかの君のパラソルもなかった。

さびしい顔をして真澄は家へ帰って、玄関で編上靴の絹紐を指先で解きながらも今日の学校での思いを胸に浮べた。

　　路すがら、みすがた忍び帰り来て
　　　靴ぬぐひまも君を忘れず

真澄は、その夜あの小さい手帳の上に、こうしるした。

真澄は佐紀子と親しく話を交したのは、夏休み近い日頃だった。

それは一学期の最終の試験の日だった。課目はその春から初めて習った化学——ある人達にとってはかなりの重荷だった。なんと言っても、かんと言っても、今日の関所を通れば後は太平楽、寝て暮そうと起きて暮そうと勝手気ままな夏休み、海に山に野に旅するもよろし、または我

が家の井戸端に縁側に物干し台に暑を避けるのも妙――ああ、間違った、物干台だけは、ただし夕方あるいは夜のこと。

何しろ、今日の試験は最後の一戦だから、不眠不休のつもりでもなかなか敵は手強くて、紅ばらの夢やマンドリンの顫音（トレモロ）も吸い入れるにふさわしい海綿のように、柔らかい少女の脳細胞がいじらしく苦しむ、それは苦しいはず、そもそもその書き出しから恐ろしい。――一、空気。空気は無色無味無臭の気体にして動物植物皆この中に生活し云々とは――こんなことをいまさら覚えなくてもちゃんとわかっているのに、じれったい、空気に友禅模様のように色なんか染めてないってことは、あんまさんでないかぎり誰だってひと目でわかっていることだし、またもしも空気に、まかりまちがっておはぎの味でもあったら、それこそ大変、花はずかしい姫君方を始め路ゆく乙女の群れからお婆さんまで、口をあんぐりあいたまま、自然の甘味に妾（わたし）は酔うなどと、おそろいの低能児の顔つきになってしまう、大変大変、まあ、ほんとに空気が味がなくて、仕合せ。――こう考えるといまさら学校の教科書なんて暗記しないでも、みな常識とやらでわかっていることなのに、化学なんて、ほんとにつまらないものねえと思っている下から、もう一度つらつら考えなおすと、あっ、教科書は間違っている！　いる！　たしかに！　空気に色がないって、ある、ある、たしかにあるはず、昼は白くて夜は黒い、味だって、ちゃんとあるはず、第一、私の小さい家の空気だってさえ、時おり味を持つのは、夕食の御馳走の前なぞ、お台所に漂う空気には、一種の仄かなる味を含むものを、こんな常識で判断できる事実をなぜ科学者は思い違いしているのかしら？　などと頭を曲げているうちに夢見る子となって、いつか夜が明けて、学校へ行

く時刻、教室へは屠所（としょ）の羊さながらで……ともあれ、かくもあれ、その時間が終れば、もうそれで手の届くところに、夏休みが控えていてくれた。

真澄の組も佐紀子の組も、その日は同じ時間に同じ試験だった。真澄が人より早く答案を出して、雨天体操場兼生徒控え室へ行くと、まだそこには人影がまばらだった。先程出した答案にまだ心配をかけている人もいた。

『ちょっと、ちょっと、あのね、非金属元素と金属元素をおのおの知るだけ述べよというんですもの、六つか七つ書けば、いいのね』

『ええ、そうよ、私だって、酸素に水素に窒素に炭素と塩素と金や白金や銀や水銀、銅、鉄、それだけよ――』

『あら、そう、じゃあ、大丈夫ね』と何が大丈夫だか、安心する。

『まあ、どうしましょう、私まさかあんなところが出るなんて思わなかったのよ、ほんとにどうしましょう』などと仰山な身振りをして、いわゆるあんなところを恨むこと十分ばかり、もう、後はたのしい明るい日がくるゆえに、やはり、いつか華やかな笑い声さえ起きてきた。

そのおり、真澄の近くにいた二、三人の中から一人が真澄に声をかけたので……『竹森さん、あなたのお家は遠かったのね』

真澄は答えた。『ええ、でも、遠いようでも近いし、近いようでも遠いし』

まわりの人は皆笑った。

『まるで、からくりの眼鏡をのぞいているようね』

『でも、綺麗な海辺よ、××の海はきれいな所よ』と真澄は、なつかしい海の名を口にした。

その時、佐紀子がつつましやかに話しかけた。
『××なら、私も小さい時母につれられて、ひと夏行っておりましたのよ』
佐紀子の優しい声音を聞いて、真澄はわれともなしに、紅くなった。自分の郷里のある海辺に、幼ない日のひと夏を送ったと、その人の唇からもれた嬉しさ、真澄の胸は怪しくも乱れたので。
『まだ、小さい頃でしたから、よく覚えませんけれども、あの砂丘の近くに、淡紅色(ときいろ)の花が咲いていましたの――あの花はほんとに可愛いと思いましたわ』――佐紀子は、こうまた言うのだった。
『あの浜撫子は今でも、あの海辺に咲いておりますの』真澄は鳴る胸をおさえて、こう言った。
『そう』佐紀子は、こう言って、静かに微笑んだ。真澄もじいとおし黙っていた。
『海はお好き？』しばらくしてから真澄が、思い切ったように問うた。
『ええ、ずいぶん好きですの――波に足を濡らしたり、渚で貝を拾ったり……』佐紀子は柔らかな調(トーン)で答える。
『貝はお好き？』と、真澄がまた尋ねた。言った後で、あんまり子供らしい問いと気がついたのか、うす紅くなっててれたりしたのだった。
『ええ、すきですの、なかでも、いちばん桜貝はかわゆくて――』
おお、浜撫子もまたその桜貝も、みな美しいひとの日ごとにかざす、パラソルの柄の房と似通う色をもつものを！――と真澄はうれしくも心なつかしさに堪えやらず――

『あの、お好きの桜貝を今度お土産に持ってきて差し上げましょうか』あんまりにぶしつけな──と思った時は、もう、心から嬉しそうな優しい声音の返事が聞えたので。

『まあ、うれしい！』──真澄にとっての、その年の夏休みこそは実によきひとに捧げる桜貝を拾い集むるに努力する楽しい楽しい月日になったので『あなたのパラソルの飾り房に似た色の花と貝のある海辺をふるさとに持つ私の幸いよ！』真澄は心の中で、こう叫んだ。

『あの戴けるなら、その桜貝を私いいことに使いたいと思いますけれども──』佐紀子は、いくらかためらいがちに、こう言った。

我が手に拾い集めて贈ろうという桜貝を、そのひとは何に使おうと望むのか、真澄には知るべきもなかった。

『何にお用いなりますの？』と、問うたけれども、佐紀子はただ微笑んだばかりだった。

『なにの役に桜貝が立つのでしょう？』と、真澄はいぶかしい面持をした。

『桜貝を戴いて、それに使って、それからお眼にかけますわ』と、佐紀子は言った。

それは何になるのか、真澄にはわからなかったけれども、いつかは自分の眼に示してくれるという優しい言葉をどんなに懐しく思ったろう。

その日のことがあってから真澄はたいへん、元気づいた。早く海辺へ帰って、桜貝を拾いたい、やさしいひとの手にささぐるパラソルの飾り房に似た花咲く砂丘に、都の君を忍んで佇みたい！　自由な夏の日を嬉しく待ち受けた。ある事情のある真澄の家庭ゆえにほんとうならば真澄にとっては東京の姉の家の方が明るい暮しよい気持になるはずだったけれども、その年の夏休み

だけは、あの海辺の街の家へかえる日が待ち遠しいようだった。それはまた言うまでもなく、桜貝のために、砂丘に咲く花のために！

真澄が、こうして夏休みを踊り上る気持で待っている心の下から長い日の間の都とあの海辺と、遠くへだたってしまう憂いにおされるのだった。朝ごとに校門をくぐる時、真澄の胸に追う一つの俤(おもかげ)があったのだったけれども、もうその俤を現(うつつ)に見ることはできない、ただ海辺の渚や砂丘に遠く都の空を打ち見て心に描くおもかげばかりになるのゆえ、でも、渚に思いを秘めつつ手にひろい集めた、美しい花片のような貝を、優しい掌(たなぞこ)にさぐるの喜びを思うと、その離れ住む憂いも補い得ると思えた。

そんなことばかり毎日考えているうちに、暑中休暇はいよいよきた。

明日、海辺の家へ帰るという前の日、真澄のもとへ細島さんが尋ねてきた。いつものように、真澄の部屋へ通った。

部屋の中には、旅仕度がしてあった。

『おかえりね』と細島さんが寂しそうに言った。寂しそうなもの言いを真澄に向かってするは、その日頃このひとの悲しい癖となっていたのだった。

『ええ、明日』と真澄は嬉しそうに軽く言った。

『そう』細島さんはあわれなほど、ますます寂しい風をした。

真澄は細島さんの、その風を見て、きっと自分の住んでいた、あの海辺へ行って見たいのだろうと軽く考えて、

『あなたも、いつかいらっしゃいね』と慰めるように言ったりした。

『ありがとう、でも私もう日本にいないいんですもの――』と、細島さんは寂しい寂しい泣くように、こう言って苦しくいじらしく微笑んだ。

『まあ、どうして?』と、さすがに桜貝のことで有頂天になっていた真澄も吃驚して眼を見張った。

『あの、いろいろの事から私も布哇（ハワイ）へ行くようになったの――たぶん八月の中旬出帆の船であちらへ渡るでしょう』

細島さんは静かに言い切って、眼に見えぬ泪を胸にたたえるのだった。

『まあ、あんまり突然ね』と、真澄は呆れた。

『ええでも、俄（にわ）かにきまったのよ』と細島さんは寂しく落ち付いていた。

そこへ女中がアイスクリームを運んできた。

ふたありは銀の小匙を手にとった。

『まあちゃん、お別れにハーモニカを聞かして頂戴』

細島さんが銀の匙を下に置いて願った。

『ええ』

真澄も素直に聞き入れた。机のひきだしから、小型のハーモニカを出して唇に当てた。吹く曲は、ふたありとも好きな歌を円舞曲にしたものだった。

　　月はかすむ春の夜に
　　岸辺のさくら風にまい
　　ちりゆく花のひらひらと

　　さおさすささぶね
　　くだくる月影
　　吹く風誘う花の波

歌曲とともに巧みにベースを入れてゆく旋律の響に、いつしか、細島さんは引き入れられて、泪さしぐむのだった。この吹奏が終ると、ややたって細島さんは、いとまを告げて帰りかけた。真澄が帰省している中（うち）に船出するのだから、見送らないでもよい、今日お別れに来たのだからと言って、細島さんは真澄が見送りに出てくるというのを断った。

『でも、何かお餞別をあげたいのに』と真澄が帰るひとの袖をとめたら、『さっきのハーモニカの音が、私にはいいお餞別よ』と言って細島さんは笑った。

――また会う日まで幸あれと――ふたありは心のうちで祈り合ったろう――

『さようなら』

『さようなら』

ふたりは、かくして別れた。真澄もその夜はものさびしかった。ああ、それにも増して細島さんの胸はどんなに侘しかったろう。

真澄は海辺の家へ帰った。

さっそく、毎日浜辺へ出て桜貝を拾おうとすると、たいへんな問題が家の中に持ち上がっていることが知れた。

それは、その真澄をお嫁にやる問題だった。天から降ってきたのか、地から湧いてきたのか知らないが、真澄にとっては地球が二等辺三角形になって自分の小さい身体がその下におしつぶさ

れたような気がして。
　まだ女学校も卒業し切れない少女をつかまえて、こうした話を平気で交すほど、南の方の村里は長閑(のどか)でのんびりしていたのだろう。ことに真澄の家庭には事情があった。
　真澄は日蔭の花のような子だった。
　真澄の生れながらに背負ってきた、ある運命の暗さが、真澄をそこまで追いやったのかも知れない。
　東京へ嫁いでいる姉さんは、異母妹(いもうと)をかばって、その話にもずいぶん反対したけれども、なかなか動かすことはできなかった。それでとうとう真澄は人形のように飾られて嫁ぐ身ときまった。
　東京から真澄の荷物が持ち帰された。
　真澄はいよいよその秋の初めに、ほど近い街へ嫁ぐことに、日取りまでおおよそきまった。今はどうすることもできない。真澄は泣いたろうか、泣いたのかも知れないが、涙は別に見せなかった。かえって平気な顔をしていた、いつも無口でむっちりしているのだから別に真澄の行動を眼に立てて気にとめる者もなかった。
　さて、そのうちに、ある日一枚の船を写した絵葉書が真澄のもとに届いた、それは細島さんが横浜を立つ時出したものだった。細島さんは、そうして日本を離れ去ったのだった。
　夏も逝って、秋らしい風が海辺にも吹いてきた、避暑の客もたいてい帰った。
　真澄は、その頃まで折々に浜辺に出ては、悲しい思いを秘めて、一つ一つ砂の上の桜貝を拾うのだった。

一つ一つなつかしい思いをこめて手にとりあげた。その貝がだいぶたまった、それを小箱に入れて小包にして、そして東京の佐紀子のもとへ送り出した。

それを自分で郵便局まで持って行って書留小包で出すと、すぐ浜辺へその足で行った。

真澄は砂丘にのぼった、そこには薄紅色の浜撫子が咲いていた、真澄は砂丘に腰をおろした。

海の潮（うしお）は鳴っていた。空には薄い夕月が仄かにかかっていた。

浜には人影はさらになかった。

真澄は袂からハーモニカを出して唇にあてた、とぎれとぎれに、もの悲しい音が波の音にまじって響いた。

やがて、その響きもとだえた。

砂丘の上に咲く淡紅色（うすべにいろ）の小さな花の上に、真澄は身を伏せて、よよと泣いた。

……佐紀子さん……

なつかしいひとの名を呼んだので……

夜はふけた、月はさえわたった。月の光に照らされた、あの花咲く砂丘の上には銀色に光る小さいハーモニカが一つ主もなく置き捨てられてあるばかり——どこにも真澄の姿はなかった。

海は黙して暗い中に時々白い波を裏返していた。

やがて、浜のあっちこっちに提灯の灯がいくつもいくつも乱れ飛んだ。

その提灯は富豪竹森家の定紋をつけていた。夜明け近くなると、いく艘もの小舟が人々を乗せて沖をさして出た。そこにも竹森家の出入りの者を始めたいていつめかけていた。

真澄は昨夜から浜辺で消えてなくなったのである。

――小包が届いた、都の佐紀子の許に、佐紀子はどんなに喜んだろう、約をたがえず送ってくれた真澄の心をなつかしんだ、それにしても、せめて葉書一枚ぐらい小包につけて下さってもよいものをと思った。

佐紀子は、いろいろの厚い言葉で礼状をかいて、真澄のもとへ送った。あわれ、真澄は今は浜の家にいるものと思えばこそ――

佐紀子は、その桜貝の大きいのを選んで、琴爪を作るように細工をある店へ頼んだ。

ようやくして桜貝の琴爪ができてきた。

佐紀子は嬉しかった、その桜貝の爪でその宵琴を弾いて試みようと思い立った。

薄く化粧して袂を更（か）えて、初秋の気冷たい縁先へ琴を運んで絃（いと）に触れた。

桜貝、桜貝、それにちなんで波に飛ぶ千鳥の曲をえらんだ。

　しおの山、さしでの磯にすむ千鳥
　君が御代（みよ）をば八千代とぞ啼く
　君が御代をば八千代とぞ啼く
　淡路島、通う千鳥の啼く声に
　幾夜ねざめぬすまの関守

静かに琴の音は澄んだ。

庭の草蔭に鳴いていた虫の音をひそめた。

ひとり夜露のみ庭の草木に茂く光っていた。

空には星がきらめいていた。

小さい一つの星がつと斜に流れた……秋の夜の風が颯（さつ）と吹きこんで、琴に向かう美しい子の袂を裏返したと思うと……十三の絃の面に浜撫子の花が散った……波の音が遠く聞えた……佐紀子の奏ずる白い指先がわなわなと顫（ふる）えた……琴ひく我が手に奇（く）すしくも浜撫子の葩（はなびら）を摘んでいるではないか……いずれが浜撫子の葩か、けじめはつかなかった……庭のおもてにそよふく秋の夜風の中に、露に黒髪を濡らして、立つ面影――それは真澄、桜貝の贈り主だった――佐紀子の指先が絃をはずれた――真澄さん――こう高く呼んだ、その面影の名を――。

佐紀子の母なるひとが、その琴の音ふいに絶えし縁先に、いぶかしんで走り来た時は、佐紀子は蒼白い顔を絃の上に伏せて胸には桜貝の琴爪をはめた指をそのまま犇（ひし）と当てて気を失っていた。

あわれ、この時、その宵、はるけく遠きかの布哇（ハワイ）の島にも秋風吹けば、そぞろかなしき異郷の仮りの住居の窓に心佗しく人を忍びて泪する寂しき子の瞳には、東の空に流れよる一つの小さな星影が映ったであろうか？

# 黄薔薇（きばら）

××英学塾の卒業式のあったその日の黄昏時（たそがれ）、五番町の英国大使館の桜並木の下を三々五々式の帰りの一団の人達が通る。卒業祝賀のレセプションめいた集まりを終って、今さまざまの感じを持って家路に帰る途中である。

『ああ、長く寂しく退屈だったスクールライフとやらも、私のは終ったらしい今日で』

その一群の中の一人がさびのあるじみな声で半ばみずからを嘲ける如くに言い出した。

『そうね、けれど葛城さん、あなたはスクールライフに告別を告げても、さらにプロフェッサーの新しい生活が展開されるじゃありませんか。』

と友の一人はその言葉に応じた。

『プロフェッサーはいいわね、とても偉そうに聞えて、しかし情けないわ、いよいよこの春から都落ちとは……』

葛城と呼ばれた人はいかにも情けなさそうな声を出す。

『葛城プロフェッサーの御赴任遊ばすのはどこ?』

と、また一人が尋ねる。

『東都を離るることまさに何千哩（マイル）の××よ。』

と、その声も寂しげに力ない。
『ああ、じゃあ××の県立高女でしょう、あなたそんなこと仰しゃるけれど、あすこなかなかいいところよ、ローカルカラーってものも感じようひとつでずいぶん詩的なものよ』
と、慰め顔で一人が言う。
『おや、じゃあ、貴女××へいらっしったことあるの？』
と葛城と呼ばれた人が真顔で問うた。
『ええ、ちょっと行ったことがあるわ、そら古い麹町の卒業生の関って人ね、あの方がこの三月まで××の女学校にいらっしったのよ、そして今度関さんがマダム藤田におなりになるんで辞職なすった、その後任があなたなのよ、私ねあの関って人が、叔母さんに当るのよ滑稽でしょ、そんな関係でちょっと××へ遊びに行ったことがあるの。』
説明を聞いて葛城さんはうなずいた。
『ああ、じゃあ、あの関さんはあなたの叔母さんね、じゃあここで悪口うっかり言えないかしら？』
実は（言ってもいい？）との謎である。
『あら、かまわしないわ、かなり私達とは時代を異（こと）にしているあの叔母さんなんてかまいはしないわ。』
ととんだ姪である。
『そう、小山さんちょっとごめんなさい、じゃ、悪口言ってよ、よくって。』
と、でも気がすまぬか前置きの御挨拶がある。

『ええ、どうぞ。』
と小山さんは澄ましたもの。
『私こう思うわ、あの関さんが長く先生していらっした後を襲って私が赴任するのは、かなり苦労よ、私みたいな者と関さんを見くらべて校長始め一同呆然として、これは飛んだ悪教師が舞い込んだわいと眉をひそめるに相違ないわ。第一私に教育者だなんて資格がないんですもの、まず現代の教育者は第一に偽善者たらずんばならずでしょう。そこへもってきて私は卑劣なあの妥協的行為が一切できない性格ですもの、きっと赴任後さっそく免職かも知れない、ああ止んぬるかな。』
と葛城さんは、少しおどけた調子で大きな溜息をついた。
『ホホホホホホ、そう早く貴女のように見限ったものでもないわ。関先生は関先生、葛城先生は葛城先生、若いだけに珍重されるかも知れないわ。』
と小山さんは慰める。
『いいえ、ところが私なんてこんな陰気なじみな寂しい性格だし、華やかな姿も持っていないし。生徒になんでいい印象を与えられるものですか、とても失敗の教師生活の受難者に終るのよ、ああ。』
葛城さんはまたも溜息──
『ホホホホ、さすがは在学中哲学者のあだ名を持って終始一貫した人だけに、もう教職に対して深き煩悶をしていらっしゃるのね、ちがったもんだ、フフフフフ。』
とかたわらの友達は一度にこの時手を打って笑い囃した。

姓を葛城名をみさを、こう呼びますその人は、学校でありし日のあだ名を哲学者と呼びなされたほどの瞑想家だった。黒いながら自然のウェーヴのついたちりっとした髪を無造作に襟もとにくるっと巻いたのが気品があってふさわしい、顔立はやや面長で頬は上品に気持よくこけている、すうと顎の方へ斜面の輪郭が美しい。下ぶくれたオールドローズ全盛の時代相にはちょっとアナクロニズムかも知れぬが、つむじの曲った流行嫌いの人間には、それがまたなく古典な貴族型としてありがたく感じられるのである。ましてその眉の秀でて濃いこと！　巴里（パリー）の美顔術師のはやらせたとかいう一本ならべの細い地蔵眉が日本にまで渡来して、耳かくしと長いショールと競争するようになった今日この頃、厚味のある濃い直線的で少し斜めに気持よくはられたその処女の眉もまたなくありがたいものである。まして、いわんや、その眉の下守る涼しの瞳よ、感情の泉しかも静かに波立たず形の表情なき心の表情を示している――しかし惜しいことにその上に眼鏡のグラスが光る、むろんふちなしで大きいそして金縁――嫌味が無く蒼白い病的なほど蒼白く沈んだその頬のあたりにうつる。とはいえその人の間近によって物語り合う時、その口数少なき人の言葉を補う如くに眼鏡の奥の眼は柔らかに開かれ指し示す声なき声を――眼鏡を越えてその人の瞳は少し憂鬱なだけに美しく寂しく人をひきつける、しかもその眼はあまり人の群の中へはそそがれず無限永遠の宇宙の流れに向けるが如く、しかして夢見るに似たるその瞳の姿――ゆえに誰言うとなく哲学者となづけたのであろう。

　その我が葛城さんが女学校の先生になったのである。その　先生」となるについてなんらの希望するところもまた期待するところも自分自身にない事は言うまでもない――それだのに葛城さ

んはなぜ先生になんかなるのかしら？　そんな「先生」は女子教育上の罪悪でないかしら？　こう言って葛城さんを誰でも責めたくなるに相違ない。けれどもそれには少しく我が葛城さんに同情せねばならぬ理由がある――それは葛城さんが母一人弟一人の家庭の娘であるがゆえに、学校卒業と同時に親類の頭の古い伯父さん叔母さん達の御意見で、「結婚」とか申すものを実行せねばならなくなったのである、ゆえに葛城さんはその結婚という大波の洗礼を避難すべく、心にもない「先生志願」をして、しかも住みなれし日本人類文化の中心の都会を離れてわざわざ遠い××市まで出掛けてゆくのもそのゆえであった。クラスメートこれを評して曰く「結婚避難所」と――

　その結婚避難所に、いよいよ葛城さんの出立する日がきた、東京駅を朝出る特急列車で立つのである。その避難所は朝乗れば午後三時頃その途中に下車できる地である。学校友達の誰かれしばしの別れを惜しんで、その朝駅頭に見送る――

『あんまり「葛城熱」を起こさせて生徒を悩殺しないで頂戴よ。』

と友の一人はたわむれた。

車窓から顔を出して葛城さんは思わず哲学者らしい顔に苦笑して、

『まあ、この私が生徒にもてた時は、まったく日米戦争の始まる時よ。』

と言う。

『葛城さん、地久節には、私達のクラス会のある日よ、忘れずに万障を排して上京して頂戴、よくって、会場はいずれ決定しだい御通知するわ。』

　クラス会の当番幹事の一人がこう念を押した。

『ええ、きっと来るわ、もうとても東京が恋しくて恋しくてあなた方の顔が見たくてたまらなくなるわ、そう地久節ね、クラス会、忘れずに上京するわ。』

葛城さんはこう早くもその日を楽しみにするかのように言う。その時五分鈴はけたたましく鳴り渡った――その時――鈴(りん)の鳴るなんとなく引きしまったプラットホームの上を急いで駈け来る足音が入り乱れて響いた――赤帽が赤革の小型のトランクを肩にして走る。その後ろに中年の上品な紳士が鶯色のレンコートを小脇にかかえて走る――その傍に続いて黒髪のお垂髪(さげ)のベルベットの海老茶色の振れるにまかせて、長い友禅模様の袂の羽織を重ねて重きがままにゆるる華やかな、よそおいの少女――おそらくはその紳士の愛嬢であろう、父なる人にせかれつつ車室へと走りよる、左手に南豆玉の飾り房をゆらがせた美しいハンドバッグ――そして右手には花の一束、真白い洋紙に覆われた隙から仄(ほの)もる花の面影は、これぞこれ、露も滴らん朝浄き眠りより眼覚めて温室の窓を出でたるばかりと見ゆる黄薔薇の花！　あわれ、黄薔薇の花！

この美しい少女の一行を、車窓から葛城さんも思わず見つめた、駅頭に立って見送る人の群も皆ひとしく瞳を向けた。

『間に合います――』

駅夫らしい人がその旅客に声をかけた。

葛城さんの乗った車室の隣の車室へ赤帽は荷を持ちこんだ。切符の番号を慌しく見た紳士は『そこだそこだ』と安心したらしく、傍の少女を助けて乗り込んだ。いそいで走ったので小さい胸の鼓動は烈しいのか、花ささぐる片手いみじくも、おののいて、ゆるる黄薔薇の花束が、乙女の袂に相ふれる――美しい状景である――

汽笛は高らかに鳴り響いた――列車は動き出した。
『じゃあ、さよなら』
かくて、我が葛城さんは都にしばしの別れを告げて雄々しくも立ち出でたのである。

葛城さんは四月の新学期から教壇上の人となった――××県立高女の英語教師として、

　ひがらひねもす
かなしやこの身
チョークに汚れて
声をば涸し
異国の言葉人に伝うる
悲しからずやこの業(なりわい)

こんな詩句（？）を東都の友、小山さんに送ったりして寂しがっていた――それは教壇へ立って二日目の頃だった。もう二日の経験で葛城さんはがっかりするのに充分だったので――三日目には、四年の東組へ始めて出た。その級は赴任後三日目に初めて教える組だった。
『生徒に慣れるまでがむずかしいですが――』老校長が葛城さんにこんなことを言った。けれど『私は百年いたって生徒になんて慣れはしない』と彼女自身思ったのである。その気持で寂しく東組の教室の扉(ドア)を開けた。今まで出たのは下級の組だったが――そこはその学校の最上級だから

なお葛城さんはへんにこだわったが、ちょっと真正面から生徒の顔のならびが見つめていられなかったから、つい視線をそらす――すると、そのそらした眼は教室の一隅に向かった。そこの壁ぎわに生徒の机の余分なのが一つ置いてある。その上に粗末ながら花瓶がある。その花瓶に花が挿してある。その花は黄薔薇の花――葛城さんの眼は、その瞬間つとその花に吸いこまれるように見入った。

　おや、どこかで見たような花――もちろん生れて二十二年間、黄薔薇の花を何度見たことがあるかわからない。しかし、特に最近見たに相違ない、その花の印象があったから――しかし、ちょっとなかなか思い出せない……しかし、花のことばかり考えていられない。リーダーを型の如く教えねばならぬ。リーダーの訳読のすんだ後で、ちょっと書取りを生徒にさせた。それはどのくらい文字を知っているか、つまり級の生徒の語学の力の見当をつけるためにである。驚いたのは生徒である。『今度いらっしゃった先生、始めっから試験なさるわ』しかし御命令通り紙を出してかき出す、お眼を白黒……その間に葛城さん、あの壁の一隅に突立った――その花の印象を思い出そうとして思い出せない――窓から吹き入る春の微風に、ひらひらと温室咲きのもろい、その花がくずれる、一片二片、葛城さんは、それを美しと見た。そしてその散った葩の一片を自分の掌にのせてみた。鐘が鳴った、書取りの答案を集める、お辞儀をする、生徒は順々におとなしく教室を出てゆく。葛城さんも答案の一束をかかえて教室を出ようとする。生徒が道をよける。よけた傍の生徒の顔が眼に入る――おや、このひとどこかで見たようだと葛城さんちょっと立ちどまった。ふくよかな面、黒髪、張りのある眼、むっくりふくらんだ紅い唇、そして今先生の前らしくはにかんでいる姿――ああ、そうそう、あの東京駅を立つ時、プラットホームをお父さん

らしい人に伴われて走って来た少女――そういえばこの教室の黄薔薇の花は、このひとが、あの時持っていたのじゃなかったかしら？　そう思って、その生徒の顔をもう一度注意して見やると、ぽっと淡紅（うす）くなって、さらにはにかむ。少し微笑んだら、片えくぼができる――しかし、いつまで見ているわけにゆかないから、葛城さんそのまま職員室へ帰る。自分の机の前の椅子に腰をおろして気がついた。なんのこと、黄薔薇の散った葩を片手の掌に後生大事にのせたまま……まあ生徒がさぞ笑ったろうと葛城さんも自分のことながらおかしい。でもせっかく二階の教室からここまで運んで来た葩だと思うと、そのまま捨てるに忍びない、机の上に本が一冊、リーダー以外にのっている。それは空いた時間のひまつぶしに読もうと思って持って来たYeatsの叙情詩集、その本を開いて、しおりの代りに葩をはさんだ。はさんだ頁（ページ）に偶然！　こんな詩句がある――その最後の一聯の終りの句に――

For my dreams of your image that blossoms - a rose in the deeps of my heart.

としるしてある。葛城さんは思わず微笑した。そしてその文字の上に淡黄の葩をのせたまま詩集は閉じられた。

五月に入って間もなく、学校では春季の遠足があった。△△山地方の近郊の名勝の風光を探りに、一年から四年まで全校総出で――その当日、四年の東組の受持の先生、家事裁縫作法というたいそうありがたい課目の御教授でニックネームをお局様と申し上げる天保生れ（？）の老先生、いささか御老体にお恙（つつが）あらせられて、その日の一行に加わらなかった。ゆえに別にきまった

受持級を持たぬ葛城さんが臨時受持教師となるように校長からのお指図で、その日だけ四年の東組を監督（?）することになった。

××市から汽車にのって、△△山の麓の町まで一行は辿った。その麓の町の駅へ降りると、東組の一生徒が葛城さんの傍へ御注進に来た。

『先生、たいへんです。あの浦上さんが眼を痛くなすったんです。』

『まあ、どうして？』

と問うと、『あの汽車の窓から飛んできた石炭の煙のかすが眼の中へ入ったんです。』

右報告終り――そこへ浦上さんが真白の半巾（ハンカチ）で左の眼をおさえながら、悄然としてうなだれて来た、その人こそ、あの黄薔薇の花とともに東京駅で相見し子――

『たくさん、痛みますの？』

と葛城さんが問うと『ええ』とうなずいたまま力無い――そこへ校長もほかの先生方も集まっていらっしゃる。

『眼は大事ですから、早速この町の眼科医へ行って、その眼の中へ入っているものを取ってお貰いなさい。その方がいいでしょう。では葛城先生、御苦労でも今日はお受持の先生ですから、浦上さんを連れて、眼科医のところへ附きそって行って下さい。私達はお先に目的地へ着いてお待ちしていますから、車でいらっしって下さい』と、これは校長の言葉。それで葛城さんは駅長の教えたその町で一番信用のあるという眼科医の許へ浦上さんを伴った。

ほかの生徒の一行は目的の地へ行列美々（びび）しく立ち去ったのである。

眼科医はこの思いがけない途上の災難に出会った美しい少女の眼を診て『おや、これはあぶなかったですね、もう少しで瞳にかかると傷がつくところでした』と言いながら洗って脱脂綿を指に巻いて手際よく拭くと、黒い小さい煤烟（ばいえん）のかすが取れてきた。『少し強い薬をさしておきますから、三十分ほど眼を閉じて、静かにやすんでいて下さい』と、申し渡した。そして診察室の一隅の手術用の寝台の上に浦上さんをやすませた。その枕辺の椅子に葛城さんは腰かけて控えた――医師は、『お眼の痛みが去ったら、お帰りになっていいんです。それまで、少しおやすみになって――』と言い置いたまま、ほかに用があったのか、室を出ていった。別に看護婦一人いる様子もない、田舎の小さい眼科医の医院――静かである――

『少しは痛みがうすらぎましたか？』

葛城さんは慰め顔に問うた。

『ありがとうございます。少し楽になりましたの――あの先生、申し訳がございません、途中でこんな迷惑おかけして……』

と寝台の上の少女は術なさそう……

『いいえ、そんなこと、ちっとも気にかけないで頂戴――浦上さん。』

と、声をかけながら、いまさらにその姿を見やった。寝台の上に、あお向けになった細長い、かぼそき姿、袴の裾に揃った形のよい黒い靴下のぴったりした足首、胸のあたりに重なりこぼれる大柄の銘仙（めいせん）の袂――重ねた襦袢の袖の紅（あか）がからんで美しい。白襟くっきりと目立つ襟もと、斜めに横切る左手は、ガーゼのきれで痛む左の眼を軽くおさえているのである。枕の下に、お垂髪（さげ）

の末が流れる、白い額に、いたく散る遅れ毛、涼しい瞳は双つとも軽やかに閉じられた面(かお)、唇のみ花のように息づいて――白日(まひる)静かに閉ずるその瞳に何を夢見てか……あわれ。

葛城さんは、その美しさに打たれた――そして思いぞ起こす、そぞろにあの黄薔薇の花の憶い出――偶然とは云え同じ列車で××市まで乗り合した、その少女、はからずも我が教えると――葛城さんは不思議な気がした――

『浦上さん、あなたには学校へ来る前、お会いしたような気がしますけれど。』

こう、初めてその思い出を言いかけた。

『ええ、あの存じておりますの、あの――東京駅で――』

その少女(ひと)は、うす赤くなって、はじらいつつ答えた。

『ああ、じゃあ、やっぱりあなたでしたの、あの黄薔薇の花を持って……』

葛城さんは、自分の思った通り、あの日相見た少女が眼(ま)のあたりの子と知った。

『ええ、あの春休みに父と一緒に東京の叔母の家に遊びに行っていましたの、そしてお土産に温室にある黄薔薇の花を貰って、帰るところでしたの――汽車にもう少しで乗り遅れるところで、私あのずいぶん走って――先生それを見ていらっしゃったのでしょう。私あの教室で始めて英語の時間にお眼にかかった時どんなにきまりが悪かったでしょう。』

こう、その少女は言う――優しい口調でなだらかに――

『ホホホホ、私あの時、汽車が出なければいいがと、はらはらして見ていたんですよ。』

葛城さんも打ちとけた。

『まあ、ありがとうございます。』

と、その子も笑い出した。
『ほんとに、偶然ですのね、そのあなたが学校の方だったとは――』
葛城さんはこう言う。
『ほんとうに――先生――私あの講堂で校長先生の御紹介の後で先生のお姿が見えた時、まあ吃驚(びっくり)しましたの……でも……』
と、その子は優しくたゆたって、言いよどむ。
『でも……ってなんですの……でもって……』
と葛城さんはでもが気にかかって追求する。
『あの……あの……でも……』
と、追求されて、ますますその子は言いよどみ、口ごもる……
『でもってなに？』
と葛城さんは気にとめている。とうとう思い切ったらしく寝台の上から可愛い声音で――充分のはじらいを含んで、
『でも、あの嬉しかったんですの――なんだか――嬉しくて……』
と言いさして、はずかしさに堪えかねてガーゼを持っていた手で、その顔を翳(かざ)した。
『おや、いけません、ガーゼが落ちますよ。』
と、その刹那こう言って、葛城さんは、はじらう子の眼を今すべり落ちようとするガーゼをとどめようと我が腕(かいな)をつとのべた、――その時、ガーゼをとどめようとした手が、その美しい子の手におのずと相触れたので……

……………

『いかがです、痛みはなおりましたかのう。』

と言いながら、眼医者はいつの間にか、部屋へ入って来た――

『ええ、もう、だいぶよろしいようでございます。』

葛城さんは椅子から立上って答えた。

『それでは、もうお帰りになってよろしい――』

医者の言葉に、寝台の子も起きあがって仕度をした。

『ああちょっと、先ほど治療をいそいだので、診察簿の記入を忘れましたから、ちょっとお名前を――』

と医者は診察簿を開いてペンを取った。

『××市の高等女学校の生徒、浦上礼子――』と葛城さんは、本人に代って答えた。

『お年齢（とし）?』葛城さんは名は教室で知っているが、そのひとの年齢までは知らない。

『おいくつ?』と傍のその少女に問うと、

『十七。』

東京の葛城さんのお友達は、地久節の日に、かねての計画通りクラス会を開いた。しかしその日葛城さんの姿はとうとう見えなかった。

『まあ、葛城さんたら、いったいどうしたんでしょう。東京駅を立つ時、あれほど地久節のクラス会にはきっといらっしゃるって約束したのに――』と幹事の一人が憤慨する。

『ほんとにねえ、あの人ったら、××へ行った当座は、やれつまらないの、淋しいのと、ぐちをこぼした手紙をよこしたのに、近頃どうしたのか、なんの便りもないんですもの——いったい、どうしたのかしら？』と小山さんが不思議そうな顔、そこへ一通の電報がクラス会宛に届いた。

文面に曰く、「コウムタタンユカレヌ」、——これを見て、

夏休みに帰省したら、みんなでいじめてやりましょうよ。』と、たちまち衆議一決！

——知るや知らずや——その日の××地では、学校では式の後（のち）礼子が葛城さんの宿を訪れたのだった。

水面（みのも）にひびく鐘の音
ゆらぎ　たゆたい　かつ消えて
沈黙の闇に溶けゆきぬ
きのうを思い返せ」とか
きょうの名残を惜しめ」とか
来るその朝を待てよ」とか
——清見潟（きよみがた）に鐘の音が響いてゆく、興津（おきつ）の清美寺の鐘楼からである——
鐘の音はかくて黄昏（たそがれ）の海の上にと鳴り渡る……
今し磯辺に佇む影……二つ

二つの影は、そこはかとなく我が身を包みて響きゆらぐ鐘の音に聞き入るであろう、言葉なくそのままに――

宵なれば月影淡（うす）く空のかなたに――渚に打ちよせて、砕けては去る波頭のみ真白い絹房をかき乱したように仄白く浮いて見える。

『礼子さん……あれは灯台の灯でしょうね。』

二つの影の一つ丈高（たか）く、すらりと砂地というよりは小石まじりの岩近くに足ふみなえしその人は葛城さんだった。

『ええ、あの――三保の松原の……』礼子の声の素直な柔かさ、少女（おとめ）なればか……かくまでにただ一つの声調そのものにさえ、まだうら若い人生の春の匂いを含むは――

『三保の松原――じゃあ、あの羽衣を天女のかけたという松のあるところですわね』

『ええ、そうですの、今でもございますわ、浜辺に囲いがして……』

『おや、そう礼子さんいらっしゃったことがあるの、あすこに――』

と葛城さんの指さすあなた、海を間にはさんで、夜目にもかすかながら長き一群の松原の半島形、その突端に細く紅い灯が一つ、消えつ、またともる――その灯の奇（く）すしさ。

『ええ、昨年の夏お父さんに連れられて……あの先生と御一緒に今年もまいりましょう、ここから船が出ますの、あの富士が見えて――まるで広重の描いた絵のようですわ』

『まあ、綺麗でしょうね、東洋風の風景がはっきりして――』と葛城さんも同感の様子である。

『先生、それからあすこの近くに龍華寺てお寺がございますの。日本一の蘇鉄の大きいのがあるんですって……。』

礼子は去年(こぞ)の記憶をもの語ろうとする。

『あ、龍華寺、あすこには高山樗牛(ちょぎゅう)のお墓があるんでしょう――』葛城さんは思い出したような声をあげた。

『ええ、そうですの、外国風の真白い大理石の墓碑でしたわ……』

『あの方は御病気でこの海辺に長らく住んでいらっしゃったのでしょう……礼子さん、あなたお読みになって？』

『いいえ……』

礼子ははっきりと葛城さんの顔を見詰めて答(いら)えつつ、その書を今からでも読みたいそぶりで――

『あ、そう、あれは私達の女学校時代みなが騒いで読んだものなの、あなた方の今頃には少し古いでしょうけれど――今でも私はっきり覚えていますわ、あの中のサッフォを讃え惜しんだ一節をね――』

『先生、サッフォって？』

『サッフォ、サッフォ、――その人はギリシャの女流詩人、偉大な詩人！　魂の偉大に美しい……西暦紀元前七〇〇年頃の人なのですよ――第十位のミウズの神として讃えはやされた、ほまれ高い女流詩人――私はこの人の世にもたぐいなく美しくも清らかな熱情が大好き！　あの 夕づつの清光を歌いて」という一聯(れん)わずかに三行ばかりの訳詩が上田博士のお筆で日本には残されてあるばかりですけれど……もっと私達の愛し讃えねばならぬ女流詩人だと私は信じますの――』

『まあ、紀元前そんな懐しい女流詩人がいらっしたのね。』礼子は麗しい瞳を輝やかせた。
『そのサッフォのことが、わが袖の記の中にかいてあるんですよ。私少女時代に暗誦したのを思い出して見ましょうか。』
『ええ、先生、どうぞその美しい文章を教えて下さいましな』
礼子もかく願うままに葛城さんはほほえみつつ誦した。
『――ああサッフォよ！　汝はたぐい無き詩人なりき、その奏ずる琴にうつし世ならぬ響きを宿しその歌う歌には天上の声ありき、ヘラスの人々は、なお詩神の列に加えてオリュムプのやしろに祭りにき、されどその最後の幸は汝にあらざりき、サッフォは人の子なりき、人の子として恋てふもの憧れき、まことなき人はかれを愛し、まことなき愛はかれを悩ましき、あわれかれが望みたる幸福は人間のものにあらざりし、かつてまことありし人を抱けば胸に蛇ありてかれを死ぬべうかみぬ、不信充ち虚偽みなぎる世に、かれ泣いて悲しめども時すでにおそし、ファオンはかれを欺きメリッタはかれをうらぎりぬ、世にくるしき事は沢なれど神かけて望みをおきしその人のまさなく卑しきさがを表わせるを見んほど苦しきはあらずかし、わが恋人の偽りを見んよりはむしろわが身の死にたらんかた、いかにはるかに幸なるべきぞ、サッフォの死や晩かりし、――』
葛城さんはここで暗誦の句を切った――息をひそめるばかりの思いに聞き入っていた礼子もほっと吐息をもらした。
『礼子さん、このサッフォはね、美しい同性の友に熱情を捧げて、裏切られた人なのです、レスボス島のエレリスの生れ故郷から首都のミチレネの学窓にありし日も――そして最後に可憐な女

隷として売られて来て、自分の侍女としたメリッタを深くも愛したのですけれど——その少女メリッタにも裏切られて——もはや熱情を空しく捧ぐるまでに破れし悲しい胸を抱いてリュカディアの岩頭から青い海の中へ身をおどらして波間に消えたのです——悲しき女流詩人、サッフォ——私は、私は、好きですの——』

　こういう葛城さんの暗い熱を含んだ瞳には泪がきらめいて……

『……先生！……』礼子の声はかすけくもおののいて、辛うじてこの一語を紅くも打ちふるえる葩の如き唇よりもらし得たのであった。

　その時——鐘声（しょうせい）余韻長くも響き渡った——その鐘の音に包まれて二つの影は相重なって——

水面にひびく鐘の音
ゆらぎ、たゆたい、かつ消えて
沈黙の闇に溶けゆきぬ

きのうを思い返せ」とか
ぎょうの名残を惜しめ」とか
来るその朝を待てよ」とか

否、否、あらず、さはあらず
鐘の音鳴りぬ　ぐちづけ」よ

我が音の消えぬその間にぞ

熱き思いに　『くちづけよ』

夏休みが来た時、葛城さんは教え子の礼子の避暑地の興津へ、礼子の両親の招待するままに、かつは礼子に離れがたくて、その地の浦上家の別荘へ来てしばしの日を送ったのであった。その間にふたりの手にはある切ない誓いが交された。それは、礼子が学校を来春出ると、葛城さんに伴なわれて上京する、そして葛城さんの母校の麹町の塾へ入学する、そして、そこを卒業したら、二人相連れてアメリカのカレッジに学ぶというその将来に誓いを立てた。ふたありの純な心臓をその上に懸けて！

葛城さんの宿へ、思いがけなく礼子の母なる人が訪れたのは、礼子の卒業の日も近い三月始めの頃の日だった。

去年の夏は興津の別荘で幾日か厚い接待を受けた事もあるので、もちろん相識の仲ではあったけれどでもあまりに突然の訪問に思えた。『お忙しいところを先生のお邪魔をいたしますのは誠に恐れ入りますが、折入って是非御願い申し上げたい事がございますので……』と、その母なる人は前置きの言葉を述べた。一体なんのことだろう、願いと言えば教え子の礼子の身の上のことであろうが、それはいかなる事柄ぞ？　早くも葛城さんの胸は波立った。

『先生――実はあの礼子でございますが――お蔭であの子ももうこの春学校の方も出ますので――実は前々からの約束にもなっておりますので――一人娘の礼子へ本家の方から養子を迎える事になりますので――その実は四月上旬にぜひ式をあげて私達もまずまず安心をいたしたいと思いますので――先生、その事を礼子に内々話しておこうと、私どもで申し聞かせましたところ、当人は非常な反対でございまして、父も私も本家の伯父達もなんと言ってきかしても承知をいたしません、けれどもあの子のそんな我儘から約束を破りますことは、どうしても本家の方への義理でできませんので、それで一同困ってしまいました末に、ふだんから葛城先生は神様よりありがたいものとあの子が思っているんでございますから、この上は先生にお願いしてよくあの子に不心得を訓（さと）して戴きたいと存じまして、――特に今日突然にお願いにあずかりましたしだいでございますが、――まことに恐れ入りますが先生、――いかがでございましょう――私ども浦上一家をお助け下さると、とくとあの子に御意見下さいますようお願いいたしますので――。』

　母なる人は声涙ともにという調子でいくつもいくつもお辞儀をしてくどくどと頼むのだった。

　葛城さんの心はその時虚を突かれてうろたえた――思いもかけぬ恐ろしい岐路がそこに運命の悪魔の悪戯好きの残忍な笑いとともに、二人の処女を待ちかまえていようとは――ああ、今日まででその日まで誰か知ろう――。

　葛城さんの心は弱かった。うわべには凛々しく犯しがたいその人もやはり弱い人の子の――人以上の弱い弱い優しいもろい魂の持ち主だったのだ。

　親の勝手に定（き）めた結婚に反対し抗議する理論はいくらでもある、けれども今この両親達の前でその正しい理論がなんの効果があろうとも思えぬ。まして、自分がいたくも礼子を愛するがゆえ

に彼女が結婚を否む原因はあまりに明らかに自分に察知できるのだ。二人の愛情を露骨に表白しそれを楯に取るのには、あまりに薄弱な理由だ、自分達が世常の結婚の型をとって生活できぬ同じ性の人間の悲しさには――結婚をもって唯一の女性の最後の冠とのみ思い詰めている親――社会の人心はこれを罵り嘲って許すはずはない――。

　葛城さんは身の置き所を失ったのである――そしてついに最後の決心を彼女はした。

『はいお話のおもむきはよくわかりました。礼子さんには私からよくお話申し上げましょう――御安心下さいませ。』

　葛城さんは雄々しい決意のもとに、かく答えた。

『まあ、さっそくお聞き届け下さいましてありがとうございます、それで私どももほんとにほっといたしました。』

　と母なる人が感謝の辞(ことば)に答えの言葉あらず――葛城さんその人は袂に面(おもて)をかくして泪を秘していたのである。

　礼子に葛城さんがいかなる言葉を示されたか？　知らず！　礼子の卒業期に早くも葛城さんは教職を辞して帰京した。

　礼子の結婚の式は四月の上旬に挙げられた。あえかにも儚なく悲しき夢多かりし処女の日のその宵をかぎり逝きて返らぬその無垢の春を惜しみてか、着飾る晴れの衣に身をまとう華やかなその姿よ――裳(もすそ)にぬきし裾模様の褄(つま)高くあざやかにこれやこれ黄薔薇の花の一群――あわれ、誰が為のせめてもの心づくしぞ！

祝(ことほ)ぐ宴のそれなるに、栄(はえ)ある式のそれなるに麗人泪を含みてうつむきて終りぬと……

その月越えし五月、葛城さんは米国ボストンのカレッジに入学のため、横浜から船出した。見送る同窓の友あまた、その成功を祈りつつ『御無事で御帰朝を、学位を得て、宗教哲学の立派な卒業論文をかいて——云々』などと口々に言う中(うち)に、旅立つその人は寂しげにほかなる思いに捕われてか、あらぬかなたへ眼をそらしがちだったと言う……

葛城さんが渡米約二年目頃の秋より便りが絶えた。渡米留学の美名に釣られて多少の学資の補助をしていた伯父なる人の怒りはもとより、母君や肉親の心配は一通りでない——叔母に当たる関夫人が良人(おっと)とともに基督(キリスト)教的団体のある事業視察に赴くのを幸い、葛城さんの行方を探して貰うことになった。関夫人はかの地に着くや領事館にも、知人にも依頼したがわからぬ、ボストンのカレッジの方へも日本からたびたびの照会もあったこととて、その退学したのは明らかだったが、念のため尋ねていくと『寂しい陰気な沈黙な日本人』として記憶されていた。そしてやはり行方は知れぬ、もはや望みの綱も切れたかと関夫人は断念しようとした。

そして、予定の旅程も終って帰途につく途中立寄ったコロラド州の移民館を視察中、その薄暗い地下室に昼なお電灯をつけた卓子(テーブル)の上、タイプライターを前に控えて働いている一人の若い日本の女性を見出した——面(おも)やつれこそしたれ見覚えあるその寂しげな横顔——葛城さんによくもよくも似ていた。

関夫人は、はっとしたが、事務長やそのほかの外人達の案内を正式に受けている場合とて、取り乱した風もできず、そのままに過したが、館を辞す前、再び引き返して地下室のかの見覚えある人の室(へや)を訪れて『みさをさんじゃあない？』と声をかけようとしたが、すでに椅子は空しく人影はなかった。おやと残念に思って見るや卓上のあたりそこに置かれたタイプライターに一枚の用箋ははさまれて、一聯の文字がしるされてある、そしてそのまま捨てておかれてあるのだった。関夫人がその文字の跡を辿ると——

For my dreams of your image that blossoms - a rose in the deeps of my heart.

こうしるしてある。

詩の一句だ——しかし関夫人にはなんのゆえをもって、かくしるされたか、悲しくもそのゆえを解する事はできなかった。

やむを得ず、その翌日さらに移民館を訪れて『あの日本人のタイピストに』と面会を申し込んだ——しかし事務員が出て来て気の毒そうに『あのタイピストは昨夜退職届を郵便で送って来ましたきり姿を見ません』と告げた。

関夫人は呆然として佇んだ、いよいよ彼女は葛城さんだったに相違ないと思った。昨日はからずも自分の姿に出合って、早くも退職してこの地を去り行方をくらましたのだと思いあたった。ああ、なぜそんなにまでして我が身を世から人からかくすのか、ゆえはわからぬながら、そんなにまでかくれたき人を心なくも追いかけて、あばき立てるのはむしろ罪のような気さえした。

それゆえ、空しく泪を呑んで関夫人は黙々として米国を去り日本へと戻った。

あわれにも悲しからずや！

かくて、才秀でて思想人に優りてその前途を望み多しと祝福された若き葛城さんが、その学究も捨て、肉親も去って、遠く異境に流離のさすらい人となりつつ影をかくす、その思いは、かの一聯の謎の詩句とともに人々は解する事はできなかった。——ただ、それを解しうる人は一人の美しく悲しきかのひとの胸のみであるものを！

# 合歓（ねむ）の花（はな）

品川の停車場前に、電車が止る、人が降りる、一番後に待ち兼ねたように、ひらりと年齢十五、六かしらと思われる少女が袴に靴に包みという通学姿で降りる、降りる時切符を二枚渡した、しかし、その少女の後から続いて出る人影はない。一足二足その少女は電車から離れて歩みかけたが、ふと後ろを振り返ったが、見ると自分の傍にいるべきはずの人がいないので非常に吃驚（びっくり）したらしく慌てふためいて、電車の降り口へ声をかける──

聞えるかしら？）

『大和田さん、大和田さん、てば！』

三声目はこれまさに絶叫と名づくべきであろう、その声鋭く悲しとでも形容しようか、すると、その三声に効果があったのか、もひとりの同じ通学姿の一少女がぬっと　お化けにあらず）立ち現れた。これもまた十六ぐらいのお年齢（とし）らしい、なぜ十六だって、ただそう感じられるだけのことなので仕方がない。この少女、年齢が十六ばかりでなくこの春の体格検査の時体量十六貫を突破して校中未曾有のレコード破り、婦人体育奨励会から一通の褒状と金のメタルを贈られたなんて少し嘘らしいけれど、十六貫近かったのは事実であって、このひと姓を大和田名を幾代と呼ぶにもかかわらずクラスの茶目団ニックネームを呈して曰く「十六さん」時に敬して「二六女

史」とも申し上げる、クラスの花形。――無邪気で優しくて親切で、そして山がくずれてきてもびくともしない落ちつきがあって、けっして人に怒ったことのない度量の広いひととして、皆に信用されていたので、さればこそ、「十六さん」もその「十六女史」も、むしろお友達の親しみを帯びた呼名に代えるものであったことは言うまでもない。

　このひと、どんなに無邪気で怒らない人かを証明してあまりある逸話がある。

　それは先の春の頃、校中揃って稲毛の海に遊んだおりのこと、両国を発した汽車、美しく優しき少女のあまたを載せて、くろがねの線路を走りつつ、いかなる機関の故障にや、車の走り方がまことに遅く、車中の姫君の美しき眉ひとしくよりて、じれったいわ、どうしたんでしょう――と異口同音。そのおりたまたま大和田さんの乗り込んだ車中で茶目団長、じれったいあまりに八つ当り『ああ、わかった、十六さんが乗り込んでいるんですもの、汽車だって疲れてしまうわ！』と、おりもおりあまりに辛(から)き皮肉かなと、気の弱いひとたちびくっとしたなかに、当の十六さん相変らずニコニコとして、いかにも今人に言われて気がついたらしく、

『あら、ほんとうね、じゃあ私ここで降りようかしら』

という、それが、まったく心から感じて言うので、一同ほんとに申し訳のない気がして『うそよ、大和田さん心配しないでいいわ、汽車は重いものを載せていると、ひっくりかえらないでいいんですって』などと、とんちんかんな慰め方をして大笑い――。

　こんな風ゆえ、クラスで少し神経が過敏症の人がいると、皆が忠告する、『あなた、大和田さんのお爪の垢をお貰いなさいよ、そしてオブラートへ包んで一日三回食後に召し上れ』などと、

それはさておき、今大和田さんはのっそりと電車から降りようとする、車はもう少しで動き出そうとする、あぶない、それでも降りられた。
『あなた切符は?』と車掌が問う、大和田さん切符を手にしてない、慌てて懐中から取り出したのが通学回数券――下にこれを見ていた先に降りた少女、酒井和子さん、急いで駆けよる。
『それいけないわ、私先に出したのよ』
車掌は酒井さんを見て、そのまま扉(と)をしめる、いかにもほっとしたらしく大和田さんが酒井さんの傍へよる。
『まあ、いやな方、何ぼんやりしていらっしたの?』と酒井さんは小柄の身体を大和田さんの前へ向かって叱る口調である。
『ごめんなさい、だって私の前にあんまり可愛い子供がいたんですもの、見とれていて降りるの知らなかったの……』大和田さんはおとなしく詫びる。
『ほんとうにいけないわ、あのまま、行ってしまったら大変だわ』
酒井さんは、まだ叱りすまない気持らしい。
『大変でもないわ、そらすぐ向こうが終点ですもの、あすこからここまで引返せばいいじゃあ、ありませんか』
と大和田さんは落ちついている。
『まったく、それは十六式よ』と酒井さん呆れてしまったらしい。
この問答でも知れるごとく、ふたりは仲がよろしい。

二つの影は打ちならんで、向こうの坂を登ってゆく、いつしか毛利公爵邸の門を過ぎてさらに向こうへと二人の若い子は歩みゆく、場所は言うまでもない東京は芝高輪南町二十七番地あたり、時代は現代、季節は花散りて若葉ようやくに梢に緑を生む頃、日は土曜日の正午前、人物は前述の二少女――。

ほどへて、この二人はやや古びた、しかし上品なもの静かな作りの家の門の戸を横に開いて入った。

二人が呼鈴を押すか押さぬかに、早くも玄関に優しいお母様らしい人が見えた。

『まあ、ようこそ、順子は朝から、今日は土曜日ね、いらっしって下さるわって、大さわぎですよ』

と、嬉しそうな様子、二人の少女は土曜日を幸い、放課後この家を訪れたものであったので。

『順ちゃん、いらっしたよ』お母さんが、いとしい子の病室に声をかけた。

『大和田さん、酒井さん』

庭を横手に控えた日当りのよい離れ座敷から細い綺麗な声で友を呼ぶ声音がした。

『はい、ただいま』

呼ばれた二人が親しく声をかけてたびたび来て慣れていると見えて別に案内もなく、離れ座敷の障子を開けた。中は病む子のために細かな心づかいをした綺麗な感じのする部屋である。中央に敷かれた厚い床の上に順子と呼ばれた病む子は臥っている、純白の羽根枕に黒髪も蒼白い頬も埋めて源氏香を散らした友禅の美しい搔巻（かいまき）の軽く薄いのを、ふんわりと胸のあたり、病む子は美しく寂しく痩せた真白き頸をあげて、静かに微笑んで、潤んだ瞳が人なつかしい色を浮かべた。

『待っていたわ』大和田さんは、より添うように枕辺近く座した。
『あっ、忘れたわ、どうしましょう』と酒井さんが、例の鋭く悲しい声を出した。
『何を？』と大和田さんは山がくずれても、びくともしない落ちつき方である。
『何をって、いやな方ね、お見舞いの花を忘れちゃったわ、それもあなたが電車などで、あんまり気をもませるからだわ』と酒井さんまたもや大和田を叱る。
あ、花、そうね、今から買って来ましょう」と、大和田さんのっそりと立ち上りかけた。
『まあ、いやだわこのひと』酒井さんが呆れた。
『あら、いやよ、お見舞いの花なんて心配しちゃあ、——来て戴くのが一番嬉しいんですもの——お花はいらないわ、花ってば、私咲くのを待っている花があるのよ』と順子が言った。立ちかけた大和田さんまた落ちつきだして、ニコニコ。
『じゃあ、その花咲いたら持って来てあげるわ、いったいなんの花？』と尋ねた。
『いいえ、持って来て下さらないでもいいのよ、お家のこの庭にあるんですもの』と順子は言う。
『あら、そう、なんの花？』と今度は酒井さんが問う。
『——あのね、それは合歓 の花——』と短く答えて、順子はなぜかうす紅くなって眼を伏せた。
『あら、あの花お好き？』と酒井さんが眼を見張った。
『ええ、だって……あの……』このたびの答えはなぜか病む人は口ごもる。
『わかったわ、忘れ得ぬ花、そしてローマンス——っての、でしょう』酒井さんは機敏な神経と強い感受力の所有者である。傍の大和田さん、眼玉をぱちくり。

『いったい、そりゃあなんのこと？』と、この場合少しとんまなお声である。

『いやね、このひと鈍感で、順子さんのローマンスよ』酒井さんひとりでじれったがっている。

『え、ローマンスて英語ぐらい私だって知っているわ、それがどうしたって伺うのじゃありませんか』

あんまり先ほどからたびたび酒井さんに叱られるので、さすがの十六さんも少し御機嫌が斜めに曲った。ああ、明日のせっかくの日曜が雨にならねばいいが……。

『まだ内容は伺わないから、それはわからないわ』と酒井さんが言い返す。

『じゃあ、順子さんその内容は何？』と大和田さんはどこまでも無邪気で……と云うよりほか仕方がない。

順子は、はにかんだ。――けれどもやはり微笑むより仕方もなかった。

『話すと、笑われるから嫌だわ』と言って唇を閉じた。

『あら、笑うなんてもったいない、そんな失礼なこと私達しないわ』と二人揃って言った。

『謹んで聞いてよ』と大和田さん両手を膝の上に重ねて澄ました。

『あのね、なんでもないの、――私達の学校を去年出た方で、その花が大好きな方がいらっしたの、そしてその方を――私――あの――私いやだわ』と、颯(さつ)と赤くなって掻巻の中に顔をかくした。

『あら、わかったわ！』と酒井さんが鋭く明るい声をあげた。

『あら、私だってわかったわ』と大和田さんも声をあげた。この時、縁の障子がさらりと開いてお母さんが入っていらっした。『何がおわかりになりましたの？』大和田さん眼玉をぱちくりと

一回転の後(のち)、

『あの、数学の答えが今三人でやって見て、ようやくわかりました』

十六さんは、これで一生の頓智を利かしたつもりであったが、酒井さん傍で吃驚(びつくり)してしまった。しかし幸いにお母さんは善良である。『さようでございますか、順子もそうして折々教えて戴ければなによりでございますよ。あの、お昼食(ちゆうじき)を宅(たく)で召し上って下さいましな、何もございませんが、順子も賑やかで喜びますから、ね、順ちゃんあなたも鶏卵(たまご)やお乳でお相伴なさいね』と、お母さんの心尽しの食事が運ばれた。

病む床にある順子が、和子と幾代に何を物語りしか？　あわれ、忘れえぬ花とのみ告げて止みしその合歓の花の匂い優しきローマンス！

――順子の家はもと府下の代々木にあった。今の高輪の家に移る前、永いこと幼い頃から住みなれていたのだった。つい去年の春先まで――されば言うまでもない順子がそこから学校へ朝な朝な省線で通ったのは。

毎日同じ朝の時刻を争って乗る人達の混む停車場では、いつとはなく同じ頃いっしょに集う人々の姿を見覚えるほどだった。順子はその中に心にかけて見覚えるひとを持ったので……あった。

順子の胸にかくも深く印象づけられし俤(おもかげ)は？――かにかくにその美しさ優しさ、そのひとの瞳のあまりに朧(ろう)たけて忘れがたいものを。

優しき人は順子とは学校は異っていたので、そして順子よりは、はるかに上級のひとらしかった。
もしも、その美しい人と同じ学舎に通う身だったらと順子は限りもない空想を燃やしたこともあった。
そのひとの身につける袖の色も袴の影も順子には大空に輝く星影の如くまたはゆるやかに流るる彩雲の如くに映じていたので、日ごとに朝な朝な時をはかってゆくほどに、その優しい面影は眼のあたり、離れてあれば忘られぬものを、眼のあたりになれば奇すしくも胸のみ打ちとどろいてわれからに視線をあらぬ方へと落とす甲斐なさ……。
もしもその姿の打ち見えぬ時は、空しくいく台もの車を見過しに送りて、ただひたすら恋しい姿を待ち受けるのだった。時計の針のやがて進んで、すでに学校に始業の鐘の鳴り響く頃ともなれば、さすがに悲しくも、力なく寂しく停車場を見捨ててゆくのだった。
順子がみずからひそやかに佳き人に捧げし名は　憧れの君」の文字（もんじ）であった。
憧れの君、憧れの君、ふとした機会（はずみ）の悪戯はこうして、ある日は順子に憧れの君の姿を仄見せ、またある時は僅かな時の差で順子の瞳に空しく佗しい空間を示して愁わしい気持にひねもす沈める事であった。
ある一日、順子のその　憧れの君」をとうとう見ることができなかった。その翌日もその翌日も、明日こそは胸に祈って待つ甲斐もなく、その翌日も翌日もやはり相見ることはできなかった。憧れの君はもしや重い病に——こうして当（あて）もない心配が順子の小さい胸を一杯にしてしまっ

た。憧れの君を見ぬ日順子にとってこの広い世界はただ空しく荒れはてた砂漠の崖のように映じたので——それはただかかる憧れの思いに悩みしもののみ知る苦しい佗しさであったろう。

順子は人を思う淡紅（うすべに）の色もやさしい小さいノートを一冊備えた、そのノートの表紙には、銀の壺」としるした、最初の一頁（ページ）にペン字で細かく、

わが憧れの君に捧ぐる銀の壺、
小さき壺よ、さはあれど——
わが胸のすべてを盛りぬ。

とかいてある。次の頁を繰ると、さあ、大変、無慮数千字縷々（るる）として尽きるところを知らぬありさま——冒頭に詩がある。

鳥にならばや真白き鳩に
君が胸の巣に眠る

この二行だけ、その小唄の後に続くのは、——もしも、お情け深い神様が、私をなにかに変らせて下さると仰しゃったら私はなにになりましょう。あの方のピンに、あの方の袂に、袴に、靴に、けれどもピンも着物も袴も靴も慕わしい方の身につくことはできても、やがては古びて捨てられるんですものつまらないわ、それより私神様にお頼みして白い可愛い鳩になって、あの方の胸に永久に眠りたい。

銀の壺）の内容の見本を述べると右の次第である。

順子はふとしたことから憧れの君の名を知ることができた。それはある日曜日のこと、天気のよいままに、そぞろ歩きのそのおりに、ふと新しい立派な邸宅の門の前へ来た。木の香のまだ失

せやらぬ、その門の柱には西某という表札があった。その門の中の植込の影に、ゆくりなくも片時も胸を去らぬ憧れの君が小さい妹と見ゆる幼いひと達と芝生の上に遊んでいたのであった。はっと胸轟かした、順子は息もつまるような思いで佇んだ、華やかな笑いが植込のかなたから聞えるその中に混って響くのは、春の草の葉を吹く微風のような優しい声、憧れの君の声音だった。

順子はいつまでも、いつまでも立ちつくしてその美しい場面（シーン）を見つめていたかった、けれども、もし自分の姿が憧れの君の瞳に入ったなら――と、それのみ恐ろしくて、逃げるようにその門の前を立ち去った。

なつかしいなつかしいその門辺、いつまでもいつまでも順子は忘れられなかったので。

順子にとって、憧れの君を持ってからの夏休みは世にも寂しく切ないものであった。

一週に一日の日曜日さえ、その面影を見ることができぬと思えば、すずろに侘しかったものを、さらにさらに長い長い夏休みはどんなに切なかろう。順子は夏休みの一日も早く終るのを待ちこがれていた。

その夏の休みの日頃である、あまりの慕わしい思いに堪えやらで、あのなつかしい門のほとりをゆきつもどりつしていた、はては、それが夏休み中の大切な日課の一つとなってしまったので。

順子がその大切な日課をまたも繰り返している時、なつかしい門に一台の自動車が止まった。順子は、ものかげに身をひそめて、その自動車からこの家を訪（と）う、どのような客が降りるのかと想像していると、訪う客にはあらで車を母上らしい人に助けられて嫋（たお）やかに降り立ったのは、憧

れの君だった。身を飾る夏の羅衣（うすぎぬ）袖も匂うて強き日輪のもとにもこれのみは永久（とわ）にしぼまぬ花とも見えたので。

　呆然として後を見送った順子の眼は、その時植込のかなたにひとむら咲く合歓の花の梢を追ったのである。合歓の花は人を慕ってのあまり疲れてうたたねするに似た弱々しい細葉の蔭に夢のように仄咲く柔かい触（ふれ）れば溶けるような優しい花である。嫋女（たおやめ）が薄き化粧をこむる窓辺の鏡の面（おもて）に煙る白粉刷毛の幻に浮かぶように、白と淡紅（うすべに）との刷毛の花房、ゆるやかに遠き日の夢を追い近き日の愁いに咽（むせ）び嘆くか、薄日に煙り夕風に顫えて儚なき花の影を残すものを……。

　いま、この花の蔭にと末もなく終りもなく消えゆく如き美しい人影を泪さしぐんだ眼もとに、いつまでも見送った順子は、今我が立つ地はそのままにいずこにか沈みゆくかとばかり思われたのであった。

　その日のことあってよりいく十日、長い休暇も経って第二学期の始めとなった。順子にとってはその日からまたも憧れの君を見る日となったので。それは過ぎし日かの懐しい門辺で合歓の花陰に消えゆきし面影を追ってから初めてその人の姿に接する時であった。

　思えばながい寂しいひとつきであった。順子にとっては――久しぶりに朝定めの時間に今日から追われる身となって、何かしら先に待たるるもののある心地して順子はその朝いそいそと停車場へ向かった――そこには何がありしか、ひとつきのさまざまの記憶のまだ生々しい夏休みの夢のいまだに覚めやらぬような学生の群れがあった中に、いつも変らぬ真白き鶴の如き憧れの君の姿よ、順子は嬉しかった。しかしその喜びはやがて瞬間の後恐ろしい寂しさと苦しみのためにあえなく消えゆく束の間の思えば儚ない焔の影であったので……。

待ち受けた車に乗り込んでからも、順子はいつものように同じ車上の憧れの君の姿を見守っていた。混む乗客のために憧れの君はすらりと嫋やかに立っていられた。車台の進行につれて烈しい車体の動揺に、細やかな身を堪えかねて、軽やかに左手を釣革にあげた時水色モスリンの袂ゆらりと波打ちしと見るや美しき腕(かいな)はあがり袖口をすべって優しき掌――露(あらわ)となりぬ――あわれ、かくばかりに優しく美しく指先に犇(ひし)とすがらるる釣革こそ羨ましくも妬ましやと思いつ見やる順子の眼はその時奇しくも驚異の光りに打たれた、光とは？

そは、憧れの君のその優しき指よ、その薬指、緑玉(サファイヤ)の指輪は一つ、静かなる暁の明星のごと輝いた……。

順子の、胸は轟いた。そしてやがて寂しく暗くなった。ああ、その美しき緑玉(サファイヤ)の指輪は、もはや動かしがたき憧れの君の来ん春の運命を語り示すものでなくてなんであろう。世にも清く美しき処女を人妻の国に追う悲しく寂しきシンボル！　そはこのリング……。譬(たと)えそのリングがどのような幸多いものであろうとも、順子にとっては、ただうらめしく呪わしいものとのみ映じたのはさらさら無理ならぬものを……。

昨日までは高嶺の花とのみ憧れて手にとりがたく及びがたく、はるかに仰いで小さき胸に讃美と思慕の焔をささげつくすのが順子にとっては生命(いのち)であり喜びであったものを、かいなく、その、高嶺の花は人の手に移されて城壁囲みし園に咲くさだめとは、――順子は悲しみに沈んでゆくよりほか術はなかったので――。

君が御手(おんて)のさふあいやの

ゆびわをぬきて
埋めまし
永久の処女と
祈りまつりて

順子は寂しい心で、あの　銀の壺）のノートに泪でかいた。

順子の思い出多い代々木の家から、高輪の今の家へ引越したのは　銀の壺）に、あの悲しいリングの小曲がいくつかしるされた後間もなくであった。

それは順子に取っては、半面には幸いであった。憧れの君を眼にのみ遠く眺めて佗しく悩むよりは、いっそのこと思い切りよく遠く離れて相見る機会を失なってしまう方が、かえって気持が救われるようであったので——しかしまた半面には堪えられぬほどの、深い深い寂しさが伴ってやはり順子を苦しめた。そして順子はその年も暮れて翌年を迎えた早春の頃から健康を失ないかけていた。順子の兄弟は皆弱くて幼ない頃哀れに逝く者が多かった。血統といえばやはりそうしたものらしかった——順子も弱い身体だった。その上心に満たし得ぬある空虚の悩みも秘めていたものを——晴れやかに進級して新しい学期に入ったばかりで、順子は病の床の人となった。

得た病は深いものと見えて、なかなかはっきりと快くはならなかった。

優しい母の手厚い看護も病魔の黒い手の前には甲斐なかった。少しでもよくなったら気の向くままに海岸の方にでもなどと親心に思いやっていても、まだ旅のできるほどの身体ではなかった。

さくらも見ずに病んだ子は、やがて若葉が梢に初夏の陽を浴びてのびる頃まで病床を離れることなしに続いた。

級の友達の中でも酒井さんと大和田さんが、よくお見舞いに来た。たいていの土曜日の放課後は高輪へわざわざ立ち寄るのが、ならわしのようになって、順子の唯一の慰安となっていた。

そのある土曜日の午後である。酒井さん達二人が訪れたのは、大和田さんが電車に乗りすごしかけたりした日のこと、お見舞いの花を忘れたのが、いとぐちになって順子みずから口を開いた忘れ得ぬ花――その合歓の花の思い出をふと語り出でたおり、お母さんが御馳走を運んで来られて、それからぱったりとんちんかん、それきり沙汰止みとなって、再び順子の唇より合歓の花にまつわるローマンス聞くよしもなく二人の友は辞し去ったのであるが――その帰り路のこと。

『大和田さん、私さっきからずい分考えているのよ、けれどちっともどの方かわからないのよ、あなたわかって？』

酒井さんに不意に、そう話しかけられて、大和田さん何が何やらさっぱりわからず例の如く眼をぱちくりと鳩ぽっぽ――

『えっ、なあに？　わからないって』

『いやな方ね、そら順子さんが今日仰しゃったじゃありませんか！』

『何を、だって、順子さんずいぶんいろいろの事を話したわ、みんな憶えているのたいへんだわ』

『だって、そのうち特別に印象が強かったのがあるはずよ』

『えっ、特別の印象――あのォ、おいしい御馳走になったこと？』

『まあ、呆れた方ね、そんなに印象は卑しいわ、そんなことでなく、もっともっと精神的の美しいことよ』
『ええ、わかったわ、私達のお見舞いに行ってあげたことを喜こんでいらっしたんでしょう』
『ほんとにあなた神経が太いからいやだわ』
酒井さんは縁なき衆生は度しがたしとばかりに吐息をついた。
『そんな、まわりくどい事ばかり言うからますますわからないんだわ』
『だって、そんな露骨に言わないでも察しるものよ』
『だって、私御存じのように太神経よ』
大和田さんみずから保証するから確かだこと。
『まあ、じゃあお話しいたしましょう、ね今日順子さんがこの春学校を出た方の誰かにってね』
『ああ、そのこと、ふーん』
なんだつまらないという風に大和田さんはさっぱり共鳴しない。
初夏の午後の陽は、いつしか西へ流れゆくのだった。ふたりの少女はやがてめいめいの家路に別れた。
その日から越えて後の土曜日には二人のお友達は高輪の順子を訪れなかった。何か二人ともほかに用事があったりしたので――。
心待ちに待った順子のその日もの足りなく寂しかったのは言うまでもない、悪いこととは知りながら二人の優しい友をひそかに怨んでみたいような気持さえ起こった。

順子のお母さんも、やはり心待ちに我が子の病む身を慰さめる親切な二人の友達の訪れを待っていたのだった。けれども、とうとう優しい客は見えなかった。

『順ちゃん、今日は酒井さん達どうなさったのかね』

愛らしい子の病室へこう声をかけて、お母さんは入った。

『ええ、ほんとにどうなさったのかしら……』

順子は寂しげにつぶやいた。

『いつもいらっしゃる方がお見えにならないから張合いがないね、きっと学校の方がお忙しいのかもしれない、まあ順ちゃん今日は面白い御本か何か読んで気をまぎらしていらっしゃい、またそのうちにいらっしゃって下さるから』

お母さんはそう慰めてその日の新聞や美しい口絵や写真の多い雑誌などを、順子の枕もとへ持って来てならべた。

『お母さん、ありがとう、じゃあ今日は私一人で読書するわ』

順子は割合に元気よく枕もとの雑誌を取りあげて口絵などに見入ったので、お母さんも安心して茶の間の方に行った。

順子は雑誌を見倦きて新聞に眼をそそいだ。ふと手にしたその紙面に順子の瞳は異様な力で吸いつけられた。そこには大きな写真が、はっきりと出ていた。

その写真を順子が見た刹那、か弱い胸を烈しく波打たせた。今宵を晴れと美しくも粧（よそお）いなせるあでなる人の面影……あわれ、あわれ、その面影こそは、病みてはさらに忘れがたくいく夜の夢にか通うかの憧れの君がいま嫁ぎ給うみやびな姿であった。西海軍少将を父として愛でられ育く

まれた美しい満智子嬢が名門の三輪家へ迎えられて栄ある華燭の典を云々という記事が傍に添えてあった。

……………………。

しばらくしてから夕方の牛乳を暖めてお母さんが病室へ入った時、順子は枕に顔を伏せて半ば失神したようにしおれていた。お母さんは吃驚した。

『まあ、順ちゃんまたあんまり御本に夢中になって疲れたんでしょう、早くおやすみ』

と慌てて枕もとの雑誌や新聞紙をおしやって、順子を抱きあげて軽い掻巻をかけようとしたが順子はただぐったりとして自分の顔を母に見せまいと僅かに努力するだけだった。

お母さんは常になく長い書見が病に障ったこととのみ思いこんでいるのみ、いとしい子の胸の思いをもとより知るよしもなかったので……。

それから二、三日たってからのこと、酒井さんと大和田さん二人に宛てて順子から手紙が来た。ふたりで読んでみると、

いらっして下さらなかったあの土曜日！　それはあまりに寂し過ぎる日でしたの、病む子には、あまりに残酷なほど。

ただ、これだけの短い言葉であったけれども、その言葉の裏に秘められた痛ましいほどの寂しい友の心持を思うと酒井さんも大和田さんも泪ぐましくなった。ふたりとも少しの用にかまけて行かなかったのは、ほんとうにすまなかったと自分達を責めた。そして二人相談して順子の心を浮き立せるように考えて返事を送った。

合歓の花のローマンスの続きを伺いに今度の土曜日にあがります、充分御用意のほど願い上げます。

折り返して順子からすぐに返事が来た。

先の日の語草再び求め給うな、あまりに胸の苦しさに堪えねば。されどただこの一事を告げてやまんかな、合歓の花蔭に忘れ得ざりし人に、去年の春同じ校舎に出でし君とは偽りにて真は西少将のいとし子満智と呼べるひと、その君すでに嫁ぎ給いぬ。

と、これだけ、酒井さんと大和田さんともに呆然そのなすところを知らず——しかし神経の鋭い酒井さんには近き頃ふと見出した覚えのある新聞紙での華やかな写し絵を思い起こした。西と少将を心当たりにその日古新聞を皆ひきずり出して隅から隅まで見渡した。努力の結果ついに大発見、順子が忘れ得ぬ面影の主こそは今豪商三輪家の田端の新邸にある美しい若夫人であることを——『まあ、ああ!』と酒井さんは泪で吐息をした。さっそく大和田さんに伝えられた。『へえ、そう』富士山がくずれてもびくともしないそのひとも、こう言って感動した。

土曜日を待ちかねて二人が高輪の家を訪れた時、意外にも順子の病は篤（あつ）かった、医師の言（ことば）により人に会うのを避けねばならぬと母なるひとは悲しく告げるのだった。

『お母さん、あのお庭は合歓の花はまだ咲かない?』

烈しい病苦に責められて日夜に衰える痛ましい身となった順子は、ある日こうお母さんに問うのだった。

『まだ咲き出さないようですよ』

お母さんが答えると、順子はふいと眼を閉じた——何か考えていたらしく——

『お母さん、あの、もしも私が神様に召されたら、この枕もとに置いてある　銀の壺）と書いてあるノートを私と一緒に埋めて、そして、あのそのお墓の上には合歓の木を植えて頂戴、きっとよお母さん……』

『順ちゃん、お前はまあなぜそんなえんぎでもないことを……』

お母さんは慌ててその悲しい申し出でをさえ切ろうとするのだったが、順子は泪を堪（こら）えた声で、

『もう、お母さま、何も仰しゃってはいや』

とたゆたげに寝返りをしたまま、再び言葉はなかったので……。

かかる悲しきこと言いしもすでに避けがたき凶兆であったのか――あわれ病む子はついに儚なく逝（ゆ）いた……。

あるほどの花投げ入れよその棺！　胸にはありし日にみずからの思いをしるせる　銀の壺）を抱いて浄くも少女のままに世を離れて眠る優しい子は永久の臥床（ふしど）を雑司ケ谷のほとり、尽きせぬ父母の泪にいとど湿る黒土の底にと……。新しき墓碑とともにその傍に移し植えられしは合歓のひともと、時くれば枝もたわわに梢は花に煙ろうものを、その下に眠る少女の人の世の春はすでに空しき！　その墓前に詣でて泣くは二人の友、酒井さんと大和田さんである。

二人は亡き友にせめても、たむけたいある願いをひそかに抱いていた。

それはかの墓畔（ぼはん）の合歓の花咲き出でた頃、二人の少女は田端なる三輪家の新邸を訪れたので

立派な大玄関の檜の沢々(つやつや)しい式台に三つ指ついた取次ぎの女中が、鹿爪らしく『どなた様でいらっしゃいますか』と尋ねた時、神経の細い酒井さんは逃げ出したくなった。しかし大和田さんは泰然自若として動かず姓名を告げ次に来意を告げた。曰く『亡き友のために』と余韻を含んで……。

『どうぞ、こちらへ』再びさきの女中が出て廊下を渡って応接間へと案内した。

三輪家の新夫人、満智子は不思議な来訪客に美しい頸(うなじ)をかたむけた。孤児院の鉛筆売りにあらず慈善音楽会の寄附金請求にあらず、しかも女学校の少女二名、ただ（亡き友のために）面会を乞うとは……？　女学生を自動車でひいて逃げた覚えもないし――と、いぶかしみつつ応接の間の扉を開いて淑やかに入れば中なる二人――神経の細きと太きがともにならんで愛らしい――（まあ、順子さんが憧れぬいたはずだわ！）とふたり心にうなずくことしきり――新夫人狐につままれたように進退きわまった容子(ようす)――二人の少女俄(にわ)かにうやうやしく最敬礼をして、やがて大和田さんが一歩前へと進み出でた。

『お掛け遊ばして』美しい夫人の会釈にもあくまで直立不動――大事な大事な任務を果たすまではとの意気込みらしい。

『突然お伺いいたしました失礼をお詫び申し上げます。今日参上いたしたのはほかでもございません、私どものお友達順子さんがおなくなりになりましたので、その順子さんのお墓にお詣りして戴きましたならば亡い友の魂はどのように喜ぶでございましょうと思いましてお願いにあがったのでございます。こうただ申し上げたのでは吃驚遊すでしょうが、あの順子さんは奥様を前から存じ上げていらっしたのです』

奥様）と呼びなされるのも、つい昨日今日満智子は紅くなってうつむいた——

『まあ、順子……と仰しゃるお方が私を……失礼でございますけれども、どうしても思い浮かびませんの——あのあのどちらにお住居でいらっしたかしら？』

酒井さんがこの時答えた。

『代々木にいらっしゃいました、そして毎日あすこから省線で私どもの学校へお通いになりました。私の想像いたしますのには、たぶんそのために……』

いかに酒井さんの想像力は鋭く豊富であることよ！

『まあ、では私わかりました。私と代々木から省線で学校へまいりましたの、ええ存じております、よく御一緒になった方、そしてあなたの学校の方でした、あの弱々しい姿で眼の青く澄んだ細面の少し寂しい御様子の方そして黒絹のリボンの品よく似合って……ね』

まことよ、げにも亡き順子は四季を通じて純黒のリボンを髪につけた子ゆえ——その面形（おもかたち）の印象は夫人の語るに一致しているものを、まさしく順子もまた満智子の過ぎし処女の日に深き印象を与えていたのであったとは、ああ！

『ええ、その方がたしかに順子さんでございます』

二人の少女は答えた。『まあ、あの方……おなくなりになりましたの……』

『はい、そしておなくなりになる日まで、どんなに奥様をお慕いしていらっしたことでしょう、順子さんは黙って寂しく代々木の頃からお慕いしていらっしたのです』大和田さんは最後の勇気を振るった！

『まあ……』美しき夫人はこの時颯(さつ)と面(おもて)に紅を刷いて背後の窓に垂るる、きみどりのカーテンの蔭につと身をかわした……数秒の後カーテンの陰よりもれし声音のうつくしさよ。

『どうぞ私にお墓へ詣らせて下さいまし……』その言葉の末は泪なりしを……。

　一台の自動車は夏の朝の郊外を雑司ケ谷の静かな墓地近く走った。止まった車の内より二人の可愛い少女と美しい夫人が降りた。

『順子さんはここに眠っていらっしゃいますの』先に立って導いた少女の一人がこう告げた。

『まあ、合歓の花が……』

夫人はありし日われを慕いしといういとしきひとの墓畔に仄咲く梢の花を見て小さく叫んだ。

『順子さまの御遺言でこのお花を植えられたのです』

『――まあ、その花はあの代々木の実家(さと)にも咲きますの……』

　ああ、何がゆえのかたみの言葉ぞ、われ逝かば奥津城(おくつき)に必ず植えよ合歓のひともとと願いしは！

　佳き人の胸にはその花に寄せたる思いの今解されたのであった、泪さしぐみ合掌し墓前に額ずく美しい姿の後に二人の少女声なく泪に沈む……その折その時、墓畔の花の梢風なきにさゆらぐと見れば夢のごと咲き烟(けむ)る花蔭に真白き翼の鳩一羽、あわれどこより飛び来りしぞ、亡い子の魂の化したるか？　静かに半円を描きて花蔭にその白き鳩は舞うのだった……。

# 日向葵（ひまわり）

W市の県立の女学校の二年級にその春から転校して入った美しい一人の生徒があった。

名は関子、父君は内務省から地方官へ移られたばかりの宝木内務部長であったので……。

『今度いらっしゃした内務部長さんのお嬢さんのお綺麗なこと！　まるで生きたお雛様のようですよ』と、官舎中での井戸端会議の重要問題になって繰り返されるのだった。

さればこそ、さればこそ、新学期の始業式の日、三年の西組の教室へ受持ちの先生に連れられて初めて扉（ドア）の中へ入られた時――級（クラス）の総勢鳴りを鎮めて、恍惚として暫時忘我の状態に落ち入った。

中にも烈しいのは、それからの二、三日、頭がふらふらとして足が据（すわ）らず、妙なお熱に浮されて時折吐息をついて食欲減退、睡眠不足、心臓の動悸が波打って、顔色蒼ざめて泪さしぐむ君思い草の根なし草、いつまで草のなよなよと、焦れ憧がれ悩むかな……という風情。

『今度三年の西組にいらっしゃした人、とてもすてきよ』

校中にみなぎり溢れる噂！　さても評判じゃ評判じゃ。

『あら、宝木さん、どんなにすてき？　私見たいわ！』

あっちでもこっちでも　『私見たいわ！』　『私見たいわ』まるでメリー・マクラレンの封切りが××館へ来たような騒ぎ。

『早くいらっしゃい、いらっしゃいてば！　今よ、今よ！』

一人が呼ぶ、今三年の西組の生徒が教室を出て、二階の階段を降りる処――。

呼ばれた『私見たいわ』の一団体、垣を作って階段の下へずらりと、二つのおめめをぴかりぴかりと。あっちからもこっちからも来ること来ること、これまさに宝木関子嬢の総見！　切符がいらないから、ますます自由にふえてならぶ。

『どのひと？　どのひと？』

と一人がじれったがって問うと、一人が落ちつきはらって曰く、

その言葉の如く、今まで校内にあらざりし美しい子は、かつては都の某の学舎に緋の袖振りこぼして舞いしらん、紺青の麻の葉抜きしその袂、この学校の定めに従って新調された海老茶にガランス色含む花と匂わん袴の紐にあしらう、これも新しい銀章ゆるがせて……左で分けた髪が、渚の小波ほど仄かに縮れて、柔らかな巻毛が白い額に夢のようにこぼれて、あまる黒髪はさらりと背へ流れた中を春のシンボル、バミリオンの色淡きリボンの翅！　童話の中の小鳥のようにひるがえる。キットの編上げ踵も軽く降りゆく子は、見る人の多くの視線を浴びる身の、あまりの面はゆさに堪えかねて、涼しき瞳をつと伏せれば、長き睫毛は蕾の如き瞼の下に影を落して薄煙る――頬にはうすくはじらう紅さして……さても麗しさ！

後見送りて階段下の総見連中、異口同音、

『まあ！　すてき！　しかして詩的!!――』

宝木熱の噂は春の日永をつきせぬ語り草、校内の生徒が騒ぐのはもとよりなれど、ここに先生方までが――音楽の先生はあんまり宝木のお顔ばかり見つめていらっしたので美事ピアノを弾きまちがえておしまいなすったというのを始めに曰く何、曰く何。はても人もあろうに開校以来十年勤続で県の教育会から表彰されたお裁縫専門の老先生までが、少々変におなり遊ばして、浅草紙をしわくちゃにしたようなお婆様の顔をにこにこさせて、その時間には美しい宝木さんの傍につきっきりで待針まで打ってあげるのは、まんざらお父様のお役へのおべっかばかりでも無いと見たは、僻目（ひがめ）か眇（すがめ）かなどと茶目連の口さがないこと……。

ああ、美しきかなこの君！

さてもこの君を胸に得るはあわれ誰が子ぞ？

『わたし気がもめるワ』

と一年生のちびさんまで元禄袖を胸に重ねて、はるかに天の一角を睨むというありさま……。

関子が都から市の県庁官舎に移り住んでから、それは間もなくのことだった。

関子の住む家――内務部長の官舎の周囲を、関子はある日の夕方、そぞろ歩きをして見た。

新たに移り住んだ住居に感じる一種の期待と興味はやはり美しい少女の胸に湧き出るのだった。

何を求め何を見るともなしに関子は優しい姿を戸外に現して、官舎の通りを出た。

知事や内務部長、警察部長など大きい住居のみならんだ東官舎の通りを裏へと出ると、そこは官舎乙号の部で長屋建になって、判任官吏の住居に当てられていた。

その長屋建の官舎の通り路には、たくさんの子供達が群れになって遊んでいた。

九つか十かあるいは七つ頃、みなひとかどの悪戯児で茶目らしいのが男の子も女の児もまじって喧(やかま)しい、彼らは地面の上に白墨で線を引いて、石切りをしているのだった。

『今度は私の番よ』

などと、女の児達も石を線の中へ投げては、ちんちんもがもがをして、足先に石をけって角の中へ中へと入れて数えてゆく。

そのまわりには皆ほかの子供達が立って眺めていた。

関子は、その子供の群れの後ろに立って、石切りの遊びを見ていた。

『ああ、くやしいッ』

女の児はちょっとしたはずみで、石を線にひっかけて残念そうに線の外へ出た。

『今度僕の番ね』

やさしい弱々しい声でこう言って、つと線の中へ入った男の子があった。それは年齢はもう九つにもなるのらしいが、どこやらに病身で発育不完全の様子のある色の蒼白い眉の濃い眼の涼しく綺麗な弱く上品な容子(ようす)を備えている少年だった。身には粗末な紺の染飛白(そめがすり)をつけているが、少しの汚れも見えぬきちんとしたもので、白い細い足には可愛い木綿白緒の草履がはかれている。

関子はその幼ない綺麗な子に眼をひかされた。

『うそだい、僕の番だいッ』

こう憎々しい声を出してその時、横合いから飛び出て前に出た可愛ゆい子をおしのけようとした同じ年齢頃の男の子がいた。

その男の子は、ほんとにそんな無茶な意地悪をするらしい様子の子だ。身体つきもがっしりとして大きかった。赤らんだ肥えて四角な顔、金壺眼、鳥のお灸のできてただれた大きな卑しい唇、新しい紡績か何かではあるが、だらしなく胸もとや膝や袖口の食物やおはなで汚れて光っているのに巻帯というだらしのなさ、そしてその子供の群れで暴力でいばっているお山の大将らしい。

『ほんとに僕の番よ』

と弱々しい男の子は優しく再び言い張った。

けれどもあの意地悪そうな男の子はどこまでも自分の無理を通しぬくつもりで、

『うそ言え、ついさっきやったばかりじゃないか、今度は僕の番だよ』

と濁った憎い声を張り上げてそのまま自分の石を線の中へ放りこむのだった。

『いけないよ、佐伯さん、ほんとに僕の番だもの……ねえ、僕の番だよね……』

と優しい男の子は周囲の子供達に援助を求めていったけれども、官舎育ちの子供達はこの勢力のある男の子を恐れてか、みすみす弱い子の正しいのを知りながら黙っているのだった。

『章ちゃんの番だか佐伯さんの番だか、忘れちゃった』

と苦しそうに逃げる男の子もあれば、

『私なんか自分の番のことき知らないわ』

などと、小さい利己主義の芽生えを早くも仄見せている女の児もいる。

弱々しい男の子は今はよるべなく助けなき身を悄然として独り寂しく群れを離れて去るのだった。

ああ、可哀想！　もしも、自分がもう少しこの官舎内の子供達になじみ深き身なりせば、その場に出でてそのお山の大将の子供をやっつけて、そして弱い優しい子を助けてやりたいものを！と関子は思ってうら悲しくなった。そしてこの官舎の中には勢力　それが悪い勢力であっても）に媚びおもねる卑しい習慣があり、かつ不正の勢力のはびこっていることを、この子供達の遊びの中に見出して、おそらく大人同志の間柄もかくあらんと察することができた。

関子はこう考えて言い知れぬ暗い寂しい憂鬱な気持になるのだった。

長屋の前を通る時、いち早く新しい内務部長の令嬢と知って、むやみにお世辞笑いをしてペコペコ頭を下げる小役人の細君達にも、かえって気持を悪くして、早く家へ帰ろうと裏手の路へぬけ出た時、そこにさっきの哀れな男の子を再び見出した。

男の子は共同使用水道栓の前にいた。そこにはなにか洗いものをしている少女がいた。

男の子は、しょんぼり立っている、そしてその少女と男の子の間にこんな問答が交されるのを関子は聞いた。

『韋ちゃん、どうしてそんな悲しそうな顔しているの、またあの佐伯さんの坊ちゃんにいじめられたの』

少女は洗いものをしながら傍にいつの間にか来ている少年にやさしく問うのだった。

『うーん、あのね、姉ちゃん、あの石切りみんなでしていたの、そしたらね、僕の番が来たから僕がしようと思ったら佐伯さんが出て、うそだ、僕の番じゃあないのにするから、ずるいって言

うの……』
男の子は満心の不平を心おきなく報告しているのだった。
『ええ、それから章ちゃんどうしたの？』
もの洗う少女の手は、おのずとたゆたいがちだった。
『そしてね、どうしても僕の番じゃないって、言って聞かないんだもの……』
章ちゃんと言う子は、いかにも悲しそうに言う。
『それから、章ちゃんはどうしたの？』
少女の声はややせきこんで来た。
『うん――、だって、佐伯さんどうしてもきかないんだもの……』
『だから、どうしたの？』
『あの、僕がだまって仲間はずれになって、来ちゃったの……』
男の子は泣き出しそうになって言い切った。
可哀想にその小さい瞳には涙がいっぱいなのである。
『いいの、いいの、章ちゃん、みな神様が御存じだから、ね』
少女は立ち上がって、章ちゃんを抱きよせて、いとしげにその頭（つむり）を撫でて、傷つき帰れる小犬をいたわりかばうように……、
関子は、その時初めて正面（まとも）に少女の顔を見た。
その少年の姉なる少女の顔を見た刹那、関子の胸は震えるようだった。
おお、それは関子にとって少なくも一つの立派な驚異だった。

少女、彼女の顔は、俗に言う美しさではなかったかも知れない。色の浅黒さ、眼の大きく黒く憂鬱に沈んでいる、唇のきつく張って眉も太く直線的である。形も直線的で飾り気と曲線美を持っていない。

しかし、彼女は純粋さを人一倍強く現していた。自我の強い、そしてそれが純に澄んでいることがよく現されていた。

関子はその自我の純粋にはっきりと出ている美しさに胸をひかれた。

——かの遊び仲間より虐げられて帰れる男の子のそれが姉に当たることも、ほぼ察しられた。年齢も自分とほぼ同じ頃であることもわかった。

関子にとっては、その少女の印象は実に強い強いものとなった。それから——

関子が毎朝連れ立って同じ官舎から学校へ通う友達がいた。それは佐伯英子という県視学の娘であった。

その英子の弟は先に、関子がはからずもある日の夕方見た石切遊びの中で章ちゃんという男の子をいじめた者である。あのお山の大将のお姉さんだけに、やっぱり女学校でも変にお山の大将ぶっていた。ややもするとお父さんが県視学だというのを頭にふりかざして、『××先生はあんなに学校ではいばっていらっしゃって、月給はたった——円よ、そしてお正月なんか家へ挨拶に来て、お父さんにペコペコしているのよ』などと、よけいな口をきいて得意になるという浅薄（あさはか）なひとだった。

毎朝関子を誘って一緒に通学して、やはり心中ひそかに大得意、校中切っての明星（スター）は私のものよと言わぬばかり、影の形につくごとく関子にまとわりついて、離れない。お昼の休み時間なぞ関子を引張りまわして、校内案内係のつもりで反りかえって、いちいち説明に及ぶ、まず先生を片ッ端からとなえ出して、そのお父さんから直伝の月給云々からお正月のお辞儀に来ることから、そのニックネームやらごたごたならべて関子の美しい眉がひそんでも、当人さっぱり知らない。

それから級の誰かれの噂や悪口、みな要するに、自分が一番よくて正しくて偉くて利口であって他の生徒は皆不正直で怠け者でお馬鹿さんで仕方がないという風な説明――関子もうんざりしてしまった、――しかし英子は平気で傍を片時も離れない。やれやれ。

その日のお昼の時間にも英子ひとりでしゃべり立てて関子を伴ない運動場を歩き廻っていた。関子を慕う者は校中浜の真砂と数知れずあるけれども、なにしろ英子という人がついていて警戒おさおさ怠りなしという有様では、残念ながらただ遠巻きにして騒ぐのみ――傍へ近よる者もない。それを、ついよいことにして、英子は美しい関子を天上天下ただ我がものという顔で運動場せましとばかりにおし歩く。

そして絶えず何かしゃべっている、関子はなんの興味もなく、むしろ迷惑そうに聞き流している。

こうして変な二人連れが運動場をさまよい歩いている時、校舎の裏手芝生の奥の日蔭の落ちる処、ひともとの切株の上へ腰をおろして、うつむきながら静かに寂しげに何か学課の筆記らしい厚いノートをひるがえしながら暗誦的に読んでいる一人の生徒がいた。

海老茶のややさめかかって朽葉色に近く古びた袴のひだは正しい、古いすれた靴ながら磨かれている。幾度か水をくぐったものながら肩の折り目にくずれも見えぬ銘仙（めいせん）の紫じみしもの、色淡けれど姿凜々しくどこやらにぶこつな角があるけれども、それもその人の性格にむしろぴったりと合って表現されているゆえ、澄み切った調和で特徴強い個性の意識を強く与えて気持がよい。

今その生徒の前を、何心なく関子と英子の二人がさしかかった。

二人の足音を聞き、その英子の姦（かしま）しい話声を前にした、切株の上の少女は、せっかく独り占めていたこの静寂を破られたのを恨むごとく、ふと黒く鋭くせまって強く、そしてその奥に寂しい悲しみの影を仄かに漂わしている双の瞳を濃く角のある眉の下からあげた。

関子は、その時偶然に今運動場の喧騒を避けて、ひとり静かに校舎の裏の切株に身を託してものを読む変った人の姿を見出して、優しい瞳をその生徒の上にそそいでいる時だった――その時、切り株に腰かけていたかの少女が、ふいと顔をあげたから期せずして二つの両極端に異なる、直線と曲線の顔がぴったり向かい会った。

『あら』

と関子は思わず小さい叫びをもらした。それもそのはず、その切株による少女こそは、かの過ぐる日官舎の裏通りの水道の傍で、石切りの遊びに虐げられた弱い男の子が姉と呼んで語らっていた、そのひとではなかったか！

切株の少女は、ちらと関子を見たのみ再び静かに寂しげに膝のノートの上へ瞳を落した。

英子は知らぬが仏でさっさと関子を引張って通り過ぎた。そんな瞬間の人の行為の神経を通わすようなデリケートさはとても生れつきない人だったから、無事である。

やや離れた場所まで通り過ぎて来てから、関子は英子にむかって問いかけた。

『さっき、あすこの切株の上にいらっした方――あの方、あの官舎にいらっしゃるんじゃあ、なくって？』

『ええ、あの人、あの缶詰さん、あのひと、そうですよ、お父さんは県庁の土木課の書記よ、もうよぼよぼした老朽の安官吏で可哀想よ、そして、おまけにお母さんがないときているんでしょう、実に悲惨よ、それに病身で発育不完全でまだ学校にもろくにあがれない章ちゃんって弟がいるのよ、あの通りに遊び時間にもノートに後生大事にかじりついて、勉強しているんでしょう、いったい遊び時間に復習するなんて規則に背くでしょう、だから私あだ名を缶詰さんとつけてやったのよ、だって、なんでもかんでもただ頭へ詰めこめばいいと思っているんですもの』

英子は面白がって、人の噂をずんずんと自己一流のしゃべり方で話していった。

関子はそれを聞いて、ようやくあの姉弟（きょうだい）の素性を知って、ひとしおの同情を覚えた。

『あの方、なんてお名ですの？』

と関子はさらに聞いた。

『あの缶詰さんは横山っていうんですよ』

と英子が答えた、

『そう、横山、それは苗字でしょう。お名前は？』

と関子はおし返して問うと。

『名前、名前は潮（うしお）っていうんですよ、ずいぶん風変りな変ちくりんな名でしょう、女らしくありませんね』

と英子は笑って言った。

『まあ、潮！　潮！　横山潮……なんていい響きの名でしょう、あの方らしい！』

後の言葉は関子は胸の中にのみ囁いた——。

全校に輝く明星（スター）、美しの生ける花一輪と人の渇仰の的とまでなっている宝木関子の胸の柔らかい湖水の面（おもて）に、その日その時より、あわれ一つの面影の忘られぬものとなりて映じぬ、その幸ある子はそも誰ぞ、まこと横山潮そのひとであった。

横山潮は忍従の子だった。

忍従——それは寂しい静かな苦しみである。

潮の故郷はみすずかる信濃の国だった。高原の故郷を離れてから幾年となる、その間に父はあまた処世上の失敗をしてついに貧しい小役人となった、母は弱い弟を一人残して去った。年ごとに老いゆく父、病身の弟、一家の行く末を見守るのは、あわれにも潮の肩にかかってきた。

潮は世のすべての少女の如くそのうら若い春の心のままに舞いつ歌う事は運命が許さなかった。

修道院の若き尼僧の如く、春をよそに寂しく静かにただ一つの灯を捧げて進みゆかねばならなかった。

その灯とは？

潮は生きるために——父と弟と自分の生きるための力を身につけねばならなかった。

潮は父を老後安らかにして送らせたかった。病身の弟を守り育ててこの世の光を浴びせてやりたかった。

潮は母に代って家庭にあった、そして学校では勤勉な生徒として成績は首席を占めていた、そして卒業後進んで高等師範へ入るつもりだった。

彼女のなみすぐれての勉学も、それは当然しなければならない事だった。

潮はそれゆえに、いつとはなしに寂しく人を離れる悲しき子となり果てていた。

寂しさも慣れれば、これが自分の住むべき無二の世界となる不思議さは、潮の身にもあった。

関子にはその潮がなつかしく慕わしかった。

官舎前の路傍で時おり会う時にも、潮は伏目になって見てはいけないものに対するように、関子に首をさげて逃げるように去った。時には黄昏（たそがれ）時、かよわい弟の手を取って官舎の近くを散歩する潮の姿を関子は見出して、人知れず胸をおどらした。

ある日のこと、偶然に教室当番が二人一緒になった。放課後の掃除の人数に補欠ができて順々に組が狂って、潮の組へ関子が入るようになったのである。

関子は嬉しかった。

潮がバケツを一人でさげて、水汲場へ行ったのを見てすぐ後から追いかけるように行った。水道の水道栓の前でバケツに水を満たしている潮の姿を見ると、関子はいつか初めてその人を相見た時を思い出して、ひとしお懐しかった。

『重いでしょう、私お手伝いしますわ』

そのバケツの柄の片端に関子が、優しく声をかけて持ち上げた時、潮は颯と紅くなって、どぎまぎした——がすぐ平静にもどった。
『いいえ、このくらい、私にはなんでもありません』
こういう声は、無愛想で、むしろ関子の助力を煩さがるようだった。
関子も、さすがに気持が悪かった。
『そう、失礼……』
悲しい思いで、バケツからきまりわるげに、離れてしまった。
ある日の午後、俄かに大雨になった。朝は天気がよかったので、誰も雨傘の用意がなかった、まだ初夏の頃だったので、パラソルさえ持って来る人は少なかった。それで家から傘を届けられる者が多かった。中には寄宿舎の親しい友の雨傘を借りる者もあったけれども、潮には傘を貸して貰うほどの親しんだ友のあろうはずはなく、さればとて、家には病身の弟一人あるだけ、誰が雨傘を遠い学校まで届けようぞ——。
昇降場に出て見ると、外は激しく降りしきる豪雨、風さえ加わっている。
中には小降りになるまでピンポンをしたりして待っている人達もいたが、潮にはその余裕はない、一分間も早く帰って、家の中の整理や、寂しく留守居している弟の世話、夕食の仕度、学課の復習、父の着物を縫う——か弱い少女の双手にあまる仕事が目の前にある、槍が降っても帰らねばならない——潮の濃い眉がぴりっと動いた。
パラソル一本も持たずに、潮は平気で歩き出した、歩くと決心したら——彼女は強かった。
『横山さん、横山さん』

関子が声高く叫んだ、女中の届けた銀の平握りの黒絹のアンブレラをさっとかざしながら、小急ぎに潮の傍に立ち寄った。

潮は雨に濡れたまま、雨足の中に立って、あの漆黒の沈んだ眼で関子をちらと見た。

『これは大きいんですの、どうぞお入り遊ばして、御一緒に官舎まで参りましょう』

帰る路も行き着く場所も同じ方角である関子の申し入れは至当のことであった。

『さあ、いらっしゃいまし』

女中まで、お嬢さんの好きな友達と見て取って声をかけたが――潮は冷たく首をちょっとさげたまま、

『はい、ありがとうございますが、急ぎますから失礼いたします』

こう、にべもなく言い残すと、さっさと走り出すほど先へ歩み去ってしまった。

『まあ、――そんなにまでなさらなくても……』

関子は思う人のあまりに情（つれ）ない素振りに、胸さえ痛んで、泪さしぐんでしまった。

『ほんとに呆れた変に剛情の方ですこと』女中は潮の雨を恐れぬ勇気に呆れはててしまった。

同じ官舎に住む二人――関子と潮は朝夕よく行き合った。

それはある時は学校へ行く途中、またある時は帰る時、またある時はふとした外出の出入りの路傍で……けれども関子は心弱くてみずから進んで潮に懐しい言葉を掛ける術を知らなかった。

八月の十日は関子の誕生日だった。

いつものようにお客様をするはずだった、学校で親しい人達を招いた、もちろん同じ官舎で学校へ行く人は級の相違にかかわらずお招きしたのである、潮も当然その中の一人に加えられたのは言うまでもない。

学校がお休み中なので、お客様は少なかった、関子もしばらく行っていた鎌倉から、わざわざ帰宅しての事であった。

――潮さんが来て下さるかしら？――

これが関子の柔らかい胸を痛めた、問題だった。

誕生日の二、三日前に帰るとすぐ関子はお母さんや女中達に手伝ってもらって、その日の祝いの遊びや御馳走のプログラムを考えるのに大騒ぎだった。

『お嬢様、皆さんで遊ばす余興に羅漢様もお入れ遊せな、陽気で面白うございましょう』

こう女中の一人がすすめた。

『そうね、ずいぶんおかしいわ』

関子はこう賛成しかけたが、ふと思いついた、それは潮のことである、あの寂しい沈んだ気持の潮を客の一人として望む以上、そうした遊戯は、どんなに迷惑させることだろう――と思うと関子は、それがいかにその日の興を添えるものであろうとも、プログラムのどこにも加える気にはなれなかった。

すべてが、こうした細やかな心づかいをして、招きの会は催されるのである。関子にとっては、あまたの他(ほか)の客の誰よりも潮のために設けた心づくしの宴に思われたのである。

関子はそうであったけれども、お母さんや家の者達はそうではなかった。潮など、下級官吏の娘はただどうでもよかったのだった。それよりももっと身分の高い家のお嬢様達を迎えるのを待ち望んで喜こんでいたのである。

いよいよ誕生日の祝いも明日となった、用意なって今はお客様へ通知するばかりだった。官舎の中の家々には女中がいちいちお使いに行くことになった。汗だらけになって方々の家を廻った女中の帰るのを待ちかねて、関子は女中に第一に問うた。

『あの、横山さん明日おいでになるって仰しゃって？』

何はおいても関子に、それが大変な気がかりだったのである。

『え、横山さん』

女中には、ほとんどその名が思い出すのに困難なくらいのものらしかった。

『ええ、あちらの裏の官舎の横山さんよ、明日来て下さるって御返事遊ばして？』

関子は気がせくので再び問いつめた。

『ああ、あの横山さんってお宅ですか、ええ、あすこはなんでも近い中(うち)お父様がお役をおよしになってお国へお帰りになるのだそうでして、とてもおいでになれないでしょう、失礼ですがおことわり申し上げるって御返事でしたよ。ええ、あのお嬢様いつか俄か雨の降った日ね、あのせっかくお嬢様のお傘へお入りなさいって、おすすめしても、いやに意地を張ってずんずんびしょ濡れになって歩いていらっしゃった方でございましょう』

女中は今でも潮の風変りの行為に気を損じているようで、こんなことを関子に言った。

……関子の失望は言葉につくしがたいものだった。ああ、あれほど、あれほど楽しみぬいて、潮を我が家の一日の客として厚くもてなして共に親しく遊べると信じて喜こび勇んで力を入れて用意を細かにしたものを、今潮が来られないと女中から聞いて泣きたいほどだった。

『まあ、横山さんのお家、お郷里（くに）へお帰りになっておしまいなさるの、まあ……』

関子は思いがけない、悲しい事を耳にしたように、顔色さえ変えた。

思えば、思えば、なんのために、こんなに毎日母や女中に手伝ってもらって、毎年よりもさらに盛んな祝いを用意したのだろう、みな潮を招き、いつも寂しい生活にのみある人をせめて一日心ゆくまで我が家の中でもてなし慰めたかったからのものを——そしてもしも、それを機縁に、二人の中に美しい友情を芽生えさせることができるならばと、そうした儚ないひとすじの希望の糸すら、つないで心あてにしたものを、無残にも今みな破り去られた空しい夢の如くになりはてて、関子の胸は暗く寂しかった。

もう、明日の誕生日を待つ勇気も失せたほどであった。

綺麗に明日の宴のために飾られた洋館の一室に入って、悄然とした——円卓子（まるテーブル）をかこむたくさんの椅子、その椅子の一つに思う人の面影を見出そうと、ただ祈ったものを——と関子はいまさらに泪ぐましかった。

ふと、窓ぎわの栗色のオルガンの黄昏せまる室（へや）に沈黙しているのを、寂しい瞳に入れた関子は、あまりのやるせなさに、つと身をよせて蓋をあけ、真白い鍵盤（キイー）に細く美しき指先を当てた。

指先のたどるがままに、奏でる曲は寂しく静かにたゆたいがちに窓より外へ流れるのであったろう……ふと、その窓の下に人の忍びより添う気配がした——関子は不思議に怪しんで、ふいと

立ち上って、窓のカーテンをひきしぼった。

……慌てて、颯と身をどかせた人の影が、そのカーテンをしぼった窓辺に浮いた。

『あっ……』

と、関子は胸おどらして床の上に倒れようとした。

おお、その窓に浮かびし人影こそは、誰あろう――横山潮その人であった。

カーテンのそよぐ音するや、いなや、彼女は早くも佇んでいたかの窓辺を後に去るのであった、ただ後ろ影のみ仄かに……関子が胸とどろかせて声も無く見送るまに、早くもそのなつかしい影は門の外にと消え去った。

肩すぼめて、追わるる如く去る姿のいじらしさよ……。

関子はこう声を出そうとしてまた出し得なかった。

『横山さん――潮さん――いらっしゃい』

彼女の姿が見えなくなると、たまりかねたように、

『潮さん、潮さん』と、なつかしい人の名を呼びつづけて、その人のより添うていた窓下を、なつかしんで見おろすと、……不思議にも、どこより落ち来りしか、黄金の葩（はなびら）めぐらす、日向葵の花一枝……心ありておける如くに窓のふちに置いてあった。

関子は、その花を取り上げて、じいっと見入っていた――彼女の瞳に泪が浮いた。

中央の卓子の上の花瓶にその花は活けられた。

関子の誕生日の祝いに招かれて来りし客達は部屋の花瓶にさされた日向葵の花をただ無意味に見ていた、そして、祝われる身の主人公がなにゆえか物足らぬ寂しい顔をしているのを、あやし

む者もなかった。

その日の翌日の朝である。

関子は、裏手の官舎に一人歩んだ——潮の住む家の前近くさまようた、潮の住みし家は雨戸がかたく閉されて、もはや主なき空家となっていた。

もうその寂しい一家は郷里信濃に帰った跡だったのである。

その空家の庭の粗末な垣のほとりに、きらめく陽の光を受けて雄々しく、しかもどこか寂しげに咲き出でた日向葵の花を関子は見出した。

日向葵の花、日向葵の花、げにも、げにも、思いぞ当たる、先の日——かの黄昏近き頃おい、オルガン響く窓辺にひそかに置かれし、その花の一輪こそは、心ありて、その花咲く家の主の贈りしものぞ——優しき関子を、潮みずからも慕いつつ、ただみずからの胸に秘めてのみ現しがたく心なく過ぎし日々の過去も——今は夢と去りて、思い出多きその地に別れを告ぐるに際し、我が住む庭のほとりに咲きし花一つ、オルガンの主を忍びてよりし窓辺に残して、よそながら別れを惜しみしにあらずや、あらずや。

関子は茫然として、その日向葵咲く垣に立った——つと立ちよれば君が門(かど)、日向葵の花咲きにけり、訪(おと)ないもせず去(い)にもせず、ただ さまようなつかしい、その門よ垣よ、家よ！　そこに昨日までありし人は、はや遠く去りてあらぬものを……。

関子は胸引き締めらるる心地して、涙に咽(むせ)んだ。

　　或る時は黄金(こがね)日向葵或る時は

月見草とも見え給うかな

この歌一首、潮のために捧げらるるものではあるまいか。

外にあくまで強く雄々しく、しかも内に優しく柔らかく人思う子の不幸の性格よ！

日向葵の花よ、花よ、御身は強過ぎる花と、少女達はあるいは眉ひそめて近よりがたく思うであろう、けれども御身の花のその中に含まれた人知れぬ優しく弱き心の涙を、孤独我れのみ一人生くる如く、陽にくるめきて咲く強き花葩（はなびら）の陰に包むのを、よく知れる美しき少女は一人はあるものをその名は宝木関子――そのひとそれより日向葵の花を愛すること世のなみならずと伝う。

# 龍胆（りんどう）の花（はな）

## その一

『クラスメートの評判記――ですって！　まあ、ずいぶん旧式ね、そんなものは今を去ること遠き一世紀以前のボロ女学校の教室で流行した古いことだわ！』

『じゃあ、月旦（げったん）？』

『それも何だかかたい感じで変ね』

『じゃあ、人物批評！』

『ますます出でて、ますますへんてこだわ』

『じゃあ……やっぱり評判記がふさわしいでしょう』

『仕方がないわ』

『じゃあ、始めますよ、よくって！』

『はあい、謹聴！』

『第一に槍玉に上ったのが、神長悦子さんなの』

『まあ、ひどい……』

『さあ、さあ、リーディング早く！』

読み役に廻った人が、中央でなくって、正面の黒板（ボード）の前――実に神聖にして犯すべからざる教壇に立って――驚きましたねえ）――エヘンと妙に鹿爪らしく咳払いをしたものです。

この光景は、×××学院　女学校ですよ）の五年級のB組の二学期の、ある火曜日の昼食後の　お弁当を召上ってから）二十分間の御規則の休息時間に起った事件です。――そのはからずも問題を起したクラスメート評判記というのは、神田の文房堂で買ってきたらしい黒革表紙のカード式綴込（つづりこみ）ノートでちょっと雑誌ほどの大きさの本なんです。文字（もんじ）はもちろんペンでしょう、しかし、一つひとつ（一人の評判記ごとに）字体が異（ちが）うのは、そのつまり評判記の作者が異うわけなのです。

早く読んで頂戴――じれったいわ。

数々の御催促を受けて――ようやく読み出された。

神長悦子の君。　杏いわ、の君なんて、囁き起こる）この君、ニックネームを仙台様と称す、時に略して、たけねつ、または銀鈴という。その理由は、西の都、京は某本願寺に、いと美しく朗（ろう）たけた気高き女性の八条武子と申す御方がおわし給う、背の君遠く異国にありて十年（ととせ）近く離（さか）り住み給う、紅涙潜々（こうるいせんせん）として離愁に堪えもやらぬ、かぼそき姿に立ち給う聖（きよ）き御仏の道のために老若男女これぞこれ観音菩薩の化身かと、合掌礼拝（らいはい）す、さればその御姿あまたの新聞雑誌の競いてその面影を写真版口絵となして読者の意を迎う、しかも武子夫人嫋（なよ）やかに麗しく哀艶の調べそぞろに人に迫る和歌を手すさび給い、すでに歌集一巻「銀鈴」の名著名高く洛陽の紙価ために狂いて某製紙会社の株一躍千金と昂（あが）り、十割五分の配当ありしとかや、さもあればあれ、時に当り

て、我が親愛なる神長悦子の君、かの台湾の山間に恐るべきマラリヤ熱もかくやとばかり全力全霊これただ八条武子夫人への思慕崇拝の　狂態」と化して、学業を怠り常識を失い、夕日がかなたの西にかすむ時云々、ひとりの我れは悲しかりけり、わッ――とやるせなき声をあげて、夫人の歌に共鳴し讃嘆の涙に咽(むせ)ぶありさま、その赤心(せきしん)のいじらしさに、衣の袖をしぼらぬ者ぞなかりける……

　ところへ鐘の音――

『本日のクラスメート評判記朗読会これで閉会になります』

とみずから幹事顔なのが一人御挨拶があって、その日はおしまい。それから毎日昼食後の二十分間は評判記の読み上げごっこに書きくらべごっこ、先生に見つからぬ程度の大騒ぎ大賑わいでした。神長さんが真先で後から後からAさんやBさんやCさんや皆、種々(いろいろ)の熱病　慢性持続的？）の所有者です。武子夫人熱に対抗して筑紫不知火もゆるところ火の女王紅蓮病(シック)とか、或は大阪は宝塚の……とか、どれもこれもよくもよくもこんなに陳列できたと思うほどでした。その原文は神長さんの例に引いた通り、いずれも大同小異の軽浮な歯の浮くような文体で戯(たわ)けたものです。

　毎日それが続くので、誰も気持を悪くしたのでしょう、いつの間にか、評判記の空頁(ページ)の中に、こんな言葉がしるされてありました。

　軽佻浮薄見るに堪えざる評判記なるもの以後かたく御禁止のこと、もし法を破りて筆をとる者あらば鈴ケ森刑場に於(おい)て御仕置致す可き事。

江戸南町奉行　　大岡越前守

ですって！
『まあ、誰がこんな悪戯書を！』
と幹事（？）連大いに憤激したが間にあわない。その次の日にまたもや、いつの間に誰のしるしたものやら。

　クラス内にて朗読の評判記は現代の人心をロシア過激派のごとく赤化するの恐れあり、発読禁止を命ず。　丸の内警視庁）

『ぷふん、新聞知識をふりまわして』
などと、冷笑されてまたもや評判記はそんな注意書にかまわず朗々と読みあげられる。
するとまた翌日、いつの間に誰がしるしたか、

　評判記断絶せざれば、この旨職員室に密告す。　尾行刑事）

支那語で申す、これがまったく晴天のへきれき！　あら恐ろしいとばかり身ぶるいしたはずでしょう。そもそも職員室といえばそれ東北と位（くらい）して鬼門に当るそうでして……。
ここにおいて、さしも勢い高かりし評判記もそれなり、火の消えたようにぱったりと音もせず声も出ぬありさま――でも級の名文家二、三、是非とも再び黒革のノートを華々しく復活させたくて、させたくて……神経衰弱になるほどでしたって！　そのうちに、いつしか秋去り冬きたる、で五年の方達早くも卒業となりました。それまでいろいろ珍らしい事件が起こったようです。たとえば八条武子夫人の背の君が外国から帰られた際、どうしたか神長さんが、少し気が変になり遊ばしたとか、うそだったとか、それはそれは煩（うる）さいほどのお話の種もありますけれど

も、すべて略します——。ただその卒業に際してはからずも、かの黒革の表紙が復活したということです。

## その二

もしも、そのまま差し置かれたら、ただそのままに朽ちはてようものを、はからざる幸運はその黒革のノートを見舞いて、世に出ずる日となりました。

それはこうしたわけから——。

級(クラス)の皆様、おたがいに学校を出てもお手紙だけはきっとね、けれどこれだけたくさんの中(うち)でしょう、みんなに行き渡るように手紙を書くのは困難な事でしょう、もちろん特製のS同志なら日(ひ)文矢文(ぶみやぶみ)でしょうけれどねえ、それでは個人的で一般に普及しませんわ、ですから、こうしましょう。廻覧ノートを一冊作って、一人から一人へ転々と送りっこして必ず義務として何か筆を染めて各自の近況を報告することにしましょう——』

これはよくある例ですから、異議なく満場可決、——それでその廻覧ノートという段になって、誰か絵を描いて表紙をしるして、あとは順々に用箋に綴じてゆくことという方法にもなりましたが、その内誰が思い出したか、あのクラスメートの評判記で大騒ぎを引き起した、黒革のノートです。

かくて黒革ノートの復活期が遂にきたのです。

そのノートの廻る順番はいろは順にいたしました。同じ音を頭字にする人達三人ならば、その中の身長順で定めました。その結果井上さんが廻覧通信の第一番に筆をとる人になりました。

この井上さんという方――級の人達の眼から観察するところ、実に驚くべき平々凡々の人ですって。善いこともせねばまた悪いこともせず、できる学科もなくできない学科もなく要するにただの人、ゆえに何人の心も刺激せずその存在をさえろくに認められなかった人、在学してから卒業するまでどこの隅にこんな人がいたかと思うような人、目立たぬ人、人に注意されぬ人、その人がノートの初めに筆をとる人になりましたから、どうせ第一頁は平凡な候文で二、三行つまらぬ文句をしるすだけのことと、たかをくくってノートを手渡して、

『井上さん、早くかいて、すぐ次の方へ廻して頂戴ね』

と、命令したのは、井上さんの次の番の某の君が、すこぶる茶目さんゆえ、何か奇抜なことを早くかかせて拝見したい下心の人達が多かったからでした。

見返りがちに立ち去った校門――そして一人に一つずつの運命を見舞って、処女の日のあえかな悩み悦び――はた涙も笑いもいっしょくたにくる中（うち）に、月日の流れのみ早かった。あのお約束の黒革ノートが、その間に処女の手から手へと廻されてゆくのでした。

そこに一つの奇蹟が起りました。奇蹟といえばなんだか仰山ですけれど――思いもかけぬある事が思わされたのです。

誰しもあっと驚いてまあと讃嘆することがありました。それは廻覧ノート第一頁にしるされた（龍胆の花）という一文でした。

第一頁の文字をしるすのは、いろは順の先頭の井上さんその人のはずでした。

あの平凡な目立たぬ人が、ひそかに自分の内部にかくし持っていた己れの姿をはっきりとそこに表現したという騒ぎでした。

よけいなことはこの際一切申し上げずに、直ぐにそれを御紹介申し上げましょう。

ノートの第一頁にかくしるされてありました。

――人見知りとははにかみと卑怯な弱い臆病――それが過去の私全体でした、否これからの将来も、恐らくそのままの形で彼方の永遠の真白き墓の中までゆく私の気質でしょう、私はそれらを露さえ怨もうとは思いません。けれど私のそのような弱い影のうすい者に、なおかつ永久にこの世にあるかぎり少女の日の忘れ得ぬ幻影として唄いつづける曲を、過ぎし学校生活に得たことでした。ほんとに人知れず得たことでした。

私は自分の価値も知っているつもりでした、私自身なんの特徴もなくまたなんの天賦の才能も持っていない私――それはけっして人生を華やかに渡るべきを許されず、またことさらに影深く悲嘆して暮す詩人たるをも許されない常の人なのです――それゆえに私は自分の心持に起きたある現象もその形を自分自身の身の程を知って所置したつもりでした。

頭の悪い私が、妙にまわりくどくこんな論理（ロジック）を立てようとは思いません――やめましょう。それよりも恐らくこれから以後私自身が注意して同窓会に出席さえしなければ皆様方とお顔を合すこともないという確信をもって安心して私は自分の胸に大事に守りかかえていたことをお話できるのです。

私は、同じ級のT様がどんなに好きだったでしょう。お顔がたがいに見えないと思って、こんな乱暴な言葉をいきなり投げつける私を　凡人の生涯に一度の突拍子）とお思いになって許して下さい。

T様の何から何まで好きでならなかったのでした、けれどもT様は級（クラス）のスターです、私といったら御存じのように教場の片隅にちぢこまっている影のいたってうすい子ですもの。どうして考えただけで釣鐘に提灯、雲に懸橋、霞に千鳥――及ばぬたかねの花にして村童（そんどう）星を捕えんとして竿をふりまわすの図ですもの――お近付きどころか、ろくに言葉を交したこともございませんでしたの。

これは私のみではなく誰しもあることですけれど――その君をふと廊下の行きずりに見出しても胸とどろいて正面を見向き得ぬ程でしたの――わざと遠まわりをしてしまって、そのくせ一日お休みになっても強くやるせない空虚に感ずるものを……ふとした二、三の人の集まりの中にまじっていて、何かのことで君の御名が出ると、ゆえもなく胸が熱くなっていたたまらず、追わるるごとくそこを逃れゆく私でした。

もしそのままにあるなら卒業してお別れするまで、一言だに交わさずにいったかも知れませんの――でもふとしたことから――それはあの秋の最後の修学旅行で、女学校時代の記念としてある意味では卒業のお別れの旅として日光の中禅寺湖畔の美しい紅葉（もみじ）を尋ねた時――あの美しい湖畔の宿でゆくりなく与えられた偶然の機会がございました――皆様も御記憶でしょう、あの夜の月のさえた光を！　登る山路で手に手に拾い採った紅葉（もみじ）の一片二片かたみに押し合うとて尊重したり風景の絵葉書に都への音ずれしるすとてあちらにこちらに万年筆を走らせて、山路を経た疲れ

も忘れて打ち興じた忘れがたい旅の一夜、その一夜ゆえに——さらに惜しまれてなつかしい秋の湖畔の宿の夜——『もう騒がずにおやすみなさい』と先生の再三のお声で、やがて静まって眠りにつくことになりました。宿の混雑のため私達は一つの床に二人ずつ休まねばならなかったので——誰かがとんきょうな声でしかも真面目に『先生寝るのは席順とちがってもいいのですか？』と問うた時、どっと一時に起こった笑い声——あわれ、ひそかに面はゆき子もあったでしょうものを！

　ああ、そしてなんという偶然でしょう——級の中でもの数ならぬ私は人に目立たぬようにと片隅に身を横たえていますと、その隣の臥床(ふしど)の中にこれも級の花形の秀才の評高きK様と御一緒におやすみになった憧れの君が右側の方におやすみになったゆえ、私は隣の臥床の左側で、ちょうどお隣り合せになりました、君とかく並びて湖畔の一夜を送りたいなど、おおそれた願いをけっして抱きはしなかったのですけれど……それはあまりに幸福な偶然で恐ろしいほどでしたの——だって、私の眼はさえ胸のときめきのみ高まってなかなか眠られればこそ、強いて眼を閉ずればとてせんないこと——ただまぼろしのごとくせまる君の御姿、あまりに近く我が前に——天鵞絨(びろうど)の夜具の襟ふかぶかと埋め給いし真白の頸(うなじ)よ、枕をすべる黒髪よ、かそけくも仄かにきこゆる君が優しき息のそこはかとなく……——私は胸も息づまる思いに打たれて眠りになかなか入れずにいるその時でした。ふとT様は臥床(ふしど)をすらりとおぬけになったのです。

## その三

──私は、その瞬間はっとしましたの、なぜだろう──と、やはり私同様まだおやすみになれないかと、私のいぶかしんでいる中にT様は広い座敷の障子をそっと音のせぬよう開いて、すらすらと外の廊下へ出ておしまいなさったのです。

　世に聞く夢遊病──まさかその病気にT様がおかかりになったのじゃないでしょう。けれど──なぜか私はただもう心配で心配でならなかったのです──もしやそのお姿があまりに美しいので湖水の主が魔の力で水の面（おもて）に誘うのではあるまいかなどと、柄にもなく妙な伝説めいた神秘のヴェールをかぶせてみずから胸さわぎを起こしたりして気をもみましたの──T様の静かに優しい足音はしだいに廊下を向こうへと響かせてゆくのです。私はその時、自分が当然それをなさねばならぬ義務があるかのように──心に責められて、自分もT様の後を慕うて臥床をそっと抜け出ましたの、今自分がT様をひそかに守護しなければT様がほろびるような気がしたのです、なんの考えもなくただそういう気持がしたのです、私はT様の後ろ姿を廊下の向こうに認めて、その後を追いました。後を後をとどこまでもついてゆくと、T様は階段を降りて突当りの洗面場に立ち止りました。

　夜、鏡の面を見入ると魔の影がうつると、幼い頃祖母からそれを聞いてからは臆病な私は夜鏡をじっと見る勇気のない者でしたが、その夜半の暗（やみ）に冷たく光る鏡の面にありありとT様の姿のうつったのを私は見ました、そのT様のお姿の後ろの肩越しに私のへんな姿も重なってうつりました。

『まあ、Iさん……』

T様は鏡にゆくりなくも私の姿を見出して、少し吃驚（びっくり）したらしくまたなつかしげに　私には感じられたのです）私に呼び掛けました。

『ええ』こう言ったまま私はひたと立ち止ったのです、恐らく足がすくんでしまったのでしょう。

『――私ひとりでこんな長い廊下をとぼとぼ来るのほんとに淋しかったの――でもあなたもいらっしゃるから私ずいぶん心丈夫だわ……』

こう言って、T様は優しく美しくほがらかにお笑いになりました。私はようやく安心する事ができました。それは自分が後ろからのそのそとついてきた事がけっして無駄でなかったのを知ったからです――なぜこうして後ろからとぼとぼとついて来たのか――思えば思うほどの烈しい思慕の念を考えると胸が熱くなるようでした。

『私、あの……虫歯が痛んできましたの、あんまり切ないからおひやでうがいをしたらと思って……』

T様はこう仰しゃったのです――私はその時初めてT様の夜半（よわ）独りでここへいらっしたのがわかりました。もしもこの場合T様が黙って――私に口を利いて下さらなかったら私はちょっとおひやでも飲むふりしてそのまま帰ったのでしょう、もとより自分から進んで話をし始めるなどとは思いもかけぬ性の子でしたゆえ、けれどもT様はよくお話して下さったのです、虫歯の痛むことも――それを伺うと私はT様の虫歯の痛みを少しでも軽くしてあげたいその願いで胸が一杯になりました、私はふと宝丹のようなお薬を虫歯のうろに入れると一時的にも痛みをとめるにきく

ということを思い出しました。それで私はぬき足さし足またも階段を上り広い座敷へ戻って、暗の中を手さぐりに自分の持ち物の手さげから一包みの薬を持ち出して、またも階下の洗面場へと取ってかえしたのです。T様はうがいをしていらしった、やるせなげに痛みを忍んで頬をおさえて立つそのお姿を麗しと見る私でした。

『あのお薬をふくんでいると、よっぽど痛みがまぎれましょう』

こう言って、私は初めて二人だけでものを言う特権を身に負う喜びにわくわくして薬の包みを差し出す手先さえわなわなとおののくのでした。

『まあ、わざわざとって来て下さったの。まあ、ありがとう』

T様の眼は感謝の念に輝いて私に今宵初めて相許す親愛の情を示していました　と、私には思われたのです）。

『ありがとう。私頂戴しますわ』

こう仰しゃってT様は私の掌の上のお薬をとって、そして口に含んで、にっこりと、しかもあでやかに微笑んで、

『まあ、清々して、まぎれますこと！』

私は自分の慕う人の眼のあたり自分に示す感謝と喜びを見て、どんなに嬉しかったでしょう。このままに今大地震でこの湖畔に地上の者が皆埋められても露いささかの心残りもないなど自我的の考えさえ起こりました。まったく思えば、大地震がその夜真実にあって、そうした事が実現されたなら、今さらこんなことを長々とかく要はないはずだったのですけれど……。

『よほど痛みは軽くなりましたの、お部屋へ戻りましょう』

T様は暫くしてこう仰しゃった。それまで女王様のお傍にかしこまっている侍女のように、ぼんやりと突立っていた私は、やはりT様の言わるる通り、またも後ろからのそのそとついて階段を上ったのです。

それからの森とした座敷の前の長い廊下——その外の硝子（ガラス）戸を透して見ゆる湖の影、山のたたずまい、流れ渡る月光の蒼白い光の波——その夜の月のあまりに清く美しかったのが、かえって後の日の追憶の恨みともなるのです——

『まあ、よい月——』

あこがれの君はこう口吟（くちずさ）んで、廊下の欄（てすり）につとよりそわれた——美しいその横顔、そして影と光のハーモニーした月夜の少女の立像——私は恍惚としましたの、そして涙ぐましくなりました。人は悲しみの極に流す涙と同じものを、あまりに美しいものに接して感動した時も瞳に溢らすものだと私はその時知りました。

いつまで見ても、いつまでもいても、かぎりないものでしたけれども、T様が欄を離れて歩めば私も共に行かねばなりません、肩をならべて二人の影を廊下の板に落しつつ、私共の広間へ戻りました。二人が右と左に別れて臥床に入る前、私はあの洗面場から大事に持って来たものをT様に渡しました。それはT様が歯痛のための頬の熱を冷やすために、洗面器の水に浸したタオルです。T様は私のあげた薬のためにか痛みのまぎれたままに、そのタオルを忘れていらしったのです。それを忠実に私は水をしぼって畳んで持って、そっと後ろからついて来たのです。

『あの——タオル……』

こう小声で囁いて私はT様の夜目にもほの白く浮く細っそりとした手にそっとお渡ししたのです。『まあ』T様は忘れていたタオルをそこに私の手から見出して、初めて思い出したらしく、ほほと忍び笑って、そのタオルを受け取りながら、その刹那つと君の片手は私の手を犇とかたく握られて――

その翌る朝、私達は眼覚めると、すぐにがやがやと起き出でて、洗面よ、髪結よ、身仕度よと大騒ぎのさわがしさとなりました。私はあの昨夜の思い出忍ばるる洗面場から広間へ帰って襖の蔭から中へ入ろうとした時、部屋の中から聞こえる華やかな笑い声を耳にしました。それはあのT様のお声です。晴れやかなクラスの女王のまわりには、いつものように数人の崇拝者がぐるりと囲んでいるのです。あのゆうべただ独り悄然と歯痛になやんで廊下をうなだれてゆくT様とは、うってかわった晴れやかな思い上った態度です。

『Tさん、あなたゆうべなんだかおやすみになってから外へお出になったのね』

『ええ、ちょっと――』

これはT様のお返事です。

『それに誰かまた出たり入ったり、ほんとに煩さくって安眠妨害だったわ』

あっ、それは私のことだ、と私は襖の外で、いったん入り掛けた足をそのまま立ちすくめました。

『ええIさんでしょ、私の後ろを用もないのにのそのそついて来るんですもの』

これは、T様の（！）確かにお声です、私の全身の血はこの刹那一時に逆流しました。

『ホヽヽヽ、まあ、不良少年みたいね、あんな平凡人のくせに見掛けによらないのね、じゃあTさんあなた困ったでしょう』

『ええ、だから仕方がないから、いい月ねとかなんとかお座なりを言ったのよ』

これはT様（T）のお返事です。

『ホヽヽヽ、そしたら彼女すっかり感激しちゃったってわけね、ホッヽヽヽヽ』

これに和する数多の笑い声――

私はじいっと唇を切れよとばかりに噛み締めました。ああこの屈辱、はずかしめられ嘲笑の的とされた私―― 一寸の虫にも五分の魂、いつの日にかこの恨みを――私の平凡な心臓もその時ばかりは真赤な血潮が湧き立って、怒りと恐れに頭脳は混乱して――私は身の置き場所もないほどでした。

今朝人々の前で私をかくまでに嘲けるなら、なぜ！ なぜ昨夜あきらかに私を軽侮して下さらなかったのでしょう、私の感情を弄んで利用して、そして嘲笑の種になさるとは――T様、貴女は美しき仮面にかくれた悪魔です。私は一生呪う！ 私はこう心に強く叫びました。

湖畔を辞して山路を下りながらさんざめく列の中に加わってひとりなじまぬ黒いもののしみのように私は首をうなだれて晴れることなき怒りと悲しみと恥とに打たれておりました。首うなだれてとぼとぼ歩む私はおおぜいの人声のする中にまじっているのが堪えやらぬ苦痛でしたままに、みずから友の群を離れて、旧道のけわしい細道を辿りました。その時でした。人の足下に踏みにじられる細い山路のほとりの叢にふと見出でた、ひとむらのうす紫の小さい花――地に低く

うつむきて咲く身のかなしさ人目にもふれでいたずらに情なくふまれゆくのみ――けれども花は可憐に深山路の秋を飾るその幸いを心から謝すごとくにいじらしく微笑んで咲いているのです――私の瞳がその花の上に向いた時、私の怒りも悲しみも恥も、不思議にすうと消えていったのです、――私はその花の運命に今の自分の心の傷手をなぞらえて、限り無き慰安を受けたのです――一本の草、一茎の野の花にも神の深い訓しが含まれてあると歌った泰西の詩人の言葉そのものが、その時の私の胸にぴったりと来た実感でした。

愛して反かれし者、尽して報いられざりし者、捧げて顧みられざりし者、そして慕うて嘲けられし者、それらの悲しき人々よ、土に生う可憐の花の黙示を見よ！　人の足にふまれ、けられても、彼は静かに咲いている――こう思った時、私の瞳に涙が湧き出でました。それはけっして先までの怒り悲しみのための涙ではなく、そこに一すじの心の救いを得た感謝の涙でした。ああ報いなき愛に満足しつつ優しく微笑む忍従と知足の美しさを私は知ったのです。私はその朝、はじめてその時首をあげてまっすぐに大空を仰ぎました。その時の空の美しさ！　コバルトに晴れ渡って無限の愛をこめた大空の広やかさ――私はその一群の野の花によって己れの心の辿る路を見出しそれによって神に一歩近くなったのではないでしょうか。私は新たなる勇気と心の信仰を抱いて旧道を横切って、再びもとの友の群の中に立ち帰りました。

――私はこの一つの小さな思い出をしかも平凡人にとっての生涯のある転機の思い出を今かきしるしたのでございます。それはけっして、かりにも復讐のためになどではけっしてないのです。かかる貴き心的経験をお与え下さったT様始め、級の誰かれに感謝を持って捧げたかった

のです。生涯忘れがたき心の痛手たるべき出来事を、美事に転じさせて、生涯の幸福たる強い信仰を与えてくれた、あの秋の深山（みやま）のうす紫の花は、私には神の意志が下界のか弱い哀れな一少女を救うために咲く天の使いのごとく思われたのです。私はその花の心をみずからひしと胸に受けて、この先の長き我が生涯を進む決心です。

このことを長々と人にかき示したことがさもしいと仰しゃる方があるならば、私はただ黙しましょう。

× × × ×

――これだけの全文が廻覧ノートの巻頭に一字一字叮嚀にペンのあと細々しくしるされてあったのです。姓名は明らかならずとも、それはもとよりあの級（クラス）の片隅で黙せる石のごとく平々凡々として暮していた井上さんであることは言うまでもないことでした――。

# 沈丁花（じんちょうげ）

## 一　受難の家

ここに多数の地上の人類の中から、特に選ばれたかと思わるる受難者達の一家があった。横山姉妹（きょうだい）の一家が、それである。

姉は君恵と呼び、妹をさち子と名づけられてあった。その一家は昔の徳川幕府の政治状態ではかなり裕福でまた相当の権力を持っていたある旗本の流れの末である。それはどういう不幸の経路を辿って一家が社会の底の方の下積みになってしまったか、ともあれそこには語るに労（つか）れを覚えるほどの数かずの痛ましい運命の悪が冠（かぶ）されていたに相違あるまい。姉妹の父の代になって横山一家が貧困の渦流に投げこまれた時、その濁流の中で溺死するかのように母親は逝った。

母を失った姉妹と、その父とは、まずそれだけでも、世の不幸の順位にはかなりに相当する痛手であったのだし、それに前に言う通りの赤貧洗うがごとしであったゆえ――

一家の生活を立てるために、その父は世の中に職を得なければならなかった。パンのためにはどんな苦しい辛い仕事でも得なければならなかった――なぜならば、姉妹の父親のために世の中はあまりよい職を与える寛大さを充分備えてはいなかったから。

それで、その結果姉妹の父は道路工夫になったのである。それほどその父親自身が不運の人であった。しかし道路工夫がなに卑しかろう。彼は二人の愛児を養うためにみずから街道の泥土（でいど）の中に汗を流して労働するのであるものを！

こうした一家は、とても門構えのある家などに住めるはずはなかった。町はずれの裏通りの小さい汚ない長屋の一つに住んでいたのである。それだってその一家の収入にとっては、かなりの家賃を支払うような生活であった。

君恵は、それでも高等小学校を出たばかりで数えて十六である。妹のさち子は三つ下の十三、来年の春は尋常六年を終るのである。

『さあちゃんだけは、私どんな辛い思いしても、女学校にあげたいわ』

これが姉の君恵の切なる願いだった。

自分は悲しくも、すべてを諦め果てた身である――けれども、妹のさち子にだけは楽しい少女の春を少しでも幸福に、こう願ってやまないので――

君恵は小学校の門を出ると、すぐ逓信省（ていしんしょう）の貯金管理局に勤めていたのだった。職持つ子の優しくも雄々しい健気さ、しかもその年若き子においてさらに貴くも凛々しい、その群れの一人だった。美しいというのではないけれど、少女なれば、やはり人の世の春の風情は飾らぬとても溢れて見えて、いとしかった。性質も才もあたりまえのおとなしやかで別に落第もせねばまた優等でもなかった。おだやかな柔らかい気質は何よりもこの人にとってまたなき一生の宝として恵まれたものであったので――

妹のさち子は姉とはひどく相違して生れた子だった。まずその顔の美しさ。黒髪は匂う、眉は霞む、瞳は黒水晶、鼻はノーブル、唇はまあ花なら蕾、そしてその頰、その首筋——いちいちとり立てて言うなら美文辞典が優に一冊編まれるほどである。臈たけて麗しい子、亡き母にそっくり、それよりも姿において秀でるというのを、あわれ。

それは外側の美である。さち子のすぐれたのは外側だけではなかった。内部から言えば第一頭がよかった。学校は尋常一年から優等生 学校で優等だから、必ずしも頭が良いと、それを真理に言い切るのではけっしてないけれども）であって、よくある例で受持の先生が舌を巻くほどすぐれた子だった。それから声がよかった。その唱歌の上手音楽の天才が充分に恵まれていた。西条先生のかなりやの唄など、その童謡が一度このさち子の唇からもれると、誰でも涙ぐましいほどに惹きつけられた。いろいろの境遇のゆえか年齢の割りにはませて不思議なほど、ある哀愁的な感情がその歌声にもられるほどだったから、小学校の文部省的な学校唱歌よりも、文学的な童謡自由詩的なものの方が、さち子の楽才を発揮させるのだった。

このさち子は学校の先生達もほめそやして、その才と姿を賞でる。しかしなんと言っても、第一に姉さんの君恵が妹のさち子にのぼせて無我夢中である。二言目には うちのさあちゃんが、さあちゃんが」とまた始まったと言われるほど——第三者の側から冷静に見ると、これはまったくなんの事はない姉さんの君恵が妹のさあちゃん事さち子を崇拝し憧憬しこがれているかのようである。しかしつらつらおもん見るに、姉さんが妹にとりのぼせて憧れているほど、さように安全なものは二つとなさそうである。人目には、それが、どんなおかしかろうとも本人にとっては生涯を懸けての一大事業として、妹のさち子にみずから捧げているのだった。

「さあちゃん、姉さんはこの世に自分としてはなんの目的もないの。けれどただ一つだけあるのよ。それはさあちゃんをどうかして将来立派な音楽家として成功させたいこと、それ一つよ、それを思うと私どんなに苦しいことでもやるつもりよ」

　これが君恵の口癖だった。

　その口癖の単に口癖でのみ終らせないために、君恵がその日常生活にだって妹のためにどんな心細やかに忠実だったか言うまでもない。子供達のために不自由を忍んで後の妻をも迎えずに働く優しい父と母なき家に父を助け妹を思う健気な姉、そしてこの父と姉とに守られて学ぶ幼い妹。この一家の平和の意義は、その貧しさや困苦のすべてを差し引いても、それは充分な幸福、つつましやかな人生の涙ぐましい幸福であったのだ。

　けれども、おお運命よ、恐るべき盲目的なある強い意志よ——御身はこのつつましやかな貧しい親娘の幸福をさえ時として美事に裏切り破ろうとするのだ！

　それは八月炎天の真最中であった。今年は例年よりも暑さが烈しいと人々が口々に言い合う頃、君恵さち子二人の父親は、その日の糧を得て一日の労働に出掛けて行った。滝のように流れる汗に眼もくらんで、振り上げる鶴嘴（つるはし）の見当もともすれば、はずれるような辛さであった。その時街路の砂ほこりをいやが上に巻き上らせて一台の恐ろしい貨物自動車が山のような貨物を積んで、その哀れに疲れ果てた老工夫の背中へさしせまったのである。運転手がじゃけんに警笛をけたたましく鳴らしたが、もう疲れ果てて鶴嘴を振り上げて仕事のはかどりに夢中になっていたその老工夫の耳にはうとかった。

炎天にじりじり焼かれるために運転手の気持も苛立っていたのであろう。そのまま恐ろしい勢いで自動車は老工夫の背後へ突進した。工夫は樹木の暴風（あらし）に打ち倒れるように、はたと地に仰むいて倒れた。

その上へ大きな車輪は二つまで乗り上がった。もう、それ以上しるすには忍びないゆえ……）

こうして姉妹は、ただ一人の片親の父さえも、運命の手にうばわれてしまった。まったくの天涯の孤児のこのふたりは、もうなんと言っても、ただふたりの事はふたりでするよりほか術が無かった。

こんな時に平常（つね）さえ零落した家を見捨てて近よらない親類縁者がなんの力になってくれようぞ。

父を道路に轢き倒した自動車運送会社から五百円だけを謝罪の意味の代償として贈ってきた。貧しい者の生命は僅か五百円でさえ買われるのであろう！

父の生命の身代りとも言われる悲しく呪わしい、そのお金さえ姉妹にとっては、かなり大事なものとなった。父娘（おやこ）三人のための仮りのホームとは言いながらさまざまの思い出なつかしいその長屋の一角を立ち去って、五百円の銀行預金通帳と、僅かばかりの手廻りの道具を小さい荷にまとめて、姉妹は程近い小さな煙草屋の六畳一間の二階を借りて、そこに二人の侘しい小さい生活を新たに立てることになったのであった。

# 二　思い合う心

姉妹が父と共に住み慣れた小さい家を涙ながらに立ち去る時、いろいろの道具などは売り払ったものもあるけれども、形ばかりの垣の中（うち）一坪にも足らぬ庭ながら、そこにはいつの日にか、あるひと夏の夜の縁日に糊づけの浴衣の父娘（おやこ）三人がそぞろあるきのその中に、ふと立ち止まった植木屋のならびに、さまざまの草のならぶその中に青いつややかな小さい葉をじみにつけた小鉢一つ、いたずら半分に亡き父がつけた安い値で植木屋がぽんと手を打った――のっぴきならぬその場ゆえに――苦笑して買い取ることになったがさていったいなんの木かと尋ねれば、いせいのいい植木屋、『そりゃ沈丁花でさあ、冬にはうんといい匂いの花がぱっと咲くんですぜ』と言う。そのまま三人で代る代るに抱きかかえ持って帰ったが、幸い根もついていたのか、立派に育って花が咲く――その仄かにしとやかで、それでいて哀れにも心憎い、あの優しい甘ずいさ――なんだかひとりでに涙さしぐまれて、いつの間にか双の袂を胸のあたりへ組み合せたくなる――ほどのその匂いを愛でて幾年（いくとせ）、縁日もののしかも沈丁花の鉢植というのが、大事にされていた――それをただ一つ、なおざりにしかねて、姉妹同じ心に持ち運んだのが――その煙草屋の二階の形ばかりの窓ぎわの手摺の張り出しの板の上に置かれてあったので――咲くのを楽しみに、ふたりがまてばやがて寒に入って咲き出す、それが一月（ひとつき）すると、間もなく、妹のさち子の尋常科卒業の女学校入学試験の時期も近づく。

『姉さんは――なぜたまご召し上らないの？』

邪気（あどけ）なく、妹のさち子は朝のふたりの食膳に向かった時、こう問うた。

『――いいのよ――姉さんたまご嫌いなの――だからさあちゃんおあがんなさい。ね、さあちゃん大好きでしょう』

　君恵はこう言った――

『うそ、うそよ。お姉様たまご嫌いなんて――私、私、ちゃんと知っているわ――あの――たまご高いからそれでお姉様御自分でおよしになるのね――』

　さち子は、箸をとらずにこう言い返した。

　妹にこう言われて、うろたえて、うす赤くさえなった君恵は、でも寂しげに強いてほほえんで、

『まあ、そんな大人びたこと子供のくせに考えるもんじゃあないわ。いいから早くごはん食べて頂戴』

『いや。さち子御飯いただかない――だって――あの、毎日おつとめで働いていらっしゃるお姉様が、たまごも召し上らないのに、学校へ行っている私が――』

　そういう妹の言葉の半（なかば）を抑えて、

『さあちゃん――学校へって――その学校がたいへんよ、ねえ、もうじき女学校の入学試験でしょ、さあちゃん身体丈夫にしてよく勉強しておかなくっちゃいけないわ、ですもの――たまご毎日一つずつあがれ、よくって、わかって』

　と君恵は真心こめて言う。

『いやいや、私がどんな御馳走だって姉さんと同じに一緒にいただくんでなくっちゃあ……』さち子の声は哀れにもう泣き声となる。

『ごめんなさい、じゃあ、姉さんがかえって悪かったのね、じゃあ、半分ずつね』

君恵の箸が動いて、ようやくさち子は納得した――親のない姉妹二人が煙草屋の二階借の生活の一端の折々に見ゆる光景はこういうものだった。

――妹の女学生の姿――こう思うだけでも、君恵は昂奮するに充分だった。

毎日の朝夕、勤め先の行き帰りに、すれちがって仄見る女学校の一年あたりの可愛ゆいひと達の姿を標準に妹のさち子が、やがてあの群れの中に入るのだと、ひとり想像してさえ、そぞろに優しい微笑が浮かぶのだった。

いよいよ入学試験の時が来た。さち子のゆくべき学校を定めるのも、かなりの大問題だった――けれども前途に楽しみのあるそれは問題だった。姉妹がいろいろ幾日も幾日も相談して、なお受持ちの先生に御相談したり、父亡き後は万事の後見をして保証人になって貰っているお家まで相談に行ったり、なかなかの大騒ぎをして、その結果――場所や本人の将来の希望やその他のためになる一つの学校を選ぶことになった。

入学試験――ほんとにそれは、はたの見る眼も痛々しいものであった。いとけなき少女の日々この暗い重い関所を一度は通過せねばならぬとは――君恵は妹を持って初めて知った。『私がお金持なら入学無試験の女学校をいくつも立てるけど――』と。――けれどもお金持の反対の方だから仕方がなかった。

どうにかして無事に試験を通過するようにと、いずれも同じ親心。といって、親の無い身に真実一路これやこれ姉ひとりの真心――神もあわれとみそなわし給いけん――うれしやさくら咲く頃さち子は夢にも描いて望みし、その女学校の校門をいそいそと朝夕くぐる身となったのである。

まず、これで一つの安心が君恵に与えられた。これで五年間学資が出て無事に卒業さえできれば、音楽学校が志望なら、その方は保証人のK氏のお宅でどうにか補助して続けさせようと仰しゃるから、もうそこまで行き着けば大安心なのである。幸いにというとおかしいけれど――父の死によって与えられた、哀れに痛ましい思い出悲しい犠牲の――あの少しばかりの五百円ほどの貯金がある。それがさち子のこれからの学資金となるのだ。

さち子の学校では五月上旬、秩父の長瀞（ながとろ）に春季遠足があった。それまでに間に合うようにと、君恵がいそいで仕立て上げた紫矢飛白（むらさきやがすり）の銘仙（めいせん）――これだけは変化の早い流行を越えていつまでもいつまでも女学生のある型に当てはまって十年一日のごとく着る人がぽつぽつと絶えない。色の白いふっくらとした感じのさち子に似合うかと思って、かえって単純な、そして多少古典的でそのくせ少女らしいそのはでな柄を選んだのである。

遠足の朝早く姉妹は共に家を出た。心づくしの紫の矢がすりの元禄袖に海老茶の新しい袴短くこれも姉の趣味で細く編上げた深編上げのキッドの黒い光――頭から足の爪先まで、君恵の心は用いられて生きている妹の姿をしみじみと見やって、なにゆえぞ奇しき涙さえ眼がしらにあつく覚えられるさち子の姿だった。

せめては上野まで一緒に――と見送るのである。嬉しそうに晴れがましく一群の生ける花の集いのごとく匂うかとおぼゆる女学生の列――その中に交わり見ゆる妹の笑顔、それで君恵の生活の苦しみは報いられる気持がした。

さち子は姉に送られて上野を立った。ものごころついての初めてほどの遠い路を汽車でゆく気がした。熊谷で混雑した電車に、乗り切れぬほどの騒ぎに、はらはらして友の名を呼び合うのも

面白く、旅なればこそと思えた。

『まあ、こっちの窓の方はきれいよ、とても』と、右側の窓の人達が声をあげると、『あらそう、どれ拝見』などと、皆こっちの窓へよって来たりして先生に、『そう慌てないでも向こうに着けばゆっくり景色が見られますよ』と注意されて、上級の方達に笑われたり大賑わいで、宝登(ほうと)山(さん)駅に着く。何日でも歩くかの勢いで一年の人を先頭に行列美々しく線路を踏み切って繰り出すと、ちょびっと歩くともう、そこが長瀞――『あら、ここなの！』と一年の人異口同音に叫んでいる時、まだ停車場の口を出たばかりの殿(しんがり)の小使爺さんが、気付薬をしょいこんで歩き出したところ、一行列、駅から長瀞まで続いてここ暫く通行止――途中には××女学校御休憩所などと、市役所の選挙事務所の前のような立札がしてある歓迎ぶりに一同気を大きくしてはしゃぎまわる。

『あら、あぶない、いやよ笑うとすべるわ』

と岩の上を靴がともすれば滑る。

白い岩の出たり入ったり、水は青く澄んで流れ、仰げば五月の空のコバルトに、白い雲一筆二筆軽く油絵具のシルバーホワイトをなすったように軽く浮いて――その中にはっきりと緑にもゆる山のたたずまい――げにも杜(もり)の紅葉(もみじ)にいやまさる新緑郷の美よ！

『まあ、いい！　支那の赤壁(せきへき)ってとところにそっくりなんですってねえ！』

と感嘆久しくして、さて取り出されるカメラの群れ、今日こそ腕によりをかけて、あわよくば懸賞写真の第一等当選をと――

『あら、××さんのカメラずいぶん大きいのね、兄さんの借りてきたんでしょ』

の言葉に、たちまち何とか式飛行船のごとくふくれ給うて、
『うそだわ、これ私のよ』
『そう、じゃあ、お古でしょ』
に、まったく絶望。
流れのふちに漂う小舟の影――一年組のおてんさん、これがまたたちまち個有の鼻声を発して――『先生イふウねイ――』
『よしよし、後でお弁当いただいてからのるんですよ』との御諚に、わーッと時ならぬ歓呼の声をあげるとは新入の方達の茶目ぶりの可愛ゆさ――
ところで船にのって流れを少し行きつつもどりつつ、向こうの岸へ上るまでが大さわぎ、『ラインの流れって、こんなかしら、あわれ、奇しき魔が歌ローレライの君やいずこに？　と』すこぶるセンチメンタルの美音を張り上げ給いしは三年の某（それがし）の君、――ところでたちまち起こる舟中の歌――などかは知らねど――こころありて――あわれ、この時、この日、長瀞の天地、水も岩も山も梢も鳴りを静め息をひそめてあえかに美しくも、匂いやかな少女の船中の合唱隊にひき入れられて――東京ではその影響で大地震があったという――。
名残はつきねど日は西にかたむいて、さらば美しの新緑の山水よと、それからまた一同行列ととのえ駅路まで、駅の前の茶店で、絵葉書に柿羊羹（かきようかん）の大繁昌三十分たらずして、これまたたちまち売り切れ申し候の札が出たという――ところで今度は絵葉書に記念スタンプ、『私にも、私にも』『ついでに早く』と大さわぎ、黄色い声赤い声　胥さん、そんなに記念スタンプが押したければ、御自分のほっぺたへお押しなさい』と、教頭のおはげの先生が仰しゃったので、どっと大

笑い。そしたらどなたかが『台湾から来るジャボンの実じゃあるまいし』としっぺ返しで、また大拍手。

それから電車でわ――わ――のわ――。

熊谷駅で汽車を待つ間に見渡す、有名な熊谷堤葉桜、――はや初夏めく夕月がその黄昏（たそがれ）の空に仄かに煙るがごと――歓楽の後の悲哀とや――小さき旅の終りて帰る途上のある甘き哀愁を今すずろに覚えてか、五年四年の方達が声もなく静まり給うその中に、あいかわらず新入生のおちびさん連中、茶目子の共進会はこちらでございとばかりに、はねまわる姿、声――けれどもその中にただ一人、横山さち子さん――なにゆえぞ邪気（あどけ）なき瞳にそっと浮びし可憐の泪――いとしくも、今小さい彼女は、ゆくりなくも姉の面影を浮ばせたのであった。

汽車は夕暮――やや仄暗く落ちゆく頃上野へ幾百の少女を送り帰した。その駅頭の群衆の中にさち子は、妹待つ姉のなつかしい姿を見出したのである。姉は勤め先からの帰りである。出雲橋から家路と反対の電車にのって上野へ来て、妹のかえりを待っていたのである。

『お姉様！』

とばかりに、さち子は犇（ひし）と姉にとりすがった。そしてわっと泣きじゃくる。

『まあ、さあちゃん、どうしたの、ええ、今日どうかしたの？』

と早くも妹の泪に胸打たれて、さち子は覗きこみつつ背をなでて尋ぬれば、

『あの――、あの――、お姉様、もう、さち子はお姉様と一緒でなければどこにもゆかないの！』

という――お友達にでも、もしやいじめられたのかと、姉は気をもんで『さあちゃん、どうして？ ええ』と不安げに問うと、姉の袂をとらえたまま、『お姉様、だって、あんな景色のところ

をお姉様にも見せてあげたいと思うと――あの、あの、さち子悲しくって、……悲しくって……寂しくって……お姉様のことばかり思って……悲し……』終りは泪に――

『――さあちゃん――さあちゃん！　……さあ……ちゃん』

――言うべき言葉のあるべきかや――ただ、いとしき妹の名を呼びて犇とくだけよとばかり我が胸に抱きしめて、姉は泣いた、泣いた！

## 三　寂しき姉

君恵とさち子――姉妹ともに純な少女であった。けれども妹のさち子の方が姉の君恵よりは、複雑した心理を持ち、芸術的天分の豊かなだけに――またどこかに近代的な敏感さで――幼いながらも懐疑的な悩ましさを持つ子で、従ってその趣味が貴族的で幻想的であるのは、まぬかれなかった――

君恵は自分の不幸を――慰め得るために、そして力を得るために宗教の光を求めた。近くの教会へも毎日曜日には忠実に通う身となっていた。さち子も始めはそれに伴なった――しかし、月日がたって女学校の一年級が終って二年に良い成績で進級した頃は、もうさち子はかなりの早熟した魂の所有者になっていた。

『幸福なるかな、貧しき者よ、神の国は汝らの有（もの）なり』――（ルカ伝六章二十節）

こうした聖書の言葉に限りなき慰安を得る姉の心のごとく単純な信念に没頭できぬ妹のさち子は――荊（いばら）の中から落ちし種子あり、茨そだち塞（ふさ）ぎたれば、実を結ばず、良き地に落ちし種子あ

り、生え出で茂り実を結ぶこと、三十倍六十倍百倍せり』――このマルコ伝第四章の言葉を引いて、さち子は暗い現実にたとえて淋しい反語を解した。

『私達は茨に落された哀れな種子よ』

　小さい彼女はこう言って自分の境遇を嘆くことを忘れなかった。

　いつか教会には君恵の姿のみ見えるようになった――強いても仕方がない、妹の心をどうすることもできない――妹は私より才多く生れた子だからと――君恵はさち子の心に触らないようにした。それほど君恵は妹に対して、つつましやかないじらしい謙遜な優しい心ばえを持って接していたのだった。

　一方さち子の楽才は日に日に長けていった。音楽の先生――春藤先生もその未来を早くも望まれるようになった。

　ある祭日に姉妹は打ち連れて春藤先生のお宅を訪れた。君恵は、妹をゆくゆく音楽学校に入れたいこと、楽壇に立たせたいこと、そのため自分自身は甘んじて犠牲となる幸福、いな光栄をすら喜んで感じていることを申し述べた――春藤先生はその貧しく若き一処女の雄々しく健気な妹思いの一念に打たれて感激し、涙さえ浮かべて聞き入った。

『まあ、あなたは――なんという優しい親切なお姉さんでしょう――お父様にも代り、お母様にも代ってそんなにまで、さち子さんをお思いになる貴いお心のために私もできるだけお手伝い致しましょう。来年、三年におなりになったら、そろそろ準備のために一ツ橋の分教場へいらっしゃい。また私もそのことではできるだけお世話いたしますから、さち子さんは御勉強さえなさればきっとものになりますわ、天分は豊かに恵まれていらっしゃるから……』

と若い姉の誠心（まごころ）の熱さに春藤先生は励ましと尊敬の言葉を贈って充分な好意を見せて下さった。君恵の喜びはたとえようもなかった。その後のことである。

『―私―ピアノは諦めているけれど―せめて小さいオルガンが一つ欲しいわ―』

さち子はこう言い出した。―黄昏（たそがれ）頃の二人暮しの小さい二階の小窓に腰かけて、五線紙の音譜をたどって拍子をとっているときなど―一つの楽器が欲しそうだった、―ゆくゆくは声楽―を、あっぱれ姿うるわしく華やかな声楽家（ボーカリスト）の路を望むその子にとっては発声練習にしても音階練習にしても―基調の音を示す楽器を一つ与えて欲しいのは無理ならぬことと、君恵は妹の願いをいかにもして叶えてやりたかった―銀座の楽器店からカタログを取って見ると、最小のベビーオルガンが四十五円である。

『このベビー型はおもちゃだわ。鍵盤（キイ）が足りなくて、複音はひけないのよ、仕方がないわ―』

高飛車にさち子は、それをけなした。それでは、その上をと望むと、八十円としるされてある。

『これは、どう―型も少し大きくてオルガンらしいのね』

君恵が問うと、

『そうね、これだって鍵栓（ストップ）が一つもなくって―不自由ね―ほんとのものじゃないけれど、まあどうにか間に合うわ』

と、不平だが我慢するという風―さち子はこうしてものの標準を高くとって貴族的なところがあった。これが短気な姉さんだったら、『そんな生意気いうんなら、もう買ってやらないッ!

ピイ——』で談判破裂——という処だが、なにしろ君恵のことゆえ、妹の御機嫌に、かえっておどおどするくらいで——

『そう。——ほんとにねぇ——でも、さあちゃん、これで当分我慢して頂戴な。ね。そのうち、あの、姉さんもどうにかして、もう少しいいのを買ってあげるから、今はこれでかんにんしておいてね。ね、さあちゃん、いくらそれだって、あの無いよりはいいでしょう——』

姉にこう、あくまでも優しく言われると、さち子もうなずいた。

『ええ、——それでもうちにあれば嬉しい——』

『じゃあ、買いましょうね』

『あら——だってお姉さん——』

と後は無言——言葉に出ずとも——それは代価はどうするの、私達そんな余裕がないのに——というのである。

『いいのよ——さあちゃんは学生だから、そんなおかねのことなんか考えなくていいのよ姉さんがいいようにするからね』

　と君恵はさち子の心配をこともなげに打ち消したものの——オルガンの購買力はちょっとむずかしい問題であった。もちろん亡父の生命に贖（あが）なわれたあの貯金はある。けれどもそれはさち子の大事な大事な学資のために是非ともそのまま保存せねばならぬものだった——とつおいつ思案している時——階下の煙草店のお婆さんが、君恵がオルガンを求める苦心を、ふと耳にして、それとなく注意してくれた。

『君恵さん、いいことがござんすよ、月賦でお買いなさい。少し高くついてもいいから毎月いくらかずつ収めるようになさってね』

と教えてくれた——君恵はこれを聞いて、さっそく楽器屋へ飛んで行ったが、にべもなく断られた。月賦販売は百五十円以上の品に限られてあること、市内に確実なる保証人を有すること——君恵はまた失望した。そのさまをみて、煙草屋のお婆さんが親切にもある知合いの古道具屋を訪ねて行ってくれて、いそいそと帰って来た。

『まあああなた喜んで下さいよ、よく言ったものですよ。渡る世間に鬼はないってね、今日ちょっともしやと思って尋ねて行った古道具屋さんに一台中古のそれは大きな立派なのがあるんですよ。なんでももとは築地辺の異人さんのお宅にあったものだそうですよ。それがね、ちゃんと店にあるんです。古いんだからやすいんですが、なかなかお品がよいから、なんでも舶来なんですってね。それで売るのにはどんなにおまけしても百三十円ほど戴きたいと言うんですがね。あなたそれじゃ困るといろいろお話したら、あなたが妹思いでなかなか感心な娘さんだって、すっかり古道具屋の御主人が感服してね。そんな御事情なら当分のうちならお貸ししてもいいって申すんですよ。そりゃあ、あちらも商売のことですから、ただってわけにはゆかず、まあ、その月四円ほど損料のようなものを戴けばお貸しするって申すんですが、どうでしょう、君恵さん、さし当たってそれを一時借りておいて、そのうちに新しいのをお買いになるように心がけておけばいいんでしょう、ね』

お婆さんはなかなか親切に考えてくれていた——君恵は涙が出るほど嬉しかった。それではと言うので、その古道具屋とお婆さんの好意から、一台のオルガンを二階の部屋に借りて置くこと

になった。
　そのオルガンは古色はついているが、独逸（ドイツ）製のしっかりしたもので、日本で求めれば高値なものに相違なかった。貸二階などに貧しく住んでいるのでなければ、春藤先生をお呼びして鍵盤（キイ）の音調をしらべて戴けばいいけれども——と思ったが、——さち子のすぐれた耳でしらべたところでは、どこといって狂いがなく立派なものだった。
　さち子は喜んだ。そして春藤先生に二学期から楽器練習の中（うち）に入れて戴くことになった——妹の喜びを見て君恵はむしょうに嬉しかった——けれども月四円の損料の負担は姉のか弱い身には重かった。どんなに節約しても二人の生活と妹の学費だけで、どんなに苦しいか知れぬ中にまた四円は重荷だった——それで君恵はとうとう決心した。
『私電車をよそう。朝早くそのつもりで家を出ればいいから——辛くとも妹のためなら我慢しなければならない』こう決心した——そしてその日から君恵は歩いて逓信省内まで通った。けれども、そのことは妹のさち子には秘密だった。その神経の過敏な妹に、そんなことをちょっとでも知らせようものなら、すぐにオルガンはもういらない返してくれ、と泣き叫ぶだろう——それでは姉のせっかくの心づくしが水の泡になるゆえ、絶体に秘密にしなければならなかった。そこにも君恵の人知れぬ苦心があった。
『どうしたの？　お姉さんこの頃たいへん早く朝お出掛けになるのね。一時間もいつも早いわ、どうして？』
　とある朝、さち子は出掛ける姉にいぶかし気に問うた。
『ええ……あの、この頃お勤めがいそがしいのよ、だから少し早目に出る規則になったの』

と君恵は慌てて答えた。
『そう、たいへんね』
さち子はいかにも姉に気の毒そうだった。
『お姉さんたらッ、まあ、どうしてこの頃毎日こんなに遅くお帰りになるの?』
ある日の夕方、いつもよりこの頃帰りの遅くなった姉をいぶかしんでさち子は尋ねるのだった。
『あの――電車が混んで、乗るのがたいへんなのよ――さあちゃん一人で夕方さびしいでしょ。がまんしてね、姉さんもいそいで歩く……』と言いかけて、慌てて言葉をそらして)あの――乗るんだけれど、どの電車も満員でなかなかたいへんなのよ』
『まあ、そう、姉さん、だからこの頃なんだか疲れた御様子でお帰りになるのね』
さち子は姉をいたわるようにませた沈んだ口調で言った――君恵の疲れたようすだけは、いかにしても、かくせぬ事だった。思っても見よ、朝夕を烈しい勤務を終ってから再び歩く都の路――近いと言っても自分の住む二階に落ちつくまでは約一時間歩むのである。弱い足に……
それでも君恵は心からその労苦に満足した。妹がオルガンに対する姿を見る喜びに代うるにお余りあったから……
ところが、その年の二学期の終りころ、秋の深い頃合いから――さち子の様子が変った――あれほど毎日熱心に奏たオルガンの蓋さえ取らぬ日が続いた。それほどさち子は憂鬱になったのである。

あれほど才はじけた、はきはきした気性の明るい感じのする少女だったさち子が、時々ぼんやりと何か考えこむような姿をした。そして時おり、ほっといかにもやるせなげな溜息をしたりした。

食事をしている時なども、どんなに君恵が心づくしのおかずをならべても、もう前のように喜びは少しもしなかった。箸をとる手さえ、ともすればたゆたいがちだった。

『さあちゃん、この頃なにかふさいでいるのね、何かいやなことがあるの、学校でお友達にどうかされたの？　ええ。姉さんは心配でならないの、どんなことでも打ち明けて話して頂戴な。ね、姉さんはさあちゃんの望みなら、どんな苦しい思いをしても通してあげるから、もうふさぐのよして話して頂戴、ね、ね』

と、世辞をとるようにして、なだめたり、すかしたりしたが、さち子は黙っていた。

『姉さん、私なんでもないの、気にかけないでね』

と言うのみだった。けれども細やかな愛情をもって妹の日常に対している姉の心には、いちいちさち子の憂鬱の姿は痛しく映じることを覆うことはとてもできなかった。

いつもは窓辺で元気よく晴やかな声で歌ったさち子は同じ小窓に力なくすがって、空ゆく晩秋の雲など見やって、いじらしい様子をするのだった。そんな時、君恵が帰って来て、二階段から『さあちゃん、ただいま』と声をかけると、かなり慌てて、どきっとしたらしく、『お帰りなさい』と言う声もふるえていた。そして振り向いた仄白い顔――その可愛ゆい瞳には泪がしっとりと浮んでいるのだった――それを見ると君恵の胸が痛んだ。身も世もあらぬ気持で妹のその不思議な憂鬱の原因を思いあぐねた。いろいろ考えたが結局――やはり不幸な寂しい境遇をはかなん

でのことと思うより術が無かったので……。君恵はあらん限りの力でその妹の心をまぎらそうとした。自分のものはどんなに倹約しても妹には豊かに与えた。

音楽会にも封切の活動写真にも、妹を押し出すようにすすめた。けれどもさち子は姉のすすめを拒(ことわ)った。

『私、どこへもゆきたくない、学校だって行きたくない――』

とつぶやくのだった――どんな姉の慰めの言葉も行ないも、もうしょせん役立たなかった。この上は春藤先生におすがりして妹に訓して貰うよりほかは――とも幾度となく思ったけれども、そのことがかえって妹の神経にさわって反抗心を起こさせでもしたら大変だと先のことを案じてたゆたうのだった。

こうした烈しい姉の心配よそに、さち子の憂鬱はやはりいつまでも治らなかった。

二学期の成績は入学以来一番悪かった――君恵は気が気でなかった。大事な音楽の練習まで怠けている様子を見ると居ても立ってもいられなかった。

『さあちゃん、来年の春には三年生になるんでしょ。そしたら分教場へゆくんですもの、しっかり今の二倍勉強しなくちゃあ、ね』

と、それとなく言うと、さち子はそんなことはどうでもいいという風の、気のない返事で――

『そう、ねえ』などと、まるで自分の知ったことではないようである。

君恵の心は妹への心配と痛苦で痛み萎えてしまった。――そのうちに、年も明けて姉妹きりのさびしい迎年にも慣れはしたものの、さち子の憂鬱の悲しさに君恵はさらにも淋しく年を迎えた――そして早くも二月に近く――いつかその窓辺に置く沈丁花の花咲く頃となったのである……。

# 四　かたみの文

春はややに近く――それでいてゆだんのなりがたいうす冷たい寒さは二月から三月までまだ地の上を凍らせている――霙（みぞれ）まじりの冷たい風がおしかぶさるような鉛色の空から、こやみなくしとしとうら悲しく降りそそぐのもその頃である――のに、君恵は朝早い勤めを疲れて帰る黄昏（たそがれ）、いつも電車を用いずに続け通しであった。

その日も、うす霙がじめじめと夕方かけて降っていた。その中を君恵は傘だけは幸いに用意して出たので、それをさしかざして人通り忙（せわ）しい電車路から身をよけて裏通りの路を辿った。気候の悪さに歩む身も辛く、それに加えて、この頃の妹のようすが心にかかって君恵の胸はさらに重く足取りもはかどらぬ。ともすれば歩みながら、思わずほっと吐息さえもらすので……。

君恵が家路近く帰りかけた時は霙に風が加えられて横しぶきになってきた。もう君恵の粗末な傘はなんの役にも立たない――雪まじりの重い雨が、濡らしたいままに君恵の身丈（みたけ）を濡らしてしまった。それでも君恵はその濡れる自分をさえ忘れて、ただひたすらに帰りをいそいだ。一人でいる妹のさち子を気づかって……。

『姉さん、まあ、袂なんてぐっしょりよ』

さち子は姉を部屋に迎えて吃驚（びっくり）して声をあげた。

『そう、少し濡れたようね』

と君恵は別に気にもとめなかった。

けれども――その夜、君恵は俄かにひどく発熱した。

『姉さん、階下（した）の小母さんに頼んでお医者さん呼んで貰いましょう』

さち子が朝になると言った。

『いいえ、それほどたいした事ないの。それより、さあちゃん早くお仕度して学校へ行ってね。姉さんは今日は一日やすんで早く治すようにするから』

自分のことを考えず、病床から君恵はなおも妹のことであせるのである。

『でも、私、学校なんて少し休んだってなんでもないのよ』

『だって、今日は音楽のある日よ、水曜日でしょう、ね、なるべく欠席しないでね、もうじき三学期の試験ですもの』

　こう言って、君恵は無理やりさち子を学校へやった。さち子は出がけに階下の小母さんに姉のことを頼んで出たので、小母さんが見舞いに上がってきた。そして病人の額に手を当てて見て仰山な声をあげた。

『おやおや、これはたいへんなお熱ですよ。感冒（かぜ）は万病の因（もと）って申しますから、お大事になさいよ、私ンとこにかぜ薬がありますから、飲んでみて下さい』

と親切に黄色い袋に入った売薬を持ってきて君恵にすすめた。しかし、その日君恵の熱はさがらなかった。午後さち子が帰ってきて気づかって医者を呼んだ。夜になって近くの医師は来て君恵を診たが、『肺炎になるといけませんから、よく注意して下さい』と言い置いて帰った。

　一夜雨に濡れて夜道を辿ったのも発病の直接の原因であるが、また遠いみなもとをさぐれば、父を失なってから妹を見守りつつ生活上の労苦の重なって、若いその身を疲らせ切ったのも原因

であるに相違ない。それでも君恵はかなりの病苦を強いかくして、元気によそおうた。そしてさち子に心配をさせまいと心をくばりつつ自分はひそかに妹のことのみ案じていた。妹のさち子がいつの頃からか胸に何か影でもさしたように力無く沈む寂しい姿や日常の様子こそ姉の君恵の一番の気がかりであったゆえ。なぜこのただ一人の親身の姉にも打ち明けられぬ悲しみか悩みを妹は得たのだろう。思っても思っても考えても考えても、しょせん解きがたき、それは一つの謎だった。

　君恵が病んで寝てから、それは三日目のことだった。看病のため学校を休むと言い張るさち子をまたその日も無理に学校にやったその留守の間の寂しい時――熱に苦しみつつも君恵はその解きがたき謎を思いわずらっていた――そして、一つの事を決心した。それは妹の小さい心の秘密を知るためには、ただ一つの手段として悪い事とは知りつつもさち子の日記をひそかに読むことである。それよりほかに方法はないと考えられた。日記帳は去年の暮、君恵が小型の一冊を買って与えたのである。さち子は忠実に短いながら毎日つけているのだった。

　君恵は病む床から起き上がって、さち子の机のほとりにその日記帳を見出した。姉妹の生活は鍵のいらぬ生活であったから……

　君恵はさすがにその日記帳を開こうとして、罪悪の感じに打たれた。――神よ、許し給え、妹を思うばかりに今私の犯す罪を――君恵は苦しくこう祈った。そして頁をひるがえした。

　一月一日の始めから君恵は叮嚀に読んで行った。七日まですべて簡単に日常のことがしるされてあった。続いて八日の部に不思議な文字を君恵は見出だした。

一月八日。

始業式

今年になって初めて憧れの君の姿を講堂の入口の扉の脇に見る――苦しい思いを秘めてもう一年近くなる…… この人生にとってもっともみじめな哀れな生存者に過ぎぬ自分がなぜあのように富める幸福な階級の美しい人を思うのだろう？ 運命の皮肉よ！ そしてその皮肉が私の未来へのびようとする意志さえも弱らせてゆく！

儚ないものよなぜに人に憧れ悩むぞ！ みずから恥じよ、みずから鞭打てよ！ そういう自責の鞭の下からまたも燃ゆるごとくに覚ゆるこの恋しさの悩ましさ！ ああ哀れなさち子――

君恵は、思いもかけぬ驚異の世界をそこにはからずも見出した。その驚きの強さに胸を打たれて顫えた。――知らなかった、知らなかった、夢にも知らなかった、――君恵はしばらく心に独り悲しく呟やいた――ああ思えば幼い幼いと思ってのみいた妹もいつか人の世の少女の春を迎えて人思う頃となったのである――平凡な自分の性情と違って天才の血を持つ妹ゆえかかる熱情も人並はずれて豊かなのだった――君恵は茫然としてその日記帳を犇と胸に抱いて、あつい泪を覚えるのみだった。――もはやその次の頁を読みゆく勇気も無いのを強いて読み続けて行った。妹が抑えようとして抑え切れぬ情熱のほとばしりがどこの頁にも時おり烈しく記されてあった。さち子の慕う憧れの君の名は永坂栄子と呼ばれる上級の人で、麹町あたりに住むひとと、日記によってそれだけを君恵は正確に知ることができた。思えば寂しかった！ 永坂栄子――このあかの他

人の美しい人を慕うさち子の心には、赤心を捧げて尽す姉の力なぞは一顧にも値しないものであると知って！

　さち子が学校から帰って来ると、姉はいつもよりしょんぼり影のうすい姿で寂しげに寝ていた。

『あら、姉さん、お昼の分のお薬まだ召しあがらないのねえ、もう三時でしょ。そんなに不規則にしちゃあ、せっかくのお薬利かないわ』

　といつにない姉の投げやりの仕打を不審がってとがめた。しかし、君恵にとっては、とてもお薬を飲むどころのさわぎじゃあなかったのである。ああ言って薬をすすめるさち子の愛らしい顔を君恵はじいっと寂しい寂しい表情でみつめて、ものも言わず涙さしぐんで掻巻に面（おもて）をあわれにも隠すのだった。

　君恵の病体は日に増して険悪にかたむいていった——そしてとうとう医師が肺炎に変ってきたから万一のことがあるかも知れぬとまで悲しい不吉な注意をするようになった。さち子はもう姉がなんと言ってもかまわず、学校はすっかり欠席して枕もとにつききりで看病した。

『姉さん。ちょっと走って病院までお薬戴きに行って来ますから、ね、ね』

　と姉の枕辺でこう囁いたさち子は薬瓶を半巾（ハンカチ）に包んで、いそいで病院まで行った——その後で君恵は力なく床の上に起きて、よろめく足をふみしめて立った——蒼ざめやつれはてた彼女の顔には『この世では最後の、妹のためにまごころを果さねばならぬ』と強い決心の色が悲しく現れていた。彼女はよろよろしながら自分の机の前に行って、顫える手に白いレターペーパーをのべて、細った指先にペンをとった。彼女のペンはこういう文字をたどたどとしるして行った。

――突然未見の方にお手紙を差し上げる失礼をお許し下さいませ。妹を思うの余り私はこのぶしつけなことを致すのです。妹のさち子があなたをとうからお慕いしているというのを私はその日記から知りました。妹があなたをお慕いする心はありふれた軽薄なものでは、けっしてありません。彼女はそのためどのように深く悩み強く苦しんでいるでしょう。そしていつまでも自分ひとりの胸に秘めて黙っているのです。可哀想な妹がいじらしくてなりません。栄子様、どうぞ妹の熱い心を掬(く)みとって下さいませ。私は伏してお願いいたします。栄子様、私はもはやこの地の土にいくばくの日も生くるか覚つかぬ病の身でございます。ただ妹のために最後の姉の心づくしをこの一本の手紙にこめたことを知って下さいませ。――ここまで書くと、もう君恵は息が苦しくせつなくなって、ペンを持つ手がしびれて、後ろに倒れようとした。彼女は、もうその後を書き続けるのを断念して、いそいで日附をしるして封筒に入れた。そして苦しい吐息をつきつつ非常な努力で宛名の人と、差し出す自分の名をしるして、ほっとあつい息と共にペンを置いた。寂しげに、悲しげに、その手紙を見つめていたがよろめいてまた立ち上った。髪は乱れて姿はかぼそい――その病む身を片隅のオルガンの傍近く運んでオルガンの蓋の上に置いてある、少しばかりの譜本の中から、讃美歌の本を抜き出して、ぱらぱらと頁をくってその中にさっきの封筒をはさんで、元のごとくに本を置いて君恵は寝床に帰るやいなや、はたと倒れた。そして枕に犇とよりすがって、初めて声をあげて泣き咽(むせ)んだ。

　なすべき事を果したという安心のためか――君恵の容態はさらに悪くなった――いまはもう薬も咽喉(のど)を通らぬただ熱のため渇(かつ)を覚えてか冷たいものを乞うた。その頃のアイスクリームなどは貧しい姉妹の生活には及びもつかなかった。せめてもとさち子が冷し氷を小刀で割ってニッケルの

粗末な小匙であせた唇へ運んでやるのだった。すやすやと眠るようにもう半分意識を失いかけたのか君恵はじいっとしていた。さち子は泪ぐみながら悲しい心で氷の砕片を姉の唇へ運んでいた。『さあちゃん……さあ……ちゃん……』ふと意識がついたのか君恵は眼を開けて枕辺の妹のいとしい名を二度呼んだ。『姉さん、なに、私よ』と、さち子は泪声になって姉の手をさぐって握りしめた。すると君恵は嬉しそうに、また寂しげに微かに笑みを悲しく含んで、

『さあちゃん……姉さんのことを忘れずにね──姉さんがこの世で一番愛していたのは、さあちゃんただひとりだったの──姉さんがどんなにさあちゃんを愛していたか──知っていて？──？……さあちゃんのために姉さんは自分のすべてを捧げて愛していたの、そして、それが姉さんの生きてゆくただ一つの喜びの路だったの──さあちゃん──姉さんのいない後は外の方達に可愛がられて育つように、姉さんは天で祈っていますよ──あの音楽の先生にもよくお願いして、それから保証人のKさんのお宅にもお願いして、そして学校は続けてやって、そして、そして、あの──音楽家になってみせて頂戴──さあちゃん──よく御相談してね……あのお父様のために戴けた貯金は姉さんの手箱の中にしまってありますから、あれがさあちゃんの財産です──さあちゃん──いつまでも可哀想だった寂しかった姉さんを思い出して頂戴ね、そして思い出した時は姉さんが一番好きだった讃美歌の七番を歌って下さいね、姉さんは天でそれを聞いていますよ──さあちゃん、姉さんは可愛いさあちゃんの傍を離れたくない、離れたくない、いつまでも一緒にいたい、魂だけでも──』

　苦しい息づかいの中から泪と共に最後の別れの言葉を告げた。

『お姉さん、そんな事仰しゃらないで早く治って下さい、お姉さん、お姉さん！』

さち子は姉の手を握りつつ狂気のようになって泣いた、――告ぐべき言葉も終ってか、君恵は双の瞳をかたく閉じて、もはや再び開こうとはしなかった、階下の小母さんが医者を連れて上がって来た時は、もう君恵は、いとしきいとしき妹の双の手を我が胸の心臓のあたりに、犇と握ってあてたまま、悲しい平和な優しきしかし寂しげな微笑の跡を仄かにやつれし面に浮かばせて、幸うすかりし清らかな処女の魂は天へと昇っていたのだった。

＊　＊　＊

今はただ一人の姉とも別れてまったく天涯の孤児となり果てた、さち子のために音楽の先生が非常な同情をよせられて、自分の家に引き取って将来できるだけ保護したいと望まれた。先生はさち子自身に同情したよりはむしろあの犠牲の生涯を送って行った姉の君恵の赤心に打たれたのであった。

階下の小母さんが亡き人の魂は四十九日の間その住んでいた家の軒を去らぬと教えるままに、さち子はその日数だけかつて姉と共に住んでいたその小部屋を立ち去りかねて、暮した。月日の流れ早くて、もうその日数もたった。いよいよ明日は小さい荷物と共に先生のお宅へ引き移る日となった。ああ、思えば悲しい悲しい姉との永遠の別れを告げたその小さい部屋、さち子は今さらに見廻して泪を誘うのであった。荷物の整理をしてまとめた時小窓のほとりに打ち忘れてあった沈丁花の鉢植がかれもやらずにあるままに、葉裏のしおれたながらに、でも健気に花はそのまま、あのしめやかに柔らかい匂いを浮かばせていた――『ああ、この花は姉さんのような感じだ、花の姿そのものはじみで目立たぬけれどもその匂いはしいんと人の胸にしみ入るように優しくどこか凛々しいまでに高い香り――お姉さまの心の香りそのもののように――』とさち子は考え

た。そして水をやりつつその花の香に泪をもよおした、――同じ部屋の片隅にある栗色のオルガンはもう今日かぎり古道具屋に返すものであった。しばしを弾き馴れた楽器への別れのために、久しぶりでさち子は蓋をはらった。悲しいこの頃何を奏でよう――ああ、そうだ、亡き姉が我れを思い出さば必ず歌えと、かたみの言葉に残された讃美歌の――第七番――さち子は讃美歌の譜本を取り出して、第七の個所を開いて、鍵盤（キイ）に向かおうとした時、譜本の中よりひらりと白い封筒がこぼれ落ちた。何かと――さち子はそれを拾いとってかざすと、まさしく亡き姉の筆蹟！――おお、表にしるされし名は、永坂栄子様の五文字ならずや！

おお！　いかなればこの君の名を姉君の知り給える！

さち子の胸は早鐘を打ったごとくに鳴った。おののく掌に裏返すそこには、横山さち子姉君恵としるされてある。日附は姉が病みつきてより幾日目なるを！

――さち子は黄昏（たそがれ）る、早春の光うすれゆく小窓のほとりにはたと倒れ伏した――そこには仄かに香るつつましき沈丁花の花のひともと――静かに寂しくうち匂うていた。

# ヒヤシンス

未だ×× 都下女学校の校名）におりました頃から御作を喜んで読んでおりました、その頃はまだ私も暗い人生の嵐も波も風も知らぬ幼い身でございました。欧州戦争の頃神戸におりました叔父と父が事業を共同してやり始めましてから父はおおかた留守の日が多かったのです。私の家は四谷の奥まった静かな所、大きな銀杏（いちょう）の木のあるお寺のすぐ隣りでしたの。私のへやのある裏二階の縁の籐椅子にもたれて夏の若葉や秋の黄ばんだ落葉をよくみつめていました。あの黄金色の小さな扇のような葉が秋風にさっと梢からこぼれ落ちる時階下の応接室から洩れるヴィクターの何かの曲に心惹かれてただわけもわからぬ物の哀れを覚えて泪さしぐみたいような気持になったのも思えばもう幾年かのかえらぬ昔の生活の断片でございます。

私は長女、妹が二人ございましたが、中の妹は、私が七つの時葉山で送った一夏の中にあの恐ろしい疫痢という病気で早くも世を逝（さ）ってしまいました。ほんとうに可愛想だと思いましたけれども、それさえも思えば、なんにも知らずに天に召された子の幸と思わずにはいられません。そう考える事さえ私の現在の生活がどんなに不幸であるかを裏書きしてくれましょう。

くどくどしく返らぬ日の事ども申し上げたのでは際限がございませんし、またどんなに煩わしく思いになる事でしょう。略して申し上げるより仕方がございませんが。――姉妹二人きり、お母様と三田の学校に通っていらっしゃった小さい叔父様と、同じ三田の夜学校に通わせている書生

と、あとは女中もお針の人もまぜて二、三人、それでも広すぎる家でした。父も母も私が小学校時代からなによりも音楽を好むのを見て、女学校を出たら上野へ行かせて下さるお気持らしかったのです。女学校入学と一緒にピアノが私のために応接室に据えられました。その頃から叔父様に連れられてあちこちの華やかなコンサートなどに行くたびに花輪に埋まった美しい音楽家の姿を壇上に見遣りつつ、小叔父様が『甲ちゃんも未来はああなるんだね』と戯談(じょうだん)にいわれても胸がわくわくするほど、音楽へ――音楽へ、身も魂もささげて行きたいつもり、また行けるつもり、自分さえ思えばなんでも世の物事は叶う積りでいた私ですもの。けれどもそうした夢はこわれやすくもろい、ちょうど、ふわっと浮いては消えるしゃぼん玉、そんなものに過ぎないのでした。神戸の叔父が、戦争後あやまった営業方針のために、実業界の不景気の黒潮に流されて遂に破産の暗礁にのりあげました。仕事を共にした父も同じように、再び事業を起こす事は不可能になりました。

　そればかりか四谷の家も人手に渡さねばなりません。一時神戸に立ちのいた後再び上京した時、私と母と妹の三人だけ、小さい叔父様は学校を止したまま、台湾の会社の方へ、父と叔父とは上海(シャンハイ)へ、いずれも住み慣れた土地をあとに淋しい落人の形で私どもを遠く離れ去りました。私達は目黒のほとりに水道も瓦斯(ガス)もない、安普請の玄関の二畳を合せて三間という昔にかわる小さな家を借り受けました。母が悲しみを抑えて昔の楽しみを職にかえ盆石のお稽古に宗家の許しを得ての出稽古、知り合いの伝手を求めて二、三軒でございましたが、それさえも物慣れぬ母には、さまざまの事から、かなりの苦しみのようでした。

妹はそれでも土地の小学校へどうやら転校させはしましたが、私は退学。三年の二月に神戸に行って帰って四月はじめ――クラスの友達は欣然として進級の喜びに華やげる時でした。私は退学すると同時に邦文のタイピスト養成所に入りました。六ケ月の間朝から晩まで耳につくかのカチカチカチカチと小忙しい器械の音もさまで気にしなくなるほどになりました。慣れるという事はなんという悲しい事でしょう。そして私は、丸の内の××洋行部へ採用される事になりました。思えばかなし、ピアノの鍵（キイ）を打つさだめと、きのうまで、己れも信じ父母も信じ給いしものを、我が指先に象牙のキイのそれならで冷たく触るる鉄釦（ボタン）、なげくさえ泣くさえ、今は暗いオフィスの古い卓子（テーブル）の陰にはかなく身をすくめ、唄えぬ小鳥のそのように一日黙して、カチカチカチカチと無味乾燥な商用文を半ばみずからも器械のように、打ちつづけているばかり、五時となってオフィスのしまるのみ待遠しさ、混雑し合う電車にまた一苦労してようよう帰りついた我が家の門（かど）、形ばかりの竹の垣根に末枯れて地に伏したコスモス、風情もないながらこれのみ赤い烏瓜二つ三つばかり、主の心を慰め顔に下がっているのも目にしみて、早くも泪が湧くほどに佗しく淋しい家の黄昏（たそがれ）、母はいまだ稽古先から帰らぬと見え、尋常四年の妹一人慣れぬ手付きで七輪の下を扇ぐのは火種でもなくしてしまったのでしょう。『おおあぶない、火事でも出しては――』と声をかける私の姿を見るなり何も言わずにしがみついて泣きじゃくります。寂しかった』ときけば、やっぱり黙ってうなずくだけでございます。

一日オフィスで身も心も疲れ果たからだで夕餉（ゆうげ）を調えねばなりません。でも妹が可愛らしく少し離れた所まで小笊（こざる）を風呂敷に包んでおつかいに行ってくれますの。母と三人で淋しい夕餉を終えてから、妹を連れて銭湯まで行ってかえるともう何をする気力も失せて、ただただ眠いばか

り。恥しいほど、そしてまた翌朝省線の停車場へ、人ごみにもまれながら希望のない一日を送るために鉛の玉を結びつけたような身と心を引き摺って行くのです。こうした生活の連続それはどんなにみじめなものでしょう。けれども――神様は人間をどんな境遇にお置きになってもきっとその周囲の何物かに心の対象をお与え下さるのではないでしょうか。少なくともその時私はかく信じて眼に見えざるお力に感謝した程でございました。心の対象――それは同じオフィスに机を並べていらっしゃる英文タイピストの方でした。私どものオフィスには英文の方だけが三人そのうち一人の方は多く支配人の方の秘書役めいた御用をなさるので、あまりお部屋の中にはいらっしゃいません。それから私と同じような方がも一人、合わせて五人が一つの部屋に陣どってカチカチたたいているのです。

　もちろんお仕事は忙しい時には山程ありますが、閑散な時にはほんとうに手持無沙汰なほど暇でございます。そんな時にはとりとめない雑談が賑わいます。ほかの男の社員の方達が、どやどや入って来て、あっちの卓（テーブル）やこっちの卓（テーブル）によりかかって、マドロスパイプやら金口の舶来タバコやら煙をプカプカ吐いて大声で笑いさざめきながら女性の前では失礼な戯談を平気でしゃべり散らして行かれます。皆さんはその人達を相手にやはり調子を合わせて何かと面白そうにお話しなさいます。私は初めの内はほんとうにびっくりいたしました。けれどもその中にただ一人、そうした戯談の交されているのをよそに、タイプライターの脇に脇目もふらずに厚い洋書を読み耽っていらっしゃる方――美しいというなら語弊があるかも知れませんが、私にはどこまでも凛々しい方と思われました。その方が饒舌（おしゃべり）の仲間に加わらぬとて、独りよがりだとか、傲慢だとか、女らしくないとか、新しがっているとかあてつけらしく男の方達が仰しゃるのです。けれどもそ

の方の美しい唇は決してこれらに向かって一度だって開かれたことはございません。また一体にお部屋の中でも無口な方でした。それですのに私が最初にそこへ入った時優しく言葉をかけて下すったのはその方だったのです。私はなんとなく初めから慕わしくお姉様のような気がしてお胸に縋って甘えてみたく泣いてもみたいような気が致しました。時おりお話するうちの事などにもほんとうに心を動かして下すってお力の籠った慰めや励ましのお言葉をいつも懸けて下さいました。いまだお眼にも懸らぬに母などは『そんな好い方がいらっしゃるのならお前の務めにも安心ができる』とさえよろこんでくれました。夕餉の時などその方のお噂を些細な事まで母や妹に伝えるのが私にとってはたのしい心やりでした。『せっかく学校でやりかけた事だから努力一つでものにする事ができるのだ』と仰しゃってリーダーを暇な時には教えて下さいました。望みさえ持てばいつかは実現できる日が与えられる、いかなる日においても希望を持つものには救いがある。形において希望がたとえ達せられずとも、希望を持って生きるそれ自身に人間の幸福があるのだと仰しゃって音楽についても私の希望を捨てるなとよく仰しゃって下さいました。このお優しいお姉様は山田麻子と仰しゃるのです。御郷里は四国の土佐、叔父様には有名な反逆者として牢獄に刑せられた社会主義の方がおありになるのです。いかにもその方の新しい人類の真理の追求者らしい気の勝った頭の明晰な自尊心の強い方だと思いました。いつも帰り道は東京駅まで御一緒に歩きました。その時おりになくなった叔父様への思慕の想いなどを沈んだ口調でお話なさるのでした。それは或る日の事でした。悲しい思い出を私に誘う四月頃でございました。お姉様がオフィスの御自分のお机の上、タイプライターの脇に純白と淡紫の二本匂うヒヤシンスの鉢をお置きになりました。カチカチの音と紙と屑籠とガタガタの机と椅子とよりほかに風情のないオ

フィスの中に不調和なほどすっきりした姿を咲かせてしめやかに匂うその花は、ちょうどお姉様をシンボルにしたような気がいたしました。淋しい心であじ気なく指先に打つカチカチの音の間にしのびやかに匂ってくる花の香りに私の心は和むのでした。そんな時疲れた手を休めながらお姉様の方を見遣るとお姉様も同じ思いか、こちらを見て眼元に微笑んで下さいますの。けれどもその幸福は長くはつづかなかったのです。私どものお部屋へ集まってくる傍若無人の方達のために少なからず常に迷惑していらしったお姉様が、ある日の事耐えかねて私達にこう仰しゃいました。『皆様、ああした方達のために私共の休息の時間を潰されて悪用されてしまうのはあんまり損失だと思います、あの方達が少しも紳士的な態度を取って下さらない以上――私達はお断りするより仕方が無いと思いますが』という意味でした。それを聞くと皆さんは残らず賛成なさいました。『ほんとうにそうよ、私達も毎日馬鹿らしくて仕方がないのだけれど、やむを得ずお相手をしているのよ、たしかに女性の侮辱だわ』と異口同音でした。『それでは私が皆様の御意見を代表して支配人に申し上げて今日以後断然社員の方達が用向き以外にこの室に漫然と出入りなさる事を阻止して戴きましょう』ときっぱり仰しゃいました。どうぞよろしく皆さんは御依頼なさいました。それからお姉様は支配人に向かって恐らくふだんよく仰しゃったように『私どもの仕事部屋は社員の方達の喫煙室でもなければ倶楽部でもございません。また私達は、独立した職業婦人でこそあれ、決してカフェーやバーのウェイトレスではありません、それゆえ男の方達のお話相手を自分の意志以外でする事は自己を侮辱した事だと存じますゆえ、あなたの権力をもって彼らの遊び半分の出入を禁じて下さいませ』と仰しゃったのでございましょう、支配人の部屋からお姉様は静かに出ていらっしゃいました。私はお姉様の仰しゃる事は正しいのですから支配人

は履行なさるだろうと信じておりました。まあところがその翌日でした。私どもはお姉様をのぞくのほか交る交る支配人の部屋に呼ばれました。入ると背が低くて赤ら顔ではち切れそうに肥った支配人は葉巻を口にくわえながら椅子に反りかえって詰問的な口調で

『あんた方はこの事務所で働かせて貰っているのに何か不平を起こして女だてらにストライキでもしようというのかね。実にけしからん。古来婦人たるもの貝原益軒の女大学今川庭訓（ていきん）のしめすように従順を第一とせにゃならん。ことに日本婦人はそうなくちゃならん。昨日も山田が何やら自分達の仕事部屋へ外（ほか）の店員が入るのは以後お断りしたいとか鼻息の荒い事を言ってきたが、あいつは一体ふだんから生意気で困る。ああいうブルーストッキングの女がいては第一感じが悪い。それに常に円満で平和な社内の空気の攪乱者だ。女のくせに男に楯をつくとはたしなみが無さすぎる』と葉巻の煙を吐いたり吸ったりしながら仰しゃるのです。私はあまりの意外にびっくりいたしました。そして愛するお姉様を罵る言葉を、使われる身ゆえに黙してきくより術なきをいかに切なく思ったでございましょうか。支配人はまた言葉を継いで『山田の口振りではあんた達も山田の意見にことごとく賛成して自分が代表者となってきたようだったがそれが果して事実かどうか、けさからあんた方を一人ずつ呼んできき正していたのだ。ところが山田の言った事は真赤な偽りで誰一人そんなつまらん事に賛成したものはないと言うじゃないか。実にけしからん。この頃は財界も不況でこの事務所も経費節約のために人員淘汰を行う際だから、この社内に不快な事があるなら出て行って戴くより仕方が無い』と口を切って、改まって私の方をみながら支配人は問われました。　『あんたは山田の説に賛成しているのでしたかね』その時の私の心はどんなでしたろう。愛する愛するお姉様の潔白の証しを自分一人だけは立てたいと望む心はいっぱ

いでした。おお、けれどももしもそうしたならば、私はこの事務所を追われるでしょう。母一人の手には負い難い生活を少しなりとも助けねばならない私が職を失えばその日から母や妹に苦しみを負わさねばなりません。おお糧のために愛する人をも裏ぎる恐ろしい屈辱――もはやこれ以上かくに忍びません。顔蒼ざめて身も世もなき心地にて支配人の室の扉を出たのも無我夢中重い足どりでかえったお部屋の中にお姉様は静かに仕事をしていらっしゃいました。私の入る姿を見てなつかしい瞳を投げて下すったのです「あなただけは信じる」その瞳はそう言っていたのではないのでしょうか。――それだのに、恥を知らざるものよ。私は見事に立派に他の人達と同じようにお姉様をついいましがた裏切ってきたのではありませんか。罪を犯せるものの汚れたる眼にどうして清らかなお姉様のそれを見返す事ができたでしょう。面伏せてそのまま、机の上に唇かみしめて私は震えました。その時支配人がお姉様をお呼びになりました。しばらくするとお姉様は戻っていらっしゃいました。何事も無かったような静かなお顔、けれども無言の淋しさをじっと堪え忍んでいらっしゃるご様子、私はそのまま足許に、ひれ伏して赦しをこいたかったのです。けれども心弱き子は『お姉様赦して――」とのみ、胸に繰りかえすばかりでした。お姉様は御自分の仕事机を綺麗に整理していらっしゃいました。やがて私どもの家路にかえる五時がきました。その時お姉様は『皆さましばらくお世話になりました。都合で私はこちらを今日からやめる事になりました。皆様御機嫌よろしゅう』と、お会釈をなさいました。裏切者の一同は『まあ――』とばかり、さすがに白けておりました。お姉様は整理された机の上にただ一つ残ったヒヤシンスの鉢を持って私の机の上におかれました。『甲子さん――これをあなたに置土産にあげましょう。水をやるのを忘れてはいけないの』と仰しゃいました。おおその時私は、いっそ一思い

に地獄の火に落されて裁きを受けたいほど良心に責められたのです。それだのにお姉様は、どこまでもお優しく　御一緒に――』と仰しゃって下さいました。お顔を仰ぐ事もできぬ子はうち連れて力なく路を歩みました。日頃はただ二人になれる路と思えば嬉しかったのにその日の心苦しさと悲しさはどんなだったでしょう。

『ここを甲子さんと歩くのも今日限りね』と淋しそうに仰しゃるのにさえ答える言葉もなくて私はただ涙をかくすばかりでした。プラットホームでの悲しきお別れ、私の乗る電車が先にきたのです、　琛さんが淋しがっていらっしゃるから早くお帰りなさいね』とわざわざ私を乗せて見送って下さいました。　『では御機嫌よろしゅう、よく勉強して希望を捨てずにいらっしゃいね。少しでもあなたの路の開ける事を私はどこへ行っても祈ります』と、最後の言葉を窓から囁いて下さいました。ただただ流れ出る涙に濡れた私の瞳がお姉様の淋しそうに立っていらっしゃる姿を貪（むさぼ）るようにみつめるうち早くも車は動くのです。おお――おお――最後に――最後にたった一言、赦してとお胸に縋りたかったその切ない心さえ果たさずにもはや永遠のお別れ、この後どうしてお眼に懸る勇気がございましょう。裏ぎりし者の負わねばならぬ暗い影は強く強くその日より私にまつわったのでございます。私の心はもう光りに明るみに向かって堅く閉ざされました。力なく悲しき心抑えつつ日ごと通うオフィスの机の上に咲きつづくその花の鉢、忘るなと仰しゃった水にかえて注ぐ私の涙でございます。

悲しきヒヤシンス、淋しい人間の運命、考えれば眼の先は真暗でございます。これでも希望を捨ててはならないのでございましょうか。努力して行かねばならないのでございましょうか。私にはわかりません。もうなんだか書き疲れてしまいました。

なぜこんな事を書いたのでございましょう。ただ苦しくも悲しい懺悔の気持をこの花に寄せて永劫に嘆きゆくさだめだと思えばこそ。

もしお作の中（うち）にこの苦しい心をお掬み取り下さいますなら、寂しい子にはせめてものただ一つの慰めとなりましょうもの――

ともすれば軽い明るい心持で、封を切りやすい未見の方達からのお手紙――これもその一つであったけれど、私はそれを読み終った後に今まで知らなかったある一つの寂しい灰色の世界をはっきりと知って心重かったのです。――もとよりこの人生に数々の愁い、悲しみ、嘆きのある事は知らないではなかったに――あわれ、ここにも、かかる悲しみありやと私はまた一つ心の重荷を負わされたかのごとくに――鉛のごとく憂鬱にならずにはおられませんでした。

幾度となく終りの方を読み返すうちに、やはり泪ぐんでおりました。――封筒に御住所は無いけれど、スタンプの跡、おぼろげに白金（しろがね）と読まれた、差し出した方は加津甲子さん――甲子さん、そして麻子さん、お二人ともいらしって下さいまし、私の小さい書斎の扉はあなた方のためにいつでも開かれております。お二人の泪の末に私の泪をも加えて御一緒に泣かせて下さいませ。

# ヘリオトロープ

心ありてか、なくてか、あわれ知らず知らず自然の凄まじき禍いを、きびしくも蒙(こうむ)りし都のさま――昨日に変りしその面影――伝え聞く南欧ポンペイの廃墟もかくやとばかり、胸もついえるばかりに、もの悲しきその日頃、親しき友の訪れて告げるに『このたびの震災のため、おおかたの書肆(しょし)の焼けたるもの多ければ、再び印を起こすにむずかしき書の一二、あるいは絶版ともなるよし、すでに某書舗(しょほ)の「ブレークの言葉」のごとき良き書もその例なるというに、かねがね欲したる書物、今求め置かずばのちに至りて悔ゆるのうれいあるべし』と、その友の言葉げにも理(ことわり)なりければ、思い立ちて、友と二人幸い残れる附近の大学前の書舗軒をつらねしあたり、それとおぼしき書を心あてに求め漁りゆくほどに、ふと立ち寄りし小さき店先に捨つるがごとく片隅に、積み重ねられたるまま、街路の埃(ちり)風吹くにまかせし古書のあまた哀れなる姿に打ち見えたり――もとよりさまで貴きものにあらずと思えばこそ、かかる一隅にうち捨て置く書なれば、いずれも表紙表装いたくも破れ損じ黒ずみて塵にまぶれはてたるありさまなるを、連れなる友のたわむれに、それなる書の一、二、手に取りて改めしに『こは古き仏蘭西(フランス)の雑誌ならずや、見給えかし』と差し示したる一冊、すでに表紙は半ば破れ去りたるまま中なる頁(ページ)も脱落多くして綴(つづ)り目(め)の糊はこぼれ糸は断(たた)れたるまま辛うじて形を保つのみなり、友はなお去りがたく奇を好む心にてか、ぱらぱらとその頁を繰り『君よ、この詩の題面白からずや』と友がさし示す処Les sables du desertとし

るされてありぬ、げにも友のおもしろしと言いしはその語句の『沙漠の砂』という意にこそあらん、『求め帰りてこの叙事詩を読まんはいかに』と友は我をかえりみ微笑みてその異国の古雑誌を手に抱えつつ『価は？』と店の奥へ声を掛くれば、この家の主ならん老人出できたりて『その書はあまりに破れて見苦しきに、いざこの棚の中には表装美しくまだ手摺（てずれ）もせぬほどの洋書あまた備えあるはいかがに』と言うもおかしく、なお小さき銀貨一つ置き捨てて我れと立ち出でぬ。

それより、あちこちの書舗に望みの書冊漁れどもあやにくに見当らで、二人はただかの古き仏（ふつ）国（こく）雑誌一つを抱えたるまま我家に帰りぬ、せっかく縁あればこそ、われらの手に求められしものなれば、せめてこの中のかの詩だけをも読みおかんと、ふたりは厚き辞典を力綱に読みゆきぬ。

南（みんなみ）の夢多き領土
美しの城ありて佳き姫棲みぬ
城園（しろその）のほとり、市より購（かわ）れし奴隷三千
中に一人の少女（おとめ）あり
髪は暗黒色、瞳は憂愁の熱情
裳裾（もすそ）切れたる衣をまといて
靴を知らざる素足のまま
彼は佇む園中の泉のほとり
日も夜も仰ぎ見る城の窓

その窓に仄かにかすかに影さすは姫の姿

日は流れ月はめぐれど
時の潮もかかわりなしや少女(おとめ)の奴隷
城園の泉のほとり佇むままに
仰ぎ見る城の窓
あわれ、姫の姿を恋いて三歳(みとせ)
その歳の春も暮るる頃
白昼星雲空に現れて
陽は暈(かさ)しぬ
大地に轟く奇すしき音
見よ、城の塔はるけく聳(そび)ゆる火山
今や時来たれりと紅蓮の焔天を柱す

熱灰(ねつかい)は散り乱れ紅の溶岩(ラバア)は降る
地に住む幾万の人の子の哀叫(あいぎょう)の風の如く
王城今や危(あやう)し騎者は逃れ馬は倒る
三千の奴隷また影無し

ここに 一人火の灰と戦いて
城門に進み入る者
いかなる勇士ぞ
これやこれ 一人の少女（おとめ）――かの泉のほとりに佇む奴隷の子
『姫はいずこぞ』
その呼ぶ音（ね）に必死の力こもりぬ

時経る数刻
今や城壁は溶岩（ラバア）に打たれて砕けんとす
この時早くも城を逃れ出ずるかの少女（おとめ）
背にしかと負いしは
気も萎えて身悶ゆる佳き姫の身ぞ

恐ろしき魔の時は過ぎぬ
紅の柱影失せて噴煙徒（いたず）らに寂し
ああ、 呪いの火山
明けの日隣国の王城より馳せ来（きた）る
一隊の騎馬廃墟の国の路に嘶（いなな）く

馬上の 一人は隣国の王子
来る日に姫が王妃を約せし若人
姫を尋ね来れば
あわれ 一望千里沙漠に似たる城廓の市

『姫の姿を求めよ』、若い王子の命に兵士は走る灰の都
程もなく 一人の兵士は帰り告げぬ
『姫は安けく在（おわ）せり、奴隷の背に』
かくて奴隷の少女（おとめ）の背にすがる姫の姿現れぬ
『姫よ』、馬上の王子はかく呼びて剣を捨て手をのべぬ
『いとしの王子よ』
少女（おとめ）の背なる姫はかく呼びて馬上の王子の腕（かいな）にゆきぬ
『姫を助けたる忠実なる奴隷に重き金貨を与えよ』
王子はかく命じて鞭あてて我が城の方へ
佳き人胸に守りて駿馬を走らせぬ
奴隷の少女（おとめ）化石の如く後に残りぬ
『やよ、汝の身に過ぎたる賞ぞ』
と兵士は金貨を盛りし革袋を少女（おとめ）の手に贈る

彼女の眉この時あがりぬ
熱を病むが如き眼（まなこ）に力ほとばしり
打ち顫う唇に言葉なく
彼女の双手は金貨の袋を地に投げ捨てぬ
革袋は破れ黄金の落葉の如く舞いぬ
驚く兵士の隊を後に、早くも少女（おとめ）は我が影を隠せり

ああ、その夜なりき
昨日（きぞ）の禍は知らぬげに、かわらで昇る月の輪の
　銀（しろがね）の光に照らされつ、さまよい出でしかの少女
今は城廓灰に埋もれ
かの美しかりし城園の面影空しく
きよらかなる水を湛えし泉のほとり
水涸れはてて灰に覆わる
少女（おとめ）はゆきつもどりつ、さまよい果てて疲れ倒れぬ
少女（おとめ）の倒れし上へ吹き運ぶ、沙漠の砂にも似たる火山灰
ああ城埋もれぬ、城園の泉また埋もれぬ
そのほとり奴隷の少女（おとめ）また埋もれ終りぬ

幾年（いくとせ）を経しや知れず
古（いにし）えの城跡あわれに悲し沙漠の広野、砂吹く風のもの寂し
広野（ひろの）をよぎる長旅の心も重く身も重く
憩う木蔭もあらなくに
喘ぎ苦しむ旅人の眼にうつる
きよらかな水吹き上ぐる泉あり
旅の悩みに生む幻の
オアシスならでまことの泉ひとすじ青し
その水の流れゆくほとり、ひとむらのほの白く
いちじくもかぼそき草の花咲けり
旅人の袖にふれなば移り香の、消えもやらざるあわれさに
人は名づけぬヘリオトロープ
あわれ、その花の持てる言葉は
――献身を意味ししかして、執着を表わすも悲しからずや

かくてわれらは拙（つたな）き意訳ながらその詩を読み了（りょう）せり――その時すでに初秋（はつあき）の日暮早くも灯ともし頃とはなりぬれどかの恐ろしき地震のため電気の灯にさわりあればとて、たよりなくも細やか

なる蠟燭の灯影もいとど、あわれふかき下に仄けくも詩章の最後の文字いたくも朧めきしは、ひとり燭の暗きの故ならで、またわれらが瞳に湧きいでとめがたかりし涙の陰にかすみしにもあらなん。　（十二年十月十四日しるす）

# スイートピー

## その一

それは━━真弓が三年に進級した春だった。

始業式の日までに寄宿舎に帰る━━誰でもがそうであるように━━そして始業式の日の朝小雨が降っていた━━真弓が寄宿舎から校舎への渡り廊下を一人でいそいでいる途中、佐伯さんにばったり行き会った。佐伯さんは息をせいて落ちつかぬ様子━━考えて見ると佐伯さんの顔は昨夜（ゆうべ）も今朝も食堂でも見なかった。では今朝つい今帰って来たのらしい……。

『今いらっしゃったばかり？』

『ええ、あの父が少し悪かったものですから……』

『あら、そう、どんななの？』

『いえ、今はもうよほどいいんです━━あの、母からもよろしくって……』

『ありがとう、うちでも父も母もよろしくと、やっぱりことづかったのよ……』

こうちょっと社交的な言葉を二人の間柄なればこそ交している時、ふたりのじき傍（わき）で、『……ごめん下さい……』とたゆたうように可愛い声がした。ふたりとも振り返ると、今まで見知らぬ

ひと――お垂髪（さげ）に深紅のリボンゆらゆらと上品な愛らしい美しい小さいひとが、手に雨に濡れたゴム毬を持って今し二人の傍を摺り抜けようとするのである。何しろ狭い狭い後から間に合わせにくっつけた廊下の真中に二人して話しているゆえ、もう一人そのわきを通るのは袂か袖かふれずにはゆけぬ――それで小さい人が遠慮して声をかけたのであろう。

『かまわないの、さあ通って頂戴』

真弓が言うと、ちょっと会釈をして通り抜け一、二間ゆくと走って控え場の方へゆく気配――新入の一年のひとだな――と真弓は思った。佐伯さんも何と思ったのか、やっぱりさっきの小さい人のゆくえを追うように見送っている。

『じゃあまたあとで……』

と真弓が別れようとすると、佐伯さんは眼を転じて慌てて、

『まだ始まるまで時間がありましょうね』と問う、『ええ、まだ二十分ぐらいあるかもしれないの』と言うと、『そう、私これからちょっとお部屋へ帰って荷物を片付けてこないと……』といそがしそうに寄宿舎の方へ走ってゆく、真弓はそのまま校舎へ入った。真弓の姿を雨天体操場兼生徒控え室というような広場の入口にみつけると、江木さん達がすぐ飛んで来た。

『お久しぶり！　きのう帰ったの？』

『ええ』

春休みの二週間をお久しぶりもおかしい。そして一つのグループがそこにでき、いろいろの雑談をする。

『こんどの一年のひとに、とても悲絶哀絶断腸之記がひとりいるのね』

誰かこう言い出したら江木さんが、

『ああ、いる、いる、ほんとにあれは確かに悲絶哀絶断腸之記だわ』

皆はそれを聞き笑った。

――悲絶哀絶断腸之記というしさいは――昨年の秋、バスケットボールの対抗競技にチームの練習が不足でパッシングがものになっていずシュートの機会をはずしてばかり、とうとう敗戦に終った時、運動部の人達がやっきとなって、その年の校友会誌『鈴蘭』に大書した見出しで、その対抗競技の報告の題目に、くだんの如く悲絶哀絶断腸之記としるしたのである。それからというものなんかと言うと、じきにこの言葉を使うのである。それは驚く事にも恐ろしい事にも悲しい事にも滑稽な事にも腹の立つ事にもまた美しい事にも綺麗な事にも感じる事にも嘆じる事にも讃える事にも種々の場合使い分けをして、その意味を利かしているのである。同じ校内の雰囲気になじむと、そうした変な感嘆詞また形容詞もはっきり感じがわかるようになってしまうのである。

この場合、江木さん達の用いた意味は、もちろん美しい可愛いなどの内容を表現したものであることは言うまでもない。

やがて鐘が鳴り、講堂に入る、いつもは一年から順々に入ってゆくのだけれども、一学期の始業式に限り、新入の一年は一番最後になり、二年から先に入ってゆくのである。五年の組まですっかり入り切ると、ようやく新入の一年が入りかけて来た。まだ慣れないので、朝礼マーチ（生徒はこう呼んでいた）に合いかねる足取りである。

『ね、あの悲絶哀絶断腸之記を教えてあげるわよ』

江木さんは頼みもせぬに、こういうのである。しばらくすると新入の小さい人達が前方にあけてある席へと上級生の左右にずらりと居並んだ中央を通ってゆく。

『そら、あれ、あれね、紅いリボン、わかった？』

江木さんが囁きながら指さす——真弓がその方を見ると、深紅のリボンそよぐその子は……さっき、寄宿舎から出て来る途中、佐伯さんと立ち話の傍を通っていったそのひとである。

『ね、あのひとが今年度の一大傑作でしょう』と江木さんは真顔で言う。近くのひと達はそれを聞いてくすくす笑う、中には不快そうに眉をよせて、『いやよ、そんなへんな上級生意識を発揮しては』とたしなめて怒っている人もある。ほんとに江木さんたら、あけすけなひとである。

それから数日後、また江木さんが控え室で皆にこんなことを告げている。

『あの悲絶哀絶断腸之記ははたせるかなたいへんなのよ、とても。毎日手紙が四、五本来ない時はないんですって』

皆はそれを聞いて、また江木さんが始まった、という風に笑い、

『そういう江木さん御自身も毎日あの方に手紙送っているんじゃない』

とからかわれたりした。

四月には校友会の委員がきまるならわしである。全体の委員は五年のひとが皆引き受け、その下を助手のような形で四年のひとが四、五人助け、三年からは僅かにＡ・Ｂ二組から園芸部へ二人委員として出るだけであった。花壇の掃除や世話はあまり好まぬ事とて三年の人達にまかせ、働く事は二年一年の人を頼むことにする考えは五年級あたりになると自然と浮んでくるのであろう。

そのために、三年のＡ組から呉尾さんが委員にされＢ組からは真弓が出された。園芸部なんて……と思うけれども仕方がなかった。

水曜日の放課後、理科教室に集まり五年の園芸部委員が挨拶をした。そして一年二年から級の当番のようになって来ている十人ばかりの人に種子を与え、それをめいめいの受け持ちで四、五人くらいずつ組み合せて種子蒔から苗床の世話をして移植し水をやり花を咲かせるまでの責任を持たせる事になった。そう話をきめておいて、五年の人はほかに用があるからと言って、

『後はね、あなた達二人でして頂戴、なんでもないのよ、この草花の種子の袋を公平にこの小さい人達に分配してね、ここにある木片に花の名と代表者の名を書かせてね、そして花壇へ苗床を作らせればいいのよ』

こう言い残すと扉を開けそのひと達は行ってしまうのである。

後に残された呉尾さんと真弓は顔を見合せてしまう——けれども役は果たさねばならぬゆえ、種子入りの袋や球根などをそれぞれ分けて渡すことにした。

春蒔の草花の種々、ひなげし、ひまわり、ひめあやめ、忘れな草に桜草、シクラメン、グラジオラス、サイネリヤ、カーネーションや松葉牡丹まで——といった風に花壇を飾るものを順々、コスモスはどなたさあ早く持っていらっしゃい、こんな風に端から片付けてゆく。別に誰に何をあげるという標準もなく、並んでいる片端から渡して行くのである。そうして順々に手渡してゆくうちに、真弓の手にあった種子も球根ももう皆なくなって、ただひとつの種子袋が残ったばかりである。呉尾さんの手許のものは皆渡して一つもなかった。

『ひとつ残りましたのね』

呉尾さんがこういう——

『ええ、なんでしょう』

こう言って真弓が袋の上の花の名を読むと、——Sweetpea

『まあ、いい花が残ってしまいましたのね』

『後で花壇へ行ってまた頼みましょう』

こういって呉尾さんと話している時に、扉（ドア）が不意に開いた。

振り向くと、あの深紅のリボン仄ゆるう……江木さんの口癖の悲絶哀絶断腸之記が入って来たのである。

『あの私は一年のＡの当番でございます……あのバスケットボールの練習に入っていたものですから私一人遅れてしまいまして……』

たいへんな悪い事でもしたように、たいそうかたくなってあやまるのである。

呉尾さんと真弓は笑い出してしまった。

『さあ、では遅れた御褒美に特別いい種子をあげましょう』

真弓はこう言って最後に残ったたった一つの袋、スイートピーの種子と名をしるす木片をその子に手渡した。

『ありがとうございます』

自分が何か貰ったように、嬉しそうに丁寧にお辞儀をして、そして再び扉（ドア）の外に出ていった。

可愛想にバスケットボールでさんざんに疲れたらしく、真白い額が汗ばんで頬は仄紅く——そう言えばピンクのスイートピーを連想されるようである。

花壇は理科の先生方の指導で苗床が作られ、おのおのの種子は蒔かれ、その傍に花の名と受持責任者の名が代表して一人ずつしるされた木片が立てられた。その中の一つに、スイートピー、（一年Ａ組酒井綾子）としるしたのがある。一週間に一、二度花壇を見廻るように言い付けられているので、義務的に呉尾さんと二人でまだなんの風情も添わぬ苗床の花壇をまわって歩いたらこの札がゆくりなく眼に入った。ああ、あのひとの名はこういうのかしら、真弓は何心なくそう思っただけのことである。

学校の人は誰も美しい花が咲くまで花壇なぞへ近寄ろうともしない。ただ一、二年の人達が自分の責任からせっせと小さいシャベルや手鍬をもったりバケツをさげて水をやったり働いていた。

四月上旬からの仕事なので、中には少し時期の遅れたのもあり、また無理もあって花の出揃うのはひまどるようだったけれども苗床はやがて一面に青々と芽生えてきた。そしてある程度まで育ってきたのは移植されて行った。そして花壇のあちこちに位置を作り責任者の木札もやはりその下に明らかに立てられた。どの花がよく早く咲くか誰の受け持ちのところが一番美しく咲き出すか？　花競いの心持で皆熱心になり出し、先生にないしょできめられた分量よりも多く草花園芸用の肥料の粉をほどこしたためにせっかくの芽生えを枯れさせてしょげる人達もいた。

五月近くなると、まず真赤なひなげしが、かぼそくあえかに蕾も重たげになよやかに緑の茎に現われ始めた。すっきりとした優しいその葉の風情さえ趣を添えるに充分だった。コスモス、松葉牡丹、ひめあやめなどはあんまり芽生えの苗が多過ぎて捨てるほどだった。一番成績の悪いのは忘れな草、あれほど一袋の種子をすっかり蒔いたのに、地に生え出でた芽といったらどこへ行

ったのかわからぬほど情けなかった。石竹（せきちく）、撫子（なでしこ）、そうしたものもどんどん大きくなっていった。そのうちにあのスイートピーが早くも蔓をのばして支えの竹柱を求めるのである。酒井綾子さん達が襷（たすき）がけで、細竹をいい形に組み合せて優しい蔓の青糸を思いのままにまつわらせてやった。

やがて時来れば、花は咲き出でぬ。そのスイートピー、花の下埋もれもせで倒れもせで寸余の木片、示すは、一年A組酒井綾子の文字――それが今度は人眼を引いた。苗床の時にはよりつきもせねば、この木片見るよしもなかりしものを、今花咲きければ花に誘われ来れば眼に入るその木札、皆感嘆した。

『まあ、スイートピー、そして酒井綾子さん！　なんて素敵なコントラスト！』

『園芸部の委員も気を利かしたのねえ』

『花か人か、人か花か、スイートピーか酒井さんか、酒井さんか、スイートピーか、ああッ』

『何お経みたいなこと仰しゃっていらっしゃるの？』

こんな風でお蔭で花壇の見物人が例年より多く、ことにスイートピーの前は混雑した。ある日呉尾さんと二人で放課後ちょっと花壇の方を見廻りにゆくと、あの問題のスイートピーの下の木札の裏に何かかいてある。裏返して見ると、あわれ誰（た）が子の悪戯ぞ、鉛筆の跡黒々と記して曰（いわ）く

（悲絶哀絶断腸之花）

酒井さんの日にまし高い人気（？）に真弓は驚いたが、その時はもう酒井さんをスイートピーと呼ぶようになっていたのである。スイートピーではあんまり長過ぎると言うので、単にピーとだけ言うようになり、蔭では誰でもピーさんと言っていた。

例の江木さんをして言わしむると『ピーさんは全校のひとを悩殺している』のだそうである。ピー熱病だのピー病（シック）だの伝染ますます烈しくその年の二学期になっても三学期になっても、すでに花壇の花散りうせ蔓うら枯れて地に朽ちても、その花のシンボル酒井さんを思うひとは絶えないという。それかあらぬか三学期の頃控え室の通告板、ふだんは基督教（キリスト）青年会のポスターや校友会の報告を張ったり、落し物を書いておいたりするボールドの上に、白墨（はくぼく）の跡太々しく、和歌（？）一首、

　小夜ふけて君を思へば路をゆく
　　あんまの笛にも胸おどるかな

註に曰くと添えるまでもなく、あんまの笛ならピーと鳴るに相違ない、さても、さても、一同この御名歌に感嘆すること久し。しかし先生方にみつからぬうちにと、五年の人が大いそぎで消しながら苦笑して、

『このボールドは個人に使ってはいけません』

と訓戒された。わっとわれるような笑い声は控え室に満ちた。真弓達も笑いさざめきながら運動場に出て行った。そこではあのさっき自分のことを詠じた歌ゆえに控え室のボールド前で大騒ぎを演じられたなどと知るよしもなく、バスケットボールの練習に夢中になって、この寒中に体操服の黒いパンツの下の長い足に黒いストッキングを細やかに見せて強くジャンプしつつ左方に身体を身軽く回転した右手にボールをささげてバスケットへ今差しのべようとする美しくも爽かな巧みなシュートのポーズを取っている酒井さんの姿はやはり人の眼の焦点になっていた——

『ピーさんは、あんなに騒がれているのに、少しもそんな事にとらわれないで、すうとしてあんなに無邪気にスポーツに熱心で……感心だわ』

見ている人達はこう言い合って皆ほめた。

あんまり見ていると、恍惚（うっとり）として見とれているなんて、うたがわれるから行きましょう、誰かがこう言うので大笑い――期せずしてそこを立ち去る人が多い。真弓も友達と一緒にそこを去ろうとすると、江木さんが『ああ、おかしいな』と言って、くすくす笑い出した。

『何が、そんなにおかしいのよ』と皆が聴きたがる――『あれごらんなさい、枯木さんが今まさにエクスタシイに陥入っているわよ』こう言うので皆は思わずふき出してきょろきょろ見廻すと、いたいた佐伯さんが――、

『あの佐伯さんがまあ』と皆は驚嘆する。

佐伯さんはただひとり、ぼそっとして立っている。さまでお友達のないひとだから、こうして運動場にぼそっとして一人で立っていたからって別に不思議はないのだけれども、それがあんまりはっきりした態度で、喰い入るようにバスケットボールの練習を見ている。そう言えば酒井さんの姿ばかり見守っているように見えぬこともない――

『人は見かけによらないものねえ、あの枯木さんが！』

皆口々にこう言って歩き出した。真弓も思うとおかしかった。もしかあの佐伯さんが酒井さんをほかの人達のように、やっぱり好きになったのかしら？　あの謹厳そのもののようなひとが、同じ牧師という職の父を持ちながら、真弓とまるでちがって、いかにも牧師の娘らしいあのひとが、学課の勉強と聖書の暗誦と讃美歌の練習と日曜学校の助手と以外には、ほとんど振り向こう

ともしないあの生真面目なバイブル・ウーマン型でてんからぴりまでこりかたまっているあの人が、そんな風であんまりほかのひと達とかけちがった性質ゆえ、とうとう級（クラス）の悪口屋が、サエギではなくてカレギ（枯木）さんだとへんなニックネームをつけるようにさえなったあの人が、やはり普通の人のように、あの評判の酒井さんを思う子の一人であるなどとはちょっと想像もつきかねるほど、ちぐはぐな事柄に思えるのである。あの佐伯さんなら真先に『おお、皆様、私共神の子はすべての友達を姉妹（きょうだい）同胞として愛し合わねばなりません、ただ一人の者に愛をそそぎかたむけるのは罪悪でございます、一日も早く悔い改めねばなりません、皆さん私と一緒にどうぞお祈り下さい』などと鹿爪らしくしかも本気でお説教を始めそうな人なのであるのに……。どう考えてもおかしかった。あるいはただあの時、バスケットボールの練習が面白く見つめていただけのことで、別に酒井さんなんかを見つめていたのではないのかも知れない、そうだそうだきっとそれにちがいない。ただ皆はそれをうたがって面白がったに過ぎないのだ――こう真弓は佐伯さんのために考えてあげたかった。事実佐伯さんと真弓は学校でも寄宿舎でもへんな位置に向い合わされているのだった。両方の父親が牧師の関係から知合いの間だし、そして学校では同じ級（クラス）、二人とも、そして寄宿舎にいるのだから自然なにかの比較に持ち出される、『同じ牧師の子でも一方はどうで、一方はどうだ』とか口の端にのぼりやすいのである。それを自然と意識する二人ともちょっとたがいの気持の上にこだわりができて、かなり少女（おとめ）心にもある苦しさを味わねばならなかった。『なんだって、お父さんは牧師なんてへんな職をお選びになったのかしら？』こう思って時々父を恨む気さえ起こす真弓は不肖の子でまた不孝の子であったに相違ない。それに反して佐伯さんはみずから牧師の子である運命を感謝し、よく身を持して父の栄誉（？）を傷つけ

ないように注意し、真弓のように禁断の木の実の文学書類にかじりつくような異端的な事は夢にもせず、忠実な生徒として信仰強くまた日曜学校の手伝いも一人で引き受けて熱心に振舞うのである。しかし惜しいことにはそんな風ゆえ友達がおもしろくない人として見てしまい、級の人望というのもへんだが、まあ一口に言えば、そんなものが、少しも無く、陰では枯木さん枯木さん、アーメン伯爵の令嬢ハレルヤ姫などと口さがないこと、口さがないこと――然るに一方の真弓は、うそをついてまで活動は見に行きたがる、小説は大いに読み学課は怠ける、先生の悪口も皆と一緒になって言うという不良性を帯びているのが大いに共鳴されるゆえんか、ともかく級の友達も真弓とは相許す中で親しくする。そのかわり教員室では真弓は注意人物、校長さんのブラックリストにはちゃんと名前が載っているはず、ただしこうならなくては級では幅の利かぬよし、どこも同じ不文律と見えたり！

　このあまりに相異なる性格の二人ゆえに同じ校舎にありて、目立ってしまういわゆる対照！それもよし、これもよし、今佐伯さんが酒井さんを思うなどという事が事実だったら、その対照にいささか錯誤が生じる、ちょっと位置が転倒して見えたからである。

　思うて見よ、美しい酒井さんを思うというようなことなら、いかにも　はずかしき事には候らえども）真弓のやりそうな事でがなあろうものを、それをそれを、あの枯木さんがそうなんだとは！？!!!

　御注意までに、真弓はけっして皆の騒ぐ酒井さんになんて、少しだって心をひかれてはいないのであった。かえって、あんまり、みんなが、ピーピー言って大騒ぎするので、いささか反感さえ覚えるほどだったのである。

## その二

二学期になった。
バスケットボールの対抗競技の日がきた、秋晴れの土曜日――。
応援隊がかり出される。寄宿舎からもたいてい出かける。一週間も前から大騒ぎをして作った校章入りの三角の赤い応援旗を持って、皆わいわい出かけてゆく。
それだのに、真弓はその仲間に入らず寄宿舎に居残った――二年までは自分もテニスの選手だったけれども宿命的の習慣性脱臼に襲われてから、ぷっつりラケットと縁を切らねばならなかった。その当時の佗しさ、暗さ――ほかに気持の転換を求めて、本を無暗に読み始めた。読んでわかろうとわかるまいと、めちゃくちゃに読み始めた。そこに救い道が開かれていった。
今日のようなはれがましい競技へうっかり応援に加わって行くのは、気持の上からも考え物だった。そんな場合はすぐ昂奮してしまうみずからの性(さが)をよく知っている子には、それがうら悲しい……肉体の上に一種の不具的な宿命を持つ子ゆえ……
本を読んできょうひとり寮舎にとじこもろう、――どう考えてもやっぱりそれが一番いいことだった。
この間から一生懸命になって読みふけっているジャン・クリストフの第二巻を今日中に読んでしまおう……真弓は部屋の机の前に座った。それでも、あちこちで人がざわついていると、少し気がもめる。応援歌の練習をして出かけてゆくありさま――思わず机をふらふら離れて窓越しに

外を見やった。──私も行こうかなあ──こう思って佗しかった。勢揃いして出かけてゆく後に、たった一人ぼっち取り残される、けっして嬉しくはない、むしろ嬉しくない反対──。

　もちろん自分以外で、病気その他で何かあって行かない人はあるらしいが、それはほんの二、三人と言ってもいいくらいの少数だった。

　寂しい心持で打ち眺める校庭のあたり、そこには続いて出てゆく応援の人々──その中にふと眼が止ったのは佐伯さんの姿である。

　佐伯さん、佐伯さん、──その人が赤い三角の応援旗を後生大事に打ち振って賑やかな仲間に打ちまじって入ってゆく不思議さ──どうしても不思議でならない。

　あの人なら、今日のような日には、まず第一に寮舎に閉じこもって机に獅噛（しが）みつくべき人のはずなのに……ほんとにおかしい──赤い旗なんか持って出かけてゆくのが……佐伯さんは日頃もずいぶん勉強家だった。試験の時はなおさら、それに試験後の誰もほっとして骨のしんがゆるみ出したようになる時、あの人はまたも机を離れず柏井先生著、基督教史の大冊をひもどいたりする人だった。その点真弓など遠く及ばず感嘆していたのに──。

　今日はその人まで出かけてゆくという騒ぎだった。

　夕刻になり一同は疲れたらしく引き上げてきた。

勝ったのよ』

　ニコニコして報告する。

　去年の悲絶哀絶断腸之記は今年はもう用が無くなったためでたさ。それだのに、皆が笑う。

『とっても、今日おかしいったらないのよ。応援に弥次を飛ばして混ぜっ返す人がいるのよ、へんな声で悲絶悲絶ッ、哀絶哀絶ッ、断腸断腸ッて呼ぶんですの――それにあのピーさんが選手の中で活躍しているんでしょう、おかしくって、……おかしくって、――県立の人達は、断腸断腸って言うのをね……何か応援団長でもいるんかと思ったんですって、ますますこっけいね』
『そう言えば酒井さん一人のために応援していた人達だって、あるわねえ……』
『半分以上！』
『まさかァ……』
――なんだ、またその話かと、聞く方でうんざりしちまう。
競技にも勝ち、それでバスケットボールの騒ぎは一段落つげたけれども、まだ引き続き話題にのぼりやすいのは、やっぱりピーさんの事、悲絶哀絶断腸之記、とあだ名して唄われる美しいその子だった。
けれども真弓だけはその話の中に入りえなかった。第一真弓は上級の人を思ったことはあった。自分が一年の時五年の組の水島ちえと呼ぶひとを、ひそかに苦しいばかりに思いつめていたりして……そのせいか、いまさら年齢(とし)下の小さいひとを思ったりする事には、少しも心が動かなかったので。
そのせいであろうか、真弓の眼には酒井さんが何も取りたててよくは映じてこなかった。
全校の人気を追って上級のひとたちに騒がれている自分の美貌を十分に意識しているかの如き振舞い――底抜けに明るくて、ほがらかで幸福で、まるで我が世をば望月と思いかけたる事のな

しといわぬばかり——と見るのも、こちらのひが目かも知れないけれど）——そんな風で真弓には、どう考えても酒井さんを懐しむ気にはなれなかった。

——やがて冬近くなった頃、酒井さんの姿が学校に見えなくなった。

お月さまがにわかに雲がくれしたように、天照大神が天の岩戸におかくれになったように——ピー党の面々ひとしく顔色を変えて吐息をいっせいにもらすひと騒ぎ……

『病気なんですって』

『まあ、重いの？』

『肺病かも知れないわ』

『そうね、綺麗な人だから——』

『血を吐くのかしら雪より真白きベッドの上に』

『ロマンチックだわ』

『何言っていらっしゃるの』

『——お見舞の手紙がたくさんね』

等々——その噂が伝わる。

なにかしら、ともかく美しい子のいたつき、かりそめならずと見えて、なかなか学校へは出て来なかった。

そしてその年も暮れてしまった。

酒井さんは依然として翌年の春も姿を見せなかった——。ただ美しい眉目形（みめかたち）のひとに憧れて騒ぐだけのことであったけれど、美を好むは、これ人類の本能——であるゆえか、しかしもうその

御本人が長らく姿を見せないとなると、いつしかピー熱もおさまりおとろえ、下火となり、はては日に日に消えてゆく——人情紙より薄しと嘆くには当らない。眼の前に刺戟が与えられなければすぐ他に心を移しやすい乙女心であったのか——ともあれ、酒井さんの噂も名も面影もうすれてしまった。もとより、初めからそうした渦巻にかかわりなかりし真弓は、あたりが静かになって落ちついたようで助かる気持だった。

その頃佐伯さんが——しきりとノートを借りて廻っていた。それが一年級のひとのノートを借りるのである。

寄宿舎の真弓の部屋にも、一年生の成績のたいへんいい子がいた。そこへ理科のノートを借りに佐伯さんがある日入って来たのだった。

『一日ほど貸して頂戴な、すぐうつしてお返ししますから……』

佐伯さんは、こう言って、ノートを受け取り、そそくさと出て行った。

呆気に取られたのは真弓だった。三年のくせに、今頃一年のひとのノートを借りて、写すなんて、なんのお呪(まじな)いかしら……？

不思議ではあっても、もとより人のする事、またなんのためになさるの？　と立ち入って聞くほど親しくもなく、また同じ職業の父を持つことなどから、へんにこだわりを持ち合うような仲なのだったから——

そのうち三学期も終ってしまった。

真弓も佐伯さんも四年級に進む——

教室がかわりて見ゆる桜かな

四月の学校内の空気――明るくもの珍しく何かそわそわして活気と弾力のあるその空気――また新しい一年の小さい人がうようよふえてきた――新しいものずきの多いならい――ベビーベッキーのような子がいるとかいないとか言ってまた大騒ぎ――去年あのさわぎした悲絶哀絶断腸の麗しい子の酒井さんのことなぞ、もうけろりと忘れたように――と言うのも本人の姿がもう久しく見えず、うっかりすると病ゆえに退校したかも知れないほどだったから。

四月には例年の如く校友会の委員が、またあらたにきまっていく――真弓は今度は園芸部ではなくて、文芸部の委員になった。文芸部――しかし真弓のする仕事は校内の一隅にようやく形をなし始めた、図書室内の整理係にされてしまったのである。

乱雑になりがちの本の配列を正し、分類したり番号をつけたり、目録を綴じたり、紛失をふせいだり、書棚の硝子戸をふいたり、それを真弓が一人で受け持たされてしまった。腕が不自由で運動ができず、人の運動ぶりを見ていると妙にさみしくなりがちの真弓には、休み時間も役目のお蔭で図書室の中へ閉じこもっていられるようで、さまで苦痛にもならぬ仕事らしかった。

さればこそ――真弓は春の日永を狭い図書室にのみこもって、本を読んだり、と言ってもとより大した本は無かった。何某女史の少女訓話とか「女の道」とか「女らしく」とか家事科の参考書みたいの、日本婦女礼式大全とか母と子の科学とか模範家庭とか国民としての常識とかなんとか、童話では小波（さざなみ）先生の世界お伽噺の全冊が揃っていたりみみずのたわごとと自然と人生と竹崎順子が二冊あるだけ――あんまりみんなが読むような本は少ない図書室は、形式に存すれどもこれを活用して入る人はないから、いたって閑散――しずか心なく桜散る校庭にゆく春を惜しみて、たわむれ遊ぶとも、誰が子ぞちりくさき小べやに古書をあさらんや――げにも。

そんな風だから真弓はたいてい一人ぼっちで小さい図書室にいるのだった。
それは四月も過ぎて五月に入った頃だった。お昼休みの時間、いつものようにただ一人で図書室の一隅で真弓が、自分が寄宿舎から持ち運んだ翻訳本をひるがえしている時、扉(ドア)が開いた、──珍しや、誰が入って来たのか、うっかりしたら見廻りの先生かしら──『休み時間には少し出て運動なさい』とでも叱られるのかなあ──そう思うと真弓はすぐには首をあげかねた。
すると、その足音はひそやかに、やや遠慮がちに真弓の傍に近づいた。
『あの──本を読みたいのですけれど……あの棚から自分が出して来てよろしいのでございますか──』
弱々しく呼びかけたはにかみを含んだ声音──真弓はあっ生徒のひとだったのだと思うと、安心して、勢いよく首をあげて、『ええ、どうぞ、お取りになって頂戴──』
と言って、今傍に立ちし人を見ると、まあ真弓はびっくりしてしまった。
その傍に立ちて呼びかけし人とは、誰あろう。酒井綾子さんその人に相違なかったから──長きいたつきに、いたくもおとろえて痩せに痩せ細りに細りし、あえかにかぼそき風にもえ堪えぬやつれた姿、色も澄みて蒼く、瞳も沈みて愁わしくその面(おもて)──病はありし日の美しい子の華やかに明るくピンクの花を思わしめたその姿をかくも変らしめたのか。今は同じスイートピーの花になぞらえるとも、白い仄紫かいずれその色も影も淡くほのかなる葩(はな)のそよぎにふさわしいものを、あわれ……。
『まあ、あなた、ずいぶん休んでいらっしゃったんでしょう』

親しく口を聞き合った仲ではないが、あまりに思いがけなく立ち現れた人ゆえに、真弓はこう言わずにはいられなかった。
『ええ――あの、病気をしたものですから……』
もの言うも、たゆたげに、蒼白い頬にうす赤いはじらいの紅を刷いてさしうつむく、
『そう、でもおなおりになってよかったのね、いつから、いらっしゃったの、学校へ』
真弓はまたこんな言葉を口に出してしまった。
『あの―― 一昨日から――』その人は答えた。
一昨日から、一昨日から――それにしても、あのように、暁の星のごと、梢にのぼる新月のごと人々の憧れのまとたりしこの人が半歳（はんさい）にわたるいたつき癒えて再び学舎に現れしを、もう今ではなんの音沙汰をする者もなく、控え室内の評判にも伝わらないとは……栄枯盛衰は世のならいとは言いながら……まったく――真弓は心寒く寂しくなった。
『……あの、では御本を出してまいります』
お辞儀をして酒井さんは戸棚に進み、何かの本を一冊抜いて奥まった壁ぎわの机の前に向かった。
真弓もそのまま再び自分の前に開いた本の頁の上に瞳をそそいだのだった。

## その三

それは五月雨（さみだれ）らしい小雨の降りみ降らずみの鬱とうしい日のことだった。

真弓はいつもの慣わし通り、あいも変らで図書室の一隅に獅嚙みついていた。読んでいたのは坪内逍遥先生の『桐一葉』――蜻蛉（かげろう）という可憐な腰元の婀（あで）やかにも哀艶な俤（おもかげ）を忍び木村長門守重成（きむらながとのかみしげなり）に涙を感じたりして時の移るのも知らずにいた。その日は陽がささないのでおのずと室内は仄暗く、窓べりに本を持って来なければ活字が見えないのだった。

――やがて、『桐一葉』は読み終った――桐の落葉ひとひらを描いた表紙をとじて思わずほっと吐息をもらさずにはいられなかった。ある深い深い感動を持って一巻の書を読み終った時、誰でもがするように――。そして真弓が辿る文字に疲れた双の瞳をふとあげた時、すぐ眼の前、一幅の机を間にはさんで向こうにあの酒井さんがやっぱし何か読んでいるのだった――『あら』真弓はちょっと微笑んでしまった。酒井さんも顔をあげた――そとは曇って雲低く鈍色（にぶいろ）に閉ざした部屋うちの薄明りの中に浮んだその面ざし、あわれにも美しかった――長きいたつきの後なれば、色沈み痩せてはあれど天与の麗質のあでやかさ――真弓は初めてかくも間近くその人を真正（まとも）に打ち見て、いたくも心ひかれたのである。

何を読めるやと、打ち見やれば、そのひとは、ジャン・クリストフの翻訳本の第一巻をひもどいているのだった。その本は真弓とても、ようやく去年の暮に読み終ったばかりのものであるのに――もう、酒井さんはそれに手をつけて読み始めているではないか――まだ二年になったばかりのひとだのに……

そんなことにも真弓は心をひかれた。そして、どちらから言葉をかけ始めたというけじめもなく、ふたりは、その日からなにかと打ちとけて話をかわすようになった。

——やがて夏の休みはきた。真弓は帰省した——間もなく酒井さんから一通のたよりが届いた。短い文言ながら、ただあたり前の暑中見舞らしきものながら、その言葉の奥に秘められた、あるひそやかな名づけがたく懐しい感じを受けずにはいられなかった。

私にはあまりお休みが長すぎます、早くあの仄暗く寂しい図書室でおめにかかりとうございます——

こうした文言が最後につけてあった。不思議にも真弓にもまた同じそうした思いが胸のそこにあったのを、のぞかれたようではずかしいくらいだった。

二学期になった。

ひとつき半ぶりで真弓は酒井さんに会った。夏の休みをへだてて会ったその人の面影はやや健康を取り戻していた。どこか悩ましげなところがあって、その人の成長を示していた。しかもかつて新入生当時、悲絶哀絶断腸などと騒がれていたおりのただ人形の如く宝塚式の如く、可愛い綺麗だというばかりでなく、その美しさに余韻が生じてきたのである。二学期から、バスケットボールの練習は烈しく始まって校庭は日々賑わった。

その賑わいをよそに、酒井さんは図書室に入る日が多かった。

『あなたバスケットボールはもうなさらない?』

と真弓が聞けば、その子はさびしげに微笑んで、

『ええ、烈しい運動は身体にいけないってお医者様に止められましたから……』

そう答えた。おお、思うても見よ、過ぎし、そのかみの華やかなりしこの人の選手の姿よ!

真弓は思わず涙を覚えた。

『—私あんなに長く肋膜を病（わず）らったのですもの……よっぽど気をつけないと生涯いけませんの』

『そう……』

真弓も痛ましい思いに沈んだ。

『でも、よくなおって学校へ出ていらっしゃれたのね、もう大丈夫でしょう』

こんな事でも言って慰めるより術なかったから……

『ええ、学校までよすのだったら、私死んでしまいますわ——』

その言葉は切なかった——

『だって、よさないですんだし、それにずいぶん長く休んでいらっしったのに、二年にちゃんと進級もできて、申し分ないでしょう』

——こう言って真弓は笑ってみたかった。

『ええ——あの休んでいる間のノートをすっかりとれたものですから……』

——休んでいる間にも、学課の筆記をとって、勉強したとは？

『まあ、そう、じゃあクラスの方のノートを借りて大車輪で勉強なすったのね、よくできたこと！』

真弓はまったく感嘆してしまった。

『ええ、あの佐伯さんが、すっかりノートを作って送って下すったのです』

『えっ、佐伯さんが！』

真弓は、あまりに思いがけぬ、その言葉にびっくりしてしまう。まあ、ではやっぱりほんとだったのかしら？……佐伯さんが酒井さんの新入生当時からひきつけられていたというのは……けれど今はこの人と佐伯さんを噂の種子にする人もないのに――

『――あの名前をかくして送って下すったノートですけれども、私佐伯さんだと思いますの、病気でいる間も、あの方だけはいつまでも、お手紙を下さったのですもの……』

――酒井さんはこう言った。げにもそれは佐伯さんでなくて誰が子がよくなしうる業（わざ）であろう。始めのうちこそ、面白半分やらちょっとした憧れ心地なぞから、ピンクの封筒や鈴蘭を銀で描いたレターペーパーなどに惜しげもなく、インキの跡を塗って送ったであろう酒井ファンの人々も、やがて日がたつに従って、忘れゆき、次から次へ眼新しく眼をひくものへうつりゆくならわしの中に、ただ一人始めもなく終りも知らず、一本調子の思いつめた心を通わして、手紙で慰め、更にノートを写して名を秘めて送るとは――あわれ、あわれ、人のまごころに胸打たれて真弓は思わず涙さしぐんだ。

『……ほんとうに佐伯さんはえらい方ねえ……あなた感謝しなくては……』

あえて訓（おし）うるというわけもなく、思わずこう口走ってしまった真弓――のその言葉を引き取り、しかもそれにによりすがる如く酒井さんが――

『あの――感謝はいたしておりますけれど……あの……』

言いよどみ口ごもる言葉の陰影（かげ）よ……おお、げにも感謝、感謝、感謝という文字のいかに冷たき手触りぞや、かくほどに心をこめて、ただひたぶるに思いを通わす人から、単に報いられるも

のが、『感謝』そのものに過ぎざりせば、佐伯さんはいかに寂しく、つれなく泣かかることか！『私は……私……あの、どうしても、あの方には感謝よりほかには考えられないのですもの──』

　美しくもやつれし子は、かく言いてうつむきぬ。その頸(うなじ)の蒼白きまで冴え愁い深くもいやまさりて──。

　思う心をただに、『感謝』でのみ報いられる人も辛かるべきはさらなれど、また思わるる身にて、単に『感謝』の念よりほかに返す術なき子の切なさは同じであろうに！　あわれ病みあがりのこのひとのやつれてうれい沈めるもゆえありてか！　かく思う時、真弓は人ごとながら身につまされて佗しく、前なる人の仄ゆる前髪のいたましさに、ふと瞳を落して、いたわりの心を持つのだった。その時、酒井さんも伏せている面(おもて)を上げて、人知れぬ苦しみを打ち解けた後の、すがすがしさとはにかみにもつれる眼ざしを送った。その眼ざしと真弓の向けた瞳とは期せずして、はたと会った……

──窓を越えて外なる校庭のほとりには、今やバスケットボールの練習は、たけなわなのか、人々の歓声が、どっと杳(はる)かに聞えてくる。しかしただ二人のみいる小さな図書室の中は、あまりに静かに、銀の針ひとつ落ちる響きも聞えるほどにも静もりて、……いつしか二人は手を握り合って、窓に背を向けて相ならんでいた。

　春を迎えし若草に似し二人の心よ、ただせめて燃ゆるがままに燃えしめよ！　それはすべて自然のなりゆきだったのだもの──真弓は自分で自分に弁解していた。

　佐伯さんのうら寂しそうな姿を見る時、真弓の胸のどこかに痛みを感ずるものを……

――自然のなりゆきだったのだから――そこに逃れてゆくよりせん方はなかった。

そうしたうちに、ひととせは経った。真弓も佐伯さんも最上級の五年生になり酒井さんは三年になり、身も黒髪も丈のびてさらにこのひとを麗しくした。けれどか弱く痛みがちの身を、ひたすらに読書や勉学の陰へかくれて、寂しく静かに生きる性は、ただ一人の真弓へ心を寄せるほかは、友と呼ぶ人さえ無いほどの、もの静かな少女になってしまっていた。真弓が五年になった、その年の六月頃、若葉の烈しく陽の光にのびゆく頃おい、寄宿舎にひとつの騒動が起きた。――舎監排斥の問題で同盟運動が行なわれたので。

まず第一の火の手はあがった。古き革袋のなんぞ新しき酒を包むに適せんや、若き子の胸はおどる、今ぞ奮い立ちし我らの意気を見よやと、宣言しなければならなかった。その宣言文を草する任は真弓が選に当った。少女雑誌への投稿とちがって、美文の調では要領をえぬ、真弓はそうした実用宣伝用の文章に苦心しつつも、書き上げた。それは寄宿舎をもっと温かみのあるものとし生徒の人格を尊重して自由にされて勉強したいという意味のものだった。

ようやくできあがった宣言文。それを数十枚生徒と父兄と学校の先生側に配布してゆくという方針が成り立った。それは謄写版で刷るよりほか道はなかった。謄写版、謄写版の機械それを同盟団は手に入れたかった。学校の事務室にひとつあるけれども、同盟運動に借りてくるわけにはゆかない。しかし謄写版なしで、いちいち書いていては大変だし――真弓達はすっかり困ってしまった。その時真弓が、ふと思いついたのは、酒井さんのことだった。酒井さんの家はその街での老舗で金物鉄材器具計量器やポンプの販売をするお店と聞いていた。そんなら、もしや謄写版刷の機械がありはすまいか買うわけにゆかずとも一日二日貸して貰えるなら――と、真弓は学校

で酒井さんに、ひそかにその事を願って見た。『ええ、うちにございます、学校で使うから頼まれたとうちへ言えば、よろこんで貸しますわ、明日店の者に持たせてお届け致します』

　酒井さんのそういう返事を聞いて、真弓は安心して喜んだ。

　その翌日土曜日の午後の放課後、寄宿舎の真弓の部屋へ佐伯さんが扉(ドア)を開けて入って来た。

『弓さん、酒井さんからお使いが見えました』

真弓は、はっとして立ち上り、『そう、ありがとう』と部屋から走り出た。寄宿舎の玄関、その受付は五年生の一週間交代で放課後そこに当番が一人控えている規則だった。その日の当番は佐伯さんなのである。佐伯さんその人は寄宿舎内改革運動のため同盟を結ぶにあたり、断然としてその仲間に入るを拒んだ。彼女はこう言った『基督(キリスト)教徒は反逆を抱かず長上に従順でなければならないから、我らの周囲にもし正しくない事があるならば神に祈りその御心のままを乞い願うより信者はなすを知らぬ筈である』かくて佐伯さんは宣言書の中にも『寄宿生の中、五年生全部、一名を除くほか』その一名として完全に除外された者であった。その佐伯さんが、同盟宣言書を刷る謄写版の機械を酒井さんから店の小僧に持たせて届けられたのを受け付けた人になった。ともあれ、その夜ひそかに五年生達の手によって百枚ほどの宣言文の謄写版刷ができ上った。それを父兄に生徒に学校当局者達の手に送り届けるばかりになった。

　しかし日曜日の朝、まだ宣言書を送り出さぬ前、早くも舎監の手によって、宣言書の全部は取りおさえられ、校長はじめ先生達は、日曜日に非常召集を受けて校内に集まり、同盟主謀者は引き出されて、きびしくなじられた。あれほど秘密にしていたのに、残念残念、あと一息というと

ころで、水泡に帰した悲しさやるかたなく、しかしなにびとが裏切って密告したのか？　しかし決してそうではなかった。それは謄写版で刷る際に、刷り損ないの反古紙を焼きすててしまえばよかったのに、火の気がない夏近い部屋の中での事とて裂いてまるめて屑籠につき込んでおいたのを、舎監が、ふとその余にふえた紙屑に眼をつけ、そして裂け目を継ぎ合して読んだ結果、電話でこの事は校外に急報されて、事を未然にふせがんため、五年生全部は外出禁止、主謀者らしく睨まれた者達は裁きを受ける事になった。動かぬ証拠の品は山なす謄写刷の宣言文。

『誰だ、この宣言の文章を麗々しく書いた者は？』

裁きの第一矢は発せられた。扉も閉め切った校長室の中、罪人の如く立たせられた五年生の一部、真弓達――声なく打ち沈んだ。

『それは一同が相談して文章を作ってゆきました、合作の宣言文です』

気の利いた勇気のある一人が口を切るとほかの者達も助言した。

『そうか、おおぜいで智慧をしぼって書いたというのですか、よし、そんなら宣言文をかいた責任者は、同盟に結束した全部が負う筈ですな』

教頭の男の老先生が一同を睨みつけ、後さらに、

『そんなら、この宣言書を刷った、謄写版の機械をどうして手に入れたか、それはどこから誰から借りたのです』

あっ！　真弓は胸をどきんとさせた。この同盟になんの関係もない、通学生の三年級の酒井さんから、個人的関係から借り受けた、あの機械だ。もしも、その貸し主が酒井さんだとわかったら、大変、酒井さんは取り返しのつかない、うたがいと損害と罰を受けなければならない。三年

級第一の勉強家、成績は一番、品行は方正という折紙つきで、教員室中で評判のよい、あの人がついにひどい境地に落されてゆかねばならないのだ、神よ、守らせ給え！　真弓は顫えた。

『あの謄写版は誰から借り入れたものです』

再び問いただされて、一同顔見合せた。あの機械を誰から手に入れたか、それは真弓一人知っている事だった。あの時真弓は、『いいところから借りる事にしたから』とのみほかの人達には告げておいたのである。

『存じません』

『存じません』

異口同音に皆は答えた。ほんとに彼女達は知るよしはないのだ。真弓も胸顫わしつつ『存じません』とのみ言い放った。

『誰も知らない、そんなわけはない。そんなに嘘をつくなら、ほかの生徒に聞いて見る、もちろん五年生以外の寄宿生は何も委しく知るはずはないが、あれほどの重い機械をともかく運び込むのは眼につくはずだが――今週の受付当番は誰でした、その人が知っているだろう……』

『佐伯でした』

舎監が口を出した。

『佐伯を呼んで聞けば、わかります、あの子はこんどの悪い騒動に始めから無関係だったのですから、正直に言いますから』

一人の先生は、佐伯さんを呼びに出られた。ああ、もう、とても駄目！　佐伯さんを呼んで来れば何もかも露れる。酒井さんのお家の小僧があの機械を持って来たのも、受け取ったのが真弓

であった事も、もう、皆何もかもわかってしまう。
万事は終った！　絶望！　絶望！　退学！　放校！　落ちゆく所はそこだ、そしてあの罪のない酒井さんも巻き添えになってしまうのだ！　真弓は観念した。眼を閉じぬばかりにして……
扉（ドア）が開いた。先生に連れられて佐伯さんが入って来た。心持蒼ざめた面を伏せて……
『佐伯さん、あなた受付当番の時、謄写版の機械を誰が寄宿舎へ運んだか知っていましょう？』
教頭の問いを受けた、佐伯さんは瞳を伏せた……一秒……二秒……その人の唇が動くとともに、真弓と酒井さんの悲しい運命はきまってゆくのだ！
『佐伯さん、誰が機械を届けて誰が受け取ったのです？』
教頭は再び問う――佐伯さんは瞳を伏せしまま、思い切ったらしく答えた。
『あの私忘れてしまいました』
佐伯さんは、はっきりこう言い切った……
『忘れた！　あなたにも似合わない、へんですね』
教頭は眉をひそめ首をひねった。
『忙しかったので、忘れてしまいました』
佐伯さんは再び口を開いて、面を伏せた。
『事は未然のうちに発見されてしまったのだから、何よりの幸いです、今回は訓戒の上おだやかに処置します』
白髪の校長が立って、沈痛な面持で、こう命令する如く言われた時、生徒達もさすがに涙ぐんでいた。

その夜、自習時間の終った時、真弓は佐伯さんの姿を探し求めた。彼女は部屋にはいなかった。ほうぼうさがしまわると、彼女は寄宿舎の庭の楡（にれ）の木陰に一人佇み、何か黙禱しているのだった。

真弓は走りより、そして彼女の前に膝まずいた。

『佐伯さん、ありがとうございます、よく私どもを助けて下さいました、私は心から心からお礼を申し上げます』

真弓の声はおののき涙をさえ含んでしまった。真弓のこの言葉に、佐伯さんはかぶりをふりつつ真弓の手を取り起こし立たせて、

『いいえ、お礼を仰しゃっては下さいますな、私は私はただ、師を偽わって罪を犯した弱い人間なのです、今私はここで一人ざんげの祈りをエス様に捧げて悲しんでいるのです』

と真実悲しみの色を湛えて彼女は言う。

『おお、何が罪です、何のざんげの必要がございましょう、あなたは恨みある者をも助け救って下すったのではありませんか、美しい立派なその行いの前に私はこうして跪（ひざまず）いてお礼を申し上げたいのですのに……』

真弓のそう言う言葉を打ち消して、佐伯さんは言った。

『いいえ、少しも立派な行いではございません。私はただ、あの酒井さんを恐ろしい責めに落したくなかったばかりに……クリスチャンにもあるまじき醜くき偽りを先生方に申したのです……私は私は……酒井さんを今もなお深く深く愛しているのです。報いられる事なき愛とは知りながらも、弱い私はやっぱりどんなにどんなに愛して今もいるでしょう……そして……そして私は今

日みずからのその断ち切れぬ愛の為に、神を汚して偽りを誓ってしまいました……私は、はずかしいはずかしい弱い弱い人間です……』

佐伯さんは、かくあえぐ如く言い続けて、とめどなくはらはらと涙をふりこぼした。おりしも月は淡くみ空に楡（にれ）の木蔭を蒼白く照らして……おお！　真弓の心臓は破裂せんばかり、思わず地にひれ伏したくなった。

ああ、この烈しく強い清い愛よ！　その愛の前に、真弓の愛はあまりに小さくあまりに低く、ああ、あまりに貧しく弱い！

おお、みずからに恥じよ、恥じよ！　真弓は己れを打ち倒すほど烈しく血の流れるほど鞭打ちたかった！

『……許して下さい……許して下さい……』

真弓は佐伯さんの前に泣き伏した。

その翌日、真弓はゆうべ一夜を泣き明かしつつ、かきしたためた手紙を黄いろい封筒に入れて──酒井さんに渡した。その手紙はこうした言葉で綴られたのである。

綾子様、

もう、あなたを今宵は、呼びなれた、いとしき私の妹よと呼びかける事は許されないのです、神様もそれをお許しにはならないでしょう、おお、私は今まで正しい魂の眼覚めを知らず、盲（めしい）のままに動いていました。佐伯様があなたにそそがれる、あの深く清く強き純情の前には、私の愛の力などは、ただ一つの小石にも足りぬ貧しく弱く価値なきものであるのを知りました。私は恥じます、悔います、あやうくあなたを恐ろしい落ち目に会わせようとさえしたのです、それを救

われたのは、あの佐伯さんの変らぬ強き愛の力のためでした、綾子様、あなたを真に愛す人は佐伯さんよりほかにけっして無いのです、私の言葉を信じて下さい、さらば、綾子様、この最後の手紙とともにお別れいたします、さよなら、美しき君よ、いざ、さらば……御身と佐伯様の御幸福を祈りて！

月きよき宵　真　弓

真弓は、校内でもみずから身体をかくすようにして、酒井さんと会うまいと注意していた。ある日、酒井さんから一つの手紙が送られた。

真弓姉様！　去りゆきし人をも今、なお綾子はこうお呼びするのを、お許し下さいまし、先日のお手紙はあまりに悲しゅうございます、仰せのことは私わかります、けれど、愛は理屈ではございません、真弓姉様、佐伯様の愛に報いよとのお言葉でございますけれど綾子にどうしてみずからを欺くことができましょう！　おお、お姉様、真弓様、朝（あした）に夕（ゆうべ）に慕（したわ）しの君の御名呼びて思いに悩む子を、もう一度み胸によみがえらせて下さいませ。

月影欠けゆく頃　貴女（あなた）の　綾子

この文を掻きいだき真弓はあわれ身も世もあらぬ思いに幾夜を泣き明かしたであろう。けれども、あの月の夜の楡の木蔭に立ちし佐伯さんの気高くも清らかなりし言葉を思うと、いかに悲しくやるかたなくとも、唇を嚙み締めても、再び酒井さんとどうして交りえよう。思い切れよ、琴の絃（つる）をば断つ楽人の心にて、再び会わじ文もかわさじと心に誓いをたてて、酒井さんを避け切ってしまった。

——夏休みはやがてきた、真弓にとっては女学校時代の最後の思い出多かるべき夏休みだった。そして、その休みは佗しくも悲しく、ただ一人の別れしひとへの思い出と断ち切れぬ恋しさに嘆く日々をもって埋（うず）められた。

やがて初秋（はつあき）はきて、二学期になった。力無く学校へ寄宿舎へ出て行った真弓は、それからひとつきたっても、ふたつきたっても酒井さんの姿を見出せなかった。

『あの方、また肋膜がいけないんですって、もう学校もおよしになるのよ——』三年の生徒がこんな事を言っているのが真弓の耳に恐しい征矢（そや）を射るが如く聞えた。

クリスマス近き冬に入って、ある雪降りつもる日の午後、三年級の生徒が受持ちの先生に連れられて、雪を踏んで、課業を休み校門を出でゆくのだった。『今日三年に何かあったの？　この雪の降るのに、出かけて』と、いぶかしみ尋ねると、三年の人は答えた、『あの長く休んでいらっした酒井さんが、とうとうおなくなりになったの、今日××教会で告別式があるから、クラスの人が出かけるんですの』

——その答えを真弓も伝え聞いた。『私学校を止したら死んでしまいますわ』かく過ぎし日に仄暗き図書室の中で言った、その人は、あわれ、今は逝けるか。その宵、クリスマスの合唱の練習が雪明りを受けた講堂に行なわれた。その講堂へゆく途中の廊下で真弓は暗いひしがれた胸の痛みに堪えやらで、つと暗闇の灯のない雨天体操場のコンクリートの冷々する床に立ち、冷たい白壁に身を寄せてすすり泣いた。ああ、綾子さん、幾度呼ぶとても永劫に返る日のなき、その俤（おもかげ）よ！　真弓は悲しみに打ち倒れようとした、その時、つとその肩を支えて、『平さん！　私

も御一緒に泣かせて下さいませ』かく言いて、つとより添う人影、窓越しの雪の反射に見返れば、おお、佐伯さん、その人……

ひさしくまちにし……主はきませり主はきませり……

はるかなる講堂のあたりから流れくる讃美歌合唱のひとふし……真弓と佐伯さんは思わず手を犇（ひし）と取り合って、今ぞ共通した同じ悲しみ同じ嘆き同じ思慕のもとに、その心を結び合せる悲しさに、より添うた――。おお、神よ、神よ、我らの主よ、か弱き人の子はみ心のままに、ただみ心のままに……二人の少女（おとめ）の頬を熱い熱い涙がひとしく流れ下った。

× × × × × ×

その翌年の春、ある日の夕（ゆうべ）、街はずれの基督（キリスト）教徒墓地の中なる、ひともとの新しき十字架の前に、一束の白と淡紅のスイートピーの花束がささげられて、夕風にかぼそき葩をひるがえしていた。その花束の中に、はさまれた一枚の名札には、

綾子様の御霊（みたま）に、　伴真弓、佐伯初代

としるされてあった。

あわれ、そのあけの朝、真弓と佐伯さんは、相伴なって、駅頭の汽車中の人となったのである。学校を卒業したこの二人はいずれも志を抱いて、真弓は東都の専門学校に、佐伯さんは関西の女子神学校にと、笈（きゅう）を負うて――。このうら若き二人の学業の成就を天にありて美しき子のみ霊はあわれ守るらん。

# 白木蓮

## 一

早春の――あのうら儚ない銀燻（いぶ）しの空のかなたに真白い象牙を螺鈿（らでん）したかの如き、おおらかな葩（はなびら）を不思議な高貴な感情を指して咲き開く白き木蓮――いみじくも美しいその姿のただに忘られぬのみではなく、桂子にはその胸ゆえに――泪多き子と運命を受けし胸ゆえに――忘られぬ、忘られぬ、その思い出――

……桂子が女学校の二年のおり、寮でも小さい方の組で、おなじ役廻りでも、どちらかと言えば甘えたがる方へ廻りたがる年頃――鈴蘭の君、白薔薇の君などと、ひそかに我が思うひとに冠して憧れ悩むのだった。桂子もそのひとの一人をひそかに持っていた。大槻三千子――こう仰しゃる御名だったけれど――やはり白木蓮の君とお呼びしたかったままに――なぜに木蓮のその花の白きを限りしか？

寮舎の庭にひともと、その梢があった。象牙の螺鈿の葩が咲く頃おい、それは一年級から二年へ始めて進級を見る季節の前だった。ふとその方のすぐれた姿をその花のもとに見出したのは

──。それから胸去りがたき面影となって、それなり二年目の早春、もうひとつき余で三年生になろうという時になった──。

　寮舎の夕べは、試験後さらに長閑（のどか）に和やかなGood timeとなっていく。

　火のもとを離れた心地の日に日に心強く思う頃ゆえ──少しの風ぐらいいとわずに皆外へ──寮の庭へと出るのだった。

　学年末の試験後は──ちょうど何かある恐ろしい災厄後、同じ受難の境地にいた人達が妙に人なつっこい親しみを感じる如くに──試験という黒い魔物に極度に脅やかされた生徒達はあたかもそれの位置だった。その感じの中にあるからには、一人二人、或は四五人のグループに別れておのおの好き勝手な気持に動きはしなかった。団体的の遊び──それは期せずして皆の願うものだった。

　そして誰が言うともなく種々の遊戯が考え出された。子取ろ、盲目鬼、かくれん坊、宝探し、半巾（ハンカチ）落し、球送り、銀貨かくしのたぐい、幼稚園や小学校に還元した騒ぎで笑いさざめくので……

　その遊戯のうちでも一番人気があったのは、半巾（ハンカチ）落しだった。なぜ人気があるのか、その理由（レエゾン）はたがいに考え合わすれば、おもはゆいことだったけれど……その遊戯には妙な気持がついて廻った。鬼になった子が、半巾（ハンカチ）を落す人を選ぶのはその思いびとを先にするならわしを誰となく伝えたままに、そういう流行はいい気になって、いち早く真似をしたがる子達は我れがちにそれを行った。中にはそういう事がしたいばかりにたびたび鬼になる事を願う人さえあった──その日

のゆうべも、『半巾落し、しましょう』と桂子達は寮の庭に出た——その始めに珍しく桂子が鬼になった。

　落す半巾を桂子は持ったままはじらった——心に怯けて恥じ入る影がさしたからである。——輪をなして囲むその中に思いを寄せる白木蓮の君が立っておられたゆえに——早くも心おびえて胸のあたり熱くときめくのだった。——期せずして何か誰かの唇を突き出でたマーチの歌につれ桂子は半巾を捧げて人の輪の中を走り歩かねばならなかった。

　同じ落すならあの方の後ろに、こう思うだけでも十分に上気してしまった。

　憧れの君の後ろに白い半巾を人知れずそっと落して戻るその恥多き冒険のやるせなさ——けれども桂子は思い切って、それを行なった。

　半巾を落された人はやがて我が後ろに半巾のあるを知って急いで半巾を拾って輪の後ろを走りゆく——我れ思うゆえに半巾を落されたと知るからには、我もまた君を思う」とその優しい心持を指し示して再び半巾を元の鬼の落し主の背後に落すのが無言のうちの黙契であり、その遊びの中にも誰もが大人びた微笑の中に約束して許す行為だった。——桂子は眼をつぶりたいような気持で、その返報の前に立たねばならなかった。——その人は確かに半巾を持って一たび二たび遊びの輪の中を走った。けれどもその人の手の半巾は桂子の後ろには遂に落されなかった。

　——その人に半巾を落された人は——桂子と同じ級の、美少女と噂の高いKさんの背後だった。——Kさんが得意らしい微笑を含んで自分の背後の半巾を見出して走り出る姿を認めた瞬間桂子

はそのすべてを知ってしまったのだ。――Lost Love――桂子はそれに似た感情を持たねばならなかった。

打ちひしがれた心の持ち主――桂子はその日から寂しい寂しい子になった。寮にあっても教室にあっても、もの言う術もいつの世のどこにか忘れきた哀れな影薄い子となってしまった。破れし我が憧れの心よ――このみずからを救うものは、ただひたむきになって勉学があるばかりだった。桂子が級切っての勉強家になったのもその時からだった。

寮の庭の木蓮の白き葩がはらはらと散るゆうべ――桂子は庭の面で打ち騒ぐ友のさざめきを外に一人机に向かった。散りしく葩は、あの心の冷たい人の落す半巾の影の如くに眼に映じて、あまりに佗しすぎたゆえ――窓のほとりに眼をやるのさえ心おびえたのである。

## 二

静かな絶望的な感じは、時にしてその人に新たな行路の展開を与える――その意味では桂子には一つの転機が起きた。

彼女は自分がひそかに求めている友情そのものに努めて無関心になり切ろうとした。

人と人との交渉のさても細やかな陰と日向の交錯――桂子にはもうそれは、堪えがたい苦痛そのものだった。

失いしものの――返らざるを知るゆえにいよいよその悲しみは冷たくなりまさっていく。

遊びに失せし一枚の
歌留多（かるた）は町に得らるべし
その夜の君に失える
わが心こそわりなしや。

桂子は寂しくやるせなかった。

いずこにか心よりて、あわれ慰むによしなきその傷つきし心を、せめて逃れさせるのは、ただ向こう見ずに眼覆いをなせる馬車馬に似し勤勉なる生徒となるよりほか術なかった。そのことは、それと同時に桂子を一つの野心にまで追い込まねばならなかった。

桂子のその頃抱きそめた野心は――最優等の成績を持って卒業しよう。そしてさらに、語学専門の学校に入学してそこをも優等の成績で終ったら、亜米利加（アメリカ）の大学にもの学ぶ身となりたい――ああ思うても見よ！

米国留学生の一語のいかに栄（はえ）あり、輝ける美しい花の冠に見えたしことよ！　そして、それへ自分の生涯の目的の基礎を懸けて、未来も生命もすべてを懸けてと思いつめたのだった。

それは心悲しきものが強いて一つのものに焦点を置いてほかに心を散らすまいとする哀れな努力への逃避でもあったのだ。かくて桂子は、少女にして早くも甘くかぐわしく明るい微笑より離れゆかねばならなかった。

校庭に華やげるざわめきの賑わう時、一人図書室の隅にノートを繰りひろげた。――一週間に一度の教科書からの解放の喜びに躍り上がるべき日曜日をさえ彼女は、型の如き復習と予習に背

を丸めて暮した。

ああ、若き少女の歓楽は彼女を遠く見捨てて行ってしまったのだ。彼女には年頃に似気ない苦労が、その肩に載せられてしまったのだ。寂しい彼女！　多くの友も彼女の周囲を避けてしまう孤独、孤独、そうだ、そこから我が力よ湧き上れ！　きっと成し遂げて見せねば！　桂子は人無き深夜の夜の床で一人唇を噛みしめた。――ああ、しかしこの瞬間、その後から直ぐに潮の如く湧き出づる無限の寂寥よ！　これをどうしよう、ひたと眼はつぶれども寂寥は青白き衣を纏うた幻影となってまつわりくる。

袖で、袂で払わんとすれども去らぬ煙の如く雲の如く湧きのぼり身を包む寂しさよ！

桂子は隠れては泣いた。人知れず泪を流すかかる夜の桂子を哀れ誰れが知ろう。誰が眼にもエゴイスティックな小心翼々とせる勉強家で味も素気もない一個の点取虫とより見えなかったはずである。泪を隠し愁いを秘めて、ただ一人群を離れし離れ鳥の侘しさ。胸の奥には熱い熱い人思う火の我が身を焼くばかりに燃ゆるを押し静めさり気なく物学びする子の少女の日は暗かった。

廊下のゆきずりに、校庭の中にふとその人の姿を桂子は見出すとき、見るべからざる者を見たる罪の報いを恐るるものの如く、慌てふためきて視線をそらして、ひそかに顫えた。《おお力ある美しの君よ！》大槻三千子その人にこれは贈る言葉だった。《おお、かくも君の冷たき心は我れを変え給いぬ》と――その力ある美しい人も、業終りて学校を出でられた。しかし桂子には一度過ぎし日の悲しき心の傷の癒ゆる日のまたあるべしとも思えず、かたくなな人といれられぬ性格の持ち主と噂されしままに早くもめぐりきし春には学校を出づる身となった。それからの四年を桂子は都に出でてただ勉学の奴隷となって生きたに過ぎない。――されどもやはり時におり、

未来への希望の矢を懸けた弓弦の如く張りつめた胸の中に、忍びやかに忍び込むものがあった。それは春浅く漂う淡藍の空に白日の夢を捧げて銀の葩を螺鈿せる花の姿――これやこのあわれ白木蓮――この葩の蔭に立った面影――かなしき思い出は年を経てさらに新しく心傷むを覚えるのだった。――

いや古りて大理石はいよよ真白に、
いや古りてかなしみはいよよ新らし、
いや古りていや清くいよよかなしく。

――白秋――

一脈の暗影はかく都の学舎にある日も桂子にまつわり消えずかくも、あったものを！

桂子はひとり悩み一人強くよくぞ学んだ――その悲しい努力に「報い」の日がめぐりきた。都に四年の業終えし後、奨学金は桂子のために与えられ彼女をして海外留学の栄を冠らせようとした――人の思うという一線の路のさても不思議に通じるものか――ああ約束の日がきた、みずから誓いみずから果さんとせし約束の日よ、それはとうとうきてしまったのだ。今や海を渡りて、異国の学舎に行く身となったのだ。桂子がこの目的への手続き一切を了せし後、しばしの別れを告ぐるため、郷里の父母を訪れたのである。故郷へ錦を飾る――古い言葉をそのままに、桂子は郷人の迎うる所となった。

郷里の女学校こそ、桂子には忘れ得ぬ母校であった。桂子をその校より出せしことの喜びの余りその留学に際して盛大な祝賀を兼ねその送別の集まりを挙げるとて、春四月の同窓大会は繰り上げられてにわかに桂子のための会が開かれた。その日の集いの女王として、桂子は晴れがましい位置に立たされた。校長は開会の辞に先立って、我が教え子の中より桂子の如き才すぐれし女性を出せる身の喜び、校の誉（ほまれ）を繰返してみずからの子女薫陶のつとめ空しからざるをみずから描きみずから讃してみずから酔える面持だった。会を代表した幹事は立って、桂子の在学時代の人にすぐれし勉強振りを賞め讃えた――昔は桂子を目するに「点取虫」のニックネームを贈って陰に嘲ったことには幸いにも健忘症であった――さらに来賓の某氏は起立して曰く（いわ）「現代の女学生諸嬢はよろしく桂子女史を模範の人物として勉学せられよ」と述べた――終りに桂子は今日の催しに感謝の辞を送るべく立った。拍手は満堂に風の如くに湧き上がった、桂子は静かに壇上に上がった。――桂子は謙譲な言辞をもって身に集まる讃えの言葉に報いんとした。満堂の視線は今語らんとする栄ある才媛の姿へ、尊敬の念を捧げて集められている――桂子の胸は高鳴った――彼女はみずからが志す未来への抱負をも語り出でんと瞳を輝かせた。その瞬間――彼女は、はっと胸を打たれて顫えた。壇上の身にあまりある栄えに包まれて昂奮した彼女は、この時冷たきものにちかと痛くも触れた。触れてはならぬものに触れたのである――桂子の言葉は九天の高きより泥土（でいど）にまぶれて沈むに似た。彼女の明るく、喜びと一種の優越感に輝いていた双の瞳は曇ってある悲しき影を落した。

　桂子は晴れがましき女王の位置に似合わず、力無く肩を落して壇を下りた――壇上の彼女の瞳にはからずも映って、おお、彼女をかくまでに打ちしものはなんであろうか？　それは――大槻

三千子その人の姿だった――広い会場にぎっしりつまった会衆――正面の会員席ずらりと並んだその後ろの方の入口、扉(ドア)の傍近く――当日の幹事が赤いリボンの徽章をつけて並んでいる――その中にも目立って美しい面影　一つ――幾年の隔てはありて、今は　一人の子の母ともなった身の――さらにあでやかに美しいその人の姿、――おお、会ってその君をかく呼びぬ　力ある美(うる)わしの君！」と、げにもその人の桂子に与えた、少女(おとめ)の日の情(つれ)ない素振りこそ桂子をして今日の路をとらせたのではないか！

ああ、げにも力ある君よ。力ある君よ。しかも今日の集いに、幹事の群に加わりて立つ人生の皮肉さよ！　桂子は首うなだれて、席に沈んだ。やがて会は終った――桂子は自分を取り巻いて祝いの言葉、別れの言葉、打ちまぜて語りかける人々の包囲をいち早く逃れて、ひそかに寄宿舎前の校庭に出でた――講堂から響く雑音を遠く去った校庭のほとり、まず桂子の仰ぎ見たは、おりしも早春の空に咲き乱れた白木蓮――銀(しろがね)含む白象牙の花弁(はなびら)はろうたけて梢に冷たき気品を放っている――ああ、この花――この花――過ぎし幾年の間、都の寮舎の幾夜の夢に、あわれ通いつらんこの花、かの面影。

胸引き締むるばかりの切なる感慨に打たれつ、低徊去るに忍びかぬる花の梢のもとよ。

『まあ、ここにいらしったの、皆さんがさっきから探して大騒ぎですのに』

思い出に耽りつつ立つ桂子の後ろから、ほがらかな――声――その声にも覚えあり――見返らずと知るかの君、かの君――白木蓮の君――と花の姿になぞらえて慕いつつ、しかも桂子みずからの捧げし愛は報われずして、しりぞけられしままに、胸破れし子の悲しみのいかに堪え難かりしぞ。その苦しみに唇嚙み締めて勝ち堪えんとするばかりに、ひたむきに己れに鞭打ち今日の日ま

で喘ぎつつただ一線(ひとすじ)の寂しき修業の道を眼を覆える馬車馬の如く、いっさんに、ただいっさんに馳せ来たのだった。そうするよりほか術無き程の影うすい寂しい子だったゆえに——あわれこの運命の最初の出発点に我れを立たせるを　我が身ゆえに」と、その白木蓮の君知るやいかに、いかに、あわれいかに！　知る由あえて無ければこそ君は何気なくその花の下——昔と変わりなき麗しき面を見せ給うぞ！

『寄宿舎にいた頃、よく夕方になるとこの辺で遊んだものですわね』

　君は曰(い)う、あわれ曰う——

『あの——あの頃半巾(ハンカチ)落しをしたのを覚えていらっしゃいますか——』

桂子はそのかく言わんと先き立ちて早くも胸ふさぐ心地した。

『ほんとうに早いものですこと、——もうあちらへお出かけになるなんて——寄宿舎で御一緒だったのは、ついきのうのことのように思われますのに』

三千子、そのひとも感慨ふかき面持にてかく言えば桂子は力無く——　『ええ、ただ勉強してみたいだけのことですの——あっちへ行ったってどうなるものでもないのですけれど……』

『でも——お羨ましい——私など、ほんとに——学校にいた時がやっぱり楽しかっただけですの——世の中へ出て見れば佗しいばかり……』

　美しき人は、かく言いて、みずからの姿も佗しげに袖をかしげるものを——ああ、美しの君もまたこの世寂しと感じ給うか、わりなき事も知る身とはなりしと仰せ給うか……あわれ、思えば

つらきは我れひとりの世にもあらざりし、桂子にはその時新たなる哀愁が胸に湧き出でた、静かに、静かに——

その哀愁はたとえば苔むす岩根を潜りて出ずるけがれ無き真清水の細き流れにも似て澄み渡り、さやかに清かった。——ゆるし合う心、許し合う心——同じ地に生きる人と人との結縁のありがたさ——なつかしさ——しかしてこの寂しさ——。

君を思いて受けられざりしままに、この苦しみゆえに、悲しみゆえにかくなりし時の過ぎ越し路よ、君に告げんか——けれども桂子は生涯黙して終るべきものと唇を閉じた——。

数日の後には祖国を去って、遠く海を渡りて波まくら、ゆられゆられて行く外国(とつくに)——そこにも母国の空に咲くこの花の面かげ寂しく我が胸に描かれて、消ゆること無き白日の夢を浮べようものを——。桂子はいつしか、あつくも濡れた泪の瞳をあげた——そこには真白の花、梢たかく燻銀(いぶしぎん)の大輪あざやかに冷たく——。

我れ語らず、君もまた黙してあり給う——

花もまた黙してぞ仄匂う梢の影——

ああかくして早春の黄昏(たそがれ)はしずけくも——三つの生命あるものを淡白(うすじろ)く柔かな靄の中へ包もうとするのだった。

## 桐の花

### 一

礼子は待っていた。かれこれもう一時間になろうとするのに、多美子の姿は見えなかった。この春お茶の水へ入ってから、入学当時の引き締った忙しさやら、いろいろな刺激から、心に潤いの無い、慌しい日を送って、とうとうこの正月まで、多美子に会う時がなかった。

会わないとは言え、それはただ多美子の顔をじかに見なかったと言うだけのことで、心持の中になら、それはもう――ほんとに、どんなに、たくさんその人の面影を胸に描き出して、毎日のように囁きもし、あの……接吻もして……心と心は、ひとときも離れてはいないつもりだけれど――でもやっぱり無理をしても会いたかった。怠りがちな日記の中にだって、不思議とあの人の名前だけは何かにかこつけて、毎日のようにかいてあるほど――思えば、やっぱし、やっぱし、会いたかった。はずかしいほど会いたかった。

その思いがようやく叶って、今この初夏、ふたりにとっては思い出深い郊外の小さい省線の駅で会う約束ができたのである。それだって、もしも多美子の方で、あんなにまで手紙の返事をなまけさえしなかったら、ついぞの事に、ゆっくり暇のある夏休みまで二人の相会う日はのばされ

てしまったかも知れぬ。まったく礼子が、こうして日曜日一日つぶして多美子と会うため出掛けるのは、かなりの無理もあるのだったから――。

学校が学校だからせっせと勉強主義でなんでもかんでも詰め込んでゆかねばならぬ。女学校時代とちがって、色彩が沈んで寂しく、そして重たるい教室の空気にもよく堪えてゆかねばならぬ。小さい兄弟がなかったら、父がもう少しどうにかできるのだったら、もう少し自由な気持で文学に親しめる生活に入ってかたわら語学だけでもやりたかったゆえ、なにもああした高等師範などという四角張って融通のつきそうもない学校へ入るつもりはなかったのだけれど――礼子の環境はそういう路を取るより止むを得なかったのである。

どんなに寂しくとも佗しくとも、やはりひとかどの宿命論者となって、定められた自己の路を辿りゆくより術ない礼子だった。

その礼子の気持をなにもかも知って、背後から優しい友情の瞳で、じいっと見入っていてくれる多美子だった――礼子はその友を信じるゆえにこそ、唯一の救いの的を持てたのだった。

『あの人に思われているものを』――相思う子の幸を知る以上、この上何を神に望み得よう。なにものにも代えがたい、あの方との長い友情の交歓――それこそ神が恵まれた礼子への一番立派な贈り物であるべきはずではないかと――。

たとえば、海路(うなじ)はるけく航する船の彼岸の灯台の灯を目当てに羅針を正しく一方に示して静かにただ一線に水脈を引いて、夜も昼も波を分けて進みゆくに似ている礼子の生活だった。

兄弟の多い貧しい家の暮し向きも、母の病む暗い家の憂鬱さの中にも、なお、かつ、よく忍び得るのは、礼子にこの一つの羅針の目標があるからだった。言うまでもないこの目標の灯こそ多

美子その人だった。さても麗しい灯の人よ！

　礼子にとっては生れてから十五の夏まで育くまれた関東平野の故郷の村をゆえありて、一家をあげて、立って都へ上ると同時に、礼子は府立第一の二年の補欠試験を受けて入りえた。

　村ではあんなにまで広い家うち、古い立樹の茂る寂しいほどの庭を控えて暮したものが、にわかに変る借家住居、それも大都市の住宅難で、ようやく探しあてられた巣鴨宮仲の奥の安普請の小さい家に、家うちの気分とは溶け合わぬ田舎風の古めかしい家具など、ぼそっとした風に置かれて仄暗く――一家初めての都会生活の不安に落ち着きえぬ気持にうす寂しい――。朝な朝な非常な混雑を告げる大塚終点の電車――だれもだれも、朝の時間の制限を持つ生活の人々は、我れがちに他を妨げても敢えて車上の人たろうとする――。そこにも一種凄惨な都会の生存競争が、痛ましい陰影を落していた。県立の女学校の寄宿から土曜ごとに母います家を慕って、帰りゆく村落の円太郎馬車のあの長閑（のどか）な感じに比して、それはまたなんという恐ろしい相違であったろう――。いささかの余裕だに許されぬ人間生活の逼迫した都会の街頭の光景――幾台も幾台も、自分は乗りえずして、空しく過しやる電車を見送りながら、礼子の心は鉛の如く沈みゆくのだった。――でも、自分より早く家を出でて割引電車にぶらさがって、勤め先へ出て行く父を思うと、沈みゆく心にも強いて鞭をあてて、強く強く生きて行かねばならぬはずだった。いささかの罪ありて、村を追われるように妻子を伴って、生れ故郷の祖先の地を後に寂しく頼り来た都会で、父は慣れぬ勤めを一家の糧のためにあえて行うのであった。電車に乗るのも、おいおい礼子には、もの慣れてきた。都市居住者の重税の一つと思えば、それで好いのだと観念もしてきた。学校も知らぬ地から補欠に入った身の寂しさ、影うすく教室の片隅に身をすくめたのは、大きな鳥籠の中

へ一羽山から捕われて入った紅雀が、唄もなく止木のすみに翅(つばさ)かためて、すくんでいるにも似た。勉強だけはしなくては——こう思うと、その一点へ気を集めて、他へは無関心でゆけるし、それに第一よい成績でも得ている生徒で無いかぎり、田舎から補欠で入った影のうすい子の無視される悲哀をいかになす術も無かったから……。

親しく語る友とても無い学校——義務的な感じで毎日通学する寂しい礼子は朝夕の電車の中で佗しい瞳を伏せがちだった。

それでもなおその瞳に折々うつったのは、自分のゆく電車の途上、同じような時間に乗り合す同じ級の人だった。美しい人ゆえと礼子にも早くからその人を覚える事ができた。小山多美子——秋の文芸会に二年を代表しての華やかな姿を眼立たせた人である。同じ教室の中で顔を見合せていながら、補欠で入った身の佗しさ、まだ一語だに言葉を交し合わなかったが、その人の印象は強かった。大塚仲町へ電車が差しかかると礼子は満員の車から瞳を窓外に運ぼうとした。仲町——そこの停留場に多美子は立っているのだから。——今日はお見えにならない——こう思うとなんの約束をした身でもないのに、ゆえもなく寂しかった——。

ある時は仲町辺で車庫の方へ歩いてゆくその人の姿をちらっと見出す時もあった。

放課後校門を出て電車路へ立ちつつ、もしやと当もなく、ただその人の偶然に来り合わする事もがなと願うような気持を抱いて我れにもなくみずから内を省みてうす赤くなる事もあった。

かくて寂しい礼子の学校生活にも一点の灯があった。それは麗人多美子の俤(おもかげ)を朝夕の電車の中に見出す事だった。美(うる)わしの灯の人よ！

# 二

五月がきた、――礼子が都に上って初めての初夏を迎えるのだった――あの暮春のやるせない重たるく饐（す）えてゆく空気の下から芽立つ緑の月。

礼子は逝く春に引き続いて、やはり愁いも深くもの思う子だった。

孤独と感傷――それがその頃の礼子の生活の基調（キーノット）として彼女の胸に薄青い嘆きの曲を奏でさせていたのである。

不活発な、メランコリーそのもののような子――それが礼子の様子だった。どうして学校で、そんな風采の人が光りえよう、礼子は依然として孤独だった。幼くて早くも人生の荒涼たる曠野に立つ気がした。

そんな時、いち早く礼子の魂を引きとらえて覆い切ってしまうのは――過去への愛着――だった。

現在にあまりの寂寥と涙を強いられるものは、追うに由なく再び戻すに術ないと知りつつも、なお過去の世界へ我が身を惜しまずに振り返えさせる――時はいかなる印象をも美しき鍍金（めっき）をかけてくれるように過ぎし日の事どもは、あまりになつかしくまたあまりに甘美の味に満たされてあったことよ！

礼子はみずから独り寂しく、その過去の追憶の古（ふ）りし酒壺から思い出の幻影の盃に掬みとって、ひとり涙して酔う子となってゆく。

礼子はいかなる事にかけても、みずから追憶の世界に溶け入る時ほど活気づいて、若々しい血の暖かさに、その瞳を輝かすことは無かった。今は礼子はあわれにも、ただ生きつつ過去の世界への追慕の情緒の露を吸うて秋深む草原に破れた羽根を痛む夏のかげろうにも似た身だった。

その時、彼女はゆくり無くも、学校の　彼女自身にとっては牢獄のように味気なく思われる）教室の中で、彼女は悲しいままなる追憶の甘く香(かぐ)わしい世界への陶酔をうる好機を得た。偶然にも作文の時間、与えられた題が『桐の花』――その時間中は嫌でも応でも級の人達の頭の中には紫っぽい桐の花が朧にかすかに仄かに――あわれにゆらぎつ、消えつ――描かんとすれば消える、かすれる、かき出せばもろくも散ってしまう――筆を持ちてまさに苦吟――罪なき桐の花をも敢えて恨まざるをえずで――。しかしその中にひとり礼子は救われた気持でその花に対しえた。

ゆえあればこそ――これやこの花、まさしく、それは礼子の過去の世界の奥津城(おくつき)のかなたの空に仄咲く花の影であればこそ――。

礼子はそこに五月の陽の踊る教室の明るさに今こそみずからの心の影を映じて過去への嘆きも思慕も心ゆくまで奏でられたのだった――。とりわけて、筆の才ありともみずからも覚えぬものを――ただその心に抱かれし熱情の齎(もた)らす不思議なるものの力は――彼女をして、一躍、ひとかどの若き詩人と化し終らしめた。――その日その一時間だけは――。

一週間を経て同じ水曜の午後の作文の時間、――いつものように先生の講話とともに選び抜かれて読まれてゆく二、三の秀逸の模範文、真先に先生によまれた一文があった。

我が家の土蔵の陰にこの樹ひともと立てり。亡き祖父君の捨て植えにされしものというに、そのかみの植えし人逝きて幾年（いくとせ）、やや高く、枝豊かに張れり。五月となれば、梢に神楽舞の鈴に似たる紫の花、陽に照りて、香ぐわしく仄匂う。

ゆえありて、我が家は祖先の地を去りて、都に上るとて、去年の初夏、父上家屋敷を人に売り給えり。その日は土曜日なりしかば、われは学べる街より帰りゆきぬ、つねにはこの土曜日の午後、母上にあいまつらんためと、小さき妹らの可愛ゆき顔みんとて帰るものを、あわれ、その日は、永久に、今日を限り離れゆく吾家（わがや）への別れを告げんゆえなりき。途上の足重く、愁いは我が胸を閉ざしぬ。

我が家の門に至れば早くも内外なにやらん物騒がしく見知らぬ人往来（ゆきき）せり。母上は、仄暗い厨（くりや）の柱に小さき妹を負い給いて、なに思い給うらん、佗しげに立ち給いぬ。『母上』と我呼べば、初めて気付き給いしか、『今帰りしか』と我を見守り給う。その御ひとみに泪浮びしを見るより、胸せまりて我は一散に裏手に走りゆきぬ。ゆきし所、二棟の土蔵あり。そも今は、人の手に渡りて土足にて踏みゆく扉の奥寂しげに空きて、中なる家財のあまたもともに売り払われしと見ゆ。見るものあまりに佗しければ、我は力無く土蔵の白き壁により添いぬ。妹らと莚（むしろ）拡げて、おままごとせしなつかしの土蔵の陰よ、思えば泪わりなく我が頬を流れて――あわれ、その悲しきわれにまつわりて、甘く儚なき花の香（かおり）の泪に沈む子をめぐるを知りぬ――。濡れし瞳をあぐれば、よれば冷たき白壁に一樹の蔭を落して立つは桐の梢、紫の花葉蔭に盛られぬ。おおなつかしの花よ、汝（なれ）とも永久（とわ）の別れぞ、かく呼びて、梢の下（もと）立ちて仰げば、梢空高く初夏の新月（にいづき）眉細く銀にかかりて煙るが如き黄昏（たそがれ）、われはその梢のもとを、さまよいつ、佇み

つ、離れ難く、立ち去りもえで別れを惜しみぬ。今都に上りて初夏を迎えぬ、都の郊外のいぶけき住居、縁先に並べし縁日の草花の鉢いくつ、僅かに眼を慰むのみ、かの花の姿見る術もなし。ただ五月の青き空の下、我が追憶の悲しき夢の中にのみその影を現わしその香をめぐらす、悲しきはこの花なり、なつかしきはこの花なり。

これで結ばれている――教室がしいんとするほど静まって、皆この文章に魅されていた。『今度の課題ではこれが一番すぐれていました。全然主観的な書き方でしたが、それが立派に成功していると思います』と先生は二、三の文法上の注意など添えられた。――それからほかの文章を二つ三つ読まれたが、とても前のには及ばないし、その時間は一番おしまいの五時間目だったから、放課の鐘がなって、皆は書物を包みながら、がたがたと机の上の雑音の聞ゆる中に、

『悲しきはこの花なり、なつかしきはこの花なり――なんてほんとに好い』

『一体、どなたのでしょう?』

いつも作文はきまって読まれる、きまった顔ぶれの誰かれを物色する。謙遜しないで仰しゃいよ、私崇拝するわ』とおどける人もある。笑い声みちた級の中、しかしその隅っこに控えた補欠に入った礼子になんて誰も一顧も与えない。――田舎から出て来て都にその花の面影を忍ぶことならばまず手近にその人ぐらいにあてをつけてもいいわけだが、色彩のうすい子は、いてもいなくても黙殺されがちで仕方がない。――チョコレートをふだん召し上りすぎる少女達は、そういう時は、ちょっと、お頭（つむ）が働かないらしい……。

礼子はいつものようにさしうつむいて校門を寂しく出た――停留場で電車を待っていると、『江馬さん』こう呼びかける声音を耳にした。

自分の名をこうして学校で呼ばれる事すら、礼子には珍しかったから、軽い驚きに打たれて振り返ると多美子が、いつの間にか立って微笑んでいる。

『さっきの、あなたがお書きになったのでしょう？』多美子はこう言った。

それが二人の言葉を交した最初であった。

それから――二人は帰る夕（ゆうべ）、電車を一緒に待ち合せた。通う朝は、多美子が早ければ大塚の停留場に立っていた。礼子の乗ってきた車を見つけて乗り込んだ。多美子の姿の見えぬ朝は礼子が降りて一人待っていた――それなりで二人肩を並べて竹早町まで――そんな事もあった。

『あの大塚の停留所に、柳の木が一本あるといいわねえ』多美子はある日言った。

『なぜ？』

『だって――あのねえ、私が朝遅い時は、あなたが待ちくたびれたら、柳の枝に白い毛糸をちょっと結んでおいて下されば好いんだし、私があなたを待ちくたびれた時は紅い糸を結んでおくの――そんな約束ができるんですもの――』

美しい眼ざしで、そうした約束を懸ける柳の木を夢見るように言う――

『でも――柳の木が無いのねえ――』

礼子はその思いつきの実行ができないので失望した。

『ほんとに私たちで小さな柳の木を一本あすこへ植えましょうかしら！』

多美子のこうした言葉で二人は笑った。

これはそうした頃のある日の挿話である。
夏休みがきた時、多美子は信州の方の山荘に都の炎暑を避けて一家族と一緒に行かねばならなかった。
『私、どんな口実でも好いから、作って、夏中東京に残りたいわ——とても——とても、まるひとつき半も——あなたと遠く別れているなんて——とても——私我慢ができないの——』
多美子は嘆くように礼子にうったえるのだった。
『だって、仕方がないわ——』
礼子はこう言いながら、寂しく下うつむくより術はなかった。今の自分の家が、避暑などの夢想だになしがたい状態であるに反し、多美子の家がゆたかに夏冬を適当な地に暮せるという差異がある以上それはせん術もないことと思うゆえ——。
夏休みが始まると、多美子は兄弟と山荘へゆかねばならなかった。立つ前に、多美子は新しい二冊のノートを持って示した。
『ね、手紙は毎日かいてお送りしたいわ、けれども——あんまり毎日だったら、みんなにも極りが悪いようでしょう！　あなたからだって毎日欲しいけれど——ね、だから、これに書いて置きましょう、私日記の代りにあなたへの毎日のおとずれをかくつもり、日記をつけるっていったって——やっぱりあなたのことばかり、書いちまうのにきまっているんですもの——だから後生よ、あなたもこのノートにやっぱり私へのおたよりを忘れずに毎日書いておいて下さいな、そしてポストに入れる手紙は一週間に一度——七日に一つ——少し寂しいのね——だけど我慢しましょう、ノートに書いておくんですもの——』

多美子はひとりで、その計画をきめて、礼子にも実行させようとした。もとより礼子にはなんの異存のあるべきはずもなかった。

　二人が新秋の都で、再び相寄った時、手に手に一冊のノートを持っていた。始めの頁（ページ）から最後の頁まで、ぎっしりとインキの香（かおり）の匂うもの、それは互いにデジケートされたものだった。その中に一日も欠かしなしに、二人の思慕の心は流れ満ちていた。二人にとっては世の中の、どのような美しい詩集よりも貴いものの一つにそれが思われた。——二人の愛情は二人の中に一つの創造をさえ、こうして与えてゆくのだった。

　二人の夏休みはこうして三度続いた——礼子にとってはもう多美子は他の何物にも懸けがえのない生きてゆく目当だった。——美しき灯の君よ——君は我がかぼそき生の歩みをつづくる人生の灯であるものを！　礼子はかく称（とな）えかつ信じた。

　この春、二人は学校を出て、もう毎日相会う機会のないのを恨みつつも、手紙も互いによくかき、日曜日ごとにあう約束もしていた。——離れれば離れるほど、礼子には多美子がなおさらに貴く、慕わしさのまさりつのりゆくのであった。

　それだのに——それだのに——

　それに反比例して多美子からは音便（たより）は次第に遠ざかってくる。礼子も学校の仕事に追われて会う機会もなきまま、ただ手紙だけは、絶えず、遠慮しがちに送ったのだったけれど——近頃はその返事さえも多美子は怠りがちにするのではないか——。

　礼子は——なにがこんなに多美子の心をそらにするのだろう——もしやなつかしい彼女の生活の中、自分との間の友情を阻（はば）むものが、あるのではあるまいか——礼子には暗い予感が湧き上っ

た。黒い雨雲のように、はらってもはらっても湧き上っては胸を圧する——その不安に堪えかねて礼子は無理をしても会いたくなった。

それで、きょう会うことに前から約束して、少し約束の時間を早目に礼子は約束の場所へ来て待っている——二人がかつてその日、日曜日や休日に郊外へ遊びにと約束をとり交した日の朝は、いそいそとそこに待つことになっていた省線のほとりである。

礼子はかくて待ち佗びているものを——多美子の姿はまだ見えぬ。

五月の陽が草に木に屋根に地面に明るく軽く反射して、人の肌もほのかに汗ばむ真昼時——礼子の胸はなぜか仄暗く——うす冷たくかげってゆく。

## 三

礼子はニッケルの古びた時計を出して見た。もう短針はVIへ廻ろうとしている。——約束の時間はとくに過ぎたのだ——それだのに、まだ多美子の影さえ見当らぬ、——日ざしはややに心細くうつり、蔭らってゆくものを……。

『今日は会えないのかも知れない——』

礼子は寂しくみずからこう強いて諦めようとした。多美子がにわかに病気になったのか——何かほかにどうしても抜き差しのならない用向きでもできたのか——こうも思って、諦めかけたが、でもやっぱり空しく待って会えないのは、やるせなく寂しかった。

礼子が重い足を運んで、すごすごとその場所を立ち去ろうとした時――向こうから停車場の構内に入ろうとして来る人の群の中に、待ちに待ったその人の姿を見出した。『ああ、やっぱりいらして下さるのだった――』今まで待ちくたびれた悲しさはもう跡かたなく去って、礼子は言い知れぬ喜悦と歓喜と、そしてそれに入りまざる不思議な羞恥感を覚えた。

恋しい人――久方ぶりで相会うだけになぜともなしの面はゆさよ――胸ときめいて、とみにはその呼名も出でぬものを――。

『まあ、まだいらしったの？　私時間がたいへん遅れちゃったから、もうどうかと思って――でもどうせここからかえっても好（い）んだから、来てみたの――』

ほがらかな声に浮々と、それは初夏の風かおる都の人らしく多美子は言う――。

……まあ、まだいらしったの？……

おお、この一言（ごん）はなんという冷たいそしてたよりない言葉だろう。感じようでは　あなどり）の意をさえ含んでいるではなかろうか？

礼子はまず最初に胸を痛くも打たれた。けれど悪意に人の言葉を、ましてみずから深くも愛する友の言葉を解したくはなかったゆえ。

礼子は強いて微笑んで――。

『久しぶりね、ずいぶん会わなかったでしょう』と、多美子に懐しげにより添うた。

『そうね、でもつい何かといそがしいと、それに紛れて……やっぱし学校時代のように単調でないからでしょうね』

多美子には会わぬ間の永さをかこつふうも見えない、礼子は——ふと下さしうつむいた、心佗しきままに——。

『ここに、ぼんやり立っていても仕方がないわ、どっか歩きましょう?』

と多美子は言うなり、みずから先立って、真新しいフェルトの草履も軽く、淡い紫縞のはでに流れたセルの袂も匂いやかに——ややに黄昏れゆくあたりも、その人の華やかに若やいだよそおいに仄明るく、颯と日蔭が変ったかと思われる。

礼子が久しぶりで、ほんとうに久しぶりで会いえた喜びをたがいに掬み合わそうとするのに——それとはちぐはぐにともすれば多美子は心も空な風情でうきうきとしている。

『私ね——まだ動悸がして……だって、あんまり、みんな熱心にお稽古なさるんですもの』

多美子はいま快い疲労に身を委ねて、少し汗ばむ気配の胸のぬくみにおのずと溢れる青春の愉びに陶酔するかのようだった。

『なにを、お稽古?』

礼子は問うた——。

『ダンスよ——いくら楽しみで始めても、やっぱり一生懸命になると疲れるわねえ——』

こう言って、多美子はまだ醒め切らぬ舞踏場の昂奮を持ち扱いかねた如くである。

その昂奮も歓喜も、傍の礼子にはいささかの係わりなくあずかり知らぬ異なる世界の出来事である。

あわれ——今までは、ただかりそめの事であろうとも、二人の相通ぜぬ喜びはなかった。また二人に相通ぜぬ悲しみもなかった。二つの心臓は一つに合して動きつつあるものとばかりに、ひ

たとより添うていたものを！
おお見よ！
礼子は早くも泪を覚えた。
なんと語らうべきか、哀れな彼女は、その言葉を知らないのだった。
『――スロー・フォックス・トロットなんて、いやにむずかしいの、上手に踊るのはなかなか』
多美子はまだダンスの話をするよりほか、心は向けられていないのだ。――
二人はどこという当なしに、いつか郊外の小径（みち）を歩いていた。
『××遊園地の方へ行ってみましょう、あんまりここは寂しいわ』
多美子はこう言って遊園地の方の丘へのぼった。――
礼子は黙々として多美子についてゆくより今の彼女はなんのなす術も知らないのだ。
遊園地の芝生には学生らしい群れ、子供の群れ、散歩する人々、スケッチをしていた人達、そうした人影がみえた――皆楽しそうに明るい初夏の夕暮を過しているのだ――礼子はこう思って、その中でひとりが暗い灰色の影を負うているのを見出して、そぞろに心さむかった。
『やあ、多美子さん――』
『おお、マドモワゼル・シャルモーント――』
二人の歩むかなたから来てすれちがおうとする青年の群はたちまち多美子を見て頓狂な声をあげた。
『あらッ……先日は失礼――』
多美子も華やいだ声を出して微笑に溶けた挨拶をした。

オールバックにセルロイドの眼鏡、ボヘミアンネクタイ、左のポケットからちょっとのぞかせた白絹のハンカチーフ、銀握りの細身のステッキ、そして後生大事に抱えたカメラサック――人間の身体の上にデパートメントストアを開業したようないでたちの一青年がつと進み出でて、
『いらしって下さい、今度の土曜の午後から、我々アマチュアのね……』
こうなにかくどくどと言い立てながら、招待券のようなものを多美子に手渡している。
『そう、ありがとう、でも夜でしょ、夜はママがやかましいんですもの――』
多美子は気持のよい迷惑を表わして美しい眉をよせ、足許をくの字にたゆたっている。
『いいですよ、僕達がお迎えにゆきますよ、そして帰りはお送りもしますよ、ね、だから――』
『そう…そう、プリンセスがお見えにならないじゃ、我々だってステージに上り映えがしないですからね』
『だから、是非お願い！』
後方の青年達も思い思いの奇声を発して笑い興ずる。
『そう、じゃあともかくも戴いておきますわ』
多美子は招待券を受け取った。
『どちらへ?』
『ええ、ちょっとお友達とそこまで散歩――』
『そうですか、じゃあ、今日はこれで失礼、じゃあ今度のサタデーにお忘れなく』
『ええ、ありがとう』
明るい浮き上った声音で青年達と問答を交して、多美子は別れた。

礼子は、多美子と少し離れて、さきから、このシーンを打ち眺めていた。——ああ何も知らなかった——いつまでも昔の夢の少女の日をそのまま永久に続くものと信じて、はかない望みを持ちつつ、今日まであんなに多美子を恋い慕い——憧れていた哀れな自分は——もう自分への友情などは、今の多美子の胸の中にはあまりに影うすいものなのだ——それが人生の進みゆく路の真実なのかも知れない——礼子のつい、さっきまで抱いていた、多美子との麗しい昔の少女の愛情への光りも力も、その瞬間地に落ちて美事に砕け去ったのだ！

ああ、光りある美わしの灯の君よ！

もう、私にはその灯も消えたのだ！

礼子——は眼の前の世界が真暗になると思えた！

『ぐるっと、ひとまわりしてかえらない？』

今何が——恐るべきあの絶望が礼子の心の中に起りつつあったかを露知らぬ多美子は、事もなげに礼子に言って、快活な足どりで芝生に添うて先へ歩んでゆく……絶望の人、礼子はそれに従った。

——暗く沈みゆく礼子は次第に地に引きずり込まれそうになってゆく——とぼとぼと灯を失ったさすらい人の如く歩みゆくあたり——ふと一脈の仄かに漂う甘くかぼそく、うすしめる匂いを知った——ああ、この匂い——礼子の暗い心の中にも、浸みてゆくかのよう……。

ふと瞳をあげた礼子は、身近きほとり紫の花を、かざした樹々を見た。

『……多美子さん……思い出して下さる……あの桐の花の咲く頃を……』

礼子はふと立ち止って寂しい寂しい眼ざしで、多美子を見つめた。

『ええ、何？　桐の花――まあ、あすこに咲いているのね』
多美子はあでやかに瞳をあげた。
『……桐の花……　それはふたりには思い出の花のはず――ねえ』
礼子はこう言って、乞うように多美子を再び見た。もしも、この花の匂いが多美子の胸に忍び入って――今のうきうきと、ともすれば自分のことを忘れて離れゆこうとする、その心に昔の濃（こま）やかな友情をもう一度呼びかえしてくれるなら、ああくれるのだったら……。
おお、桐の花、桐の花！
お願いだから、匂って、匂って！
そして、あの方の胸に昔の、私への愛情を呼びかえして！
礼子は梢に祈る気持だった。
『思い出の花……　そうだったかしら？』
多美子はちょっと首をかしげて、いぶかしげに答えた。
ああ、もうこの人の胸には呼び返す一雫の愛の滴さえ枯れはてていたのだ！
礼子は黙して唇を噛んだ。

うれしきは
あれは五月
桐の花

桐のはな
うす紫に咲くゆえに
その花ほのかに匂うゆえ
　きみを恋しと思うゆえ

　こうした詩句をひそかにかきしるして、五月を讃え、桐の花を愛で、思い会う君を歌ったのも皆過ぎし昔の夢だった……。

　あわれ、桐の花は年々五月のめぐり来るたびに咲き匂うであろう……。けれどもふたりの友情はもう再びあの昔の日の如くには咲き匂わない。――空しく萎んだかなしい押花の永久(とわ)の思い出をのみ残される運命であったのか……礼子は泪をさしぐんだ。

　おお、今日から、昔の夢に咲く悲しい儚ない花となるものを！　あわれ桐の花よ、泪にうるんだ双の瞳に朧にかすんでうつる紫の花の俤(おもかげ)、うら若い心をそそるかのようなかのうす甘き匂いさえもそこはかとのう、今はただ、寂しい子の泪をいや重ううちしめらせるのみである。

# 梨（なし）の花（はな）

一つの古い塔の中を二人の少女が登ってゆく――仄暗い塔の中――。
狭い型ばかりの梯子をあやうい足取りでのぼってゆく。
『………』
先へのぼってゆく少女は、紺青の袂を長く緋の帯が目立つ――。その後からのぼってゆく少女は鶯茶のような、錆びたネルの着物に乳羽（ちちば）色の帯を締めている。二人とも白足袋に草履、その緒はいわずとも紅緒であろうに……。
『あぶないこと、手を取ってあげましょうか』
先へ行く緋の帯の子が、こう後を振り向いた。
『いいえ、大丈夫よ』
乳羽色の帯の子は微笑んで見せた。
『でも、あの落ちるといけないから……』
半ば笑いながら、緋の帯の子は手をつと差しのべた。
なんという美しい手よ、その腕（かいな）よ、象牙のように真白く、しかも血の通う温かさ――。
『大丈夫落ちはしないわ』

下の方の子は首を軽く振った。つややかな黒髪を惜しげもない断髪にしたのが、房々と襟元にさやかに振れ合う。
『だって――もしか――いけないわ』
美しい腕はやはり差しのべられ、細い指先は乳羽色の子の片手をつと握った。
春は暮れゆく頃だ。
生暖い空気は――外光の僅にもれ入る古い塔の中に、よどんでいる。――二人の少女は、握り合った手の軽く熱して、胸内に優しく汗ばむ感じを持った。
二人はとうとう塔の上へ登りついた。
『まあ、外で見たよりずいぶん高いのね』
『ええ』
二人は、こう言って塔の頂上の古い朱塗り半ば剝げた欄干により添うた。
暮春の夕陽が今塔を斜めに照らして、塔影は長く斜めに傾いている。
まぶしそうに、乳羽色の少女は手をかざした。
『あれ――河……河……』
緋の帯の子は指をさした、杳かかなた……
真白い雲の如く群がる――
『……高き家に君とのぼれば春の国河遠白し朝の鐘なる……って晶子様のお歌にそっくり……ねえ……』
緋の帯の子は夢心地で語る。……

ふっと笑い出したのは乳羽色の帯の子である。

『……いけないわ！　あなたお眼が近いのね……あれはね、梨の花よ――梨畑があすこにあるのね』

『まあ――』

緋の帯の子はそれを聞いてうす紅くなって笑い出した。

『でも……いいのね、私も近眼になろうかしら、ものの見方が朧ろになって幻想が描けて羨ましいのね』

乳羽色の帯の子はこう言ってさらに笑いを続けた。

『梨の花……梨の花……きれいなのねえ……あんな、真白にそして仄かにぼうっとして……』緋の帯の子は遠くその花の群がりを見やった。

『ええ――でも儚なげな花――近よる前に、消え入りそうな花ねえ』

乳羽色の少女は言う――。

『あれ――夕月が――』

緋の帯の子はかく叫んだ。

『夕月――まあ……儚ないのは梨の花、それにまして儚ないのはその花の上の夕月……』

乳羽色の帯の子は――しめやかに吟（くちず）さんだ。

『そして私達は……』

『――知らない……』

一年の後である。

やはり梨の花咲く頃——
一人の少女が古い塔を登ってゆく。
鶯茶のセルと乳羽色の帯。——一年前、二人して登った少女のかたわれである。その日と同じみなりのまま——けれども少女の面（おもて）は細くやつれていた。——何かの悲しみが小さい彼女を襲ったのだ——。
喘ぎ喘ぎ塔の上へと登ってゆくけれども、彼女のために親切に差しのべられる手は見出せない。
かの日の塔の中の空気は仄かに暗く生暖かに汗ばむ気配だったが、今はただうすら冷たい。
——やがて少女は、塔の頂きに、登り切った。
朱の落剝（らくはく）した欄干は風雨に曝されるままに、残されてある。
欄（おばしま）に寄った——見渡すかなたに、ひろびろと白き雲も漂うと見る真白き梨の花——。一年前と同じように——そしてまた同じ暮春の陽ざしに、あの一年前にしたと同じように少女は小手をまぶしそうにかざした。
『あれ……河が——河が……』
こう呼んだ緋の帯の子は、その日はすでに傍にいない——小さい彼女はもうこの地上に無い。
『あれ——夕月が——』
かく呼びしひとはも。
『夕月——まあ……儚いものは梨の花、それにもまして儚いのはその花の上の夕月……』
『そして私達は……』

『……知らない……』
あの日の塔の上での問答よ。　一年を経て今日乳羽色の子は寂しくただ独り塔の上に立つ。　見渡すあたり梨の花——そして同じようにうっすらと夕月が……。
　少女はじいっと吸い付けられるように見入った。　少女の眼は朧ろにかすんだ——その時梨の花蔭——逝きし友の面影が仄かに浮き出でた——軽やかな紺青の袂ひらひらと——塔の上を指して招く——。

『………』
塔の上の少女は呼び声をあげた。
それは、あの名を呼んだのであろう……。
杳（はる）かに遠き彼方、花蔭の紺青の袂はさらにひるがえりつつ真白き手は塔をさして招く——今は紅の帯も仄白き花の中に、くっきりと灯の如く点じられて……。
『………』
二度（ふたたび）、友の名を呼んだ時——塔の上の少女の身体は軽くもひらりと——塔を落ちた。
乳羽色の帯は颯（さつ）と風を切って解けて空に乱れた。

『魔の棲む塔』
人々はこう呼んで、その塔の扉を永遠にかたく閉ざした。
——梨の花咲く暮春の黄昏の出来事。
一人の少女は、その古い塔の頂きから、狂い落ちたのだ。

魔の棲む塔』
人々は塔を恐れた。
しかし、あの塔から落ちた美しい犠牲者が、どのような魔力のために生命を失ったのか――それは知るよしもなかった。

儚なき　梨の花
まして
その花の上の夕月――
あわれ　されど
儚なきは　悲しきは
亡き友のまぼろしをおいて
みずからもその花蔭に入るとみし
かの塔の少女（おとめ）。

半ば、落剥した朱塗の古き塔は不開（あかず）の扉の鍵錆びしままに今も打ち黙し、かの梨の花、暮春の空に今もなおほのめく、しかも夕月は、黄昏――　いかに――。

# 玫瑰(はまなす)の花(はな)

北の国の淋しい海辺――北海道の根室本線の走る釧路沿岸のある小さな街に、真弓は育った。

夏の終りから秋へかけて、その町の海岸に玫瑰花(はまなす)の花が群咲く。

その花はしどみの木に似て刺があり薔薇科に属し、淡紅色(ときいろ)と白と、五つの花弁(はなびら)、野趣を帯び、北海道の憂愁をそぞろに思わせる淋しき強き匂いを持つ花。真弓はその幼い頃、秋晴れの日は海辺の砂丘にその花を求めて、ひとり遊んだ。

　それは、ある日の事――真弓は薄曇りの秋の日の午後をまたひとり砂丘のほとり、その花を慕って歩きつづけていた。一つの砂丘を越えても一つの砂丘へ、渚に沿うてゆくほどに、日ははや傾いて、見返せばあわれ遥かに来つるかな、我が家は遠く杳(はる)けく、いままでに来た事もない渚のほとりに真弓は立っているのだった。

　さらぬだに、薄曇りという大空の雲密にして鉛の色、重々(おもおも)といまにも小さい真弓の頭におしかぶさって来そうなけはい、渚に打つ波がしらさえ憂鬱に粘って、たよたよと水の青さも、今は灰色、まるで物の怪のついたような、あたりのありさまに、逃げようとする足も、あせればあせるほど、動かず、しだいに砂に埋まってゆくその中(うち)に、さらさらと、耳をかすめる物の音、それは砂丘の砂がひとりでに、崩れゆくのであろう。しかもその音に交って、はらはら、はらはらと、

花が──はまなすの花が、白きは蒼みを帯びとき色なるは紅（あか）を含みて、潮風にぱっと、そして散る砂の上、貝と擬うて散りしく間もなく崩れる砂に乗せられて、さらりさらりと、渚の近く、波に洗われる。

そうしている内に、真弓の足下の砂も、さらりさらりと崩れて、するするっと流れ落ちる砂にのせられ、散る葩（はなびら）と一緒に波に流されて渚まで、灰色の波が、があーんと大口を開いて呑み込みそうである。

怖い！　真弓は救いを求めた。声高くあげて──と云ってそれは助けて下さいと言ったのでもない、助け船といったのでもない、いわんやHelp meといったのでもない。彼女その時、芳紀（ほうき）まさに八歳、尋常の一年生、彼女の声高くあげて助けを訴えたというのはただわあわあ泣いた事である。

そして、その泣き声は美事に成功し、誰か来て、真弓を砂浜から救い出したのである。真弓を救った勇敢なそして、気高き人！　真弓はその人を見た。自分より年は一つか二つ上であろう、やはり幼い女の子である。その人は真弓の手を引いて、砂丘から連れ出して、そして可愛い口調でいいきかせるように告げた。

『あんな砂の上に登ってはいけないのよ、満潮の時は潮に濡れて、だんだんに下から、濡れ崩れてしまうのよ』

真弓は、その時『そう』と言ったか『助けて下すって有難う』と言ったか、しかとした記憶はないけれど、ぼんやりでそして少し間の抜けた真弓の人柄から推すと、その子供のおりなれば、ただはにかんではにかんで丹波鬼灯（たんばほおずき）のように、真紅になって黙りこくっていた事でもあろう。

さて、それから話は俄かに飛ぶ。これより春秋六年、真弓はめでたく女学校の新生徒になった。龍が昇天したように、小学生が女学校に昇格した。その喜びは説明の要はなかろう。彼女は意気揚々として、よく学びよく遊んだ。——実はよく学んだ方は、いささか疑問である。しかしよく遊んだ事だけは相違ない。そして夏休みがきた。

彼女は女学生になると同時に、家庭を離れて遠く去り、寄宿生にならねばならなかった。そして第一学期、終了後、真弓は最初の帰省をする事となった。時に七月二十一日午前九時、△△市発の列車に投じて楽しい帰省の旅をするために同じ方面へ行く友達と、一時間も早くから停車場へかけつけて、息せき切って、おくれるおくれると、代るがわる改札口へ飛んで行って『××行のはまだですか』ときかねばすまされぬ。やがて改札が始まって、そこにはいずれも同じ思いの袴の靴の生き生きした乙女の群が並んだ。恐らくその日、同じ△△市にある女学校の生徒達は大抵便宜のよいその時刻の汽車を選んだのであろう。それは真弓とおなじミッションに学ぶ生徒よりも多く庁立高女の人たち、私立技芸の人たち、数多く見知らぬ顔が並んでいた。

やがて、これらの人々を乗せて列車は走り出した。早きは二つ三つ過ぎた駅にも、すでに出迎えの姉妹に囲まれて、まるで鬼ケ島からかえった桃太郎のように、大にこにこで、プラットフォームから、過ぎてゆく車窓にむいて、『じゃあさよなら、また九月にね』と声をあげて、いそいそと立ち去ってしまう人がある。かくて一つの駅ごとに同乗の人数は減って行った。やがて汽車が荒漠たる狩勝の広野を横切る頃、落陽炎々と、みどりの荒れ果てに燃えて茜さす空、雲の嶺は今落日のかげに受けて崩れんとする。その頃、既に車窓に倚(よ)るものはみ渡すところ、女学生らし

いのは真弓一人になってしまった。真弓の帰りゆくなつかしい我が家の街にはまだ二、三時間を要するのである。

時は黄昏(たそがれ)せまる汽車の窓、そぞろに旅愁をさえ真弓は覚えねばならなかった。曠野の果ての雲の嶺、崩れしと見し頃より天候俄かにかわりて、大粒の雨がぼとぼとと列車を濡らしたかと思うと、追々に勢いは加わり、風さえ、新たに起きて、それを夕立と呼ぶには、ふさわしからぬほどの強雨強風となった。

真弓は不安の感に駆られた。空は次第に仄暗く、沛然(はいぜん)たる雨はやがて、閉め切った車の窓から吹き入って席を濡らすほどであった。

真弓は母のお古を貰った粗末な時計を出してみると時正に六時、しかしなお目的地に達するには約一時間を辛抱せねばならない。

そう思って心ひそかに嘆ずる時、耳をつんざく非常汽笛、鳴り響く！　鳴り響く！　そして汽車は止った。

乗り合せた人々は口々に不安と驚怖の言葉をあげて、窓をおしあけて外をながめようとする。レールの周りにはいくつもの角灯の灯が駅夫の手に光ってあちこちする。黒い人かげが雨の中に浮いて見えた。

間もなく、車掌らしい人が「豪雨のために、この先の鉄橋が少しあぶないのです。今工夫が盛んに警戒中です。しばらくここに臨時停車をしてその結果を待つことにします』と告げて歩いた。乗客もそうなると仕方がなかった。不安そうな顔をしながらも待っているよりほか仕方がないのである。やがて雨は少し小止(こや)みになってきた。車の中で倦き果てた乗客達は、車窓から、半ば

好奇心を持って、プラットフォームのないレール際に飛び降りて、あちこちを調査でもするような顔で見廻ったりする。真弓の乗り合せた車窓の中の人達は、大抵みな、そんな風に降りてしまった。あとまで残ったのは、おばあさんのような人や、赤ちゃんをつれた女の人ぐらいである。真弓はなんだか、心細くなった。こうしている内に汽車でも引繰りかえっては、大変だと、根も葉もない心配をはじめた。自分も降りて見たい誘惑を感じた。そして真弓もとうとう飛び降りてしまった。日傘を拡げて雨を凌ぎつつ前の方の車掌室へ、レールに沿って歩いて行った時、二等室の窓から外をみつめている一人の少女がいた。その顔に見覚えがあった。それは、今朝方、△△市の停車場で改札口にいた時一緒になった庁立高女のひとであった。真弓が、そう思ってみる眼と窓から外をみていたそのひとの眼とが期せずして打ち重なった。

途中で、女学校の人達はみなほとんど降りてしまった。けれど、まだ車に残されているのは恐らくその時、真弓とその二等車の少女と二人っきりであったであろう。

友達は去りただ残された二人の身は思いもかけぬ途中の不時の災厄に逢ったこの時、思わず寄り添うようなあるなつかしさを感じた。

『私も降りますわ』と二等車の少女は、ひらりと身軽く、モスリンの袂をかえして、早くも濡れそびれたレールの際に、細い編上靴の光る両足をぴったりと揃えて降り立った。そして真弓をかえりみてほほえんだ。

『どちらまで?』彼女は問うのであった。

『××まで——』真弓は少し固くなって、答えた。

『まあ——』

と彼女は少し驚きを示してその時軽く叫んだ。
『私もよ――』
彼女はそして、こうつけ加えた。
『まあ、そんなら、御一緒できますわねえ』
こう言ってその少女は再び二等車にとってかえした。真弓が、あっけに取られている内に早くも小さなバスケットと日傘を持って、再び車室から、飛び降りてきた。
『さあ、あなたの車はどこ？　御一緒になりましょう』
真弓はちょっと赤くなった。彼女は三等車だったから……。
『だって――私三等なんですもの』
真弓はこう言うより言葉を知らなかった。
『かまわないわ。私、もうさっきから、お友達が欲しくて欲しくて、ひとりで泣き出しそうにしてあすこにいたんですもの』
真弓はそう言われると元気づいて、先に立って、自分のうちへ連れてでもゆくように、自分の乗っていた車室へ案内した。
そして二人は並んで腰をかけた。
『あなた、何年でいらっしゃるの？』
そのひとが尋ねた。
『一年です』
真弓が答えると、

『私は二年なの。でもあの学校へはまだ来たばかりなの、四月っから……あなたの学校は外国の方が先生にたくさんいらしって、英語だの音楽だの、ほんとに素敵なんですってねえ――』

お褒めにあずかって、真弓はふらふらのぼせ上がった。仄暗い車室の中に、見返すかたわらのその少女の顔は、しかも美しい極みであった。

やがて汽笛が、また鳴り出した。レールの外をうろうろしていた人達はみな車室へ追い返された。そうして汽車は漸く動き出した。鉄橋はともかく辛うじて危険を免れたのである。三、四十分の遅着をどうにか取り返すためであろうか、汽車は烈しい速力を出した。そのために車体は烈しく動揺した。並び合った二人の少女の身体は揺れるたびごとに、思わずおかしくなるほど、ぶつかり合うように触れ合った。そんな事が二人をさらに無邪気に親しい友達にさせてしまった。

『夏休みの間にきっとお遊びにいらっしゃいね、私の家は街端れの海岸通りの淋しいところなの』

そのひとはこう言った。そして名前を告げた。樋口和子、それがそのひとの名前だった。

そんな話をし合って、長い汽車の退屈もいつしか打ち忘れ、楽しいのどかな気持になってしまった頃汽車は漸く××の小駅についた。二人にとっては二人が知り合ってからの汽車の時間はむしろ短かった。駅には真弓のお父様が外套をびっしょりに濡らして、蒼い顔をして、途中事故延着の札の前に不安そうに立っていた。汽車から無事に降り立った真弓を見た時、お父さんは感動のあまり真弓を抱きあげて、真弓を恥かしがらせ、その上に真弓の着物を濡れた外套でくしゃくしゃにしてしまった。その時真弓の傍らに涼しい声が響いた。

『弓さん、忘れないできっと、家へいらっしゃいね――』

こう言って和子が会釈をして立ち去るのであった。真弓がお父さんに伴われて駅からほど近い我が家へ帰る途中、後からベルを鳴らして走り抜く二台の車、その一台の幌の中からすれちがいざまに、

『さようなら、また会いに来てね』

という和子の声が雨の中に残された。

『あれはどこの人だ』とお父さんが不審がって真弓にきいた。

『汽車の中で一緒になった樋口さんて仰しゃる方なの、庁立高女のひと』

『おおそうか、じゃあ、樋口代議士の家族だな』

父がこう言ったので、

『お父さん、じゃ御存じ？　あの方のおうちを？――』

『うん、知っているよ、ずっと街端れの海岸通りの大きな古い邸(やしき)だよ。しばらく前に樋口ってその人は亡くなったのだから、今はなんでもその人の子供が住んでいるようだ』

『そう、じゃあ和子さんはお父さんのない方なのねえ』

『いや、そうじゃない、亡くなったのはお祖父様だろう。今の主人のお父さんなのだろう。この町の人達とは今はまるで交際(つきあ)いをしないんだ。どっか遠くへ出てばかりいるそうだがどんな仕事や商売をしているのかそれもわからないそうだ』

『そう、でも、お金持なのでしょう、あの方二等へのるんですもの』

真弓は無邪気にこう言い放った。お父さんの眉が曇った。

学生は三等が、あたりまえじゃないか』

『あら、わたし、三等でいやだって言うんじゃないのよ』

『そうか、そんなら好いが、汽車の二等に乗るからといって、そんな事を羨んではいけないよ。樋口さんのうちなど、お祖父さんが政治狂で大分借財を残していると言われるが、やっぱりそんな事はさせるのだろう』

半ば独り言のように、お父さんがこう呟いた。その中（うち）、父子はお母さんが、首を長くして、さっきから立ちつくしていた家の門へ辿りついた。

その夜は、真弓は興奮して、両親から問わるるままに、学校の事、寄宿舎の事、先生の事、成績の事、学課の事、面白い事、面白くない事、それから今日の旅立ちの事、汽車の事、途中での暴風（あらし）の事、樋口和子さんの事、滔々と論じ述べたてて疲れてしまった。

そうして、初めての帰省の夜、なかなか眠られぬ。朝になったら熱が出てきた。びっくりして呼ばれた医師は診察した後、

『昨夕の雨がいけなかったのだろう』と言った。熱はなかなか引かぬ、苦しい苦しい、それで遂々十日あまりねてしまった。まるで病気をしに、吃驚（びっくり）させにかえった夏休みのような気がして真弓は少し、しょげてしまった。しかし苦しい熱がさめるとすぐにも樋口和子さんとの約束を思い出した。早く遊びに行きたいのは山々だが、病気をきづかって、お父さんも、お母様も遠くは出してくれない。それで遂々おそくなって夏やすみも半ばすぎてしまってから、やっとの思いで街端れの和子さんの家を訪れる事ができた。同じ街ながらほとんど来た事もなかった淋しい所だった。

和子さんは玄関先きへ飛んで出て、いきなり真弓の手を振ってよろこんだ。

『まあ、伴さん、私、恨んでいたわ』
『私、病気をしていたの――』
『まあ、そうならそうと知らせて下されば、すぐ私がお見舞いに上がったのに――』
それから部屋に通された。そこは広い洋風の一室である。古い古い絨氈が敷いてある。おいてあるソファーも、椅子も緞子（どんす）のような帛（きれ）を張った古めいたものに思えた。第一、卓（テーブル）が黒の漆塗り、四脚に七草の金蒔絵、どうしてもなんだか古めかしい。
『ここは、あなたのお部屋なの？』
よけいな事を真弓がきくと、
『ええ、ですけれどね、私のへやなんてきまっていないの、だってこの家はもとお祖父様の住んでいらっしした所なの、私はずっと東京のうちにいましたの、この春まで――ここは、お祖父様がお亡くなりになってから空家のようになって鼠が威張っていたのよ、けれども、東京のおうちをお父様が売っておしまいになったんですもの、だから仕方がないの、こんな所へだって来なければ――』
そう言って、和子の顔は曇った。
『そう、やっぱり、東京が好いの？』
真弓がきくと、
『ええ、もうそりゃ』と一も二もなく合点した。
『そう、私まだ東京を知らないの、でも女学校を出て、よくできればね、上の学校へやって頂けるのよ、その時東京へ行けるの』

真弓はちょっとはずかしがりながら、そう言うとまだみぬ東京への夢に胸をおどらした。

『そう、じゃあ、真弓さんは、小さい時からこんな淋しい所で暮したの』

和子は半ば、呆れた調子に憐れむ如くにたずねた。

『ええ、そうなの』

『私、子供の時、たった一度ここへお祖父様にお目にかかりに来ていた事があるのよ』

冷たい紅茶が出て、うすいビスケットが運ばれた。二人は深々と長椅子の上に埋まって、あの汽車の中でのように睦じく語り合った。

やがて陽は黄昏（たそがれ）に近くなってゆく、すると、ふしぎにも、ほうほうと鳩の鳴く声が部屋の一隅から起きた。

『あら鳩が――』

と真弓は、びっくりして立ち上がった。和子は笑っている。真弓がきょろきょろ見廻すと、部屋の片隅においてある時計の葡萄の葉の飾りのその葉蔭に、一羽の白い象牙の鳩が出て、ほうほうと時を知らせて鳴くのである。古めかしき異国渡来の時計に、真弓はその鳩が姿をかくしてしまうのを心惜しい極みでみやった。

『これはお父様がずっと前にお船に乗って遠い国から持っていらしったものなの、皆ここにあるのは、ずっと前のものなのよ。そら、これを聞いて御覧なさい』

と真弓を部屋の隅へつれて行って、細いゴムの管を真弓の耳にあてさせた。しばらくすると、不思議にも、真弓の鼓膜に水底から響いて来るような仄かな楽の音がきこえた。夢のような奇異な世界に真弓はうっとりした。

『これ、昔の蓄音機なの、おかしいでしょう』和子は笑った。レコードに代るものが円い蠟の円管なのである。ほんとうに古いものは、魔術師のもののように思われる。つまらぬ事まで不思議に感じられる。それから二人は絵本を見た。絵本というのがまたどっしりして厚いもの、外国の絵である。

裸の女の人の浴(ゆあ)みしている姿や、強そうな騎士が入り乱れて戦っている絵、そういう絵も真弓には珍らしい刺戟を与えた。

うちでみるようなマリヤ様やキリストの絵などは一枚もない。どれもこれも、血なまぐさいようなまた毒々しいほど美しく、そして奇怪な感じを与える絵ばかりである。

真弓は一枚ごとに胸おどらして繰って行った。その時真弓は、

『ああ、船!』と思わず叫んだ。それは、大きな大きな帆前船(ほまえせん)が、不思議な虹のような光のあらわれた空の下を走っている絵である。そして、その帆柱の高い所に一人の少女が登って、片手を高くあげて、どこか指さしている。その少女の顔をみつめているとだんだん悲しそうな顔にみえてくる。

その絵に惹きつけられた真弓はいつまでもみつめていた。そしてこの絵が何を意味しているかを知りたくなった。恐らくこの絵の題や説明を示すのであろうかその絵の下の方には横文字が並んでいた。二人は字引を持ってきて、一々引いてみたが一つもわからない。二人はようやくそれが英語ではない事がわかった。もう、黄昏の色は濃くなって絵のおもてさえも、かすむようである。真弓は名残りを惜しみながら別れを告げねばならなかった。

和子は途中まで送ると言って一緒に門を出た。そして二人は海添いの路を辿りながら行った。その時真弓は砂丘のかげに早くも咲くはまなすの花を見出した。その時ある古い記憶が真弓の胸に蘇った。それは八つの頃ただ一人このほとりに来た覚えがあるそれだった。そして満潮の浪に砂丘が洗われてゆくのをみて、身動きもできず砂の中に泣いた。その時女の子に助けられたのだった。その女の子の面影がどうしてか和子と結びつかる。そして一つ二つ年上の女の子に

『あなた、小さい頃一度こちらへいらっしゃったって仰しゃったわねえ』

『ええ』

『あの時、この浜辺で、玫瑰花（はなます）の咲いている砂の中に埋って泣いていた小ちゃな女の子を覚えていらっしゃらない？』

和子はその言葉にちょっと首を傾げたが、

『さあ——そんな事仰しゃるとあったような気もするけど……だけどなぜ？』

『でも、その時泣いていた子は私なのよ』

『そうね、あなたならば泣きそうだわ』和子は優しくこう言って肩に手を添えた。

しかし、どうあっても、真弓は、あの時の自分を助けた女の子はこの美しい和子である事を信じてしまった。

『また遊びに来て頂戴ね、学校へかえる時には御一緒にしましょうね』

こう言って和子はわかれて行った。

それからまた訪れる日もなくて夏休みが終ろうとする。真弓達の乗ってゆく汽車は朝早く出て、夕方までに△△市につくに便のよい列車である。その時間と日取りとを和子あてに、知らせ

ておいた。しかし和子からはなんの返事もなかった。そして遂に、出立の日がきた。真弓は仕方なくまたお父さんに送られて停車場へ行った。汽車の出る一秒前まで、もしやもしやと待ち受けたが、とうとう和子の姿はあらわれなかった。

真弓はひとり淋しい心を抱いて学校の寄宿舎へかえった。安着の知らせを父母へ出すと同時に和子へあてて先へ独りで来た事を詫びるかたわら、一体どうなすったのかという意味をかいて送った。

しかし一週間たっても、二週間たっても、なんの音沙汰もなかった。あまりの不思議に堪えかねて真弓はお父さん宛に　樋口さんは一体どうなすったのでしょう』と問い合わせてしまった。間もなく新聞の切抜きを封じて返事が来た。真弓ががっかりして読むと、

××地方屈指の豪家たりし樋口一蔵氏は、前代議士たりし太蔵（たぞう）氏の没後、東京より××町の旧邸に家族と共に移住したりしが、数年以前より氏が大仕掛の密猟を計画し、みずから乗り込みて遠く北海沿岸を巧みに注網（ちゅうもう）をくぐりて出没しいたりしを今回計らずも顕わるるところとなり、官憲の追求中、ついに××日頃、秘かに上陸、旧邸の家族を引き具し、再び深夜乗船早くも船体を隠し逃亡せり、……

真弓はこの記事を読んで愕然とした。

×　×　×　×　×

真弓は夏休みごとにただ一人、あの遠い××町に帰省した。そして彼女はやすみの終る頃にはきっとあの街端れの海辺を訪れた。そこには変りなく玫瑰花の花が砂丘のほとりに咲いていた。そして砂の丘の花の蔭に彼女は座りながら、眼の前に蒼々とひらけている海をみやった。そうす

るとそこにはきっと、一艘の幻の船が浮んだ。そして空には虹のようなふしぎな光があらわれた。夕陽を受けて帆前船の帆はあかくただれたように、そして帆柱の上には一人の少女が立って、玫瑰花の咲いている、浜辺を指している。その顔は悲しく淋しそう――和子さんだ――樋口和子さんの顔である。真弓の顔にはその時止め度もなく涙が流れるのだった。

## 睡蓮（すいれん）

### 一

『植物園に睡蓮が咲いたら――』

これは長い間のお二人の約束であった。

二人とは仁代（ひとよ）と寛子――十七と十八、絵を習う子である。できるなら絵筆をもって世に立ちたい切なる願いを秘むるは同じ事、絵と言ってもそれは日本画、柿沼玉園女史の高弟と言っては少しあわてすぎるが、辛抱さえすれば、あるいはその高弟とやらにもなれようが、今はともかく二年ほど前、お弟子入りを願ったばかりの二人でございます。しかし二人とも月日の浅い割りには、その進境は目覚ましいもので、師の玉園女史をして、吃驚（びっくり）気を遠くさせるほど、富士を描けば雲が湧き、琵琶湖を描いたらおのずと船が浮んだなどとはちと仰山ですが、まあ物に例えれば、このくらいお上手なんだそうで、それに両方とも年齢が若い。思えば前途洋々と、春の海の如し。その上お両人（ふたり）、それは大変な大変な大仲よし、雷がなっても離れっこなし、哀れ妬ましや、二人揃いの絵日傘に、木履（ぼくり）こそはかないが、フェルトとか申す厚ぼったい草履（これは内緒の話だがお背（せい）の足りない方が大変重宝がるそうで、よく売れますってね）しかし御心配なくこの

お二方は別にお背が足りなくって煩悶なさるという方ではない。むしろ、すらりとして美しい。しかししさいにこれを検すれば、寛子さんの方が美しいことでしょう。第一この人のお父様は予備海軍中将で今はさる生命保険会社の監査役、もってその富裕を知るに足るべし。学校も学習院とやら、平民どもの行けないような学校へいらしった由、いつの頃よりか絵心がついて習いたいとの申し出に、父上は日本海の海戦当時のように大いに緊張された。その結果、展覧会へ入ればまた名誉じゃという結論に達せられてお許しが出たという次第。

　ここに一方の仁代、九州博多の産にして明治維新前までは博多長者の一人なりしお祖父様、世が移ってお父さんの代頃から、倉が売られ、山がうられ、果ては庭を売られてそれから家屋敷、屋根の瓦一枚今は我が物ならぬ人手に渡ってついに赤貧洗うが如くに近寄りかかった。どうしようかと、あんまり心配をしたせいであろう、お母さんと二人だけ後へ残されることになったのです。仁代はここにおいて、石に噛りついても、女の子ながら、志を立てねばならない。人生到るところに青雲ありやなしやは知らぬ、ともあれ郷関を立ち出で、世にときめく閨秀画家柿沼玉園女史の内弟子に入りました。内弟子などと申すと大変聞えがよいけれど、実は女中が八分五厘、残る一分五厘が、僅かに絵のお弟子という次第で、朝は五時頃に一番早く起きる、御飯を焚く。それが初めは大変、瓦斯（ガス）というものに火をつける。マッチをすって持ってゆくとぼそっと夏の末頃のはかない蛍のような火が一ところだけつく。これではなるまいと、たくさん瓦斯（ガス）を出して、またマッチをすると、ぽっぽぽんとなにか物が破裂したような音がして、ぷっすと火が消えてしまう。あらっと胆をつぶす。つけたり消したり――つけたり、消したり、ああどんなに心配をした事か――それも当座のうち、なれければ手早く、順序よく頭を働かせてお台所の用をなるべく早

く片づけ、お湯殿の仕末までして、そうして絵具を溶こうという精励。玉園女史もその熱心と誠実とに驚いて今年の春から別に女中専業のひとを雇い入れ仁代は漸(ようや)く完全なる内弟子に進級いたしました。しかし内弟子のことゆえ、先生のお使いや、家庭内の雑用はよく心を使って働きます。そんな風ですから、着物なんかに贅沢をいうどころの騒ぎではございません。なんでも先生から戴く、おすべりだろうがお下りだろうがそれで満足して、あとは一心不乱に絵筆への精進、脇眼もふらずまっしぐら。それに引きかえ、寛子の方は一週二度のお稽古日に決しておんなじなりをしては来ない。着物が同じなら羽織がちがう羽織がおんなじなら着物がちがう、帯が同じなら帯留がちがう、帯留がおんなじなら帯揚げがちがう、襟がちがう、襦袢がちがう、足袋がちがう下駄がちがう、ちがわないのは頭ばっかり　ただし、これだけはだれでも一つよりもたない、おしゃれにとっては不自由だわねえ）。しかしお化粧はどうして大変なんです。白粉のその数およそ四十八通り、忠臣蔵の義士よりは一いろ多いんです。ですから鏡台の前に坐って御自分の顔を彩色する時間と、絵絹に向かって彩る時間といずれが多きかと、なにも頭をひねって考えなくても好うござんす。なぜならば、こんな問題は女学校の試験には決して出ませんからね。これがお二人の人となりのあらましでございます。

『それは好いけど、植物園の睡蓮の花はどうしたのって？』

まあ、そう急かずに聞いて頂戴、その年の秋上野竹の台を飾る数々の展覧会のうち、帝展や二科会ほどの勢力はないけれど、若い新進の画家達にとっては一つの登龍門となっている×××の展覧会には、玉園女史の門下一同も毎年出品する事になっていました。去年からこの二人も生れてはじめての出品をこの展覧会へ試みたのです。ところが、お二人とも仲よく枕を連ねて御落

選、さらぬだに仲の好いのが、さらに同病相憐れむ憂き目から、友情いやましてこまやかなり……。

『失望しちゃだめねえ』

『だった一度ぐらいで見事に当選しようなどと思うのがあんまり虫が好すぎるのよ』

『いいわ、また来年があるんですもの』

『来年こそは、きっと好いものをかいて、ねえ……』

『ねえ……』

と見合せた四つの瞳は希望の光りに輝き燃えていた。それで、寛子も鏡台の前へ坐る時間を絵絹の前へ坐る時間に繰り越す事にいたしました。仁代は奮励その度をさらに加える。

今年の春頃から二人ははやくも秋の出品の画題を案じ合う騒ぎです。

『何にしましょう、ありふれたものではいやね』といううちに、仁代がふと思い出したごとく、

『あのね、私いつか初夏の頃、植物園へ行きましたの、そしたらあすこの池に睡蓮の花が随分たくさんきれいに、そりゃ美しかったの、水の上に咲く花――ね、夢のようね、あたし下手でも書きたかったの、でもその時は御用のかえりに寄ったので何にも用意が無かったので――それは心残りだったの』

という仁代の言葉に耳傾けた寛子が、ふと瞳を輝かして、

『ああ、睡蓮の花――睡蓮の花好いわねえ、それにしましょうよ。今年の絵は題材――は同じでも構図をかえれば好いでしょう。そしてお互いに助け合い、相談し合って仲よく描いて、みましょう』

寛子は一つ年上だけに、どこやら姉様らしい物のいいよう。そうした言葉もたより無い淋しい仁代にとっては、しかく有難くかたじけなく心嬉しき極みであった。それゆえ仁代は早速賛成し同意を表した。

『ええ、じゃあそうしましょう、二人ともほんとに一生懸命でかきましょう。当選しても、落選しても、一つの絵を一心こめて描きぬくという事は、それだけで尊いでしょうもの』

『ええ、そうよ、また二人お揃いの落選したって、かまわないわ、まだ私達は若いんですもの』

学習院へ行ったというにもかかわらずこの人は至って平民式で、貧しきがゆえの内弟子の仁代にも、まるで小さい時からのお友達同様の親しみをみせた砕けた言葉遣い、誰が眼にも美しかった。

二人は睡蓮をかく事にはきめましたけれど、あいにく、その頃、睡蓮の花いまだ開かず、上野の桜がようやくというところ、今年だけは一足飛びに夏がすぐ来れば好いのにとじれったがることじれったがること。

しかるがゆえに、植物園に睡蓮が咲いたらねえと、二人が一緒になりさえすれば、お経のように唱え出す。

その内やがて、街路樹の鈴懸けの葉が、そよかぜになり出して、夏帽子にパラソルがちらほら、嬉しや睡蓮の花、今や咲きつらんと、二人は気もいそいそ、ある日写生の仕度をして、出かけてまいりました。

『まあ綺麗ね』

『ここにしましょうか』

『あすこにしましょうか』

『あっちがいい』

『やっぱりここよ』

二人が、写生の位置を定めるのに、あちら、こちらと小半時、絵日傘つぼめて脇におく、その昔を今に返した京風俗の流行の絵日傘も、仁代は寛子から貰ったのです。

それから二人が、花の姿をあらまし、写し取りました。配色、背景(バック)はふたりともみずからの心にまかせてしかもどこまでも相談し合って助言し合う頼もしさをもっているのでございます。

『私、もう疲れてしまったの――』

と寛子が向こう側、自分のを、やや離れた位置に陣取って熱心に木炭を動かしている仁代の方をにっこりほほえんで見上げる。と仁代もその声に気を取られて、そちらを見返りました。美しい顔が、初夏の日の下、影もなく、照らされて、やや汗ばむ心地、上気した頬、かろき疲れを覚えてか、うるんだ眸(まな)ざし、げにも寛子は美しい処女の姿です。仁代はしみじみ姿をみつめて半ば夢心地、水面に咲く花を描かんとする我なりや、はた地に咲くこのうるわしき生命の花を描く我なりやと少し頭が混乱いたしました。

『あらいや――そんなにじっとこっちを御覧になって、あなたおかきになって？――』

と言われて仁代は思わず、薄紅くなりました。

『いいえまだ――』とあわてて面(おも)を伏せて、かき出しました。

しばらくたつと寛子がまた声をかけました。

『あなた好いもの上げましょうか』と呼びかけました。仁代がまたそちらを見返すと、南京玉の飾りを綴ったオペラパックから、出したのは、美しいビロード張りのまるで美しい宝石の指輪でも入っていそうな小さな箱、蓋を取ると中に銀色にお行儀よく並んだチョコレート。

一つをまず手に取って『いかが――』とすすめる。仁代はほほえんで画板（カンバス）を傍においたまま寛子の傍に近寄って、おなじくチョコレートを指先につまんだ。それは右手である。

寛子はまたオペラパックの口をあけて、

『好いもの上げましょうって申し上げたのは、それじゃないのよ、これ――』といいながら、にっこりうすい藤色の絹の夏手袋を取り出して、

『私お揃いにこの間買っておいたの、おいやでなかったら、おつかいになって――ちょっと感じが好いでしょう』

と、いいかけてまず一つを自分の手にはめてみる。真白いきゃしゃなこの人の五本の指が、うすぎぬの藤色につつまれて、さらに匂いやかである。

『まあ、美しい！』と仁代は思わず讃嘆の瞳をみはった。

『あなたもはめて御覧なさいな、ちょうど好いでしょう』一対の手袋を仁代の手に渡しました。けれども、仁代はそれを受取るのをたゆたうのです。その顔色はにわかに打ち沈んでみえました。

『この色おきらい？』と寛子はいぶかしそう――。

『いいえ』あわてふためいた仁代は思わず声を慄わせました。

『だって、お気に入らなそうなんですもの』

はやくも、お嬢様を発揮して寛子はお冠りを曲げかけます。

その様子に仁代はますますあわてふためきました。今はこれまでと思いつめた如く、

『かんにんして頂戴、私——私——あの指がいけないんですから——』

『え——指が——』

寛子は青天のへきれき、美しい瞳をぱっとみひらきました。

『指がどうなすったの、お怪我？』

『いいえ、私まえから——生れつき、いけないの』やはり声が乱れる。

『まあ、どうして——どこが？』

『あの——運命だと私あきらめていますの』

蒼白く顔色を沈ませていたましくはじらいながら袖の蔭にほのみせた彼女の左の掌、薬指と小指が、離れずにぴったりとついたままで——寛子ははっとした。そして彼女は、我がことのように胸を打たれて、とみには言葉も出でぬように——しかも激しき同情の思いはつよくつよく寛子の胸を揺がして、心からの優しい慰めをもって、

『好いことよ——好い事よ、そんな事、なんでもありませんわ、はずかしい事ではないのですもの、あなたの罪ではなくって、ただ偶然なのですもの、そして絵をおかきになるのには別に御不自由じゃないんですもの、気にかけたり、悲観なさったりせずに、お忘れになっておしまいになるのよ、ね——ね』と優しく妹をいたわるように仁代の背を撫でて、抱きすくめぬばかり、

『ほんとに、私こんなもの持ってきて、いやなお気持をおさせして——かんにんして頂戴ね、私ちっとも知らなかったのですもの、あなたさえ仰しゃらなければ誰にもわからないほどのそんな

事、ちっとも悲観なさる事はないのよ。それに私、あなたがお打開けになったって決して、人に話したりはしませんもの、私のあなたに捧げる友情に誓って――』

熱情をこめて寛子は、その時仁代の不具の手を犇と握って我が唇のほとりに近づけました……。

今さらながら、かくも優しい友の心遣い、仁代の瞳には泪がそっとにじみ出るのでした。

初夏の日の午下り、睡蓮の花はたゆたげに、水の面に漂うて、空指して開く花の面ざし、げにも夢のごと――夢のごと。

## 二

二人の乙女は日ごと睡蓮の花咲く植物園の池のほとりへ通いつめました。写生が終ってから、二人は構図にとりかかり、下絵をつくりました。それまでにどんなに二人は助言し合ったでしょう。互いに励ましつつ、二人は睡蓮を主題にした画面を構成しました。そして七月の半ばには、いよいよ絵絹の上に彩りをつけるまでになりました。寛子は家中が、国府津に避暑するにもかかわらず、ひとりその年は断って、我が家の十畳を速成の画室にかりて、そこへ昼のうちに仁代を呼びました。先生のお宅の西日のあたる四畳半のせまいへやに絵絹をのべねばならぬ仁代を思いやって涼しい我が家の広間へと招くのです。そして二人は同じへやに絵絹を並べて、仲むつまじく心をこめて彩りました。八月の末には二つの絵は完成されました。

『さて題は何とつけよう』と二人はまた相談をするのです。繁った夏樹の影、東屋を画き、その前に睡蓮の浮び咲く池、傍の芝生に踏石、にぎやかな構図の寛子の絵には、『睡蓮咲く頃』と二人で名づけました。

『ロマンティックな小説の題にでもありそうね』と、寛子はすっかりこの題がお気に召して大喜びです。仁代の絵は画面いっぱいに、池の一部分をうつし取って、睡蓮の花を浮べ、空に浮く白い雲のかげほのかに、花咲く水面に夢のようにうつった構図でございました。それには寛子が『水の面』という題をつけてくれました。

『すっきりした題！　この絵にはもったいないほど詩的な題ですわ、ありがとう』

仁代はお礼を言って、これも大喜びです。

『お互いに、題を贈り合って、いい記念でしょう』

と寛子も、喜んでうきうきしていました。

九月初め、搬入の始めの日に、二人は絵を車に頼んで出品しました。二月（ふたつき）、三月（みつき）も、絶えず心をくばり、身を疲らせて、片時も忘れることのなかった大事な絵を、手離して搬入するのが寂しいくらいでした。

　それからの二人はただ発表の日をのみ待つのでした。

『去年のように落選したっていいでしょう。あんなに二人が助け合ってつくった絵ができ上ったのは、ふたりの友情の思い出のためにだっていいことですものねえ、それだけでも、十分、報いられているのよ、私達は、――』

寛子は、ふとこんな事を言いませんでしたけど、心の中で、いくたびもうなずきました。ほんとうにそうです、二人の友情の記念──仁代はこう思うだけでも、胸が熱く、高鳴りました。いつとはなく、寛子を思い慕う気持が根強く自分の胸に生じて、今は動きのとれぬものになっているのを感じたからでした。

ともあれ、発表を待つ間のもどかしさは、この二人だけではございません。夜ごとの夢は、当選して、一躍、新進閨秀画家の列に入り、某伯爵家から揮毫を頼まれたり、婦人雑誌や少女雑誌から口絵や、表紙を矢の催促で頼まれたり、絵葉書やが絵葉書にしたいと申込んできたり、新しい画室を郊外につくったり、名画見物に欧州めぐりをしたり、等、等、等、うまい夢をみたい放題、あんまり夢をみて神経衰弱になったなどと大騒ぎ。

寛子と仁代も、やっぱし夢をみるらしい。その夢はあわれ水の面に咲く睡蓮の花のさゆらぎ──

仁代はある日寛子に一つの夢の話をいたしました。

「私、こんな夢をみたの、あのね、静かな静かな山の頂きの湖水、その湖のきわに私が立っているの、そしてその湖の面には、きれいなきれいな睡蓮の花が咲いているの。「まあきれいだこと、私とてもこんなにきれいに画けなかったけれど」とあの絵の事をまた心配しているの、こんな美しい湖の花をあなたにもお見せしたいとすぐに思い出して、あなたの名を呼んだのよ、いくら呼んでもお返事がないの、私悲しくなって泣きそうになり、花を見ていると、まあ吃驚（びっくり）した、あなたがいつの間にか湖の中に、水の上に睡蓮の花の中に、すらりと立っていらっしゃるじゃあないの、あらっと私はほんとうに驚いてしまって、夢中になり、寛子さん、寛子さん、私がここ

にいるのよ、大きな声で呼ぶと、ちらっとあなたが、私を見返るの、けれどもねえ、それは冷たい素気ないまなざしを投げて、そっぽをむいておしまいになるのよ、私、取りつくしまがなくて、しょんぼりしていると、あなたは見ている間に、睡蓮の花の中に影をかくしておしまいになるの、まあその時のきれいだったこと、この世のものならぬ美しさ、黒髪も瞳も、胸もただゆらゆらと水渡る花の微風（そよかぜ）に、打ちなびいて、足許にむらがって咲く睡蓮の花が、一きわくっきりと、睡蓮の精！　睡蓮の精！　私はその時そう思ったの、そうだ私はもうあなたを今までのお友達の寛子さんとお呼びする事はできないのだと思うと、にわかに自分の姿のみすぼらしさが恥かしくなっていそいで逃げるように湖の傍を馳け出して、近くの木立の蔭に身を潜めて、それでも、私ったら未練がましく、木の間から、あなたの姿をみつめていたの、そのうち、あなたの姿はもうみている間に、花の蔭に、水の底にほのかに消えて沈んだようにもう見えないの……もうあなたにはこれっきり会えないのだと気が付いて、私は立木に縋って、寛子さんと呼んで泪ぐんでしまったの、その夢がさめてからも、しばらくなんだかぼんやりして淋しかったくらい……』

仁代はかく語りつつ、いかにも淋しそうだった、その夢を思い出したのか――。

聞いていた寛子は、華やかな笑い声を立ててこの人のやや持ち前らしいうきうきとした調子で、

『まあ、大変私がロマンティックな姿で夢の中にあらわれたわけねえ、睡蓮の精になるどころか、私の画いたあの睡蓮の絵が入選か落選か、今、天下分目の関ケ原で、会場の中で震えている最中でしょう』

寛子にとってその夢は仔細もなき笑い話にすぎなかったのです。

いよいよ入選が発表の日となりました。その朝の新聞はいかなる朝寝坊のえかきさん達も待ち兼ねていたに相違ありません。

その待ち兼ねられた新聞には、新入選の人達の顔振れを賑やかにかきたてたうちでも、ことに、うら若き女性、しかも、苦学に近き道をとって絵筆にいそしんだという見出しで仁代の名が挙げられ、昨夜（ゆうべ）、新聞社の写真班が押しかけてとったらしい玉園女史のお宅の四畳半の隅っこで小鳩のようにびっくりして小さくなっているその人の写真さえ出ていました。

かくて言うまでもない、仁代の『氷の面』は見事に入選したのです。しかし『睡蓮咲く頃』の寛子の絵はついに選びにもれたのでございます。

『仁代さん、おめでとう、やっぱしあなたは豪（えら）いわ』

今まで少し馬鹿にしていたような門下の人達もにわかに、手の裏を返したように仁代に言葉をかけたりします。

『仁代さん、気が狂うほど嬉しいでしょう、気違いにならぬように御用心御用心』

と仁代の背中をいきなり叩いてからかうひょうきんな人達もいます。師の玉園女史も心から仁代の入選を喜び、一層なお力添えをして下さるようでした。けれども肝心の当の本人の仁代はなぜか浮かぬ面持、本来ならば、明るく輝く祝福された運命の前に小躍りしてはずむ毬のようであろうはずのその心持に、なぜか一抹の憂愁のまつわるは――。

彼女の心は、ひそかにひそかに人知れず溜息をして、こう嘆くのでした。

『あの方と御一緒に入選できたのなら――』

今目の前にふりそそぐ華やかに明るい喜びの運命も自分ひとりの掌にはうけとるをためらう己れの淋しい姿を仁代は知ったのです。

おお、いっその事『睡蓮咲く頃』一つが当選したのだったら、仁代の心は躊躇もなく喜びに浸れたでしょう。なぜならばその幸福の前に酔い疲れた女王の如く寛子の傍に、侍女の如くその喜びを分つみずからを、さらに幸福と仁代は信じたのです。

おおしかし、現実はそうではなかった。『水の面』は選びに入り、『睡蓮咲く頃』は、それに伴うを得なかったのです。

それにしても寛子を慰めたい励ましたい、どんなに一緒に入選したかったか、いっその事一緒に落選した方が好いとまで思う自分の心を、偽りもなく寛子に示してその人を慰めたいと仁代はみずからの喜びをよそにして、その日を待っていました。

間もなくのお稽古日に来た寛子を仁代は寄り添うような気持で出迎えました。

『寛子さん、力を落さずにね、私あんなに祈っていたのに、ほんとに惜しかったのね、でも好いわ、来年こそね、私ほんとうに今から祈っていますわ』

と真心こめて優しく慰めると寛子は、むしろその言葉に不快を感じたらしく、つと身体をよけるようにして、つめたい声音で、

『おめでとう、仁代さん、――けれど、私に対する憐憫だの同情だのはよして頂戴、少し残酷よ』

と反感を持って言い返したまま見向きもいたしません。

その日、集まった人達、まだ残念さが去らないと見えて、展覧会の話で持ち切り、その中で寛子は苦々しそうに、

『敗軍の将、兵を語らずって、いまさら、愚痴はみっともないわ、およしなさいな』と彼女一流のお侠（きゃん）な口ぶり、負けん気性もほのみえて、どこやらに八つ当り。

『どうせ、当選するような人は、特別な人よ』

はては、寛子はこんな事を意味ありげに言い出しました。一同聞き耳をそばだてて、

『ええ、寛子さん、やっぱり何か情実があるの？』

と、さも聞きたげにつめ寄って来る大勢をあしらって、

『だって、どっか不具だったりする方の意気込みはそりゃ私達の遊び半分のようなものとはちがうでしょうものね』

寛子は、つんとして言い放ちました。思わずしんとした一座、眼を見合せて、さすがにだれも口を聞かない。そのはずです。仁代は一座の隅に、絵皿に向かっていたのですから。

不具！　不具！　寛子がかかる言葉を口にするのは、暗に仁代を指していることは火を見るよりも明らかです。思えば、この夏、植物園の池のほとりに写生に余念なかったおり、寛子が贈り物の夏手袋のゆえにはしなくも打明けねばならなかった仁代の小指の人並ならぬそのこと、――おお、いま、寛子が満座のなかで、かくも激しい語気を用いて、その一つのことによって、こその日の友情を微塵に打ちくだいてまで、仁代を見事に裏切ろうとは――。あまりの儚なき、頼み難き人のこころ、かくも人間は時として孤独の姿を強いられねばならぬのか。いかなる堅き誓いも、いかなる強き愛情も、ああそは時として、行く雲の影よりもはかなく、散る花のさだめより

も淋しく、かくて破り、ふり棄てられた後、ただ、最後に残るものは、佗しい佗しい『孤独』——世を捨てし聖の心も、あわれかくと悟りえてか……。

×　×　×　×　×

仁代が行李を納めて師の家を去り都を去ったのは、彼女の入選画の飾られた展覧会が上野にまだ群集の足を止めている秋も半ばであったのです。

都に出でてこの方、ようやく望みを達しかけた、その時、なぜ彼女は都に背いて去るのでしょう。故郷に錦を飾らんとして、否、否、あらず、さにあらず、もう二度と都の土を踏まぬ決心で立ち去ったのでございます。

師の玉園女史が、彼女のために幾度かその決心を思い止らせようとされたのは申すまでもなく、——けれども、やはり仁代の決心はあまりに強くかたかったのです。

『なぜにかくも都を後にせっかく得たる栄誉を後に、精進の絵筆をすてて立ち去るのか?』

師のいぶかしみ問う言葉に、仁代は涙さしぐみしまま答うる術を持たない子でしたものを……。

恩ある師の温かい心づくしに背いてまで、都を去った仁代は、故郷の博多に立ち帰ったまま杳として消息も無く、その秋も暮れて、年立ち返る春も訪れて一年目の、その暮春の頃、玉園女史が縁故ある長崎に行なわれる、自分の画会のために旅されし途中、過ぎし日の愛弟子の身の上を思い出されて、わざわざ博多へ降りて、仁代の家を訪れました。

彼女の家は千代の松原のほとりの小さい、かくれ家のような住居——、母子二人きりの佗しさ——、門に止る俥の気配にいぶかしみ出迎えた仁代の姿を見た玉園女史の驚き……やつれにやつ

れて身も細々と頼りなげな仁代の姿寂しげな、さても……
『まあ、先生……』
かく呼びて後は涙に——よよと師の袂にすがりつく仁代を抱きよせて訪れし人もまた継ぐべき声もなくて……。
招じられて入りし、狭い家うちに、まず師の眼を見張らせたものは、粘土のかたまり、素焼の人形いく十……泥絵具盛りし小皿と筆——あわれや、うら若き女人形師のそれは家なのであるものを……。
『では——あなたは……』
師のかく呆れたように見守る眼ざしを、地にも入りたげに恥じらい避けし仁代は低い寂しい声に、——口ごもりつつ……、
『あの先生、お許し下さいませ……絵筆はすてても——やはり生活のために、——働かねば、なりませぬゆえ……』
師の瞳から、堪えかねていた涙が流れ落ちました。
おお——会いに来たのか、泣かせに来たのか……千代の松原の千本松葉、こぼれ松葉のはらはらと、かなしや春も暮れゆく夕月夜……別れかねて玉園女史の胸は愁いにとざされるのでした。
汽車の時間もせまりしままに——悲しくも袂を分つ際、師の乞いにまかせて、仁代が差し出した一つの自製の人形、……夏かげ仄ぐらき湖のほとり花こそ開け睡蓮の片笑い……その中に立つ水がくれの美しの姫の姿、しろがね色の花蕚に一炷（すい）のかおりを焚く如き神秘なる乙女の姿その姿——その彩り、その姿、——やっぱり絵筆にあれほどの才ありし子の業（わざ）ゆえにと——今さらながら

玉園女史は仁代を惜しみました。そしてその人形の顔を見ると、なんだか見覚えのある知った人の面影に似通っているようでしたが、さてそれは誰であるかを思い出すほどの暇も無く、駅頭に別れを告げて帰途をいそがねばならぬ身でした。

　あわれ、人に裏切られ友情も愛も頼み無きゆめと知りて、あまりに傷つきし胸は狂わしく、一切を捨てて、かえり来れる我がふるさと、母子二人の生活のために、やむなく作る人形も、そを彩どればその面ざし、己れを裏切りし美しきかの人に似て、かのひとに似て……。

　おお過ぎし日に我が見し夢そのままに、つれなき君に似る人形は、かくて銘されぬ。睡蓮の精』――。知らずや人々、東京の某百貨店の、人形類の陳列棚に『睡蓮の精』なる博多人形のいくつか、ならびたるを。試みにその一つを取りあげ、人形の足許に咲ける花の裏を見たまえかし。せぴやのサインの細き文字、円の中にかぼそくひとよとしるされたるを――。

　かくていまだ眉うら若き女人形師の九州は博多、千代の松原のほとりに、つれなき人に似る人形つくりつつ、みずからの青春を葬るを思えば、すずろ、泥人形の肌の冷たきをも掻い抱いて泣かまほしや、泣かまほしやと――かく嘆くのは、私のせんちめんたるの性（さが）ゆえでしょうか？　いかに少女の君達……思い給うや。

# 心（こころ）の花（はな）

## 一

南島の港、和蘭陀（オランダ）船の往来（ゆきき）せし繁華の時は過ぎたれども今もなお、仏蘭西（フランス）航路の船、偶々（たまたま）に訪るるという古風の海港の趣き、海を囲める三方の山の姿のいみじさは、あわれ、長崎、その地の大浦と呼ぶわたりのカソリックの修道院の広き庭の面（おもて）、そこはかとなく春暮れゆく頃のこと、委（くわ）しくいえば一九××の暮春なり。——修道院の石階（きざはし）を疲れた少女が一人とぼとぼと上がって行った。あたりは仄暗いから彼女の姿ははっきりとは、見えないが、髪はみだれ手足はやつれ、その頬は血の気も失せ、若かるべきその瞳は力なく曇って、皮膚は弾力なく、歩みゆく足もなえはてていた。言い難い苦悩が、まだ十五、六の彼女を、打ち傷めているようである。静かな暮春の修道院の石階をただひそやかにあえぎつつ登りゆくその姿を、その時、じいっと灰色の修道院の窓から見下していた、一人の修道尼がいた。彼女の名はロゼット、若くして日本に渡り、十数年、信徒の間には、翼なきエンゼルの如くに信じ敬われつつあるその人であった。

かの影の如くにいたましい少女は石階を登りつくした。そこには重い扉がしめられ、一条の重い鎖が垂れている。少女はその、一条の鎖に我が身を守りすがらせた。必死の力をこめるがごと

くよろぼいつつ、その鎖を、双手(もろて)に強く、引いたのである。扉は左右にキキとややきしりて開く。会堂の内部は、夕闇濃く、仄暗かった。しかしただ正面に、マリアの御像の前に捧げられた不断の御灯(みあかし)のみは、聖(きよ)げにまたたいていた。乙女はもの狂おしげに、その御灯の前に走りより、はたとくずおれて、十字を切った。身もだえするがごとく、我が手を組み合わせ、

『まりあ像、今宵を限り、私はこの世を去ります。その前にどうぞ私の懺悔をおきき下さいませ。私の懺悔をおきき下さるのは、まりあ様よりございません。私は罪深い子でございます。死にましても、地獄(アンフエル)の火に永劫に灼きつくされるともいたし方のない身でございます。天国にまいれぬ身にはせめてこの現世(うつしよ)のうちにまりあ様の御前にひれ伏して我が身の罪を懺悔しとうございますゆえ、身に残る力もて、ここまで、たどってまいりました。まりあ様、悲しき子の涙の物語をおきき下さいませ』

こう言いつつ、その乙女はさめざめと泣いた。言葉を続けんとする前に、重き悲しみははやくも彼女の胸を圧するのであろう。

## 二

その時である。仄暗き御堂の一隅の帳(とばり)は、風なきに揺らめいた。それは、マリアの像を安置した左手(ゆんで)、修道院の廊下に通ずるかたわらである。いつの間にか、ひそかに廊下を渡りて会堂に入り来りしは、ロゼット尼(に)、彼女は静かに帳をかかげ我が身をその蔭にかくした、そして乙女の声に耳をすました。やがて涙の中から乙女の声は再びつづいた。

私はこの町から、ほど近い村の由緒正しい家に生れたものでございます。兄妹は兄二人に、妹一人でございました。妹が眉目（みめ）かたち美しいのに引きかえ、私は父にも母にも似げない、あまりに美しからぬ子だったのでございます。並の人よりも美貌を好む両親の心はいつしか私を疎み可愛い妹へのみ愛情を注いでゆくのでありました。『同じ着物を造っても、久代に着せたのでは張合いがない』こう申して、母達は私の着物の世話をする事さえ、けうとく思うようでございました。妹のためには、あまたの衣（きもの）が春夏、整えられ、人形を飾るように父も母もその美しい姿をよろこびめづるのでした。二人の兄も、房代、房代、と妹のみに、声をかけて、山遊びにも、野遊びにも手を引くようにして伴いました。そんな時、ひとり淋しく、とり残されるのは私でした。初めの中（うち）は子供らしく、無理にもとせがんで一緒に連れてゆかれたいと思いましたが、兄達がそんなら止そうと腹立たしげに申す言葉などは私の幼い心にも得体の知れない影をおとしました。やがて、年長けるに従って、そうした兄達の心も、はっきりとわかってきました。両親も兄も、女の子としてあまりに美しからぬ私は、連れて歩くことさえ恥としていたのです。それを知った私の心はいつか暗くいじけた子となりました。顔が美しくない上に、心まで暗く閉された乙女は、世にもみじめな姿でございました。盲（めし）いの野犬の如く、笑いを知らず、明るさを知らず、光を知らず、肉親の愛を知らず、暗い小さい部屋の隅にうずくまって、牡蠣の如くにおしだまっていました。若やぎし乙女の春のよろこび――そんなものを夢にだに知る由は無かったのでございます。

　人に愛され甘やかされている妹は年長けてゆくに従い、ますます美しく明るく、花のように家うちに輝いていました。父や兄の前にも、美しい誇り高い女王のように振舞っていました。生ま

れながらに、苦しみも淋しさも知らぬような妹のはずんだ心持の前には、醜い影の薄い私の姿などは、我が家に召し使う奴僕の一人に過ぎぬように映じていたのでございましょう。私は幾度、家を逃れ出ようと願ったことでございましょう。けれども、年もゆかず、力も弱く、姿も醜い私が、ただ一人世に立ったとて、誰が、これを迎えてくれましょう。人に愛される幸は生まれながらに失って出でた私でございますゆえ、やっぱり盲いの犬のようにこの世の光も仰がずに、下俯(うつむ)いて黙して暮すより、せん術ない私でございました。そのおり、妹はふと、病にかかり長く煩いました。両親も兄達も、尊い宝玉を扱うように、ひたすらいたわり介抱しつつ、医師よ薬よと、ある限りの手をつくしました。それほどの心づくしの中に妹は、病に勝てず逝ったのでございます。両親や兄達の嘆きはどんなでございましたでしょう。『美しい花は散りやすいのだ、醜い雑草は、生い繁るばかりさ』兄達は、腹立たしげにこう言い放ちました。いじけにいじけぬいた私の心には醜い雑草は、私になぞらえたものとさえ思われるのでした。父の悲しみ母の涙、とりわけて、女の胸のせまいゆえか母は狂気の如くになって妹の死を嘆きました。ともすれば狂おしげにいろいろの事を口走ったりいたすのです。ある日のこと、私のした、些細な、あやまちを咎めだて、口穢(くちぎたな)く罵りました果てに『大事な子は死んでゆき、死んでも好いという子は生きている、ままになるなら代らせてやりたかったものを』と叫ぶのです。おおその言葉は針よりも鋭く、槍よりも痛く、十五の私の胸をつき刺しました。あまりの事に涙も出なかったほど、一日を泣き明した後に、私の小さな心臓は破れ果て、獣のように、ただ無我夢中に、肉親への復讐に怒りたたせたのでございます。

## 三

その夜の事、私は、ひそかに、我が家の裏手に廻り、納屋の中から一握りの藁を取り出し、油をそそいで、戦く(おのの)手に握りしめ、火をつけて、我が屋の床下に、眼を閉じて投げ込んだのでございます。そして、そのまま地面の上に打ち倒れました。しばらくしてまたよろめきつつ立ち上がり、床下をのぞきました時、一束の藁は今は燃えつくし、白き煙をあげて、床下に焔を移そうといたしております。それを見ると私は我を忘れて床下に駆け込み、我が衣(きぬ)の袂に帯に、燃えさかる焔を揉み消してしまいました。火は消えました。私は藁灰の中にさめざめと泣き倒れ、我が身を見廻した時、おお何という世にも恐ろしい罪を犯そうとした私であったのでしょう。そしてもう取り返しもつかない罪悪の中に私の手も身体も染まったのでございます。

これほどの恐ろしい罪を犯そうとした私が、どうして、父母達の前に再び出る事ができましょう。ただ、この上はこの罪の身体をこの世から、掻き消す事だけでございます。この後生き永らえていたとて、所詮はこうした罪を犯す機会をただ待つばかりのような気さえいたします。私のようなものがこの世に生れてきた事がもうあやまちのような気さえいたします。この上苦しい世に生きてゆくには耐え難い自分でございます。海になり河になりと身をば沈めて醜きがゆえに、幸うすかりしこの身をかきけす事がせめての残された一つの道でございます。この世を去る前にまりあ様、まりあ様、心ねじけた子の犯した罪をお許し下さいませ、尊きびるぜんさんたまりあへ、捧げ奉る一つの乙女のざんげをおききとり下さいませ。

涙に声をふりしぼった乙女は、かく言いて、はたとひれふしたが、やがて力なく立上がり、よろよろと再び会堂を立ち去り、みずからを、死のかなたへ運ぼうとするのであった。

その時、御堂の奥、まりあの像のほとりより涼しく優しき一つの声音が起きた。

『小さい娘、お待ちなさい、死んではなりませぬ。おまえをそんなに不幸にしたのは、神様のあやまちでした。今宵おまえは美しい子に生まれ変わるのです。さあここへ戻って御恩寵を乞い願ってお祈りなさい』

乙女は呆然自失せる如く、我が耳を疑いてふりかえれば御堂の奥に輝くみあかしのもと、まりあの御像の優しき瞳は乙女を見守って、またたくようであった。おおこの奇蹟よ、びるぜんまりあの御胸に我がざんげのまこと通ぜしかと戦き走り寄りてはたと再び御像の前にひれ伏した。

## 四

『まりあ様、まりあ様、お救い下さいませ、一度、罪を犯した私も、みめぐみによって、おお、美しい子に美しい子に、生れ更(かわ)る事ができるのでございましょうか。おお、びるぜんさんたまりあ、玷(きず)なき御母(みはは)、いと尊きろざりおの元后(げんこう)、哀憐(あわれみ)を垂れて、すべての悪より、すべての罪より、魔鬼の罠より救い給え――』

かく祈りつつ、双手(そうしゅ)をさしのべて、御像の裳(もすそ)にとり縋り、涙とともに吻(くちづ)けて、果ては力萎えて、はたと床に転(まろ)び、気を失って倒れた。

やがて、時経て乙女は眼覚めた。気付きてあたりをみ廻せば我が身はいつの間にか、聖げに真白きベッドの中、深々と埋(うず)められ、枕許には、美しき、気高き尼僧一人、静かに立ちて、乙女の額を優しく掻き撫でつつ、

『びるぜんまりあは、あなたの祈りをおききになって、あなたの罪を、許し給い、今までの不幸に代る生命の光をお恵み下さいました。おおあなたの面(かお)は、もう美しく愛らしく、花のようです。けれどもその花はまだ蕾のままです。なぜならばあなたは年齢(とし)少ない少女ですから。あと幾年かこの修道院にまりあ様のあの愛らしき侍女として仕え教えを学び行なう時は、その花は開き匂うのです。おお、美しい花の乙女よ、今日から美しい一人の乙女としてこの修道院に私達と一緒に姉妹(きょうだい)のように睦み暮すのです。私達は皆あなたを愛する妹として喜び迎えていつくしみましょう』

かく柔らかき言葉もて告げつつ、尼僧は乙女の額に熱きくちづけを与えた――いままでかつて父にも母にも同胞(はらから)にも受けることなかりし人の愛情の甘きうるおいに今始めて包まれて乙女は半ば夢見心地にて――ややしばし語(ことば)もなく尼僧を見上げたるが、口ごもりつつ……『尼様、私は……私は……ほんとに愛らしいきれいな子に生れ代りましたの?』……かく問われし時、そのひとロゼット尼はしかと乙女の手を握りしめ、眼にまことの熱意を見せて、びるぜんまりあ様の御恩寵をお信じなさいとただひとこと、十字を切った……

五年の歳月が流れた。十五の春の暮、修道院に入りし乙女の久代もはたちの年丈（た）けし女性となりぬ。その年齢の春、いよいよ基督（キリスト）の花嫁として、御堂に宣誓の式を挙げて、永久なる純潔の童貞、修道尼の一人に加わる誉れを許された。

彼女の母となり、姉となり、かつ師として、この年まで、朝夕（ちょうせき）、導き助けたロゼット尼は、久代を始めて大いなる鏡を備えし一室へ伴い行った。

『美しい基督（キリスト）の花嫁、祝福に輝く若い妹よ、御身に約束された美しい花は今、御身の顔に胸に匂い高く咲き出たのです。麗わしい御身の姿は天の星のように輝やかしいものを！』

心よりの讃えの言葉を贈った――久代は、あまりの誉め讃えの言葉にはじらい、ためらったが、促されて大いなる鏡の前に立った。鏡面に映る我が姿よ、面（かお）よ、そは五年目に初めて鏡に対する己れだった。

おお、鏡の中に立ちしは、はたちの処女、身に纏いしは、純潔雪かと紛う白絹の薄衣（はくい）、裳（もすそ）長く垂れてこぼれ、髪に結び覆いし紗絹（しゃぎぬ）の垂れ布に影仄かにさす、その面（おも）のいかに聖げなりし。五年の間、闇を離れ、光を知り、憎しみを忘れ、愛に生き、まことの処女の潤いし魂の芽を育ておおせし女の胸の貴さは、あの過ぎし五年前暮春の黄昏、祈りの御堂の石階を、疲れつ登りし、いじけにいじけ暗かりし痛ましかりし少女の姿に引き替え、まことに生まれ更れる如くなりき。その瞳は信仰と愛に輝き、その唇は感謝と希望に微笑み、その頬は、この世の光と天上への思慕に聖げに白く冴えていた。

『おお、さんたまりあ、これが私の姿でございましょうか……』

感謝と喜悦の激情にみずからを支えかねつ、久代はつと傍(かた)えのロゼットにより縋った。

『信ずる者に、神は奇蹟を贈られます。あなたの魂の内なる心の花はかくも立派に麗わしく咲きいでました。これが正しい奇蹟でありました……』

ロゼットは温顔に絶えざる泉の如き微笑を浮べて答えたのだった。

おお、心の花、心の花、まことに眼には見えざる心の花、人は胸に持ちてこの世に生まれ出で、その花の咲く美しさに従いて姿も面(かお)も変わりゆくものであったのか。生まれながら眉目(みめよ)美き子が、もうそのみずからのすぐれし姿にのみ頼む時、その胸の心の花は、凋(しぼ)み落ちゆく恐れさえあろうに、眉目かたち人にすぐれず美しからぬとて、いたずらなる嘆きをすてて、身に智慧と愛と信仰を宿す時、おのずと内なる見えざる心の花開きて、その美をも気高く雄々しく飾りゆくものと、神は人の子に正しき奇蹟を約し給うたのであった。この奇蹟こそ伝え聞く、そのかみの、切支丹ばてれんの魔法と呼ばれし妖しき類にはあらで、真実(まこと)、今の世より人類絶ゆる永劫の世にわたりて、人と神とをつなぐ、ただ一つの正しき奇蹟ならずや。おお心の花！　心の花！　世の幼なき少女の君達よ、ゆめ忘れ給いそ、この花の培いを。

――かく語り終り給いしは、われらにカトリックの信仰と仏蘭西語との手ほどきを与え給う霊名アグネスと呼びし日本の人にして修道尼の君なりき。われらには師の君にてあり給う人ぞ。あわれ、かくまでに優しき智慧と情もて一人の乙女を救い完(まっと)うし給いしロゼット尼今はいずこにおわし給うぞと、われら教え児の口を揃えて問いまつれば、『来れよ』と曰(い)いて、われらを従え会

堂の後園に導き給う。そこに一基の大理石の小さき十字架立てり。野うばらの蔓めしきもの、その石のおもてを覆うて露を帯びたり。

『ロゼット尼の御霊はここに――』と、示し給う、その御声のおののきたる……、われらもおのずと胸ふさがりて首（こうべ）を垂れぬ。

『さらば、救われし幸あるひさよと呼びしひと今もおわすや』と、われらのひとり口軽く師の君に問いまつりぬ。

『さなり、彼女は、今御身らの前にかく立ちてあるなり』

と、――御声は強くも凛々しく響きぬ。われら七人の少女ものも言い得ず、ひたと跪きて裳にまといつ師の御姿仰ぎまつれば、いみじくも気高き御顔（おんかんばせ）蒼白きまでに澄みわたりて御瞳きよらに濡れしよ。

# 曼珠沙華（まんじゅしゃげ）

## 一

大利根と呼ばれる平野を横切る大河を一つの渡船が、秋のうららかな陽ざしを受けて、漕いでゆく。

船の中には、七、八人の人影――

『あら、綺麗な花』

こう叫んだのは、年齢二十一、この若さで早くも女芸人一座の座頭になって東から西、北から南、浮草の、なにをうねうね水のまにまに漂う寂しさはその美しさに添えるにも、もの懐かしい香りのように、長旅にいささかやつれは仄見えても、眉目形凜々しく、しゃんとして、やっぱり麗しく若い一座の師匠（おっしょう）さん『みやこ』そのひとの声だった。

『師匠さん、どこに、花が』

仇気（あどけ）なく、かくより添って眼をきょろきょろとさせて尋ねたのは、幸ちゃんと言われて一座中での年齢（とし）下、十四の少女、師匠さんには腰巾着で可愛がられっ子。

『幸ちゃん、いったい、あんた盲目なの』

これはみやこの手きびしい声で、
『あら、師匠さん、私、私、ちゃんと眼が開いていてよ、それ、こら、こんなに、ちゃんと見て頂戴よッったら』
盲目と言われて幸ちゃんたる者、いとどまなこをかっと見開き給う――。
『そうね、そう言えば、どうやら二つ節穴みたいな可愛い穴があるわねえ』
師匠さんあくまで冷然たり。
『いや、私、知らないッ、ずいぶんだずいぶんだ師匠さんはン』
と船ばたを叩くけど那須の与一はあらず！　もとより扇（おうぎ）といいたいがもう秋の河中（かわなか）――ただし緋房のゆらぐ舞扇なら船の中に積んだ小荷物の中に束にしてあろう、踊りと唄を取柄のこの一座の旅だから……。
『怒ったの、可愛想だな、ちょっと教えてあげようか、あれさ、あれ、あれをごらん』
と、みやこがいまし嫋（たお）やかなる腕をあげて、しかもその腕にまつわるのが、秋にはうす寒かるべき羅（うすもの）の袖、帯さえ少し萎えて痛々しい。一座の師匠さんともあろうものがと云っても、いたしかたなかった。この一団しさいありて、旅先であぶれてとやを続けて、あげくの果てにこの河下り、今宵までに向岸の小っぽけな田舎街の汚ない小屋で打とうという次第だから、さもあらん、秋の風、河の流れ、渡りゆく船の中あげし腕のかぼそきは、あわれ。
　みやこの指さすかなたは岸のあなたの平野、――おお、げにも花が、花が、咲きたりな。美事に、一面颯（さつ）と、今開いたばかりの如く、真赤な花が咲いている。

『あら、ほんとう、きィれェいィねえ』
幸ちゃんは感嘆久しく我を忘れて、後また船ばたを叩きつつ、
『みんなも、みんなもごらんなさいよ、あれを、あの花を、さ、何をぼんやりしているのよう』
と子供のくせに大人の真似をして額に青い筋をはって、怒りつける調子。
そのみんなたる御連中が、大変心細いみんなだった。キャラメル、氷砂糖、塩せんべい、あられかき餅、ひどいのは二銭に五つの飴玉の入った駄菓子の袋、南京豆のごそごそいうのに、無我夢中で、空も船も水も岸も花も、いわんや十四のお茶ッぴいの幸ちゃんの声なぞ彼女らの眼中にあるべきでなかった。
『やい、くいしんぼう』
幸ちゃんがじれて、こう大声で言いかけた時、――
『あんなに言うから、ちょっと見ておやりよ』
みやこの声が通った。さすがにくいしんぼう同盟の連中も、その声で、はっとして、慌てて氷砂糖を呑み込んで、のどをつまらせた人がある。その白黒させる眼できょときょと、さてお伺いを立てた。曰く、
『師匠さん、あの何を見るんでございますの?』
『あっちだい』
といきなり幸ちゃんが、その首玉をつかまえて、ぐいと船のふちに、
『見えるかい、見えるかい、あれが、赤いのが、きれいなのが、ぱあと一面に開いてるよう』
と幸ちゃんが声をせかせか。

『へーい、花火、どこに？』
相手は落付きはらって悠然。
みやこが珍らしく、皓歯を見せて笑った。
『花火！』
『玉屋！　鍵屋！』
三味線（いと）を持つ一座の小母さんが、こう黄色くしかも錆びた声をふりしぼった。
『いいわねえ、これが川開きだったらねえ……』
あわれ、江東のほとり隅田の川のそれならなくに、ここは都を落ちてひととせ、いつ立ちかえりて事問わんあてもない都鳥の一座であるものを。
『いけないよ、花火だなんて思い出させちゃあ、東京の話は禁物ですよ、師匠さん』
三味線（いと）の小母さんが衣紋（えもん）をぬいだ。眉の跡が青く秋の陽ざしをまぶしがる。
『幸ちゃんの嘘つき、花火が赤く開いたなんて――しだれ桜でもぽんと上がったのかと思ったのさ』
氷砂糖太夫が頬ふくらましたは、あながち飴玉のためではなかったろう。
『いやね、このひと、くいしんぼうでおこりんぼうで、そそっかしやで』
幸ちゃんは悪口を言い続け出したら、
『まあ、花火みたいに綺麗なのよ、そらあの花がねえ』
と師匠さんが、いつものように喧嘩にならぬうちに口を切って間に入る。
『へーい、あら、なんだひがん花じゃありませんか』

と、口あんぐり、太夫は馬鹿馬鹿しくかつがれた表情である。——ひがん花が何が珍しいんだ、切り取って束にして持って行ったって、一厘にもなるものでもない、こう言った気持でつまんなさそうな顔。古来かかる無感覚者を称して　花より氷砂糖）という。

『でも立派な名がついているわ、曼珠沙華って』

みやこがこう言った。このひと字もよくかく、ものの本を読むにちがいない人柄で。

けれども氷砂糖太夫輩は名が立派だってあえて驚きはしない。都鳥一座、なんて名が立派だってごらんなさい。まる一年ろくな収入（みいり）も無くてまだ田舎をうろうろ、あげくのはてがていのいい河流れだ、ふん、——そういいたげな面持でつんとしているところは、すでに若い師匠さんを不信任の議決がほぼ成り立っているのかも知れない。何を言っても、ものの張り合いのないひと、——諦めているからみやこは、今さらしょんぼりしなかった。

『綺麗だわねえ、綺麗だわねえ』

幸ちゃん一人一生懸命で賞（ほ）めている。

## 二

陽の入り合いに船は着いた。

その河添いでの小さい劇場というよりは、芝居小屋といった方がふさわしい、そこへ僅かな人数の一行がこれも僅かな荷と一緒に着いた。

芝居小屋の持ち主が慾張りで一晩といえども、無駄にしないで、すぐに今晩から開けるという。船で酔ったの疲れたのと泣言を言っても間に合わない。

楽屋で仕度をしていると、ぽーん、ぽーんと空に打ち響くものの音、響。

『あれ、何。――』

『花火よッ』

今度こそ、まさしく、それと思って、一人が楽屋の窓から首をのべると、しだれ柳もさくらも渦巻く龍田の錦もなんにもない、――ただ音ばかり、たいへん高くつーんとひびいて、煙が、ちょっとするばかり。――またぽーんと――今度は小ちゃい風船が一つへらへら降りて来る。

『野暮くさい花火ね、運動会！』

三味線（いと）の小母さんが舌打ちをした。

『いいえ、ちがうのよ、たいへんなのよ、私今表で聞いてきたわ』

と、二人ばかり口を合せた。

『何を聞いてきたの』

『あのね、オペラってんのがあるんですって、ちょうど今晩から、この少し向こうの小屋で、立派な新しいできたての劇場っていうんですって、そこへかかったの、×××子の少女歌劇ってのがね、それの花火よ』

『へーい、オペラって花火を打つのかい』

『いやな小母さん、いわば景気を添えるためじゃありませんか。なんて言ったって、つまり向こうが勝っているのよ、花火がつくんだもの』

若いひとと二人が溜息をした。
いかにも、そのように、今宵同じこの街で××少女歌劇と銘打った一座が始まる。新築のこの街の洋風の劇場で、出しものはサロメとなんとか、なんとかって、七色のベールをかぶって裸で脚を出して踊る西洋の有名なオペラというものだとあって大評判、土地の新聞社が応援をする騒ぎである。――

これに引き代え都鳥の一座は、途中座の人達に見限（みき）りをつけて逃げ出されて、僅かな小人数。みやこのすぐれた芸をもって、『保名（やすな）』よ『藤娘』よと踊って見せるとも、おすしよりもライスカレーのおいしいこの街の文化的発展の空気には及びそうもない。

さても影のうすい、都鳥の一座よ。

その宵から、木戸に人影はまばらである。

花火の音、サロメ、七色のベール、オーケストラ、同勢何十人の一行のオペラ――向こうは満員でにぎわう。

あんまり、こちらへは、入りの無い不景気さに、とうとう木戸番があくびをし続けて煙草をのみ倦きて、小屋の横手の床屋へ将棋を打ちに出かけてしまった。

『今夜はどうせこれだけだ、もう八時すぎに誰が来るものか』

こう言って行ってしまった。しかし、幸ちゃんはそれを見逃さない。

『八時すぎたって木戸番のいない小屋はないよッ』といきなり自分で木戸番の席へ乗り上がった。

――この幸ちゃんは深川の大きい料理家の女中がお母さんだった。お父さんは行方知れず、お母さんが三階立ての大きい料亭をお膳を持ってどんどん日にいく百回上がり下がり、立ちながらお茶漬をかきこむ生活だったから、脚気をそのままの不養生でなくなった。その時、その料亭の宴に踊りでよく呼ばれて来ていた、みやこが、孤児の十一の幸ちゃんを引き取って、妹分に芸を仕込んでやろうとしたが、踊りはとてもいけなかった。というのは、幸ちゃんは生れながら、どうしたのか、片足短い、言い代えれば片足長すぎる。……どっちにしてもよくないけれど）じゃあ、唄をと言うと、これが少し調子はずれというので絃（いと）に乗ってくれない。そんならと撥（ばち）を持たせると、

『よいやまち』と『さがやおむろ』を一年してもすぐ明日から忘れる。

　みやこは笑い出してしまった。ずいぶんと思い切って無器用ね、えらいわ、それじゃあ、もう遊んでおいで』と、それなりで腰巾着だけになっちまった。

　その幸ちゃんだから、楽屋の使い歩きの用のあとでは、木戸番でもなんでも引き受けるせめてもの奉公ぶり。彼女は速成木戸番になったのである。ところへ、ぬっと風体はなはだよろしからぬ人物、ふところ手をして男が二、三人、そのまますいと木戸を通り過ぎて入ろうとする。

『木戸銭を願います』幸ちゃんが忠実なる声を発揮した。『木戸銭、どこだっておれ達はただだ』というなり、また入ろうとするから、深川生れの幸ちゃんが火の玉のようになった。

『どこだって！　ここはちがう、みやこさんの芸をただで見たけりゃあ、お辞儀をして通れッ』

　十四の女の児のたんかに吃驚（びっくり）したのか、逃げちゃった。その時後ろでほほとほがらかに笑う声、振り向くとその肩を優しくおさえた、みやこが立っている。鬘下地（かつらしたじ）でそのままに、楽屋に見

当らぬ幸ちゃんの姿をたずねて、来てみた表木戸で、今の様を見たのである。
『えらいわね、幸ちゃん、ありがとうよ』と、にっこりされて、まごまご。
『だって師匠さん』仇気なく幸ちゃんは、はにかんだ。けだし幸ちゃんにとって、みやこは救いの女神であり、第二の母であり、天与の姉である。その貴き人の芸を、ただでふところ手をして見にくる男の人を生命に代えても追いはらうは、彼女になし得るただ一つの芸であったから。

その翌日、小屋の持ち主が一座に相談をかけた。それは初日からのような入りでは仕方がない、この上は今来ている……少女歌劇団と合同して出演して貰いたい、幸いオーケストラで越後獅子も春雨もかっぽれもできるというから、一つあちらへ合同して踊って貰いたい、こういう相談だった。座員の面々気がめいっていた際だから、一も二もない。氷砂糖の太夫など真先にもう立ち上がった。『さあ、行きましょうよ、あちらへ』とばかり、荷物をかつぎ出しそう。しかし、肝心の座頭のみやこの柳眉はひそまって開かず。水色の半襟に真白きおとがいを埋めて愁いに沈む――その胸にいきなり顔をさし向けて母に泣きつく幼な児のごと、幸ちゃんが烈しく泣き声を上げた。

『いやよゥ、いやよッ、誰が、オペラなんかにへいへいして仲間に入れて貰うものか。裸になってベールをへらへらさせて踊って、生首を吸ったりする奴の下端に誰が使われるッ、私はいやだッ、ね、師匠さんもいやでしょう、立派な芸を持ちながら、楽隊で踊れるかいッ、師匠さん行っちゃ駄目よ、あんな奴の中へ――』

そういう幸ちゃんを抱き締めて、ほろりとみやこの涼しい瞳が露を宿した。

『ええ、行きやしないわ、ねえ幸ちゃんと二人だけでも、立派にたてこもって見せるよねえ。私の芸はオペラとやらの合い間に使われるのには、いばるようだが惜しすぎる。なくなったお母さんに会わせる顔がありません』

お母さんとは、みやこに芸を教えた、養い親、東都舞踊界で有名なひとだった。

『師匠さん、それことわざにも申すじゃあ、ございませんか、身をすててこそ浮ぶ瀬もあれってね……』

と三味線の小母さんが遠まわしの忠言も、この場合、舞台で死ぬまでもと思いつめた、若い一本気のみやこには、ききめのあろうはずがなかった。

それで都鳥一座を守って、残ったのは座頭のみやこと芸なしの幸ちゃんと、たった二人。後にも先にも――ほかの同勢ことごとく白旗をふってついに怪しげな歌劇（？）の一座に合同、頭をさげて合い間に使って貰うことになった。

もう、唄も無い絃もない。みやこの身につきしは幸ちゃんと舞扇一本の芸である。

『東京にかえりましょうよ、師匠さん、帰ればまた舞台があるわよう』――可哀想に、その東京がいけないから、みやこは旅に流れて来たのだ。あの大地震で隅田川近くのみやこの住居は灰になって身ひとつ、幸ちゃん達と逃げたばかり。一座のひとを抱えて、何もなくしたみやこが思い立っての旅興行なのである。今立ちかえる東京になんの当があるわけでもなかった。バラック一つ二人を入れる屋根の下があるか無いかさだかならぬ心細い中を……。それでもなんと思い立ったか、ともあれ生まれた東京へ立ち帰るとあって幸ちゃんを連れて、渡しの船を求めて河添いを

辿って来たのが黄昏（たそがれ）であったという。渡しの舟が生憎、――オールバックの頭で、半ズボンをはいた若い船頭が今夜は街の歌劇見物とあって、早くから船をとめて出てしまった。

『へんな清姫だねえ』日高川のそれではないが、――泳いで渡れるはずもなし……。

その翌朝、一番の渡し船が出る頃――みやこと幸ちゃん二人は、その川下の岸辺、曼珠沙華の咲き乱るる中に埋もれ相抱いて眠っていた。永遠に醒むるとて無き眠りに……。朝露は真紅の細き絹房を乱せしに似し葩（はなびら）を潤していた、その真中にみやこは嫋女（たおやめ）の身を横たえて、面を覆うに銀泥（ぎんでい）の舞扇もて――。しかも夕べの名残りの月痕淡くそれに映じて……。幸ちゃんは彼女のいとしき師匠さんの胸に顔を埋めて犇（ひし）と離れず身を添えていたという。

人々は自殺と言う、然し麗人何んぞ昇汞水（しょうこうすい）、猫いらずの無風流をものせんや。さにあらず、彼女らが露帯びし花のしとねを一夜の宿に朝の渡船を待つ夜の中、その花茎より花蕊（はなしべ）より発する花の毒気に打たれたのであろう。古老は言う、この花は古来毒草として野遊びの小児をいましむるに足るものであるから。さもあらばあれ、舞姫のいのち奪いしこの曼珠沙華！

辞典はこの花を告げてかく称す。

マンジュシャゲ　曼珠沙華）は梵語Mañjūṣakaの略、天上の華の義、石蒜科（せきさんか）に属する草、一根より数葉を生ず、葉は細長くして緑黒色を呈す、葉枯れて後、茎生じ花開く、花は繖形（さんけい）に排列す、花蓋は通常深紅色を呈し六片に深裂して各破片は反捲（はんけん）す、しかじかと――。

梵語によりて天上の花の義ありと。ああ、舞姫みやこ、すでに天界にその妙技を舞いてあるべし。かの幸ちゃんと呼べる少女は、その裳（もすそ）に坐して莞爾（かんじ）とせん。善きかな。

かくてよし、花よ地に咲け、佳きひとよ可愛の少女の魂よ天に瞑せ——。

# 解説　花々は世界に抗する。――大正五年の文藝ガーリッシュ

千野帽子

連作短篇集『花物語』は、大正・昭和を代表する人気作家のひとり、吉屋信子の出世作とされるガーリッシュな文藝作品です。

上巻冒頭の「鈴蘭」から第七話「名も無き花」までの七篇は、一九一六（大正五）年に《少女画報》に掲載されました。初夏の夕方、洋館の一室につどった七人の少女たちが、ひとりひとり、物語を披露していくというシリーズものでした。これが好評で、その後も作者は『花物語』の総題のもと、一話完結の少女物語を同誌に一九二四年まで、足かけ九年にわたって連載しました。

女（の子）どうしの出会い、交流、別れを書きつづった全五二篇の短篇では、女（の子）が女（の子）を慕い、励まし、あるいは支えています。ロマンス小説に見られるような「女を守る存在としての男」は、ここにはいません。吉屋信子の世界では、男はしばしば、女を理解しようとしない冷たく横暴な権力者であるか、そうでなければ逆に女が庇護してやらなければならない「老爺」「弟」といったか弱い存在なのです。

女は結婚して当然、結婚しない女は人として問題がある、という考えの人が多かった当時、男を介在させずに物語――しかも濃厚なエロティシズムすら漂う物語――が成立するとは、世人は想像もしなかったはず。良妻賢母教育が国是であった時代の少女向け媒体で、『花物語』は、結婚は女の不幸の源でさえありうる」と、なかなか過激な主張をしているようにも読めます。

さぞ風当たりがきつかっただろうと思ってしまいますが、そうでもありませんでした。当時の少女雑誌は「門限」が厳しく、恋愛をストレートに題材とするのがご法度だったので、「男」の意味を相対化する『花物語』ですら、女子（おんなこ）ども向けの、ただ男が出てこないだけの安全無害なお涙頂戴話にすぎない、と世間では長らく軽んじられていたようです。

「女学生は恋愛禁止」「女は結婚すべし」と決めつけていたような人たちなら、作者の装飾的な美文に立ちこめる凜とした色香にも、どうせ気づくわけがない。彼らの目には、女だけで完結している『花物語』は一見、「当たり障りのない模範的なコンテンツのひとつ」でしかなかったのかもしれません。

幸か不幸か真価を見誤られたおかげで、『花物語』の連載は圧力をかけられることもなく、読者たるお嬢さんたちを励ましつづけることができたのでした。

女の子を読者対象として、女の子を主人公とした物語は、もちろん『花物語』以前にも存在しました。しかしそれらは基本的にはパターン化された、教訓臭の強い、修身教育向けの、娯楽や芸術というよりは教材に近いものだったようです。

それまでの少女読物の修身物語的な主人公たちと違い、『花物語』一篇一篇のヒロインたちは、つねに理想を愛し、世界に抗することを忘れません。しばしば泰西名画や洋楽に憧れ、とき

にはキリスト教や翻訳文学に親しんでいたりもする。彼女たちは近代(モダーン)の子。
　一九一六年、『花物語』は少女小説の閉ざされた部屋にやってきて、一気にカーテンを引いて窓を開け放ち、外の風を通したのです。窓の外には、まだ遠かった西洋の風景が広がっていました。

＊

吉屋信子は栃木高等女学校（のちの栃木女子高）に入学した年、一二歳で《少女世界》などの雑誌に投稿をはじめ、翌々年には《少女界》の懸賞で一等となります。明治末・大正期の雑誌において、読者が投稿する作品（詩歌や随筆や小説）は大きな位置を占めていました。
　その後、投稿先を少女誌から文学青年の登竜門的存在だった《新潮》《文章世界》に変えますが、常連投稿家からプロの作家にはなかなかなれるものではありません。不器用で家事を好まず、読書に夢中で他のことを顧みない彼女の性向を、両親は喜びませんでした。いまだって子どもが小説家や漫画家になりたいと言ったら、親はそう簡単に納得しないでしょう。
　当時、作家になるためには、上京するのが通例でした。吉屋信子が上京したのは卒業の三年後、一九歳のとき。東大で学ぶ兄の下宿で家事手伝いをしながら、童話作家としてデビューします。その翌年（一九一六）、《少女畫報》の編集部に送った第一話「鈴蘭」が編集者・和田古江の目に留まり、連載が決定しました。それが本書上巻冒頭の一篇であり、つまり『花物語』は持ちこみ原稿からスタートしたのです。
　作者は後年、『處女讀本』（一九三六）所収の随筆「まだ見ぬ花」で、鈴蘭にまつわる女学校時代の思い出を書いています。

〔…〕今こそ夏の銀座の夜を花賣少女がこの花束を賣つてゐるけれど、少し前には東京では珍しい花だつた。
女學生の頃、同じ寄宿舎の友達のお家が北海道で六月頃になるとブリキの罐のなかに、この小さい白い鈴の花が葉につゝまれて、たくさん送つて來た。私だちはそれを机の上に分けてもらつて有頂天になるのだつた。

鈴蘭とは当時、このような花でした（小説『屋根の子だち』の題に見られるように、吉屋信子はよく「××たち」を「××だち」と書きます）。

『鈴蘭』にはじまった『花物語』の連載中、一九一九年には波瀾に満ちた家庭小説『地の果まで』と自伝的な『屋根裏の二處女』という大人向けの二長篇を書き、前者は新聞の懸賞小説で一等となります。こうして翌二〇年に前者は新聞連載、後者は書き下ろし刊行の形で発表されました。

ここで同世代の、まったく作風が違う作家たちの人生が思い起こされます。

二歳年長の森田たまは、吉屋信子と同じころに《少女世界》に投稿をはじめました。吉屋信子と同年生まれだったあの尾崎翠も、やはり在郷中より吉屋信子と並んで《文章世界》の有力な投稿家となり、童話や少女小説から大人向け小説へと進みました。のちに書かれた尾崎の代表作『第七官界彷徨』の主人公・町子は、兄たちが住む家の家政婦として上京するという設定。

『花物語』連載中の一九二一年には、一歳年下の宇野千代が新聞の懸賞小説でデビューしています。また『花物語』が完結した一九二四年には、同じく一歳年下の野溝七生子（なおこ）も新聞の懸賞小説でデビューし、その作品『山梔（くちなし）』の主人公・阿字子は本に耽溺して、その文学趣味を親に咎められています（しかも『死の果まで』『山梔』を世に出したふたつの懸賞には、どちらも選者として徳田秋声がかかわっています）。

そして吉屋・尾崎・宇野の三人は、いずれも十代のころに短期間、地元の小学校の代用教員をしていました。

つまり、吉屋信子の二四歳までの生きかたは、この時代、文学少女が作家デビューするまでの、ひとつの典型だったのです。

*

『花物語』の主人公たちは世界に抗する、と書きました。たとえば「白芙蓉」では、庭に来た鶺鴒を空気銃で狙う子爵家の幼い若さまを、家令の娘が強く窘めます。

〈いけません、私のお庭のお客様をうっては……〉

主家のお坊ちゃまに諫言したこの凜々しい美少女は、そのことをもって、ほかでもない父の命により、遠い国もとに返されてしまうのです。

人に仕えることが雇用関係ではなく主従関係を結ぶことだった時代は遠くなりましたが、現実世界での敗北がそのまま理想世界での勝利となることがあるのは、いまでも同じです。『花物語』の宛先は、世界はここ一番で味方になってくれない、と感じている人たちの心なのかもしれません。

＊

私も含め、近年は『花物語』は一九八五年刊の国書刊行会版（全三巻）で読んだという人が多いはず。国書刊行会版は、一九三九年の実業之日本社版を踏襲して、中原淳一の表紙画・挿画で飾られていました。その後、著者歿後三〇年にあたる二〇〇三年に同社あるいはゆまに書房から復刊された他の吉屋作品も、多くは中原淳一の表紙画・挿画を看板にしていましたから、私どもはつい、吉屋・中原をまるでコンビのようにとらえてしまいがちです。

吉屋と中原とは、一九三〇年代に内山基主筆時代の《少女の友》誌で、それぞれ花形作家・花形画家として活躍していました。この時点ですでに『花物語』の連載開始から数えてざっと二〇年後のこと。この時代の《少女の友》を読んで育った田辺聖子や須賀敦子といった人々の世代にとっても、吉屋と中原は頭のなかで切っても切れない親和性を持っていたはずです。

いまさら言うまでもなく、中原淳一の挿画は溜息が出るほどすばらしい。しかしそれはそれとして、オリジナルの『花物語』は中原の挿画ではありません（連載開始時、中原はまだ三歳）。

中原の挿画を採用しないこの河出文庫版は、既存のイメージをいったん横に置いて、「吉屋信子の『花物語』」に立ち返ってみる試みでもあります。新しい『花物語』、未知の『花物語』と、どうぞまっ白な心で出会ってみてください。

二〇〇九年二月、京都

初出　「少女画報」一九一六―一九二四年、「少女倶楽部」一九二五年
初単行本　『花物語　第一集』洛陽堂、一九二〇年一月
『花物語　第二集』洛陽堂、一九二〇年一月
『花物語　第三集』洛陽堂、一九二一年四月
『花物語　Ⅳ』交蘭社、一九二四年一月
『花物語　Ⅴ』交蘭社、一九二六年三月
＊洛陽堂版全三巻も、『花物語　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（Ⅰ／一九二四年三月、Ⅱ／一九二四年六月、Ⅲ／一九二四年九月）として、交蘭社より再刊

河出文庫版は、実業之日本社刊『花物語　上・中・下』（上／一九三九年三月、中／同年五月、下／同年七月）として三巻本に再編集されたものを原本にして新字・新仮名遣いに改めた上で刊行された国書刊行会版（上・中・下／一九八五年五月）を底本とした。ルビは、適宜付し直した。尚、本文中、今日では差別表現につながりかねない表記があるが、作品が書かれた時代背景と作品の価値をかんがみ、底本のままとした。

**吉屋信子**　よしや・のぶこ)

１８９６年、新潟市生まれ。10代から20代にかけて発表した『花物語』が「女学生のバイブル」と呼ばれる程の大ベストセラーとなる。その後、『女の友情』『安宅家の人々』『徳川の夫人たち』『自伝的女流文壇史』など多彩な作品を次々と発表、流行作家として人気を博した。52年、「鬼火」で女流文学者賞、67年、菊池寛賞受賞。73年、逝去。

# 花物語（はなものがたり）　下

発行日　２０１５年10月30日

著　者　吉屋信子（よしやのぶこ）

発行者　小野寺優

発行所　株式会社河出書房新社

〒１５１－００５１

東京都渋谷区千駄ヶ谷２－32－２

http://www.kawade.co.jp/

カバーデザイン　大野リサ

カバー装画　さやか

この電子書籍は、『花物語　下（２０１４年７月10日３刷発行）』に基づいて制作されました。